
アビス

如月 晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アビス

【Nコード】

N5815U

【作者名】

如月 晃

【あらすじ】

1999年。Xデイに始まった多数の行方不明事件。その犯人は異次元から現れた特殊生物「アビス」による物だった。自衛隊は対アビスに独立特殊部隊を設立する。201X年。防衛省にある自衛官が呼び出される。かれは問題児であり、天才でもあった。彼が防衛省に招かれることにより、破滅の物語が幕を開ける事となった。

発端

1999年8月某日。

南太平洋深海。

海洋科学技術センターが保有する有人潜水調査船「しんかい2000」は深い深海にいた。

深海は暗く澱み、光が届かない、完全な闇を形成していた。

闇の中の海底には不気味な姿の深海魚が体を左右に動かし、悠然と目の前を通過していく。

「気味が悪いですね」

若い調査員が小さく呟くと、貫禄のある無精髭を生やした中年の調査員が頬を緩ませた。

「見馴れれば可愛いもんだ」

中年の調査員は若い調査員の肩を軽く叩くと、若い調査員は物珍しそうに深海魚を眺める。

その様子を見ていた眼鏡をかけた調査員は嘆息を漏らし、諫めた。

「私達の任務は海底の塩分濃度の変化を調べる事であって、深海魚の調査ではないぞ？」

「す、すいません」

「確かにな」

中年調査員は苦笑すると、頷いた。

ここ最近、南太平洋深海周辺の塩分濃度が極端に薄くなっていたのだ。

原因不明の事態に海洋科学技術センターは調査の為にしんかい2000を送り込んだのだ。

「・・・殆ど真水みたいな濃度ですね」

眼鏡の調査員は囁くように呟くと、若い調査員は素っ頓狂な声を出す。

「それに深海魚がいるのも異様ですよね」

「意外と機器の故障とかだったりしてな」

中年調査員が豪快に笑うと不意にその笑いを止めて、体を乗り出した。

「見る・・・箱がある」その声に二人も体を乗り出した。

暗闇を照らしている、しんかい2000の光源が漆黒の闇の中にある箱を映し出していた。

箱はまるでその存在を主張するように光を反射している。

「何だ？あの箱は・・・沈没船の残骸か？」

「この辺りでの沈没事故や行方不明事件は報告されていません」

眼鏡の調査員は資料を見ながら言うと、中年調査員は冷静な口調で指示を出した。

「この現象に関係があるかもしれん。回収しよう」

その声と同時に、しんかい2000はゆっくりとその箱に向かう。

表面にギリシャ語で「ネクロノミコン」と書かれたその箱は不気味にその存在を主張していたのだった。

翌日

翌日。

海上保安庁。

三人の調査員は箱を見つめた。

黒塗りの箱に書かれた「ネクロノミコン」の文字を見て、若い調査員が小さく呟いた。

「ネクロノミコンって、何ですかね？」

「俺が知るかよ」

中年調査員が言った瞬間、黒いスーツにサングラスを付けた男が歩いてきた。

歩み寄つてくると同時に、威圧感も近付いてくるのが分かる。

まるで映画等で見えるスパイのそれにそっくりだ。

「貴方達がこれを回収した方々？」

抑揚の無い声で男が尋ねると中年調査員は「そうですが、何か？」と問い掛ける。

男は動じる事なく切り返してきた。

「政府の命令でこの発見物は頂いていきます」

男が黒塗りのアタッシューケースを開き、それを掴んだ瞬間、中年調査員は箱を素早く掴み、それを止めた。

そして挑戦的な笑みを浮かべると男に顔を近付ける。

「一体、どこの管轄の命令で？ 私達は聞いていませんよ？」

「君達に話す義務も命令も無い。先に言っておくが、公務執行を妨害した物への逮捕権が私にはある」

そこまで言われては引き下がるしかなく、調査員は箱から手を離れた。

男は無言でそれを掴むと、素早く、かつ丁寧な箱をアタッシューケースの中に納めた。

アタッシューケースの蓋を閉めると、男は威圧的な口調で語りかける。

「君達はここで何も見なかった。この意味が分かるね？」
男は言い残すとアタッシューズを持ち、足早に退室していく。
三人は呆然とその後ろ姿を見送るしかなかった。

人とは異なる者

同日

富士樹海

深い樹海は来る物を深淵に誘い込むように不気味な様相を醸し出している。

人間が殆ど手を付けなかった事で形成されたその樹海の中は他者を拒絶する別世界と言っても過言ではなかった。

その中を一人の登山者が小走りに駆けていた。

「流石に暗くなったなあ」

登山者は小さく呟くと何かを踏み付けた。

今までに感じた事の無い感触だ。

周りは柔らかくその中に固い物が通った、言い表す事が出来ない。

登山者は眉を潜めながら足元を見つめる。

日が高い季節とはいえ、樹海の中は非常に暗い。

登山者は屈んでそれを掴み、目視出来る距離でそれを見た瞬間、登山者は絶叫した。

登山者が掴んでいたのは・・・

引きちぎられ、食い荒らされた人の腕だった。

朝日が上り始めた頃、多数の警官が樹海付近に展開していた。
例の腕。

後に周辺から腕の持ち主と思われる胴体や下半身、さらには食い荒らされ、脳を剥き出しにした頭部も発見された。

被害者は前日から行方不明となっていた登山客だと、落ちていた荷物の中にあつた身分証から確認された。

金田一郎はその身分証を一瞥すると、チャック付きのビニル袋に突っ込んだ。

「不気味だな」

バラバラ事件なら、さして珍しい事でもない。

だが、その死体を喰らう事が常軌を逸している。

野犬なら野犬でここまでやる可能性は低い。

「こんな事件初めてだ」金田は空を見上げた。

妙な胸騒ぎがする。

非常に嫌な感じだ。

「何も無ければいいが・・・」

同日深夜

警官達は樹海の中に分け入って行く。

金田もその警官達の中にいた。

ホルスターにはM38エアウエイトが下げられている。

捜査当局は、仮に野生生物なら夜行性だろうという結論を出した。

野生生物の場合は拳銃での射殺が許可されていた。

その為のエアウエイトなのだ。

「気味悪いですね、金田さん・・・やっぱり僕はこっぴどい苦手で
すよ。ホラー映画も苦手なんですよ？」

金田の後輩警官は縮こまりながら、震える手を押さえていた。

その様子を見た金田は苦笑した。「もしかしたら、犯人は化け物か
もしれないぞ」

それと同時にドツと笑いが巻き起こった。

不意に、それに混じり何か聞こえてきた。

それはハッキリ聞こえる大きさだった。

まるで蛇が威嚇する時に出す音に似ている。

「何だ!？」

警官の一人が小さく呟いた瞬間、懐中電灯の前を何かが横切った。人に似た影だった、違和感があった。

「今の見たか？」

「例の加害者かもしれないぞ! 気をつけろ!」

金田が叫んだ瞬間、先程の後輩警官が悲鳴をあげた。

「金田さん! アレ!!」

後輩警官の指差す方向には多数の光る点があった。

不気味に光るそれはすぐに目だと分かった。

見ただけでも数は十を超えている。

さらに周りを見ると、そこかしこにその目がある。

完全に囲まれている。

背丈から見て小柄な大人程の身長だ。

つまり、野犬や野生生物ではない。

刹那、一体が懐中電灯の光の前に歩み出た。

光に照らし出された者を見て警官達は言葉を失った。

ミイラのように干からび、やせ細った体、爛々と光る目。

人に似て異なる化け物。

化け物は体を屈め、奇声をあげると懐中電灯を持っていた警官に突進した。

警官はホルスターのエアークウェイトを掴もうとするが、それより早く化け物は首に噛み付いた。

紅い水柱が周囲を汚した。

「太田っ!!」

金田はホルスターのエアークウェイトを掴むと、ハンマーを降ろし、大腿で警官に噛み付いている化け物に歩み寄った。

金田は化け物の肩を掴むと、力任せに引きはがし、倒れた化け物に引き金を引いた。

銃声とともに放たれた弾丸は化け物の胸を捉えたが、化け物は動じる事なく立ち上がり、駆け寄る。

「クソツタレ！」

金田は怒鳴ると化け物に次々と弾丸を撃ち込む。

最後の四発目が化け物の頭を撃ち抜き、首から上を吹き飛ばした。それと同時に周りにいた化け物が奇声をあげて駆けてくる。

「来るなあああ！！！」

後輩警官がホルスターからエアークラウドを引き抜き、引き金を引いた瞬間、他の警官も絶叫しながらエアークラウドを引き抜いた。しかし、化け物は弾丸をもともせず駆け寄り、掴み掛かろうと手を伸ばす。

また、装弾数が五発のエアークラウドでは火力不足は明白だった。弾切れになった警官から一人、一人と餌食となっていた。

金田は右手でエアークラウドを掴みながら、左手で無線を掴んだ。

「こちら金田！繰り返す、こちら金田！」

（金田警部、どうした？）

「化け物！化け物と交戦中！！救援を・・・

そこまで言った金田の左足に激痛が走った。

見ると、足に化け物が噛み付いている。

「クソォ！」金田は右足で化け物の頭を踏み付け、迫ってくる化け物をエアークラウドで撃ち抜く。

（どうした、金田警部？化け物？）

「とにかく助けてくれ！」

金田が叫んだその時、後輩警官の絶叫が響き渡った。

「金田さん！助けてっ！！！」

「待ってる、三田！今助けてやる！」

金田は足を引きずり、震える手で引き金を引く警官に歩み寄った瞬間、その警官の後ろから化け物が飛び掛かった。

化け物は警官の頭蓋骨ごと脳に噛み付く。

骨が砕ける音が響き渡り、声に成らない悲鳴をあげて、後輩警官は

倒れた。

「三田 あああっ！！」

金田が絶叫した瞬間、今度は右足に激痛が走り、地面に倒れる。

刹那、化け物が一斉に金田に群がり、体に噛み付いてくる。

「がっ・・・ああっ！」

金田は体を引き裂かれ、喰われていくと自覚し、その激痛を感じながら意識を霧散させた。

特殊戦略小隊

漆黒の闇が広がる上空にヘリのローター音が響き渡る。

三機のUH-1Jが富士樹海に向かっていた。

一機のUH-1Jの機内で、一人の自衛官が胸ポケットから煙草を取り出した。

「入谷、煙草か？」

入谷謙介は女性を一瞥すると、ライターを取り出し、火を付けた。
いりや けんすけ
肺一杯に紫煙を吸い込むと、入谷は悪びれずに女性に切り返す。

「落ち着くんだよ。霞もどうだ？」

入谷が差し出した煙草を見て苦笑した霞かすみ はかなは煙草を受け取ると、機内に落とし、踏み消した。

「ふざけるのも大概にしるよ？」

霞は茶髪のロングヘアを後ろで束ねると入谷を睨む。

「相変わらず、豪胆な性格だねえ。一応、俺は上官だぞ？」

入谷は一等陸尉の襟章を見せ付けると、霞は嘸く。

「お前が上官なんて残念だよ、全く……」

「よく言うよ」

入谷は苦笑すると、M4A1にサプレッサーを取り付けた。

その時、一人の自衛官が笑った。

「一尉と二尉ってお似合いですね」

「そうっすよ！特殊戦略小隊の隊長と副隊長がお二人で自分達、幸せっすよ」

他の自衛官が言くと、入谷はサプレッサーを取り付け終える。

「コイツとは腐れ縁って奴だ」

「悪かったね、腐れ縁で！」

霞は口を尖らせ、横を向く。

入谷は霞の美しい横顔を見て、頬を緩めた。

防衛大学時代から同じ班、同じ部隊として共に訓練をしてきた仲で

あった。

そして、初の自衛隊特殊部隊「特殊戦略小隊」が編成された際も、実力を買われた二人が隊長と副隊長に抜擢されたのだ。

その部下や二人に面識のある有能な曹階級以上の自衛官が特殊戦略小隊に編入された。

「これより、作戦を確認する」

入谷は無線を掴むと、他のヘリに回線を繋いだ。

同時に全隊員が顔を引き締める。

「ヘリボーン（ヘリコプターから歩兵がラベリング降下を行う戦術）で樹海に降下し、カルト教団が中国マフィアを殲滅する」

そこまで言っていると、入谷は煙草を口にくわえた。

「俺達、アルファは樹海中央、ブラボーは最初に被害者が発見されたエリア、チャーリーは警官達の惨殺死体が発見されたエリアだ」紫煙を吐き出すと入谷は目を細めた。

「俺達は警察では対処仕切れない事件を解決する為の部隊だ。言わば最強の部隊だ。しかも、特例で自衛隊外の武器を装備していいときてる。負ける要素は無い、派手に行くぞ！」

入谷が無線を切ると、霞は「精神論か？」と呟く。

「いや、事実だろ？・・・化け物か」

「何かは知らないが、余裕には違いない」

「確かにな」

そこまで言っていると、ホバリングしたUＨ－１Ｊからロープが下りてくる。

入谷はM4A1を掴むと、ロープに歩み寄った。

「じゃ、一番乗りだ」

そう言っていると、入谷は樹海に降下していく。

それを見送った霞は9mm機関拳銃を掴んだ。

霞はロープを掴み、降下すると、入谷が下で待ち構えていた。

「はい、お疲れ様。恐くなかったか？」

「入谷、貴様は真面目に任務を熟せないのか？」

「面倒な事はテンションを上げないとやってられないんだよ。分かってるだろ？」

元来面倒臭がりの入谷は整った顔を歪める。

「分かってるが貴様は隊長だ。貴様の行為や言動が士気に関わるんだぞ？」

「分かってるよ」

入谷が面倒臭そうに呟くと、M4A1に初弾を装填した。

他の隊員達の降下を確認した入谷は暗視装置「JGVＳ-V8」を装着する。

入谷は隊員達に、準備が完了したかハンド・シグナルで確認する。全隊員が親指を立てたのを見た入谷は片腕を上げ、五指を伸ばし、数回振り、前進のハンド・シグナルを出した。

霞を含めた全隊員は無駄の無い動きで入谷の後ろに続く。

JGVＳ-V8に映る映像を頼りに部隊は歩みを進める。

森林内での戦闘では、先制攻撃と命中制度が要求される。

つまり、音を立てずに索敵し、接敵するかが作戦成功の鍵を握るのだ。

必然的に隊員達は慎重になるのだ。

刹那、非常時以外は封鎖を封じていた無線から悲鳴が響き渡った。

全員がビクリと体を動かしたが、入谷はすぐに無線員の無線を掴んだ。

「どうした？」

（こちら、チャーリー、木村！化け物が・・・・・・化け物が襲ってくる！）

「木村三曹！詳しく教える！」

（カルト教団でもマフィアでもないっ！本当に化け物だ！弾が切れた！リロードする。援護を・・・・・・うわあああああ！）

「木村三曹！木村！！」

同時にブラボーの声も響き渡った。

（こちら太田！化け物に囲まれてる！奴ら向かってくる！！弾幕を

切らすな！)

「状況を報告しろ！」

(火力が足りない！来るな、来るなあああ！！…………やめる、やめてくれえ…………)

悲鳴と同時に無線から何かを囃む音やしやぶる音が響き渡った。

「もう聞く必要は無い」

入谷は無線を切ると、霞が不安そうに呟く。

「何なんだ？さっきのは……………」

「例の化け物だろう……………本当に化け物だとは……………」

「入谷、信じるのか！？」

「化け物という言葉を感じなかった俺のミスだ。総員、アサルトでいく！サプレッサーを外せ。派手にいくぞ」

「いいのか、入谷！ステルスで行けと上層部が……………」

「戦場では臨機応変に対応しないと全滅する。それに俺はまだ死ぬ気は無い」

そこまで行った瞬間、木々がざわつく。

入谷は周囲を目配せすると、「来た」と囁いた。

刹那、木々の隙間を駆け抜け、化け物が入谷に飛び掛かってきた。

化け物に銃口を向けたが、間に合わない。

その時、渴いた銃声が響き、化け物が空中で弾き飛ばされる。

そのまま、木に叩き付けられた化け物は動かなくなった。

「大丈夫か？」

「助かった」

「しかし、何だアレは？」

「グール……………」

「グール？」

「クトゥルフ神話の化け物。食屍鬼だ」グール

「待て。神話の化け物？冗談は大概に……………」

「これが何よりの証拠だ。俺はクトゥルフ神話以外でこういう化け物を見た事はない」

真面目に答える入谷に霞は歩み寄る。

「だが、あれはあくまで作家の創作だ!!」

「火の無い所で煙りはたたない。都市伝説だってそうだ。結局は元になる事件があったんだ。という事は、その元となる物がいてもおかしくは無い」

入谷が言い放った瞬間、化け物「グール」はドロドロに溶けだし、一瞬で消滅した。

同時に周囲から荒い息遣いが聞こえてくる。

「囲まれたな」

入谷はそう言うと、M4A1を背負い、代わりにMK・23を取り出した。

「CQB（近接格闘）の方がいいぞ」

そう言うと、入谷は初弾を薬室に送り込む。

「そうらしいな」

霞はSIG P226に初弾を装填しつつ、答えた。

その時、樹海の中からグールが飛び出してきた。

グールは自衛官の首に噛み付くと動脈を引きちぎる。

同時に、樹海の暗闇をマズルフラッシュが照らす。

銃声と同時に照らされるマズルフラッシュはグールの不気味な姿を照らし出した。

「離れるなよ!」

迫ってくるグールに45ACP弾を撃ち込みながら、入谷が叫ぶ。

そんな中、隊員の一人が手榴弾のピンを抜いた。

「馬鹿! そんな物を・・・」

霞が叫ぶより早く、グールがその隊員の腕に噛み付き、手榴弾が取り落とされる。

「伏せろ!!」

入谷は霞を庇いながら伏せた瞬間、多数のグールが手榴弾を抜いた隊員に群がり、押し倒した。

刹那、爆風とともにグールと自衛官が吹き飛ばされ、伏せなかった

隊員は破片、或いは爆風に巻き込まれる。

僅か一瞬で自衛官の生き残りは伏せる事が出来た入谷と霞のみとなった。

が、グールも手榴弾でだいぶ数を減らしていた。

しかし、それでも数は十を超えている。

入谷は素早く立ち上がると、グールの額を次々と撃ち抜く。

「俺達だけでも生き残るぞ！」

「分かってる！」

霞は入谷に背中を付けると、SIG P226の引き金を引いた。放たれる9mmパラベラム弾はグールの頭部を正確に吹き飛ばす。

「ヘリ、聞こえるか？」

（こちら、ホーク1。隊長、聞こえています）

「ホーク1。部隊は壊滅した。俺達もこのままではやられる。上空から援護を頼む。今から照明弾を上空に放つ。それを頼りに探せ」

（了解）

入谷は懐から信号銃を取り出すと、上空に向けて引き金を引く。放たれた照明弾は空中でまばゆい光を放つ。

（ホーク1、現在地を確認。援護に向かう）

入谷は携帯無線を仕舞うと、飛び掛かってきたグールに蹴りを決め、吹き飛ばす。

霞はそのグールを空中で射抜く。

その時、ヘリのローター音が響き渡る。

（何だこれは！？）

パイロットの驚愕の声を漏らすすぐに冷静さを取り戻し、無線に吹き込む。

（これより援護を開始します）

その声と同時にコパイロットがグールにM2重機関銃を放った。

次々と吐き出される12.7mm弾はグールの体を引き裂き、吹き飛ばす。

その間にも入谷と霞は向かってくるグールを打ち抜いていく。

圧倒的火力かつ上空からの攻撃にグールは手だし出来なかった。

最後の一体が吹き飛ばされた瞬間、霞のSIG P226が弾切れとなった。

「終わった？」

霞が呟いたその時、木の上からグールが飛び掛かる。

間に合わない。

霞が他人事のように思った瞬間、銃声が響き渡り、入谷のMK・2の弾が切れた。

「これで最後。借りは返したぞ」

入谷は笑って見せると、上空を見上げた。

「一体、何が起きてるんだ？」

桐生

201X年

防衛省前

車や雑踏の喧騒の中、烏が鳴き声をあげる。

晴天を見上げながら、竹刀を入れる袋とアタッシユケースを持ったラフな格好の青年が防衛省に歩いてくる。

ヘッドホンから激しいロックを漏らし、セミショート黒髪を風になびかせて防衛省の前に向かう。

門の前まで行くと警備を行う二人の自衛官が青年に駆け寄ってきた。「申し訳ありません。一般人は立入禁止です」

青年はそれを見越していたかのように言葉が終わる前に懐から身分証を見せた。

「防衛省長官に呼び出されてるんだよ」

陸上自衛隊二等陸尉の文字を見て、自衛官達は素早く敬礼する。

「失礼しました」

「ああ、ご苦労さん」

青年は微笑を浮かべ、竹刀袋を背負い直すと門を抜ける。

そのまま、カウンターまで歩くと、ヘッドホンを取り、受付嬢に紙を見せた。

「桐生翼きりう ひとつばで話し、通ってねえか？防衛省の長官に呼び出されてるんだけど」

「桐生様ですか？少々お待ち下さい」

受付嬢は紙を見ると、パソコンに向き直る。

「確かに面会の予定が入っています。エレベーターの方へお進み下さい」

「ありがとね」

桐生は微笑むと再びヘッドホンを付けた。

エレベーターのボタンを押すと、待っていたかのように扉が開いた。
（お待ちしてましたってか？笑えねえ）

桐生は内心呟き、ドアを閉めるボタンを押した。

六年前、俺は実家を勘当された。

理由は簡単だ。

俺が一人っ子で家が神社、親父との二人暮らし。

俺の実家は京都の小さな神社「鬼無神社^{きなし}」。

その神主になれと言われて、反発したらこのザマだ。

俺は大学に行きたかったが勘当された身、そんな金は無かった。
むしろ、その日の食い物でも困るレベルだ。

大学に行きたいなんて事を言ってる場合じゃねえ。

そこで俺は泣く泣く、学費が免除される防衛大学に向かった。

訓練は嫌だが自衛隊は公務員、給料もそれなりだ。

そして採用試験の結果は一次試験も二次試験も合格し、入学出来た
訳だ。

桐生はエレベーターから出ると、真っ直ぐ防衛省長官室に向かった。
ノックをしようとした瞬間、中から「入れ」と声が聞こえてくる。

桐生はドアノブを捻り、ドアを開けると苦笑した。

「超能力者か、あんた？」

「そんなに音楽を垂れ流しにしていたら分かる」

防衛省長官は呆れたように呟くと、目を細めながら続ける。

「持ってきたか？」

「はいはい」

桐生は竹刀袋から一振りの刀を取り出す。

さらに、アタッシュケースから銃口が二つ付いたベレッタ社のM92FSを取り出した。

「銃刀法違反、武器不法輸入、違法改造か……よくもこんな無茶苦茶な銃を作ったものだ」

長官は改造されたM92FSを見ながら感心する。

「『雷電』ですか？様々な改造してるぜ。ジャムを防ぐ為に排莖口を上下にずらしている。ついでに装弾数も二十発に……」

「そういう事を言ってるんじゃないよ!!」

長官は立ち上がりながら怒鳴る。

そして嘆息を漏らすと、ゆっくりと椅子に座った。

「入学当初は神童が来たと思ったよ。常に学力、訓練成績が首席ときた。だが、行動に問題ありときている」

「そりゃそうだ。それが俺だからな」

桐生が笑みを浮かべたその時だった。

けたたましい警報が鳴り響いた。

「避難訓練か何かか？」

「こんな時でも軽口を叩くか？非常事態だ」

「非常事態？ああ、非常事態訓練か」

「貴様は……」

その時、内線電話が鳴り響いた。

長官は素早く電話を耳に当てる。

「私だ……そうか……ああ……」

警報で電話のやり取りが聞き取れない。

しかし、その切迫した表情を見た桐生はアタッシュケースからベストを取り出し、着込む。

ベルトにホルスターを引っ掛けると改造拳銃「雷電」を突っ込んだ。そしてベストの後部突起に刀の鞘を引っ掛けると、足早に出て行く。止めようとする声に桐生は聞こえないフリをし、ドアを閉めた。

警報が響き渡る中、悲鳴が混じって聞こえる。

「マジらしいな」

桐生は雷電に初弾を装填すると、歩き出す。

何が起こっているかは分からないが常軌を逸した事態には変わり無い。

（まずは警備室に行くか）

桐生はエレベーターに向かうとボタンを押す。

しかし、ボタンは点滅せず、動いている様子が無い。

「主電源が落ちてやがる。階段を使うしかねえか」

桐生は肩を竦めると隣の階段の手摺りを掴んだ。

足早に駆け降り、二階下まで下りたその時、血生臭い匂いが漂ってくる。

吐き気がする程強い匂いに桐生は顔をしかめる。

下に行く程匂いが強くなるが、警備室は一階だ。

この匂いに耐えなければならぬ。

桐生は一気に一階まで駆け降りると、カウンターに目をやった。

カウンターは血まみれになり、先程の受付嬢がカウンターに上半身が横たわっている。

「大丈夫か!？」

桐生は女性に駆け寄ると切れ長の目を細め、口を押さえた。

女性の下半身は引きちぎられ、何処にも無かった。

「ひでえな……」

桐生は小さく呟くとカウンターの隣にある警備室に入る。

警備室にも血生臭い匂いが充満している。

警備員の姿は無く、ただ夥しい量の地が飛び散っていた。

「何が起きてやがる!」

桐生が呟くと銃口が背中に突き付けられる感触が走った。

「動かないで下さい」

落ち着いた口調だが、確かな殺気が感じられる。

「武器を捨てて、手を挙げて下さい」

それを聞いて、桐生は雷電を床に置く。

刹那、突き付けられている銃があると思われる場所に蹴りを叩き込

んだ。

桐生の蹴りは銃を吹き飛ばし、素早く体勢を整えると、足で雷電を蹴り上げ、それを掴み、銃を突き付けた人物に銃口を向けた。

しかし、桐生はその人物を見て眉を潜めた。

「女？」

ワイシャツ姿の女性は美しい顔を殺気に満ちさせている。

女性は眼鏡を上げると桐生を睨む。

「貴方は桐生二尉ですね？何でこのような事を？」

「何か勘違いしてねえか？俺は長官に呼び出されてここにいる。君は？」

「私は椎名望^{しいな のぞみ}三等陸尉。私も同じです」

「そうか」

桐生は椎名のSIG P220を拾うと差し出す。

椎名はそれを掴むと、桐生に背中を向けた。

「おい！何処に行く？」

「私は防衛大学時代から貴方の事が嫌いです。私一人で何とかします」

椎名はそう言うと、駆け出して行く。

（俺の事が嫌い、か）

桐生は苦笑するとモニターを見た。

モニターには避難した職員の姿以外人影が無い。

モニターを目で追って行くと、地下金庫のモニターに不審な物が映っていた。

黒い光の塊が脈動している。

そしてそこから人に似た化け物が飛び出してくる。

「何だ、この化け物は……」

桐生は小さく呟くと地下金庫の階段を下りる椎名の姿が映ってる。

それを見た桐生は雷電をホルスターに仕舞うと、全力で駆け出した。

あの桐生という人。

防衛大学時代から噂は聞いていた。

いくら成績が良くても、規律を乱す人は好きになれない。

椎名は階段を駆け降りながら昔を思い出していた。

この先は地下金庫。

被害者が一階に集中しているという事は地下に何かあるはず。

椎名は地下の扉を開ける。

その時、一階以上に血生臭い匂いが漂ってくる。

「酷い匂い………」

椎名が歩みを進めたその時、何かに躓いた。

椎名は視線を落とすと小さな悲鳴をあげた。

警備員の頭が転がり、椎名を見つめているのだ。

「いやっ！」

椎名は尻餅を付くと、曲がり角から人の影が見えた。

人の姿に安堵した椎名はゆっくり立ち上がる。

「誰ですか？あの……大丈夫ですか？」

椎名が小走りで駆け寄り、角を曲がると不気味な化け物の顔が目の前に広がった。

「えっ？」

椎名が狼狽したと同時に化け物が椎名に飛び掛かる。

椎名は化け物の肩を押さえるが、壁にたたき付けられる。

化け物は噛み付こうと体を近づけてくる。

凄まじい腐臭と血の匂いに椎名は顔を背ける。

「くっ………」

力が強い。

このままでは……

椎名が目には涙を滲ませた瞬間、銃声が轟き、化け物の力が抜けていった。

椎名は力無く地面に倒れると桐生が駆け寄ってくる。

「大丈夫か？」

「桐生二尉？」

「無茶しやがって……」

桐生は微笑むと椎名は顔を背ける。

「私一人でも何とか出来ました！」

「腰抜かしてるクセに強気だな」

桐生は苦笑すると、椎名の頭を優しく撫でた。

「こっからは俺がやる」

「私も……」

「だから、腰抜かしてるだろっての」

桐生が笑った瞬間、銃声に反応して化け物達が向かってくる音が聞こえてきた。

桐生は立ち上がると雷電を一回転させ、左手で掴む。

「行くんだな？」

「勿論です」

「結構！」

桐生は椎名に右肩を貸して立たせると椎名は怪訝な表情で桐生を見る。

先程、桐生が拳銃を使っていたのは右手。
今持ってるのは左手。

「拳銃、扱えますか？」

「ん？ああ。俺、両利きだぜ」

「そうですか……」

椎名が呟いたその時、化け物達が一斉に角を曲がって来る。

そして化け物達は二人を見ると奇声をあげて駆け寄ってきた。

桐生と椎名が拳銃を構えると、引き金を引いた。

同時に放たれた9mmパラベラム弾が化け物の頭部を吹き飛ばす。

「桐生二尉！その銃の装弾数は！？」

「二十発だが、同時二発発射だから、あと八回分だ」

「マズイですよ！私もあと八回分……敵は十七体！火力不足です！」

「大丈夫だ。一発も外さなきゃな」

自信満々に言う桐生を一瞥した椎名は正確に狙いを付ける。

二人は確実に化け物の頭を撃ち抜くと、同時に弾切れを起こした。しかし、一体が突進してくる。

「桐生二尉！！」

椎名が叫んだ瞬間、桐生は雷電を投げ捨てた。

刹那、裾からCOP・357マグナムが現れた。

「隠し玉って奴だぜ！」

四つの銃口から同時に弾が放たれ、化け物に風穴を開けて吹き飛ばす。

「デリンジャー（隠し持てる大きさの拳銃）を持ってたんですか？」

「まあ、そういうことだ」

「しかし、それも改造してますよね？その銃、普通なら一発ずつ発射されるのに、同時発射って……でも……」

椎名は呆れたように呟くが、笑みを浮かべた。

「助かりました」

その笑みを見た桐生は鼻で笑う。

「先に進もう」

「はい」

桐生と椎名はゆっくり奥に歩みを進めると、化け物達が飛び出してきた曲がり角には、化け物が出て来たと思われる黒い光の塊があった。

黒い光の塊は時折脈動している。

「これは？」

「さあな」

桐生が呟いたその時、光の塊が収縮を始める。

光の塊の収縮が最高潮に達した瞬間、化け物が飛び出してきた。

二人が身構えたその時、弾丸が二人の間を抜け、化け物の頭を吹き

飛ばし、再び光の中に押し込む。

同時に光は消滅した。

驚く二人の後ろにはSIG P226を構えた女性が立っていた。

「グールか………イマジナリー・ディメンション虚数次元が開くとは想定外だったな」

「あんたは？」

桐生が地面に座り込みながら問い掛けると女性は二人を見下ろしながら答えた。

「私は特殊生物殲滅隊、通称『CATS』キャッツ所属。霞儂三等特佐」
「CATS？」

椎名が素っ頓狂な声で復唱すると、霞は二人に言い放った。

「これより、貴様らにCATS配属を命じる！」

CATS

小笠原諸島近海

UH-60JAに揺られながら桐生はヘッドホンで音楽を聴いていた。が、不意にそれは取り上げられる。

霞はそのヘッドホンを海に投げ捨てる。

「おい！」

「煩いんだよ」

霞は短く言い放つと桐生と椎名を真っ直ぐ見つめる。

「貴様らが配属するCATSについて簡単に説明する。特殊生物殲滅隊のCATSは『Counter-xenomorph Annihilate Teams』からきている」

「やたら長い名前だな」

桐生の軽口を霞は流すと続ける。

「CATSはお前達が戦った化け物『An Bio Things』通称アビス（ABTh）を秘密裏に処理する部隊だ。部隊は七つに分けられる。その中の特殊部隊に位置付けられる実動殲滅隊に配属される」

「CATSって特殊部隊じゃないのですか？」

「陸海空自衛隊の独立部隊だ。言わば第4の自衛隊だ。本部は小笠原諸島にある地図に載っていない島『老神島^{おいがみ}』だ」

「第4の自衛隊……小笠原諸島ねえ……」

桐生が小さく呟いたその時、何かを思い出したような表情で叫んだ。

「あああ……」

二人はビクリと体を動かすと桐生を見つめる。

「煩いぞ！」

「煩いですね」

「いや……CATS本部が島って事は完全な孤島だよな」

「そうなるな」

「つて事は、私物はどうなるんだ!？」

「何だ、そんな事か……荷物はお前達より先に着いてるはずだ」

「有無は言わさないって訳か……」

桐生が苦笑すると、霞は僅かに眉を潜め「話しを続けていいか？」と問い掛ける。

二人はゆつくりと頷くと、霞が口を開く。

「お前達が所属する実動殲滅隊はアサルト、スカウト、スナイパー、メディックで構成される。桐生はアサルト、椎名はスカウトだ。残りは確保している。スナイパーは桐生、お前の部下だった奴だ」

「俺の部下でスナイパーって言ったら、お調子者の馬鹿しかいねえんだが……」

「そいつだ」

「あの馬鹿野郎か……」

「貴方の部下はそんな人しか配属されないのですか？」

椎名は桐生を横目で見ると、窓の外を眺める。

それを見た桐生は嘆息を漏らす。

「可愛い顔して、可愛くないねえ」

「だ、誰が!」

椎名は顔を真つ赤にさせると窓を凝視した。

眼鏡が曇り出しても椎名は気にせず、一点を凝視している。

その様子を見ていた霞は鼻で笑う。

「そっいえばもう一人、メディックは誰なんだ？」

「フランスから渡ってきた魔術師だ」

「魔術師ねえ……はあ!？」

「魔術師ですか!？」

多少赤みが引いた椎名は驚きの声を漏らす。

「魔術師ってあれか？あの手から炎を出したり、雷飛ばしたりするあれか？」

「ああ」

「映画とかファンタジーでみるあれですか？」

「それ意外に何かがある？手からトランプ出したりするアレだとも思ってるのか？」

「しかし、いくらなんでも突飛すぎやしねえか？」

「人は信じられない事が起きると信じようとしない。いつの時代も・
・・・・どんな時も・・・・・」

霞が小さく呟くと、窓の外を眺めた。

何処か寂しそうな霞の表情を見つめる。

豪胆で真っ直ぐな物言いだがやはり女性なんだなと内心桐生は呟いた。

その時、UH-60JAのパイロットが振り向いた。

「これより降下します。シートベルトを締めて下さい」

「見る、あれが老神島だ」

二人はシートベルトを締めて窓を見つめた。

外には自衛隊の駐屯地だけに島を使ったと言わんばかりの施設が広がっていた。

戦闘車や装甲車、海自の輸送艦「おおすみ」型の艦があり、さらに輸送機「C-130H」もあり、二人はとうとう後戻り出来ない世界に足を踏み入れた事を悟った。

最悪のチーム

同時刻

地下鉄構内

地下を突き抜ける電車の音がホームに響く。

光が通らない地下鉄構内での光りは淡い光を放つナトリウム灯と電車の照明のみ。

その中に一筋の光が灯った。

時空の中央から何かでこじ開けられるように黒い光の塊が発生する。そして、そこから奇声が響き渡り、人とは異なる者が送られて来たのだった。

CATS本部

ブリーフィングルーム

二人は広い部屋に通された。

作戦会議を行うブリーフィングルームのようだ。

椅子には二人の男性が座っていた。

二人の席は離れ、まるで見えない壁があるようだ。

その一人がゆっくりと振り返り、桐生を見ると顔を明るくさせる。

「兄貴！兄貴じゃないっスか！」

ショートヘアに柔和な顔立ちの青年は糸目をさらに細くし、嬉しそうに歩み寄る。

「やはり貴様か……………」

桐生はセミシヨートを掻き上げると嘆息を漏らした。

「いやあ、良かったつスよ！兄貴と一緒に部隊で！話し聞いたら化け物と戦うらしいっスから心配だったんスよ」

青年はまるで子供のように擦り寄ってくる。

桐生は鬱陶しいと言わんばかりに青年を睨んだ。

「大野！貴様は飼い主と再開した犬ところか！？」

大野賢治はそれを聞いて口を尖らせるがすぐに椎名を見て口を開く。

「ところで隣の茶髪の美人さんは兄貴の彼女さんですか？」

「こんなガサツな人が私の恋人な訳ないじゃないですか」

椎名は涼しげな顔で答えると桐生は嘆息を漏らす。

椎名は横目で桐生を見ると、椅子に座り眼鏡を拭く。

大野は椎名を眺めると小さく呟いた。

「なんスか、あの人。感じ悪いっスね」

「そう言うな。チームは信頼関係が成り立たなければ成立しないから？お前に最初に教えたはずだろ？」

「…………隊長気取りか。おめでたい奴だ」

椅子に座っていた銀髪のセミロングを後ろで束ねた男性が体を向けながら、挑戦的な笑みを見せている。

桐生は頬を緩めると、ゆっくり歩み寄った。

「お前が魔術師か。思ったよりはイケメンだな」

「誰だか知らないが、ふざけた奴だ。蜂の巣にされたいのか？」

男性は流暢な日本語で呟くと、ホルスターのM1911A1ガバメントを一瞥する。

「マジシャン手品師君はその銃から花でも出してくれるのか？」

「…………ふざけやがって。貴様もその背中に背負った刀、抜けば花束なんだろ？」

「御名答。季節の花が出てくるぜ？今の季節はアルストロメリアとアケイレギアだ」

桐生はニツと笑って見せると、男性は舌打ちする。

「詰まらないジョークを言いやがって…………口だけのクズが・

「……」

「口で吹っつけたのは君だろ？ Mr.マジシャン？」

男性は椅子から立ち上がると桐生の首を掴み、押し倒した。

桐生の首を押さえ付けると憤怒の表情で怒鳴った。

「こうして欲しかったか！？ ああ！？」

それを見て大野が歩み寄るが、桐生は涼しい顔で手で制止した。何気なく椎名を見ると、気にする様子もなく、本を読んでいる。

桐生は苦笑すると、さらに首が絞められ、男性は語気を強める。

「笑ってんじゃねえ！！」

「熱い………ねえ………」

桐生は小さく呟くと男性を巴投げで吹き飛ばした。

男性は素早く受け身を取ると、立ち上がった桐生を睨む。

桐生は乱れた服を直すと笑みを浮かべた。

「血気盛んなのはいいが、力技か？ 何なら魔術って奴を見せてくれよ。俺はそれを楽しみにして来たんだからな」

「ふざけるな！！」

男性は右手を桐生に翳すと、地面を叩いた。

刹那、窓の無いブリーフィングルームに突風が巻き起こる。

同時に桐生の周りにカマイタチが起こり、擦り傷を付けていく。

それは数秒で止んだが、桐生の服はボロボロとなり、頬からは血が伝ってくる。

男性は息を切らし、俯く桐生を見て勝ち誇った笑みを見せる。

しかし、桐生は頬の血を拭くと、笑った。

「すげえな、Mr.マジシャン。これならラスベガスでやってけるんじゃないか？」

「まだ言うか！！」

男性は怒鳴るとM1911A1をホルスターから引き抜く。

それより速く桐生は雷電を構えていた。

「バン！」

桐生は銃を撃つ真似をすると、回転させてホルスターに仕舞う。

微笑を浮かべている桐生を見た男性はガバメントを構え、トリガーに指をかける。

やはり、それより速く桐生は改造したCOP・357マグナム「霧^{きり}積^{つみ}」を構えた。

刹那、二回銃声が轟き、二人の拳銃が吹き飛んだ。

霞はSIG P226をホルスターに仕舞うと、二人を交互に一瞥し、小さく呟いた。

「貴様ら、椅子に座れ。ジェイク、むやみに魔術を使うな。桐生、あまり調子に乗るな。次は警告では済まないぞ」

「・・・・・・・・」

「了解です、三佐」

無言のジェイク・サイファーと悪びれた様子の無い桐生、それを傍観する椎名、桐生に心酔した大野。彼らを見た霞は内心呟いた。

最悪のチームだと・・・・・・・・

地下鉄構内

14:21

地下鉄を進む電車の運転席。

車掌は変わらない景色に飽き飽きしながらもそれが自分の仕事と言いつつ聞かせ、運転させる。

早く仕事が終わって、一杯やりたい。

そんな事を思っていると、目の前に人影が飛び出してきた。

地下鉄で人が飛び出してくるはずがないと油断していた車掌は慌ててブレーキをかける。

金属と金属が擦れる凄まじい音が響き渡り、電車が揺れる。

後ろからは乗客の悲鳴と驚く声が聞こえてくる。

「止まってくれ!!」

車掌は思わず叫んだが、無情にも電車は人影を撥ねた。

人影は人形を蹴ったかのように軽々と吹き飛び、地面に落下する。

「やつちまった……人を……俺のキャリアが……

……」

車掌が崩れ落ち、嗚咽を漏らした瞬間、フロントガラスの下からグールが飛び出してきた。

グールはフロントガラスを叩き割ると中に入ってくる。

車掌は逃れようとドアを掴むが、グールの強い力に下半身が持つて行かれる。

しかし、死に物狂いの車掌はそれに気付かず、無我夢中でドアを開けると、這って客室に入った。

様子を見て来ていた同僚が目の前にいるのを見た車掌は小さく「助けて」と呟いた。

同時に凄まじい絶叫が響き渡り、グールが客室になだれ込んできた。

ファースト・ミッション

CATS本部

15:14

霞はモニターに映像を映しながら、CATSの基本戦術を説明する。
「まず、戦域封鎖隊が戦域の封鎖を行う。そして隠密工作隊が偵察を行い状況を把握し敵の種類を確認する。その後、状況に合わせて強襲殲滅隊及び遊撃支援隊の混成部隊、または機動兵器隊、お前達が送り込まれる」

「手順を確認すると、封鎖、偵察、殲滅って事か？」
桐生の言葉に霞はゆっくり頷く。

その時、警報が鳴り響き、放送が流れた。
(アビス事件発生。CATS、スクランブル)
「ファーストミッションか」

桐生が小さく呟くと、ジェイクが立ち上がる。
無言で退室すると、椎名も立ち上がる。

「武器の調整に……」

椎名は桐生を一瞥すると、足早に去って行った。

大野はその背中を見送り、毒づいた。

「何か嫌なチームになりそうっスね」

「そうか？俺は最強のチームになると思っぜ。まだ研かれていない泥まみれの原石だから汚ねえただけだな」

桐生は僅かにほくそ笑むとゆっくり立ち上がり、ポケットに手を突っ込むと、歩いて行き、大野もその後ろに続いた。

C-130H機内

シナリオはこうだ。

民間には地下鉄構内にて不発弾が発見されたと伝える。

不発弾二つ。

一つは列車の衝撃により爆発。

もう一つは地下鉄構内を支える支柱付近にあり、仮に爆発したら、連鎖的に地下鉄構内が崩落する。

その為半径二十キロを封鎖、報道ヘリの一切を規制。

こうして完全確実にアビスの殲滅を行える。

（考えたものだ……）

桐生が苦笑すると同時に輸送機は降下を開始した。

桐生は雷電に初弾を装填すると、弾倉に空いた二発の余白に9mmパラベラム弾を二発装填する。

（始まりだ。）

地下鉄ホーム

先んじて出撃していた隠密工作隊、通称「隠工隊」は偵察を行っている。

敵はグール。

数は四十を超えているが虚数次元は確認されておらず、約一時間で消滅することが確認されている。

その為、虚数次元は消滅し、グールの増援は有り得ない。

また、夜行性のグールは午前は屋内にいる。

屋内からグールが出るにはそれほど時間は無い。

早急かつ確実に殲滅が必要という事が決まり、強襲殲滅隊と遊撃支援隊の混成部隊「強襲遊撃隊」、通称「強遊隊」が殲滅を行う事になった。

グールは脅威だが訓練され、火力が充実した自衛隊なら奇襲されない限り、負ける事は無い。

迷彩服に黒猫を月桂樹が囲んでいるデザインのエンブレムを付けた隊員達がベストを付けていく。

陸自正式採用銃である89式小銃とMINIMI軽機関銃で武装した強襲殲滅隊とH&Amp;K社の狙撃銃PSG-1とサブマシンガンUMP9で武装した遊撃支援隊が地下鉄に突入していく。

その後ろ姿を見送った桐生は小さく呟いた。

「俺達の出番はなさそうだな」

その時、82式指揮通信車で待機していた霞の声が無線から聞こえてきた。

（油断するな。アビス事件は何があるか分からない。気を引き締めろ）

出来れば、配属初日でバラバラの部隊では動きたくない。

「やりたくねえなあ」

桐生は苦笑すると、自動販売機に小銭を入れ、ブラックコーヒーを口に運んだ。

強遊隊は駅のホームを抜け、線路に下りる。

JGVSS-V8を着着すると、隊長が口を開いた。

「狙撃用意！」

二人の隊員がPSG-1を構えると同時に引き金を引いた。

二体のグールの頭が吹き飛ぶ。

同時に自衛隊に気付いたグールの群れが向かってくる。

「狙撃班、狙撃を続ける。総員、射撃用意」

隊長の声と同時に全員が武器を構えた。

グールが十メートルまで迫ると隊長は声を張り上げた。

「撃てえ！！」

同時に銃声が構内に響き、マズルフラッシュが周囲を照らす。

次々に放たれる5.56mm NATO弾はグールの群れをせき止める。

ただ突進する事しか出来ないグールは正面から将棋倒しになっていく。

一方的な攻撃の前で、グールは手も足も出なかった。

あつという間にグールの死体の山を築き上げた自衛隊は全弾を撃ち込むと銃口を下げた。

「状況終了！」

隊長が無線に吹き込んだその時、後ろから何かが這いずってくる音が聞こえた。

自衛官達が振り返ると言葉を失った。

頭も目もない巨大な烏賊のような化け物が向かって来ていたのだ。

化け物は列車と殆ど同じ大きさで、口から生えた触手を壁に張り付け、這いずる。

自衛官達は素早く弾倉を交換すると、化け物に銃口を向ける。

凄まじいマズルフラッシュと銃声が響き、化け物を襲うが、化け物は動じる事なく迫ってくる。

「06式小銃擲弾用意！」

その声に従員達は擲弾を装填していく。

「撃て！！」

次々と放たれた擲弾は化け物に着弾すると爆発する。

土煙が巻き起こり、化け物を隠す。

「やったか？」

隊長が呟いたその時、煙りの中から黄色い液が大量に吹き掛けられ

る。

自衛官の多くは液体を浴びた。

刹那、液体を浴びた自衛官達の体から白い煙りが噴き上がり、自衛官が溶け出す。

「体が………体がああ!!」

「熱いつ！熱いいい！」

自衛官達の悲鳴が響き渡り、体が溶けていく。

煙りが晴れたその時、触手が伸び、生き残った自衛官を掴むと烏賊の口に似た嘴で胴体を食いちぎる。

化け物は奇声を上げるとゆっくりと奥に進んで行った。

桐生がコーヒーを飲んでいると椎名が歩いてきた。

椎名は自動販売機に小銭を入れるとオレンジジュースを買う。

オレンジジュースを取り出そうと屈み込んだ瞬間、桐生が空き缶をゴミ箱に捨てる。

「お前も一服か？」

「ええ」

「オレンジジュースを飲むとは可愛らしいところがあるな。てつきり、コーヒーとか飲むかと思ってたぜ」

「私が可愛いかかふざけないで下さい！」

椎名が顔を赤めると桐生は軽く頷いた。

椎名の事が何となく分かった気がする。

椎名は「可愛い」という言葉を聞くと動揺するらしい。
相当初なのか………

桐生が苦笑したその時、ジェイクが歩み寄ってきた。

「……………そろそろ状況が終了する」

「わざわざ教えに来てくれたのか？」

「貴様には関係ない」

「言葉のキャッチボールが成り立ってねえぞ？」

「……………」

ジェイクが無言で桐生に背を向け、歩き出したその時現場の様子が変わった。

急に慌ただしくなり、救護班が地下に向かう。

同時に82式指揮通信車から霞が飛び出してくると桐生に駆け寄ってくる。

「緊急事態だ！突入した部隊が全滅した！！」

「全滅！？この短時間でか！？」

「そうだ。先程、突入した部隊から連絡が途絶えた。しかも、偵察衛星の熱探査で地下に巨大な影が確認された」

「影？」

「とにかく緊急召集だ。仮設テントに集まれ！」

「んな、時間ねえだろ！」

桐生は叫ぶと近くにあった軽装甲機動車に駆け寄る。そして荷台を開けると、片っ端から兵器を積み込む。

「何やってる！？」

「見りゃ分かるだろ？」

桐生はニツと笑うと、運転席に乗り込んだ。

刹那、大野が駆け寄ってきた。

「どうしたっスか！？」

「出撃だ！！早く乗れ！」

「りよ、了解っス！」

「お前達は行くのか？」

「任務を断る義務は兵士にありません」

「……………勘違いするな。俺には目的がある」

「オーケー！」

大野と椎名が後部座席に、ジェイクが助手席に乗ったのを確認すると桐生はキーを回し、アクセルを踏み込んだ。

そして軽装甲機動車はそのまま、地下鉄の中に突入した。

「あの馬鹿野郎共がつ！」

霞は吐き捨てると指揮通信車に戻った。

階段を駆け降りる衝撃に軽装甲機動車が揺れる。

「車の中に入るなんて、馬鹿ですか！？」

「舌嚙んだっス」

後部座席の二人とは対称的にジェイクは足を組み、平然としている。

「へえ、肝が据わってるね」

「それがどうした？ 恐がる要素は無い」

「そう来なくっちゃな！」

桐生はさらにアクセルを深く踏み込む。

そして線路付近まで行くとドリフトを行い、横から線路に下りる。

桐生は車を停止させると微笑を浮かべ、後部座席を見る。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見えたら眼科に行くべきですよ！」

後ろの二人はまるで絶叫マシンに乗った後のような状態になっている。

桐生が苦笑したその時、ジェイクが「おい」と呼び掛けた。

「デカイのが来てるぞ」

三人が前を見ると、巨大な烏賊のような化け物が迫ってきていた。化け物を見た桐生は口笛を吹くと軽口を叩いた。

「まるで烏賊だな。干物にでもするか？」

桐生が嘯いた瞬間、溶解液が吐きかけられる。

桐生は装甲機動車を後退させ、溶解液を避けると叫ぶ。

「大野！ 弾幕を張れ！」

「了解っス！」

大野は天井を開けるとグロック社の拳銃「G18C」を二丁取り出した。

フルオート射撃は弾がバラけるが弾幕を張るには最適だ。

大野は指切りをせず、フルオートで連射する。

無差別に放たれる9mmパラベラム弾は化け物や壁を削り取る。

椎名も窓から顔を出して、MP-5SD6の引き金を引く。

しかし、化け物は動じる事なく這ってくる。

「兄貴！効いてないっスよ！」

「構わねえ！打ち続けろ！！」

桐生は車を全速力で後退させると、化け物から百メートル離れる。

大野はG18CからSR-25狙撃銃に変えるとスコープを覗いた。その間にもジェイクは84mm無反動砲「カール・グスタフ」を荷台から取り出す。

大野が引き金を絞ろうとした瞬間、HEAT弾が化け物に着弾する。

「邪魔しないで欲しいっス！」

「豆鉄砲撃ってる暇有ったらこっちを撃て」

ジェイクは大野にカール・グスタフを渡すと、乗車する。

（お前達……聞こえるか？）

無線から霞の声が聞こえ、桐生は急いで無線を掴む。

「聞こえてる、どうぞ」

（生きていたか。敵を確認しているか？）

「ああ！でっけえ烏賊だ！」

（烏賊？クトーニアンか！？）

「何だそりゃ？」

（地底に住むアビスだ。武器は溶解液。高温の地底で暮らせるように奴の体は高温や生半可な武器は通用しない）

「ここって言つ生半可な武器は？」

（対艦ミサイルだな）

「笑えねえ……弱点は？」

（水をかければ骨格が軟化し、H E A T弾でも一撃で倒せる）

「水ねえ……っ!？」

約五十メートル先から溶解液が飛んで来た事に気付いた桐生は急いで車を後退させた。

「地下鉄で水って、どうすりゃいい!？」

（方法なら無くはない）

「何だ？」

（そのまま奥に行けば、建設途中の線路がある）

「建設途中？」

（地下水脈に当たったんだ。それを爆破すればいい。だが、問題がある）

「何だ？」

（地下水脈の量だ。その地下鉄の全体が腰の高さまで浸かる水位と予測されている）

「どんだけ杜撰な設計なんだ？んな物の隣に地下鉄作るって、有り得ねえ。だいたい、爆破したら俺達もただじゃすまねえぞ!？」

（分かっている!!）

霞が怒鳴ると桐生は不意にほくそ笑んだ。

「いや、イケる」

桐生は無線を置くと、バックで地下鉄を抜ける。

（どうするつもりだ!）

「爆破するんだ!」

「正気ですか!？」

無線会話を聞いていた椎名が叫んだ。

「俺はいつだって正気だ!」

桐生はそう言うと、曲がり角で装甲機動車を正面に向けると、例のトンネルに車を走らせた。

霞は眉を潜めると無線を置いた。
破天荒で無鉄砲。

だが、行動は全て正しい。

「まるで、あいつみたいだ」

霞は小さく呟くと自嘲した。

桐生は行き止まりまで車を走らせると、停車させた。

「椎名、C4爆薬を壁に仕掛けてくれ！」

「貴方は馬鹿ですか！？私達まで死にますよ！」

「大丈夫だ」

桐生は口元を緩めるとジェイクに向き直った。

「ジェイク、お前の魔術でバリアみたいな物を張れねえか？」

「指図するな」

「貴様、何か目的があると言っていたな？だったら、ここで死んでいいのか？」

「……………」

「俺はお前を利用する。お前は俺達を利用する。それならどうだ？」
「……………目的の為だ」

ジェイクは車から降りると車の周囲に紋様を描いていく。

「椎名、頼む！」

「分かりました」

椎名は車から降りると荷台からC4爆薬を取り出し、壁に取り付ける。

同時に向こうからクトーニアンが迫ってくるのが見えた。

「まだか！？」

「……………終わった」

「こちらも完了です」

椎名は車に乗ると、ジェイクは車の前に立ち、結んでいた髪を解いた。

暗闇の中に銀髪が靡くと、ジェイクは紋様と同じ模様の手刀を切り、地面を叩いた。

刹那、車を囲むように緑色の透明な壁が現れる。

「今だ、椎名！」

桐生の声に椎名は信管のスイッチを入れた。

同時に壁が吹き飛び、水が鉄砲水となった。

クトーニアンは鉄砲水に吞まれて姿を消す。

しかし、車の周囲のみ、水が避けて通っている。

「凄いっス」

大野は感激しながら見ていると、ジェイクが苦しそうに息を切らしていた。

額には脂汗が滲んでいる。

「大丈夫っスか!？」

「黙れ!! 集中出来ねえ!!」

ジェイクが叫ぶと同時に凄まじい量の水は勢いを弱め始めた。

水に吞まれたクトーニアンはその巨体を露にした。

クトーニアンの体はナメクジのように光沢を放ち、触手も弱々しくのたうつ。

「ジェイク、助かった」

桐生は01式対戦車誘導弾、通称「携MAT」を掴むと、ジェイクの肩に手を置く。

ジェイクは手を払いのけようとしたが、バランスを崩し、地面に倒れた。

同時に結界は消滅する。

桐生はジェイクを起こすと、片手で携MATを構えた。

コンピューターが逃げるクトーニアンを捉える。

「チエックメイトだ。烏賊野郎」

桐生は小さく呟くと、対戦車ミサイルを発射した。

対戦車ミサイルは一直線にクトーニアンの口に向かうと、口内に侵入、爆発した。

同時にクトーニアンは頭からバラバラに吹き飛び、四散した。

「終わった・・・」

桐生は小さく言うと、溜め息を漏らした。

同時に全身の力が抜け、水の中に崩れ落ちたのだった。

戦後

CATS本部隊員宿舎

不覚だった。

あそこで盛大に汚水に浸かるとは……………

そこまで神経を使っていたとは思わなかった

桐生は嘆息を漏らすと、トランクスを履く。

髪から垂れる雫をタオルで拭い取るとベッドに倒れ込む。

その時、愛猫の三毛猫「トロコ」が顔を嘗める。

「お前も強制送還されて大変だったろ？」

桐生はトロコを持ち上げると頬を緩めた。

家を勘当されて迷っていた所にこの三毛猫を見付けたのだ。

小さい子猫を放っておく訳にもいかず、自分とも重なって見えた桐

生はこの子猫を飼う事に決めた。

その日のご飯を分け合い、共に寝たトロコは実家から勘当された桐

生にとって、唯一の家族だった。

桐生はトロコをベッドに下ろすと、頭を優しく撫でる。

猫以上に人懐こく、犬以上に忠実なトロコは気持ち良さそうに喉を

鳴らす。

その時、部屋の扉をノックする音が聞こえ、桐生は立ち上がると、

ドアに歩いて行く。

「誰だ？」

「自分っス！お酒、持って来たっスよ」

「お前か……………ワリイな。彼女がいるんだよ」

「もしかして、椎名っスか？」

大野のニヤついている顔が目につく。

何か胸糞ワリイ。

「んな訳ねえだろ。トロコだ」

「何だ、トロちゃんっスか」

「何だとはなんだ！俺の唯一の家族だぞ」

「す、すいません！入っていいスか？」

「ああ」

桐生は鍵を開けると、ドアノブを捻った。

大野はドアを開けると酒瓶を見せびらかし、笑っている。

そのまま中に入ると、大野は椅子に座り、桐生もベッドに座った。

そして桐生の膝にトロコが座るのを確認すると、大野が口を開いた。

「しかし兄貴って、温泉好きっスよね？トロコもですし、雷電や霧積も、その刀も……」

「お前にも言ってなかったな。鬼首おにくびは別だ」

桐生は刀を見遣ると苦笑した。

「唯一の実家との繋がりだからな。それもあるんじゃないかな？」

「兄貴……」

「まあ、気にしたら負けだ」

桐生は笑みを浮かべると、酒瓶を掴んだ。

「大野、冷蔵庫の中にミネラルウォーターがあるから取ってきてくれねえか？それとグラス」

「分かったっス」

大野は冷蔵庫の上のグラスを取ると、中からペットボトルを取り出した。

「トロコの水皿も」

それを聞き、大野は水皿を掴み、中に水を入れる。

大野の床に水皿を置くと同時にトロコは水皿に駆け寄り、小さな舌で水を掬い取る。

大野はトロコを見て優しく笑うと、椅子に座った。

「アビスか……」

唐突に口を開いた桐生を大野は一瞥した。

「何か馬鹿らしいと思わねえか？」

「えっ？」

「アビス事件ってのは極秘事項なんだろう？ だって事は俺達が危険な目に遭っても誰も知らないって事になる。いくら俺達が死のうが、国民はそんなの知らないって訳だ。誰にも感謝されず、誰からも顧みられない」

「それはそうっすけど……どうしたんスか？」

「何かふと思っちまったんだ。らしくねえな」

桐生は苦笑すると、酒をグラスに注いだ。

並々と注いだウイスキーに氷を入れるとジェイクは一気に流し込んだ。
だ。

まだ冷えてないウイスキーが喉を通り、刺激の強いアルコールが喉を刺す。

ジェイクはグラスを机にたたき付けるように置くと氷がグラスから飛び出した。

ジェイクは飛び出した氷を踏み付ける。

氷が割れる独特の音が響き渡り、床に小さな水溜まりを作った。

あの桐生という男……

ふざけた態度でうざいが、実力は確かだ。

もし、あの場に奴がいなかったら全員の帰還は有り得なかった。

むしろ、全滅していた可能性さえ有り得る。

だが、だとしても俺は誰も信用するつもりは無い。

奴らは俺の目的の為に利用する、その駒に過ぎない。

ジェイクは幼い子供と金髪の妙齡の女性が写っている写真を見て小さく「母さん」と呟いた。

暗い室内に灯る一つの明かり。

キーボードを叩く音が響き渡る以外物音は無い。

椎名はパソコンに今までのアビス事件をまとめていた。

隊員のIDでログインが許可されるアビス事件の資料集。

その全てを見ることは出来ないが、今まで現れた一部を見る事は出来る。

元々、部隊の参謀的な立ち位置だった椎名には、先の任務で殆ど役に立たなかった事がどうしても我慢ならなかった。

桐生……

彼の前に、どうしても太刀打ち出来ない自分が腹立たしい。

防衛大学生時代だってそうだ。

訓練成績、射撃訓練、学力、どれを取っても勝ち目が無い。

桐生を天才と表現するなら自分は凡人だ。

どんなに背伸びしても、どんなに頑張っても、彼に適う事はない。

いや、なかった。

追いついた頃には彼は一步先を進み、一步先に出たと思った頃には二歩先にいて……

努力家の椎名にとって、不真面目でありながら優秀な成績の桐生は納得の出来ない存在であり、解せない存在なのだ。

その桐生に差を付ける為に、今こうして資料をまとめている。

その時、椎名の目にあるタイトルが映った。

「防衛省地下金庫内部「パンドラの箱」？」

椎名はカーソルを合わせクリックしたが、画面には大きく「ロック」の文字が踊っている。

その時、後ろから声が聞こえてきた。

「それをハッキングしようと思うなよ」

椎名は驚いて振り返ると霞が立っていた。

霞は厳しい顔つきで椎名を見下ろしている。

暗闇の中の唯一の光源に照らされた霞の顔は殊の外不気味で、思わず悲鳴をあげそうになる。

しかし、椎名はそれを押し殺すと口を開いた。

「霞三佐、これは？」

「文字通りパンドラの箱だ。これを開ければ災厄が起こる」

「パンドラの箱とは一体？」

「さあな」

そう言うと、霞は始末書を手渡した。

「お前が壁を爆破した始末書だ」

「そんな！あれは命令で……」

「分かっている。賠償請求はされない。CATSの誰もが通過する、言わば通過儀礼みたいなものだ」

「はあ」

椎名は半ばホツとしながら答えると、霞はドアに歩いて行く。

その時、霞は歩みを止めると小さく呟いた。

「もしかしたら、防衛省のあれば、パンドラの箱に惹かれたのかもな」

「えっ？」

「早く寝ろ」

霞は小さく言い放つと椎名の部屋から出て行った。

パンドラの箱に惹かれた？

椎名は内心呟くと、霞の言い付け通り、パソコンを閉じるとベッドに横になった。

過去

明朝の誰もいない射撃場。

桐生は雷電を指で回しながらそこに向かった。

雷電の銃口は二つある、という事は同時に炸薬が二発分炸裂する。という事は衝撃が尋常ではなく、50AP弾の約1・5倍の反動となる。

つまり、常人が扱うには難しい所か、役に立たないのが現状であり、桐生でさえこの銃を扱うのは至難の技であるのが現状である。

桐生は9mmパラベラム弾を装填すると人型の的に構えた。

その時、射撃場のドアが開く音が聞こえ、桐生は構えを解いた。

「貴方でしたか」

「椎名か」

桐生は振り返らずに言うと、再び雷電を構えた。

椎名もSIG P226を構えると、横目で雷電を見た。

「そんな銃にどんなメリットがあるんですか？デメリットの塊じゃないですか」

「確かに、ジャジャ馬だな。だが……………」

銃声が轟くと、的に弾丸が当たる。

着弾場所はほぼ同じだ。

「同じ部位にダメージを与えられる。拳銃弾が通らない防弾チョッキでも確実にダメージを与えられるって事になるだろ？」

「実用性はありませんが……………」

「厳しいねえ」

桐生は続けざまに撃つと、頭部、胸部中央、右腕、左足を撃ち抜いた。

それに対抗するように椎名は引き金を引いた。

弾丸は右胸部、脇腹、左手を撃ち抜き、頭部を狙ったが弾丸が逸れる。

椎名は舌打ちすると、桐生を一瞥した。

桐生は微笑を浮かべると、的を見ないで片手での的を射ぬく。

放たれた弾丸は頭部を吹き飛ばし、激しい音を鳴らした。

「射撃場の的を破壊する程の威力に改造するなんて、頭がおかしいんじゃないですか？ 犯罪で家族に迷惑かけてるんじゃないですか？」

「・・・・・・実家からは離縁されてるよ」

「そうなんですか？」

「言ってなかったか？ 親父に反抗した結果だ。家が神社で、神主になれと言われて反発した結果がこれだ」

「一年間、何をしていたんですか？ 貴方、年齢が一つ上でしたよね。なのに防大には同期生として入学しましたね？」

「その一年、俺は日本中を旅していたな。自暴自棄になって・・・・・・な」

桐生は自嘲すると、弾倉を取り出すと9mmパラベラム弾を装填し直す。

「そういうお前は何で島流しになったんだ？」

「島流しって・・・・・・私は罪人ですか？」

「冗談も通じないか、生真面目な嬢ちゃんには」

「一歳差の人に嬢ちゃんはないですよ」

「ったく・・・・・・本当に冗談通じねえ」

桐生はやれやれと首を振ると、弾倉を雷電に装填する。

その時、椎名は囁くように口を開いた。

「実殲隊の選抜基準は身寄りの無い優秀な自衛官・・・・・・」

「お前・・・・・・まさか・・・・・・」

「私は孤児院で育ちました。椎名は院長先生の苗字。望は希望を絶やさないようにと願いを込めて・・・・・・私、孤児院の前に捨てられていたそうです」

「ワリイ・・・・・・そんなつもりは無かったんだけどな」

桐生が申し訳なさそうに言うと、椎名は笑みを浮かべた。

「貴方が謝るとは驚きです」

「何だよ。まるで俺様主義みてえな言い方だな」

桐生は苦笑すると、雷電をホルスターに仕舞う。

「何か、お前が笑ったの始めてみた気がするな」

椎名はハツとすると顔を背けた。

同時にスクランブルの警報が鳴り響いた。

「任務か………」

「そうですね。行きましょう」

椎名はSIG P226を仕舞うと眼鏡を上げ、射撃場を出て行った。

「全く……分らないな」

桐生は椎名の後ろ姿を見て苦笑する。

そして桐生は射撃場の出口に向かう。

刹那、銃声が響き渡り頭部の無い的の胴体が吹き飛び、桐生は雷電から立ち上る硝煙を吹き消した。

協同作戦

ブリーフィングルームに入った二人を見た霞は二人が席に座ると同時に口を開いた。

「今回の任務について連絡する。今回は米海兵隊との共同作戦だ」

「海兵隊っすか!？」

「お前らに言ってなかったか？アビスは米軍も認知している。日本でアビスが始めて確認されたのは1999年の富士樹海惨殺事件だが、それ以前にアメリカ海軍第七艦隊のニミッツ級空母カール・ヴィンソンをアビスが襲撃した記録が残されている」

「そうか。で、今回の任務の詳細は？」

桐生の言葉に霞は関東の地図をモニターに映すと、千葉県東海岸沖合を指示棒で指した。

「米軍の強襲揚陸艦『エセックス』。それがアビスに襲撃された」

「エセックスって確か乗員は約1200名だろ？そんなのが簡単に落ちるのか？」

「こればかりは盲点か、天さ……………」

霞が言いかけていた所を、桐生は椅子に寄り掛かると、人差し指を立て、遮った。

「アビスはCATS同様に米軍の一部隊員しか伝えられていない。

そして海兵隊以外の、例えば調理師や歯科医を除外したら、乗員約300名だった、とかか？」

「知ってるなら聞くな」

「さっき思い付いた」

桐生はニツと笑うと、霞は憎らしいと言わんばかりの表情で睨む。

しかし、すぐに気を取り直し、口を開いた。

「今回は事情が複雑でな？ある変態野郎が米軍を護衛に付けて、何か変態的な物を輸送していたら襲われたらしい」

「……………変態、変態と、そいつにどんな恨みがある、オペレ

「ター」

ジェイクは呆れ気味に呟くと、霞は髪を掻いた。

「あいつにはハラワタが煮え繰り返る程、恨みがある」

霞は歯を食いしばると深い溜め息をついた。

「今回の作戦はそのクソの救出と物の輸送だ」

「重要人物のその物についての詳細を要求します」

「重要人物に関しても物に関しても詳細を教える事は出来ない」

「……無茶苦茶だな」

「同意する」

桐生はジェイクに同意するとジェイクは桐生を一瞥する。

霞はその二人を睨むと口を開いた。

「頭を撃ち抜かれたいか？」

「いや……アハハ」

桐生は苦笑すると、モニターにタスクフォースの文字が踊る。

「今回は特別編成したタスクフォースと行動する。現地にはM V -

22オスプレイで向かい、ラベリング格降下する。作戦とアビスの詳細はオスプレイ機内で米軍が説明するそうだ。作戦時刻は一二〇〇

時。その時刻にオスプレイがここに来る。それまでは自由時間だ。

以上、解散！」

C A T S 本部滑走路

11:58

私服にベストを付けた桐生が歩いていると、椎名が駆け寄ってきた。迷彩服にアーマーを付けた椎名の手にはM P - 5 S D 6が握られている。

「随分と軽装ですね、二尉。また旅にでも出るんですか？」

「防弾チョッキは動きにくいし、そのうえ迷彩服では逆に目立つだろ？それに俺は軽装が好きなんだ」

「貴方、本当に自衛官ですか？」

「民間人でここにいるなら不審者だろう？」

桐生は歩いて集合場所に向かうと互いに背を向けたジェイクと大野が立っていた。

ジェイクはコートにショルダーホルスターという出で立ちだ。

椎名は桐生とジェイクは似た者ではないかと思えてきた。

似ているからこそ、反発しあうのではないか？

その時、椎名のロングヘアがなびき、椎名は上空を見上げた。

ヘリと飛行機の特徴を備えたMV-22オスプレイがゆっくり降下してくる。

着陸したオスプレイの後部ハッチが開くと米海兵隊がこちらを見ていた。

桐生は海兵隊に英語で語りかけた。

「あんたらがタスクフォースか？」

その声に大尉の襟章を付けた海兵隊が立ち上がりながら答える。

「そうだ」

「あんたが隊長か？」

「ああ。私はウィリアム・ソロモン大尉だ。君が隊の隊長か？」

「いや、俺はそういうのじゃないさ。柄でもないからな」

桐生は苦笑するとソロモンも鼻で笑い、乗れと手招きする。

四人は武器を持ち、オスプレイの中に入る。

タスクフォースの面々は黒い防弾チョッキに黒いヘルメットを付けていた。

「では、状況を伝える」

ソロモンは大きな地図を取り出した。

「昨日、我が国の強襲揚陸艦エセックスが行方不明になった。エセックスが消息を絶つ直前、ある無線が飛び込んでいる。ダゴンに襲

われた、とな」

「ダゴン？」

「我が国で始めて確認されたのはダゴンとその眷属であるディープと
呼称されるアビスだ。ディープは半魚人、ダゴンはレビヤタンタ
イプのアビスだ」

「レビヤタン？」

「……蛇に似た怪物だ。ヨナ書では巨大な鯨と表記されて
いる」

ジェイクは小さく呟くとソロモンはゆっくり頷いた。

「奴らと遭遇したと見るべきだろう。機関部がやられ航行不能の状
態にディープに侵入されたらしい」

「生存者は？」

「無線からは確認出来ない」

「という事はやはり完全に占拠されたという事ですか？」

椎名の問い掛けにソロモンは首を横に振ると、エセックス遭難地点
を赤で囲む。

「この一帯にジャミングが確認されている。その影響だろう」

「ジャミング？何でまた？」

桐生が訝しげに問い掛けるとソロモンは再び首を振った。

「分らんが事実である事に変わりはない」

そんなソロモンを見ていた桐生は何か妙な違和感を感じ、目を細め
た。

「ところで君達の武装を確認したいのだが？」

「私はMP-5SD6とSIG P226です」

「自分はSR-25とG18Cっす」

「……ガバメントだ」

「この刀と改造拳銃だ」

桐生は雷電を見せると、ソロモンはそれをまじまじと見つめる。

「クレイジーな銃だな」

「サンキュー」

桐生は笑いながらそれを受け取るとホルスターに仕舞った。

「では、出発だ」

その声と同時にオスプレイのハッチが閉じ、上昇していった。

海上の要塞

霞が本部の管制室に入った瞬間、別のオペレーターが走ってくる。

「霞三佐！」

「どうした？」

「これを見て下さい。ジャミング領域の測定結果です」

「ジャミング？」

「ええ。エセックス行方不明後に確認されました」

「それがどうした？」

「発信源がエセックスなんです！」

「何だと!？」

霞は眉を潜めると資料を受け取った。

偵察衛星の写真から確認されるエセックスの場所と、ジャミング発生地域がピンポイントで重なっている。

それだけなら問題は無い。

そのジャミングの発生地域がエセックスを中心に円形に広がっているのだ。

つまり、ジャミングの発信源は……………

「エセックスがジャミングを!？」

「ええ」

「実殲隊に無線を開け!!」

「無理です。オスプレイは既にジャミング下に入りました」

「クソ!!」

何故奴らはジャミングを？

考えられる可能性は……………

「入谷……………余計な物を持ち込んだか！」

霞は小さく呟くと、駆け出した。

「三佐! 何処へ!？」

「ヘリポートだ!! ジャミングが晴れたらすぐに私に連絡しろ!!」

「了解！」

オスプレイから見えるエセックスは例えるなら海上の要塞だ。

重輸送ヘリ「CH-53Eスーパータリオン」やVTOL（垂直離着陸）戦闘攻撃機「AV-8Bハリアー？」が搭載されているのが見える。

その一部は大破し、さらに艦の側面には巨大な穴が確認出来る。

「デケエな」

桐生が小さく呟くと同時にオスプレイはエセックスの甲板の真上にホバリングを行う。

後部ハッチが開くと同時にラベリング用のロープが下ろされる。

「ゴー、ゴー、ゴー！」

ソロモンの掛け声と同時にタスクフォース隊員が降下を開始する。

「君達も」

その声にジェイクと大野が降下する。

桐生がロープを掴むと、椎名を一瞥した。

椎名は躊躇っているらしく、尻込みしている。

「どうした？何を緊張してんだ？」

「私……高いのが苦手で……正確には高い所から飛び降りるのが苦手で……」

そこまで言った瞬間、椎名の手に温かい物が触れた。

同時に桐生は椎名を抱き寄せると片手で降下する。

椎名は口をぱくぱく動かしていたが、顔を真っ赤にさせているので恐怖ではないのは明白だ。

桐生が甲板に降り立つと同時に椎名は急いで離れる。

「な、何するんですか！？」

「時間の短縮」

桐生は短く答えると椎名を一瞥し、苦笑する。

「男に免疫ねえんだな」

その時、桐生と椎名の間にソロモンが降下してくる。

「行くぞ」

「イエッサー、キャプテン（大尉）！」

桐生は苦笑いすると、駆け出した。

椎名は憎らしげに桐生の背中を見送ると眼鏡を上げ、追い掛ける。

タスクフォースの隊員五人、実戦隊の四人が内部に突入した。

同時に生臭い匂いと血の匂いが隊員達の鼻をつく。

「二手に分かれ、搜索する。我々は海兵隊員を搜索し、君達是要人を救出でいいか？」

「あんたらに従う。特に異論は無い」

「それはいい。日本人はいい友人だ」

ソロモンは不敵な笑みを浮かべると駆け出した。

その後ろに続き、タスクフォースの隊員達が駆け出すと桐生は溜め息をついた。

同時に大野が口を開く。

「兄貴、何で霧積を言わなかったんすか？ 忘れたんすか？」

「いや、持って来てるぜ？」

桐生は改造したCOP・357マグナム「霧積」を見せる。

「タスクフォースの連中、何か引つ掛かってな。わざわざ俺達の武器を教える必要があるか、ってな」

「・・・・・・まるで俺達の手の内を確認するようだった」

「それにだ。スタリオンが健在ならそれに乗って脱出すればいいだろ？ わざわざ救援を出す程か？ もしかしたら、米軍が敵になるかもしれない」

「二尉は考えすぎでは？」

「悪いが、俺も同じ考えだ」

ジェイクは小さく呟くと、ゆっくり歩き出した。

「勝手な行動は……」

「いいじゃねえか。どうせ隊長はいねえんだから」

「ジェイクさんはオブザーバー、階級は桐生二尉が上ですよ？」

「柄じゃねえからいいんだよ。行くぞ」

桐生はジェイクの後ろに追従した。

ソロモンが歩いていると、タスクフォースの隊員が駆け寄ってきた。

「隊長、奴らを野放しにしてよろしいのですか？」

「関係ない。所詮は」(自衛隊)。海兵隊に勝てる訳は無い」

ソロモンはほくそ笑む。

「我々の目的はアビス研究の第一人者の抹殺と例の物の奪取だ。悔しいが、アビス研究は日本がトップだ。我がアメリカが日本に負ける事は許せないと、大統領はお考えだ」

「では、予定通り？」

「海兵隊と合流後、」を抹殺する。軍曹、奴らに張り付け。例の物を手に入れたら、殺してでも奪え」

桐生達は階段を降りる。

武器庫らしく、武器・弾薬が並んでいた。

「で、マジシャンは何を頼りにここに来たんだ？」

「……邪な気だ。恐らく例の物がそれだろう」

「俺には何も感じねえなあ」

「何か分かる気がします。胸の動悸がこの場所に近付く度に早くな

って……」

「緊張してつからじゃねえの？」

「そうですかね？」

椎名は首を傾げると入り口に寄り掛かった。

同時にジェイクは足早に小さな箱に近付いた。

「これか……」

ジェイクは箱を開ける。

箱には四インチ程の大きさの黒い宝石が納まっていた。

多面体のその表面には赤い筋が走っている。

その時、「フリーズ」という声が響き渡った。

ジェイクが振り返ると、オスプレイ機内で見たタスクフォースの隊員が椎名を羽交い締めにし、額にM9（M92F）を突き付けている。

「コイツの頭が吹き飛ばされなくなったら武器を置け」

その声に、三人はそれぞれの武器を捨てる。

「それを渡して貰おう。それは合衆国に必要な物だ」

「これは何だ？」

「トラペゾヘドロンだ。詳しい事は知らんが……さあ、渡して貰おう」

ジェイクが紋章を描いたその時、桐生がジェイクの手を掴んだ。
「信じろ」

桐生は短く言うと、黒い宝石「トラペゾヘドロン」を受け取る。
ジェイクは一瞬躊躇ったが、すぐにトラペゾヘドロンを手渡す。

桐生はニツと笑うと、隊員の方を向いた。

そして桐生は僅かに大野を見るとゆっくり頷く。

「椎名と交換だ」

「いいだろう」

隊員が答えると同時に桐生が歩き出す。

不意に隊員との距離が二メートルの所で桐生は歩みを止めた。

「ここで交換だ。三つ数えたら、お互い渡す」

「ああ」

隊員は笑みを見せ、それを見た桐生はゆっくり頷く。

二人は同時に口を開く。

「ワン………ツーン！」

桐生は素早く霧積を取り出した。

隊員は反射的にM9を構えるが間に合わない。

「スリーー！」

霧積が火を噴くと同時にM9が隊員の手から弾け飛んだ。

一瞬怯んだ隙について椎名は逃げる。

「大野！！」

桐生が叫ぶと、大野は日本刀「鬼首」を投げる。

桐生もトラペゾヘドロンを投げ、二つが空中で交差した。

桐生は素早く刀を抜く。

刀の刃は緋色に染まり、妖しい雰囲気を醸し出している。

タスクフォースの隊員はナイフを抜くと、桐生に駆け寄る。

桐生は振り下ろされたナイフを鬼首で受け止めると、腹を蹴った。

隊員がよろめいた隙に、桐生は刀を一閃する。

鬼首の刃はナイフの刃を切断した。

ナイフの刃は壁に突き刺さる。

桐生は隊員の喉元に切っ先を向けた。

「形勢逆転だな？」

「クツ………」

「何が目的だ？」

桐生が問い掛けたその時、エセックスが激しく揺れた。

「何だ？」

桐生が踏ん張りながら呟くと、隊員の真上から巨大な触手が現れた。

桐生が思わず後ずさると、隊員が上を見上げる。

同時に触手が隊員を捕まえると天井に消えた。

隊員の悲鳴が訝する。

刹那、椎名の真上からも触手が現れ、椎名を捕まえる。

桐生は急いで駆け寄るが、それより早く触手は椎名を引きずり込んだ。

椎名の眼鏡が落下すると、レンズが割れる。

椎名の悲鳴が響き渡り、桐生は舌打ちする。

「何だつてんだ!!」

「ダゴンの触手だ」

三人が声のする方を見ると、そこにはボサボサの髪に無精髭が生えた男性が立っていた。

身なりを整えれば二枚目の男性のホルスターにはアメリカ軍特殊部隊が使っているMK・23が納められている。

「見た所日本人のようだが、あんたは？」

ジェイクは男性を睨みながら言っていると、男性は目を細めた。

「あれ？ 夢から聞いてないか？」

「夢？ 霞三佐の事っすか？」

「そいつ以外に誰がいる？ 俺は入谷謙介だ。元CATS所属で夢の相棒だったんだぜ？ ま、今は民俗学者としてアビスの研究を行っている」

「んな、事はどうだっていい！ 椎名は何処に!？」

「可愛くないねえ、坊や。恐らく、嬢ちゃんは大ゴンの所だろうな・

・・・」

「・・・何があつたか、教えろ」

「礼儀がなつてないな、坊や。まあ、いい話してやるよ」

入谷は煙草を取り出すとライターに火を付けた。

「米軍はあるシナリオを書いていた。民俗学者と例の物を運んだエセックスが大ゴンに襲われ航行不能。謎のジャミングで連絡不可能になる。救援に来た自衛隊と民俗学者は死亡、例の物は行方不明」

「やつぱ、自演だったか」

桐生は嘆息混じりに言っていると、入谷は紫煙を吐き出す。

「だが、実際に大ゴンが襲撃、シナリオが可笑しくなったんだ。米軍はシナリオ通りジャミングを行い連絡を絶つが、逆に裏目に出た

って訳だ」

「偶然ってあるんスね」

「ダゴンは貨物室付近にいるかもな」

それを聞いた桐生は雷電を左手に、鬼首を右手に持ち、駆け出した。
「若いっていいねえ。俺達はジャミングの解除に専念しようか？」

入谷は煙草を投げ捨てると歩いて行った。

海魔

桐生が全力で走っていると銃声が響き渡った。

同時に組み合っている米兵とディープが飛び出してきた。

「どきやがれえ！！」

桐生は雷電で米兵を吹き飛ばした。

同時にディープがこちらを向いた。

魚とも蛙とも分らない人型のそれは桐生を見ると飛び掛かってくる。

桐生は右手に、逆手に持った鬼首を走りながら構えた。

擦れ違う瞬間、鬼首の刃はディープの胴体を真つ二つにし、薄い赤色の血液を噴き出した。

桐生は振り返らずに一気に駆けると奥に走る。

刹那、二人の海兵隊員達が曲がり角から現れた。

桐生は鞘に鬼首を仕舞うと、右手で霧積を掴んだ。

同時に海兵隊員はM16A4を構え、引き金を引いた。

桐生は正面に飛び込むと空中で引き金を引いた。

9mmパラベラム弾と357マグナム弾が隊員を弾き飛ばした。

二人とも即死に近い状態だ。

357マグナム弾はともかく、雷電から放たれる9mmパラベラム弾は一撃が当たれば致命傷となる。

放たれた初弾と続く次弾。

初弾が体内に食い込むと僅かに減速、体内の中心で殆ど減速しない次弾が初弾にぶつかり、マッシュルームリングを起こす。

つまり、体内で流体性力学的ショックを引き起こし、即死するのだ。

桐生は地面に着地する瞬間に腕で反動を付けて跳び上がった。

そして一回転をすると、地面に立ち、桐生は再び駆け出した。

入谷が歩いていると後ろから大野が駆け寄ってきた。

「待ってほしいっす！何でジャミングを解除するんスか！？そんな事をしたら敵の増援が……」

「今日の一八〇。時、ジャミングが解除されなければ奴らはハーブーン（対艦ミサイル）でこの艦を爆破するつもりだ」

「何故解除しようとしなかった？」

ジェイクは入谷の肩を掴むと、問い詰める。

入谷は目を僅かに細めるとトラペゾヘドロンを取り出した。

「コイツをアメリカにやる訳にはいかなかったからな。お前、俺が遊んでいたとも思っていたか？」

入谷がそこまで呟いたその時、天井から巨大な触手が現れた。

触手は入谷に真っ直ぐ向かうが、屈んで避けられる。

入谷はホルスターのMK・23とショルダーホルスターのMK・23を二丁構えた。

「ビンゴ！！」

入谷は水平にMK・23を構えると速射した。

45ACP弾は触手を貫通し、さらに跳弾で別の部位に着弾する。

触手は痙攣したかと思うと、素早く天井に戻っていった。

入谷は立ち上る硝煙を吹き消すと歩き出した。

集合地点にいたディープを殺害し終えたソロモンはディープの死体に唾を吐いた。

生き残ったのはソロモンと一人の隊員だけだった。

「何が簡単な任務だ！」

一人の隊員が呟いたのを聞いたソロモンは「黙れ！」と怒鳴った。
「作戦に変更は無い」

ソロモンはM4A1の弾倉を交換すると、ディープの頭を踏み付けた。

骨が砕ける音と肉が飛び散る音が響き渡る。

そしてソロモンは葉巻を口にくわえると歩き出した。

桐生が階段を駆け降り、最下層に辿り着く。

機関室付近は浸水し、膝まで海水がきている。

隊員がブロック閉鎖をしているのか、浸水はそこまで酷くはない。
しかし、歩みを鈍らせる海水に桐生は舌打ちする。

その時、桐生は海兵隊員の死体を見つけ駆け寄った。

仰向けに浮かんでいるその脇腹は食い荒らされ、内臓が無かった。
桐生は目を背けると、弾倉が装填されていないM4A1を掴んだ。

桐生はオプションとして付けられていたグレネードランチャー「M203」の引き金に指を駆けけると引き金を引いた。

密閉した物を勢いよく開けた時に似た音が鳴り、20mmグレネード弾は壁に当たり炸裂する。

まだ使用出来る事を確認した桐生はそれを掴むと、死体のジャケットにあった三発のグレネード弾を掴むとポケットに挟込み、奥に急いだ。

その時、凄まじい力に足を捕まれ引きずられる。

勢いが尋常ではなく、桐生の口や鼻から臭い海水が流れ込んでくる。

桐生は死に物狂いで刀を抜くと、薄目で足元を見た。

例の触手が足元に絡まっている。

触手は凄まじい力で桐生を引きずる。

桐生は刀で触手を切り落とすと勢い余り、水中にたたき付けられるが、すぐに体を起こした。

桐生は足元を見ると僅かに痙攣する触手が水中を泳いでいる。

水中の触手に弾丸が撃ち込まれ、触手は動かなくなった。

「ふざけやがって!!」

桐生は雷電の弾倉を交換すると、歩き出した。

甲板に出た入谷達は真っ直ぐ艦橋に向かった。

入谷が艦橋の扉を開けた瞬間、その手摺りが火花を放った。

入谷は体を横に向けながら後ろを振り向いた。

後ろにはソロモンともう一人のタスクフォース隊員が立っている。

ソロモンはM4A1を構えながら葉巻を捨てた。

それを見ていた入谷は煙草をくわえ、火を付ける。

「どうした？」

入谷が紫煙を吐き出しながら英語で問い掛けるとソロモンは一步前に出る。

「貴様らにはここで死んでもらう」

「そういう訳にはいかないんで」

入谷は小さく呟いたと同時に手榴弾が投げた。

ソロモンが素早く避けようとしたその時、手榴弾が炸裂し、強烈な閃光と轟音が轟いた。

「フラッシュ（閃光手榴弾）か!？」

ソロモンは真っ白に染まった視界に焦ったが、すぐに晴れる。

しかし、ソロモンが銃を構えた時には入谷はMK・23を掴み、目の前に立っていた。

貫通力の高いアサルトライフルと携行性の高いハンドガン。

至近距離ではハンドガンの方が有利なのは明白である。

入谷はほぼ零距离で押し付けるように引き金を引いた。

ソロモンの脇腹から血潮が噴き出し、吹き飛ぶ。

「キャプテン！ファツキュー！！」

タスクフォースの隊員が入谷にM4A1を向けたが、それより早く9mmパラベラム弾が隊員の額を撃ち抜いた。

隊員は勢いよく吹き飛ばされ、甲板を転がり海中に落下していく。

入谷はそれを見送ると倒れているソロモンに銃口を向け、煙草を落とす。

それを踏み消すのを見たソロモンは脇腹を押さえ、半身を起こしながら口を開いた。

「貴様……民俗学者ではないのか！？」

「今は、な。昔は自衛隊の特殊部隊にいた身だ。特にCQBに特化していてね。悪いな」

「シット！！」

ソロモンはM9を構えると同時に45ACP弾がM9を吹き飛ばした。

「どうする？」

入谷は無表情に呟いた時、甲板から多数のディープが這い上がってくる。

入谷が拳銃を構えると同時に、ディープはソロモンを掴んだ。

「離せ！離せえ！」

ソロモンはディープに引きずられると、そのまま甲板から姿を消した。

同時に水しぶきの音が響き渡った。

他のディープも三人を捕らえようと迫ってくる。

「艦橋に逃げ！」

入谷が叫んだその時、大野が艦内に引き返した。

「どうした！？」

「兄貴達を探しに行くっス！」

大野は叫ぶと艦内に戻り、ジェイクと入谷は艦橋に入ると鍵を閉める。

入谷はジャミングを発生をさせている装置を破壊すると、長距離無線を掴んだ。

その時、ディープの声と壁を叩く音が響き渡り、入谷はそれを横目で見ると、無線に吹き込んだ。

何かを貪り食う音が響き渡る。

桐生は眉を潜めると、貨物室の扉を少し開けた。

貨物室からは魚市場のような匂いが漂い、桐生は顔をしかめる。

刹那、巨大な影が動いているのが目に入った。

桐生はM4A1のオプションであるM203を掴むと扉を勢いよく開けた。

そこには蛸とウツボを足したような巨大な化け物がいた。

飛び出た目、垂れ下がった唇を備えていながら不快な程人間に酷似している。

地面には食い散らかされた肉片が散らばっていた。

触手にはまだ喰われていない海兵隊員が捕らえられていた。

一人が桐生に気付くと悲鳴をあげる。

「ヘルプ」という単語が聞こえ、助けを求めていると理解した瞬間、触手は海兵隊員を化け物の口元に運び、そのまま一口に丸呑みにする。

桐生が歯ぎしりすると、触手に捕らえられている椎名を見つけた。

椎名は僅かに口元を緩める。

同時に桐生は小さく呟いた。

「あれがダゴンか……」

桐生はM4A1を構えるとM203の引き金を引いた。
20mmグレネード弾はダゴンの首に命中する。

ダゴンは顔を桐生に向けると顔を左右に震わせた。

桐生は微笑みを浮かべると雷電を構える。

「三枚に切り刻んでやんよ！」

桐生が嘯くとダゴンは触手を桐生に向かわせる。

桐生は素早くそれを避けると触手を鬼首で切断する。

同時に桐生は雷電を両手で支え、速射する。

放たれた9mmパラベラム弾はダゴンの体に食い込むが致命傷に成らない。

ダゴンは何事も無かったからの如く桐生を見据えている。

「この野郎……涼しい顔しやがって!!」

桐生は雷電を仕舞うとM4A1のM203に20mmグレネード弾を装填した。

刹那、ダゴンは巨大な口を開けて突進してきたが、桐生はグレネードを撃ち込みながらそれを避ける。

グレネードはダゴンの口内で爆発するがやはり致命傷にならない。

火力不足、その言葉が桐生の頭を過ぎった。

20mmグレネードはあと一発。

(どうする、桐生翼……必ず突破口があるはずだ!)

桐生はグレネードを装填しながら模索すると、ニツと笑った。

「この一発にかけてやる!!」

桐生は怒鳴ると引き金を引いた。

「当たり前がれえ!!」

同時にM4A1を捨て、ダゴンに駆け出す。

グレネード弾はダゴンの顔のすぐ横を掠めた。

刹那、椎名を捕らえていたダゴンの触手をグレネード弾が吹き飛ばす。

桐生はスライディングしながら椎名を受け止めると迫ってきた触手に霧積を撃ち込む。

「……………んっ」

椎名は体をビクリと動かすとゆっくり目を開けた。

「目覚めたか？」

「桐生……………二尉？」

「なんだ……………眼鏡が無い方が可愛いじゃねえか」

桐生は椎名に笑いかけると、椎名は顔を真っ赤にした。

「誰がですか……………っっ！」

椎名は顔を歪めると足を押さえた。

足が少し腫れているように見え、走れそうにない。

かと言つて、ダゴンと戦うには火力が足りない。

選択肢は一択のみ。

桐生は椎名を抱き抱えた。

「ちよっ！何をするのですか！？」

「逃げるんだ！お前、走れねえだろ！」

「しかし！」

「しかし何もねえよ！」

桐生は全力で駆け出すと、ダゴンは伸縮自在の触手を伸ばした。

桐生が扉を足で閉め、駆け出したその時、触手が扉を突き破った。

「しっけえんだよ！！」

桐生は怒鳴ると椎名を見た。

「雷電を！」

椎名は雷電を掴むと「椎名、頼む！」と桐生が言う。

椎名は弾倉を交換し、両手で支えながら雷電を撃つ。

激しい衝撃に弾丸は逸れる。

「なんて銃を使ってるんですか！？」

「俺以外の使用は想定してねえんだよ！！」

桐生が叫んだ瞬間、風が擦れる音が聞こえ、後ろの触手が紫色の血を吹き出した。

「兄貴、三尉！」

二人が目を凝らすと大野がSR-25を構え、立っている姿が見え

た。

「大野、援護を!!」

「そのつもりっス!」

大野は急いで駆け寄るとホルスターからG18Cを引き抜き、弾幕を張った。

「来たのか?」

「兄貴はいつも言ってたっス。作戦は全員帰還して完了すると・・・」

「馬鹿が!」

桐生は苦笑すると速度を速めた。

壁を叩く音が響き渡る中、入谷は煙草を吸う。

「・・・・・・悠長だな」

「落ち着くんだよ。それに頼りになる助っ人が来るからな」

その時、ヘリの音が響き渡り、無線から声が聞こえてきた。

（伏せろ!!）

同時に12.7ミリ機関銃の重い銃声が響き渡る。

弾丸は艦橋の窓やデイープを構わず撃ち抜き、吹き飛ばす。

銃声が止むと入谷とジェイクが艦橋から飛び出した。

上空にはUH-60JAがホバリングしている。

「霞、早かったな?」

（貴様には聞きたい事が沢山あるからな）

そう言つと同時に、艦内から桐生達が飛び出してきた。

（全員無事だな?今すぐ降下する）

キャノピーから見えるエセックス。

爆音が響くF/A-18スーパーホーネット機内でパイロットは操縦桿を握る。

UH-60JAが降下し、中に人が入って行く。

「Jが……」

パイロットはホーネットのヘルメットマウントにエセックスを捉える。

このまままとめて吹き飛ばしてやる。

コンピューターがロックオンを告げたと同時にパイロットはAGM-84ハーブーンのスイッチを押した。

「ターゲット・ロックオン、FOX3!!」

ハーブーンはエセックスに向かって行く。

「来るぞ、ハーブーン！上昇だ!!」

霞の声と同時にヘリは上昇する。

刹那、ハーブーンがエセックスに突っ込み、HMXオクトーゲンが炸裂した。

同時にエセックスは大破した。

「間一髪か？」

桐生が呟いたその時、ミサイル警報が鳴り響く。

ホーネットパイロットはヘリを捉える。

UH-60JAはチャフとフレアを放出する。

「サイドワインダー、ロック！FOX2！」

放たれたAAM-9サイドワインダーが蛇行しながら向かって行く。刹那、海上からダゴンが顔を覗かせた。

ダゴンはホーネットに巨大な口を開けた。

サイドワインダーはダゴンの頭を吹き飛ばす。

「オーマイゴッド！！」

パイロットは叫ぶと、ダゴンの胴体につ込み、吹き飛んだ。

爆発するホーネットと爆風で体が吹き飛んだダゴンを見た桐生は小さく呟いた。

「終わった……………」

深い嘆息を漏らすと座席に寄り掛かった。

その時、椎名は桐生を見ながら小さく呟いた。

「ありがとうございます」

「えっ？」

「何でもありません！」

椎名はそっぽを向くと、海を見ながら微笑んだ。

二組の男女

CATS本部

街の明かりの無い孤島は星が非常に綺麗に見える。

月明かりが優しい間接照明のような明かりを作り出していた。

月明かりで光る海を紫煙が霞める。

バルコニーに立つ入谷は煙草を海中に投げ捨てると視線を右にずらした。

「霞か？」

「ポイ捨ては感心しないな」

霞は片手にウイスキーを持ちながら入谷の隣に立つ。

入谷はそれを無視して、手摺りに両腕を乗せてリラックスした。

「今まで何をしていた？」

「トレジャーハント」

入谷は短く答え、再び煙草を取り出した。

煙草に火を付けると入谷は紫煙を吐き出し、灰を落とす。

「エジプトの古代遺跡から見つけてきた。エジプト政府を黙らせる為にアメリカ軍を連れてきたって訳。まあ、アメリカも騙し討ちしてコイツを奪おうとしてただけだな」

入谷は灰を落とすとトラペゾヘドロンを取り出した。

「何でそんな物が必要なんだ？」

霞はウイスキーを口にすると入谷を一瞥する。

入谷はトラペゾヘドロンを月明かりに照らした。

不気味に光り輝くそれを入谷が覗き込むと顔が映り込んだ。

「コイツにはあるアビスが封じ込まれている。それは強力な力を持ったアビスだ」

「それをアメリカ軍に渡さない為に、か？」

「いいや、ある教団に渡さない為だ」

「教団？」

「ヘルファイア教団とか言うカルト教団だ。何でも、イギリスのヘルファイアークラブが元らしい」

「何だ？そのクラブは？」

「簡単に言えば、貴族が黒ミサと称して少女を犯す変態クラブだ」
「本当に変態だ」

霞がウイスキーを煽ると入谷は煙草を海に投げ捨てた。

「案外そうでもない。日本でも人身御供って風土があっただから言えないさ」

入谷は自分の事のように自嘲すると霞はウイスキーを一気に飲み干した。

「……………いつまでここに居る？」

「明日、研究所に戻る。アビスに関する研究が溜まっているだろうから」

「そうか……………で、そのカルト教団がどうした？」

「ああ。奴ら、今回のダゴン襲撃に一枚絡んでいるらしい。詳しい事は分からないが……………一つだけ、気になる事がある」

「何だ？」

「ジェイク・サイファー。お前達が抱えている魔術師だが、ヘルファイア教団に何らかの形で関わっている」

「……………」

「聞いただけだから、詳しく分からないが」

入谷は鼻で笑うと、身を翻した。

「疲れた、寝る」

入谷は手をヒラヒラさせると室内に入った。

「入谷！」

霞の怒鳴り声に入谷は振り返った。

霞は息を整えると、静かな口調で問い掛ける。

「自衛隊に戻るつもりは無いのか？お前ならCATSの教官になれる。だから……………」

「悪いな」

入谷は前を向くと小声で答えた。

「俺は民俗学者として暮らしている方が楽しいんだよ。面倒な事をしなくてもいいからな」

「何が楽しい！？何が面倒なんだ！？答えろ！！」

霞はウイスキーのグラスを捨てると入谷の胸倉に掴んだ。

入谷は苦笑すると、その手を掴み、引きはがした。

「相変わらず恐いな。俺は貧乏でも幼い時に懂れた民俗学者って仕事に誇りを持っている。元陸軍大佐の親父が無理矢理、陸自に入れたんだ。それを面倒臭いって言わなくて何がそれに該当するんだ？」
「・・・・・・・・」

霞は無言で力を弱めると、俯いた。

「じゃ、今度こそ、おやすみ」

入谷は頬を緩め、歩いて行のを見送った霞はバルコニーに出て、ガラスを掴むと海に投げ捨てた。

「馬鹿野郎が・・・・・・・・」

霞は目を潤ませ、バルコニーの柵に寄り掛かると小さく嗚咽した。

CATS本部隊員宿舎

時計の針が二十一時を回った頃、桐生はH&K USPを掴んで満足しながらそれを眺めた。

その時、ドアをノックする音が聞こえ「開いてるぞ」と桐生は言い、ドアを見遣る。

すると、椎名がおどおどしながら入って来る。

「何ですか？呼び出しておいて・・・・・・・・」

「お前、眼鏡と髪……どうした!？」

椎名は眼鏡をかけておらず、ロングヘアの髪を自然な一本結びに変わっている。

椎名は髪を一瞥した。

「眼鏡は先の任務で失いました。髪は、寝る前は基本的にこの髪型をしています」

「似合ってるぜ。動きやすそうだし、何より可愛い」

「可愛いって、誰がですか!」

「お前以外いねえだろ?それより、プレゼントだ」

桐生は先程のUSPを椎名に投げると、続けて弾倉を投げた。

椎名は慌ててそれを受け取る。

それを見て、桐生は興奮気味に言った。

「USPに3点バースト機構を付けてみた。名付けて『漁火』だ」

「漁火?また、要らない機構を設けたのですか?扱い難い出鱈目拳銃じゃないですか?」

「傑作銃だよ。使い易いように、発射間隔を抑えてるから命中率と反動抑制が両立している。それと、コイツもやるよ」

桐生はステアー社のマシンピストル「TMP」を渡した。

「銃床もセットだ。一応、お前が使ってたMP-5SD6より性能はいいはずだ。それなりに改良してMP-9と同レベルにしている。

桐生特製TMP……名付けるなら『雄琴』だ」

「雄琴ですか?何でTMPなんですか?MP-9でいいじゃないですか?」

「たまたま手元にあるのがコイツだったただけだ」

「要は押し付けですか?」

椎名は冷たい目で桐生を見ると、桐生は苦笑した。

「銃って高いんだぞ?それを無料で手に入っただけいいと思え」

「……そうですね。実戦で使って判断します」

椎名はそう言うと、退室した。

桐生はその背中を見送ると、小さく囁いた。

「可愛いが、可愛くないか分からねえな」
背伸びをした桐生はベッドに横たわった。

鬼無の伝説

「「休暇!？」」

呼び出された桐生と椎名は異口同音に霞に問い掛ける。

「名目は入谷の護衛だが、実際は自由行動だ。貴様らには貸しがあるからな」

貸しなんてあったか？

桐生は内心呟き、今までの出来事を回想するが思い当たらない。その時、椎名が霞に問い掛けてはならない事を問い掛けた。

「貸しなんてありましたか？私には身に覚えが無いのですが？」

「クトーニアンとダゴンの件だ」

霞は顔色一つ変えずに答えると、入谷は二人の肩を掴んだ。

「ま、ご褒美だと思え。孤島で干上がるのも嫌だろ？」

入谷が微笑むと、霞が口を開いた。

「とにかく、遊んで来い。迎えのへりは明後日まで来ない。ホテルも取ってある」

無茶苦茶だなと桐生が苦笑する。

同時に霞は「これは命令だ」と怒鳴った。

桐生がへりから見える風景を眺めていると、入谷が近寄り、桐生に囁いた。

「お前、あの椎名つてのと出来てるか？」

「はあ？」

「出来てる訳無いじゃないですか」

椎名は無表情に言い放ち、入谷を睨む。

入谷は僅かに苦笑すると桐生から体を離した。

「ところで、お前の刀だが……………」

「鬼首か？」

「謂れを教えてくださいないか？」

「謂れかあ」

桐生は鬼首を掴むと膝に置いた。

「俺の鬼無神社に伝わる伝説だな。まあ、よくある妖怪退治の話
しだ」

「ほう？続けて」

「でも、詰まらないぜ？」

桐生が苦笑いを浮かべると椎名も珍しそうに言う。

「私も興味があります」

桐生はふうと溜め息を付くと刀を掴んだ。

「何時だったか忘れたけどな？親父からこんな話を聞いたんだ。
かつて俺のご先祖様が鬼を退治したんだと」

「鬼……………ですか？」

「鬼だ。何でもそこで有名な鬼だったらしくて人を喰らう化け物だ
つたらしい。それを俺のご先祖様がこの刀で退治したらしい」

桐生は刀を抜くと、刀身を見せる。

緋色の刃が光で妖しく光った。

「この緋色の刃は鬼の首を切り落とした時に染まったそうだ」

「そんな馬鹿な話がありますか！？」

「俺に言うな」

桐生は呆れ、鬼首を鞘に収める。

「面白い話、ありがとうな。ま、明後日までゆっくり遊びな」
入谷はそう言うと言草を口にした。

椎名の故郷へ

東京の雑踏。

せわしなく響くそれを久しぶりに聞くと非常に不快になる。

音楽以外で煩い物は嫌いだと桐生は内心呟いた。

そんな中、桐生は尾行するようについて来る椎名を見て溜め息を漏らす。

「お前さあ、休暇なんだぜ？少しは女の子らしく服とか見たりしろよ。どう見ても俺に張り付いているようにしか見えないだろ？」

「私、服とか興味無いですから」

「随分と年頃の女の子とは違うな。一体、何に興味があるんだ？」

「そうですね・・・動物とか熱帯魚とか生き物を見る事ですかね？ついでに言うと爬虫類や両生類を見るのも大丈夫ですね」

桐生は信じられないといった風に椎名を見ると、「ネタか？」と問い掛ける。

しかし、椎名は首を強く振る。

「私は聞かれた事には正直に答える主義です」

「お前、どこまで真面目なんだ？」

「そういう風に育てられましたから」

椎名は生真面目な表情で答えると桐生は顔を引き攣らせる。

「お前って、力を抜くって事を知らねえだろ？」

桐生が小さく呟くと椎名は眉を潜めた。

「私はそんなつもりはありません。それでも力は抜いています」

「ああ言ったらこう言う、か？」

「事実ですから」

生真面目で、その分頑固。

ついでに言うと、扱い難い。

「で、何で爬虫類やら両生類みたいな女の子が恐がる生き物が大丈夫なんだ？」

「可愛いじゃないですか！何を恐がるのか私には分かりません！」
椎名は興奮しているのか熱が籠っている。

付け加えよう、一般人と価値観が盛大にズレている。

「ふう………どうか行くか？動物園とか………」

「それより、行きたい所があるのですが？」

「行きたい所？」

「私が育った孤児院に行きたいのですが………」

前に聞いた孤児院の事か？

椎名が育った孤児院。

「………いいぜ。どうせ、歩き回るだけの予定だったからな」

「ありがとうございます」

椎名は頬を緩めると微笑みを浮かべた。

やっぱ、可愛いな。

桐生は何処かにそんな感情を抱いている自分に自嘲した。

入谷民俗学研究所

入谷は煙草を吸いながら書斎に入った。

入谷は若かった頃に霞と撮った写真を見て苦笑いを浮かべた。

「いい加減結婚しろよ、三十路越え」

あいつが俺の事が好きだという事は一目見て分かる。

非常に不器用で乱暴な彼女は入隊した時から自分に好意と信用を寄せてくれていた。

俺が自衛隊を抜けてその信用を裏切っても、変わらない心を寄せてくれた。

昨日だって……

「当てつけにあの二人か」

入谷は頬を引き攣らせるとパソコンを起動させた。

電車で二時間程の小さな町。

煩い雑踏が無く、非常に心地がいい。

桐生は深く深呼吸をすると、改札口に切符を入れた。

「いい所じゃねえか。俺の住んでた町に似てて落ち着くな」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

椎名は優しい笑みを浮かべた。

「ここから歩いて約十分の所に私が育った孤児院があります」

「嬉しそうだな」

「院長先生に会えるのです。これ以上に嬉しい事はありません」

「そりゃそうだな。家族に会えるってのは大切だからな」

桐生は何処か寂しそうに呟くと財布を取り出し、自動販売機に小銭を入れた。

スポーツ飲料のペットボトルを買うとキャップを開け流し込む。

一気に半分程飲み干すとキャップを閉めた。

「お前も何か飲めよ」

桐生の声に椎名は小銭を入れる。

「またオレンジジュースか？」

「リンゴジュースです！」

向きになって怒る椎名を見て桐生は苦笑する。

殆ど変わらないそれに桐生は頬を緩ませた。

椎名が口を尖らせ、リンゴジュースを買ったのを見て、桐生は歩みを止めながら口を開いた。

「早く行こうぜ」

桐生は残ったスポーツ飲料を飲み干すと、空のペットボトルをゴミ箱に投げ入れた。

親

廃病院

埃臭い匂いとかび臭い匂いが漂う廃病院。

そこに笑い声が響き渡った。

「心霊スポットだって期待してきたのに何にも無いな」

「そういうもんっしょ！」

「昼だからじゃね？」

三人の若者が談笑しながら廃病院の奥に歩いて行く。

奥には扉が開け放たれた霊安室が有り、蠟燭立てが置かれている。

「何か持つて行くか？」

一人が笑った瞬間、霊安室が光だした。

それは明滅を繰り返し、光りが激しくなった瞬間、黒い光を放つ球体が現れた。

「何だ、こりゃ？」

一人が素つ頓狂な声を出した瞬間、女性の笑い声が響き渡った。

同時に黒いイブニングドレスを着た女性が優雅に歩いてくる。

女性は妖艶な美しさを醸し出し、この世の物とは思えない程、美人で優雅だった。

女性は長い黒髪を撫でる。

同時に中から七体のグールが飛び出してきた。

女性は犬を扱うようにグールを手で制す。

呆然としている三人を見つめ、女性は妖しく目を細めた。

「二人は喰らって、もう一人は逃がしなさい」

同時にグールは唸る。

「お行きなさい」

女性が手を差し出すと、グールが三人に向かって駆け出していった。

児童養護施設

「私が育った孤児院はここです」

椎名が懐かしそうに言う所は児童養護施設だった。

（何か変だと思ってたんだよね……1948年以降は児童養護施設になったと思ってたが、何を間違って孤児院になったんだ？）

桐生は苦笑いを浮かべ、椎名の後ろに続く。

「望お姉ちゃんだ！」

「お姉ちゃん」

同時に子供達が椎名に駆け寄ってくる。

この子供達は虐待や事故で親から離されたんだよね。

桐生は目を細めながら椎名に抱き着く子供達を見つめた。

「ねえ、お姉ちゃん！あの人、彼氏？」

「イケメンだね」

子供達は桐生を指差して、口々に言うと椎名は顔を赤くする。

「違うよ！この人はお姉ちゃんの仕事仲間で、そんなんじゃない……」

「望？」

椎名が言いかけると初老の女性が懐かしそうに歩み寄ってきた。

椎名は姿勢を正すと、一礼した。

「院長先生、お久しぶりです」

「そちらは？」

その声に桐生も敬礼をした。

「椎名三尉の上官で桐生翼二尉と言います」

「桐生さんですか。望がお世話になっております。申し遅れました。」

私は椎名幸路と申します」

幸路は優しく微笑むと、桐生は深く一礼する。

「望？ちよつと子供達の相手をしてくれないかしら」

「ええ。勿論です」

幸路は桐生に歩み寄ると笑みを浮かべ、口を開いた。

「桐生さん。失礼ながら少しお時間よろしいですか？」

「はい」

桐生は頬を緩ませながら答えると、中に招き入れた。

桐生が椅子に座ると、幸路は桐生に湯呑み茶碗に入ったお茶を目の前に置いた。

湯呑み茶碗から立ち上る湯気を見ていると幸路が口を開いた。

「桐生さんにお聞きしたい事があります」

「はあ」

「望は今どのような部隊にいるのですか？」

「それは………」

CATSは極秘部隊。

民間人に教えてはならない。

それが育ての親であつてもだ。

「国家機密……ですか？」

「すいません。話すと俺も椎名さんも面倒な事になりますので……」

「……」

「重々承知です。望は危険な任務に就いているのですよね。しっかりと、あの娘を守ってあげてください」

それに桐生は深々と頭を下げる。

「貴方には話す必要がありますよね？望が預けられた時の話を……」

「自分にそんな話しをしていいんですか？」

幸路は笑みを浮かべ、目を閉じると溜め息を付いた。

「望は一見気が強いですが、実際はとても弱いんです。何かあるとすぐに泣いて……でも、そんな様子が見えなくて……
・もしかしたら貴方のお陰なのかと思ひまして……だから、
貴方にお話しておこうと思ったのです」

「そうですか」

桐生は目線を落とすと、幸路も目線を落とした。

「あの娘が赤ん坊の時に目の前で両親を殺されているのです」

「目の前で!？」

「望は覚えてませんが……」

「そうですか……」

「あの娘を守ってやって下さい!」

「勿論です」

桐生は力強く言うと、幸路は「ありがとうございます」と答えた。
実の親じゃなくても子供だったら気にかける、それが本当の親なんだと桐生は心の何処かで呟いた。

桐生が施設の中から出て来ると椎名が子供達と遊んでいた。

幼稚園の保母さんのような雰囲気だ。

「こっちの仕事の方が向いてんじゃないかねえか？」

桐生は小さく呟き、苦笑いを浮かべると、電話が鳴り響いた。
携帯電話を開くと霞の名前が踊っている。

「はい」

（休暇は取りやめだ）

「事件ですか？」

（察しがいい。今すぐ迎えを寄越す。作戦内容と武器の調達は現地で行う。以上だ）

電話が切れる。

空気が読めねえ人だ……

桐生は嘆息を漏らし、椎名に歩き出した。

予感

廃病院前

17:39

UH-1Jで半ば強制的に送還された二人は武装を終えて簡易テントに入った。

同時に霞は目を細め「来たか」と呟く。

「休暇はどうしたんだあ？」

「任務優先に決まってる」

「そうだよな……」

桐生は何時に無く深い嘆息を漏らすと椅子に座った。

「大野とジェイクは？」

「じきに来る」

霞はそう言う二人を見る。

「先程、携帯電話で警察に通報があった。被害者は大学生。三人で肝試しに入った所、アビスに襲われたらしい」

「で、作戦内容は？」

「隠工隊が偵察し民間人を救出、その後、強遊隊が敵を殲滅。お前達は不足の事態に対応する為に待機だ」

「ま、お約束だな」

桐生が苦笑すると、大野とジェイクが入って来た。

その時、テントの隙間から隠工隊員の二人がMP-5SD6とSIG 552で武装し、廃病院に突入していくのが見える。

（妙な胸騒ぎがする……当たるんだよな、胸騒ぎが）

桐生は苦笑すると雷電に初弾を装填し、弾倉の隙間に二発の9mmパラベラム弾を挿入した。

隠工隊の隊員がJGV S - V 8を装着すると、コムタック（ヘッドセット）に吹き込んだ。

「ブラボー1、準備よし」

「ブラボー2、準備よし」

（目的は民間人の救助とアビスの確認だ）

「了解。行動を開始する」

SIG 552を持った隊員が先を歩き、MP - 5SD 6を持った隊員が後続する。

中は日が入らず、文字通り闇を作り出している。

病院の独特の薬の匂いが鼻をついた。

地面には薬品が入っていたであろう割れたガラスのビンが落ちている。

二人が受付を抜けると、小部屋から影が飛び出してきた。

JGV S - V 8に映っていたのは金髪に可愛い顔をした少女だった。

「民間人？大学生と聞いていたが……」

少女は十歳程度でどう見ても大学生には見えない。

その時、少女が逆の方向に駆け出して行く。

「待て！」

二人が少女を追いかけて、少女が曲がり角に消えるとそこに二人も角を曲がる。

角を曲がると二人の目の前にドレスに身を包んだ女性が現れた。

まるで少女が妙齢の女性に数秒で成長したみたいだ。

「君が通報した大学生？」

「ハズレ。フッフ」

女性は笑うと、一瞬で隊員の懷に潜り込む。

同時に女性は隊員の腹部に掌を打ち付ける。

隊員は凄まじい力で吹き飛ばされ、SIG 552を取り落とす。

もう一人の隊員はM P - 5 S D 6を構え、足に狙いをつけ引き金を引く。

女性は素早い身のこなしで9 m mパラベラム弾を避けるとM P - 5 S D 6を蹴り上げた。

刹那、吹き飛ばされた隊員が、サイドウェポンであるS I G P 2 2 6の引き金を引く。

女性はもう一人の隊員の顔を掴み盾にする。

放たれた弾丸が隊員の背中で受け止められたのを確認すると女性は隊員の首をへし折り、投げ捨てた。

「化け物がっ!!」

怒鳴った隊員は傍らに落ちていたS I G 5 5 2を構えた瞬間、それより早く繰り出された女性の回し蹴りが隊員の頭を粉碎した。周囲に飛び散る肉片が顔に付着すると、女性はそれを舐めとる。

「フフフ。美味しい」

女性は小さく呟くと、闇の中に歩いていった。

突如としてオペレーター達が慌ただしくなった。

桐生がテントから顔を出すと霞が駆け寄ってくる。

「緊急事態だ。侵入した隠工隊員から連絡が取れなくなった!」

「て、事は・・・俺達か」

桐生は溜め息を漏らした。

それを見ていた霞が笑みを見せる。

「拳銃に初弾を装填していたって事は分かっていたんだろう?」

「俺の嫌な予感的中するんでね」

桐生は鼻で笑うのを見た霞はテントの中に入った。

「出撃だ、お前ら!」

数分で身支度を整えた四人は半ば面倒臭げに中に入る。

最近はこのな事ばかりだと桐生は内心苦笑しつつ、雷電を構えた。アタッチメントのライトが周囲を照らす。

「問題は敵か……」

桐生は小さく呟き、歩き出した。

「兄貴、作戦は？」

「二手に分かれるか。俺とジェイクがリーダーになる。そうだな……俺と椎名、ジェイクと大野が組む。ジェイク、それでいいか？」

「……構わない」

「何で兄貴と一緒にやないんスカ！」

「大野、チームワークを乱す発言をするな」

桐生が諫めるとジェイクは奥に向かって歩き出した。

「ちよつと！」

大野がジェイクの後ろを急いで着いて行くのを見た桐生は嘆息を漏らした。

その時、椎名が歩み寄ってくる。

「何故、貴方とペアなんですか？」

桐生は頭を掻くと椎名から目を逸らした。

「院長先生に頼まれたんだよ、お前を守ってくれってさ」

桐生は小さな声で呟くと、椎名は頬を赤らめて、足早に角を曲がった。

その時、椎名は短く悲鳴を上げて尻餅を付く。

「どうした！？」

桐生が急いで駆け寄ると曲がり角に隠工隊員の無惨な死体があった。

一体は壁に寄り掛かるように倒れ、頭が無い。

もう一体は背中から血を流し、首が変な方向に曲がった状態で床に倒れている。

その時、桐生は不審な点に気付き、眉を潜めた。

「銃が一つねえな」

「えっ？」

「俺は隠工隊員がSIG 552を持ってきているのを見ている。

それが見当たらない……嫌な予感がする」

「止めて下さい。縁起でもありません」

「確かにな……どうかしてるぜ」

桐生は苦笑すると、闇の奥に進んで行った。

食屍姫

黙々と歩くジェイクの後ろ姿を見ていた大野は面倒臭そうに周りを眺める。

「何でコイツとなんスかね」

「・・・・・・・・俺の台詞だ」

ジェイクは歩みを止めて後ろを一瞥し、再び歩き出す。

大野が不機嫌そうに下を向き、前を向いたその時、ジェイクがこちらにM1911A1の銃口を向けていた。

大野が狼狽した瞬間、マズルフラッシュが閃き、銃弾が大野の横を抜けた。

刹那、碎ける音が響き渡る。

大野は驚いて振り返ると、頭に銃弾を受け、右半分を吹き飛ばされたグールの死体があった。

「・・・・・・・・お前に撃つと思ったか？」

「あ、ああ」

「手元が狂えば当たっていたかもな」

ジェイクは笑みを浮かべると、M1911A1を仕舞い歩き出した。

（食えない奴・・・・・・・・）

大野は内心呟いたその時、グールの下敷きになるように真新しいノートが置かれていた。

大野はジェイクを呼び止めるとノートを掴み、駆け寄る。

「何スかね」

「・・・・・・・・読めば分かる」

ジェイクはノートを受け取ると口に出して読みはじめた。

「加藤も田中も食われた・・・・・・・・次は俺の番」

「例の大学生ツスかね？」

「何処に逃げてても現れる・・・・・・・・食屍姫？」

「食屍姫ってなんスか？」

「少し黙れ」

ジェイクは苛立ち混じりに呟くと、再び読みはじめる。

「ヘルファイア教団の理想は素晴らしい。私の人生をかけて尽くすと誓おう。かつて地球を支配していたあの方の復活の為に……」

・
・

ジェイクが言い終えたその時、銃声が轟き、大野が地面に倒れた。

ジェイクはM1911A1を構えるとスリーショットバーストで弾丸が撃ち出される。

ジェイクは小部屋に飛び込み、弾丸を避けると半身を出して様子を見た。

そこにはSIG 552を持った先程のノートを書いたと思われる大学生がせせら笑いを浮かべている。

目は虚で口からはヨダレを垂らし、まるで自我が無い。

「完全に自我を失っているか……」

ジェイクが呟いたその時、アサルトライフルからフルオートで弾丸が吐き出され、ジェイクは間一髪で中に戻る。

5.56mm NATO弾が壁に穴を開け、周囲に土煙を起す。

問題は撃たれた大野だ。

近距離でライフルによる弾丸を受ければ、部位に関係無く流体性力学的ショックにより即死する。

つまり、衝撃が伝播する事により中枢神経が損傷を受けるという事だ。

助けるにも奴を何とかしなければならぬ。

ジェイクがM1911A1を構えた瞬間、フルオートで弾丸が撃たれた。

弾丸はジェイクの頬を掠める。

ジェイクは直ぐさま戻ると先程頭があつた場所に重なる壁に銃弾が着弾した。

「あそびましょお」

大学生は覇気の無い口調で言つと哄笑した。

直後、ジェイクは飛び出す。

大学生もフルオートで弾丸を撃つが、ジェイクの作った魔力の壁で阻まれる。

同時にSIG 552は弾切れを引き起こした。

その隙を付いて、ジェイクはM1911A1を構える。

しかし、それより早く大学生は弾倉を装填した。

二人のマズルフラッシュが同時に轟いた瞬間、大学生のアサルトライフルが暴発した。

暴発というよりは爆発に近く、大学生の体は吹き飛び、銃も原形を留めていない。

暴発した銃の銃口からジェイクの放った9mmパラベラム弾が出てきた。

弾丸を飛ばす際に現れるマズルフラッシュは薬莢の火薬が爆発し、それを逃がしている物なのだが、ジェイクの放った9mmパラベラム弾が銃口を押し潰し、それを妨害した結果、逃げ場の無くなったガスに薬莢が連鎖的に引火し爆発したのだ。

ジェイクは急いで大野に駆け寄ると脈に手を当てた。

規則正しい脈動を確認したジェイクは無線を掴む。

「大野が負傷。命に別状無いが戦線復帰は無理だ」

（分かった。救護班を向かわせる）

霞の声を聞き、ジェイクは幹部に手を翳した。

痛みを和らげ、傷を塞ぐ魔術だが、精神力を激しく消耗する。

奴らに任せるしかないか。

ジェイクは苦笑すると、集中した。

桐生と椎名が歩いていると無線から霞の声が聞こえてきた。

（こちら霞。大野が負傷した。ジェイクが治療を行うが、戦線の復

帰は難しい。お前達で対処しろ)

「・・・・・・・・了解」

桐生は無線を切ると、髪を掻き上げた。

「あの馬鹿野郎が・・・・・・・・」

「桐生二尉!」

椎名の声に桐生が前を向いた。

そこには金髪の少女が立っていた。

無表情に立っている少女は二人を真っ直ぐ見つめている。

「民間人?」

桐生が駆け寄ったその時、少女は奥に駆け出した。

「待って!」

椎名が駆け出し、桐生も慌てて駆け出す。

少女が角を曲がり、二人も追い付いた瞬間、少女は消え、代わりにイブニングドレスを着た女性が立っていた。

いきなりの事に二人は狼狽すると、女性は笑みを浮かべる。

桐生はJGV S - V8を外すと口を開いた。

「あんたも民間人か? さっき、少女が来なかったか?」

「来てないわよ? それに、民間人というのもハズレ」

女性は口到人差し指を当てると桐生に歩み寄った。

「私が今回の首謀者」

その一言に椎名が改造したH & a m p ; K U S P 「漁火」を構えようとしたが、桐生は手で制す。

「何者だ?」

「私? 私は食屍姫^{じしやくし}メリフィリア。グールを束ねる姫」

「目的は?」

「内緒!」

そう言うと、メリフィリアは桐生に回し蹴りを行う。

それを避けると、後ろに跳びのき雷電を構える。

桐生は椎名を一瞥すると、「手を出すな」と呟く。

「何故です!?」

「コイツ、強い。それに手を汚すのは俺だけで十分だ」

それを聞いたメリフィリアは口に手を当て、優雅に笑う。

「カッコイいわね。でも、裏目に出なきゃいいわね!!」

メリフィリアは怒鳴ると桐生の懷に潜り込む。

メリフィリアの掌打を素早く避けた桐生は後ろに回り込み、雷電の引き金を引いた。

メリフィリアはそれを避けると、優雅に後ろを振り返る。

「私には全て見えているのよ」

メリフィリアは再び放たれた9mmパラベラム弾を避けると、目に止まらない速さで桐生の側に現れた。

もはや瞬間移動と言っても過言ではないその動きに驚きながらも桐生は銃口を向ける。

それより速く、メリフィリアの蹴りが雷電を弾き飛ばす。

続けて桐生に蹴りを見舞うが、桐生は右腕でそれを受け止めると霧積を出した。

霧積を押し付け、引き金を引いた瞬間それをメリフィリアが避ける。

「馬鹿なっ!?!」

桐生が言うと同時にメリフィリアのサマーソルトが桐生の顎に炸裂し、吹き飛ばされる。

桐生は背中から床に落ちたが、すぐに態勢を整えた。

左手と両足で体を支えながら、右手で鬼首を抜くとゆっくり立ち上がる。

メリフィリアは依然、笑みを浮かべていた。

桐生は血を吐くと、刀を正眼に構える。

近接格闘が得意なら遠距離で片付ければ、という考えは甘かった。霧積の不意打ちでさえ避けられるのなら正攻法で勝てる訳がねえ。

「どうしたの？来ないならこっちから行くわよ？」

メリフィリアは一気に駆け出すと桐生は鬼首を振りかぶり、薙ぎ払う。

刹那、メリフィリアは切っ先を指で白刃取りをした。

「駄目ね」

桐生は余裕のメリフィリアに蹴りを行うが、メリフィリアの膝が腹部に刺さり、体を折る。

同時にメリフィリアの蹴りが桐生の顔面に当たり、桐生を吹き飛ばす。

「二尉!!」

椎名は漁火を構え、メリフィリアに銃を引くと、それに気付いたメリフィリアは素早く避ける。

そして一気に椎名の懷に潜り込むと椎名の胸倉を掴んだ。

「私のダンスの邪魔しないでくれるかしら？」

「くっ！」

椎名は銃口を向け、引き金を引くとマズルフラッシュが辺りを照らす。

メリフィリアが眩しそうに目を細めると、3点バーストで放たれた最後の弾丸がメリフィリアの頬を掠めた。

「私の顔に傷を付けたわねっ!？」

メリフィリアが左手を伸ばし、椎名の腹部を刺し貫こうとした瞬間、メリフィリアは駆け寄ってくる桐生に気付き、椎名を投げ付けた。

桐生の上に椎名が乗る形で吹き飛ばされる。

二人はすぐに受け身を取り、立ち上がる。

「大丈夫ですか？」

漁火を構えた椎名が桐生に問い掛けると桐生は口から流れる血を拭き苦笑する。

「ダセエな」

「全くです」

その声に桐生は椎名を一瞥する。

そして鼻で笑うと、桐生は鬼首を構える。

「椎名、有りつたけの發炎筒を頼む」

「何に使うんです、そんな物？」

「ダンスには蠟燭、違うか？」

「こんな時にふざけるのは……」

椎名が怒鳴った瞬間、桐生は一步步み出る。

そして後ろを振り返らずに親指を立てた。

「頼む」

「……死なないで下さいね!!」

「行かせないわよ!!」

駆け出した椎名にメリフィリアが向かおうとした瞬間、桐生が斜線上に入った。

「もう一曲いかがですか、お嬢さん？」

桐生は手を差し出すと、ニツと笑って見せた。

相変わらずあの人は分からない。

二人で協力すれば勝てるかもしれないのに……

ダンスには蝋燭なんて古すぎる。

一体、何を考えているんですか？

桐生は顔を上げると、メリフィリアを一瞥する。

「どうしたんですか、お嬢さん？ 顔色が優れないようですが？」

「ふざけるな！」

先程の丁寧な口調とは打って変わり、乱暴な口調のメリフィリアは一気に桐生の懷に潜り込む。

桐生は一回転し、鬼首を振るうとメリフィリアは素早く屈み、桐生の足を払う。

倒れた桐生にメリフィリアは踵落としをするが、桐生は刀の鎬で受け止める。

「随分と焦ってるねえ、お嬢さん？そろそろ魔法が解けちゃうからか？」

「黙りなさい！」

メリフィリアは拳を振り上げるが、桐生の蹴りがメリフィリアに刺さり、後ろに退く。

桐生は反動で立ち上がると落ちていた雷電を蹴り上げ、素早く構えて引き金を引いた。

メリフィリアは弾丸を素早く避けると一気に駆け寄った。

（早くしろよ………椎名！）

眩しい光りが目を刺す。

椎名は目を細めると同時に霞が駆け寄ってきた。

「どうした？」

「二尉が発炎筒を………」

「発炎筒？桐生はどうした？」

「食屍姫と交戦中です！攻撃が当たらなくて………」

「……成る程な。考えたな」

霞は納得したように眩くと叫んだ。

「私も着いて行く。有りったけの発炎筒を集めろ！急げ！！」

霞は怒鳴ると車両に駆け寄り、中から発炎筒を取り出した。

「ボサツとするな！急げ！！」

「は、はい！」

椎名は返事をする、車両に駆け出した。

額から流れる血が目に入り、染みる。

唇が切れて、血が流れる。

鼻から血が流れてないのが救いかと、桐生は自嘲した。

その時、メリフィリアの回し蹴りが来るのが見え、桐生は反射的に横に躲す。

メリフィリアの回し蹴りが壁を破壊する。

「よく避けたわね？ん？」

メリフィリアは無表情な表情に笑みを浮かべている。

その不気味な表情に桐生は身震いした。

その時、銃声が響き渡る。

メリフィリアは体を後ろに逸らし、横目で発砲した人物を見た。

刹那、発炎筒が投げ込まれ、暗闇を照らす。

160カンデラ以上の明かりが暗い廃病院を照らし出した。

次々と投げ込まれる発炎筒にメリフィリアは眩しそうに目を細めると、桐生が叫んだ。

「こつちだ！」

桐生の刀がメリフィリアの左目を一閃した。

血潮が飛び散り、桐生は発炎筒が飛んできた所に駆け寄った。

メリフィリアが左目を押さえ、憎らしげに光りの中に浮かぶ、三つの影を睨んだ。

「久しぶりだな、メリフィリア」

光りの中に浮かび上がった霞を見てメリフィリアは顔を歪めた。

「夜行性のグールの主である貴様にこの光はキツイだろう？」

「夢！」

メリフィリアは霞の名前を呼ぶと、霞はSIG P226を構える。

「何故、貴様がこんな事をする？取り替え子でグールになったとはいえ元は人間の貴様が……」

「私は人間の変えられない運命を知ったの。だからこそ私は……」

「自らそれに加担しようと言ったのか！？かつて食屍姫ではなく人間として共に戦った時、貴様は言ったはずだ！グールに育てられ、人間でもグールでも無い自分を友として扱ってくれて嬉しかったと……グールが敵になろうとも自分は人間の味方をする……その言葉は嘘だったのか！？」

「嘘じゃない！！だからこそ……ごめんなさい」

メリフィリアは小さく呟くと、闇の中に駆けて行った。

それを追おうとした桐生と椎名を手で制止すると、霞は絶叫し、天井に数発立て続けに発砲した。

「三佐、知り合いだったんですか？」

椎名の問い掛けに深く息を吸うと「ああ」と短く答えた。

「撤退する」

「いいのか？グールが残ってるかもしれないだぜ？」

ボロボロの桐生は刀を地面に刺して、それを支えに立っている。

霞はそれを一瞥すると、嘲笑した。

「貴様、動けないだろ？」

「よくお分かりで……」

桐生は苦笑いを浮かべると出口に歩き出した。

そして一瞥すると、小さく呟いた。

「今回は完敗だが、奴も痛手を受けた。奴も撤退するだろう。あとは戦域封鎖隊が処理する」

何処か淋しげな霞の背中を見送った桐生は倒れそうになった。

それを椎名が素早く支えると問い掛ける。

「何故、メリフィリアが光に弱いと？」

「ああ……お前が顔面に撃った時、メリフィリアに弾丸が掠ったろ？だが、不意打ちの霧積が当たらなかった。それに、グールは夜行性だ。としたら、漁火のマズルフラッシュが原因なのかね」

やっぱり考えてる……………

勝てないな、私……………

それを聞き、椎名は苦笑した。

同時に椎名は何処か照れ臭そうに口を開いた。

「私のお陰で勝ったんですから……………今度から二尉のことを

桐生と呼んで……………いいですよね？」

桐生は一瞬拍子抜けたがすぐに頬を緩ませた。

「勿論だ」

「桐生、ありがとう」

「ああ」

椎名の笑顔を見た桐生はそれを笑顔で返し、出口に向かって歩いて行った。

幽霊

CATS本部診療所

腕に刺さっている点滴のチューブから薬品が落ちて来るのが見える。額には包帯が巻かれていた。

桐生はふらつく体を起こすと、頭を押さえる。

貧血にも似た感が襲い、体が怠い。

「いつてえ………」

桐生は無理矢理点滴の針を引き抜き、溜め息を漏らした。

その時、白いカーテンが開き、椎名が顔を覗かせた。

「桐生さん！何やってるんですか！？」

椎名は驚き、駆け寄ると点滴の針を掴んだ。

「何って、邪魔くせえから抜いたんだよ」

「鎮痛剤ですよ！？重傷なんですから………」

「大野にやられた方が酷かったぜ」

「大野さんに？」

「言った事無かったか？あいつ、元暴走族のヘッドだぜ」

「え！？」

いつも糸目に柔和な顔立ちをしてそんな風には見えないのに……

「結構有名な暴走族で警察にまで目をつけられてたんだぜ？」

「そんな人が何故ここに？」

「色々あつてな………ところで、何か用事があつたんじゃねえのか？」

「ええ、まあ………」

椎名はベッドの隣の丸椅子に座りながら頷く。

「何故、あの時発炎筒を選んだのですか？」

「何だ、そんな事か」

「雷電にフラッシュライトがあつたのにそれを使わず、照明弾や閃光手榴弾を使わなかった……どうしても気になるんです」

「簡単な事だ。フラッシュライトは発炎筒より光が強いが、照射し続けなければならぬ。フラッシュバン（閃光手榴弾）は霧積を避けた奴に通用するとは思えない。照明弾は夜間戦闘の測定じゃねえんだ。その場にある可能性は限りなく低かった」

桐生は人差し指を立てるとニツと笑った。

「だったら五分間燃え続け、安定した明かりを放つ発炎筒が適任だとね。明かりが無いなら作ればいいだろう？」

桐生は鼻で笑うと、背伸びをする。

すると、椎名はベッドの側のリングを掴んだ。

「とにかく、貴方は今日はじつとしていて下さいね？」

「なあ、椎名………気になる事が無いか？」

「気になる事ですか？」

椎名がリングの皮をむきながら復唱すると「何がですか？」と問い掛けた。

「物忘れが早いな」と桐生が苦笑すると腕を組み、真面目な顔になる。

「廃病院で会ったあの少女、何者だ？消えた途端にメリフィリアが現れて………」

「そつえば、そうですね」

椎名は顔を上げると思い出したような語調で呟く。

「少女とメリフィリアの因果関係は今の所、考えられない」

「もしかしてあの子はメリフィリアが成長した姿だったりして」

椎名は笑みを浮かべると、桐生は苦笑した。

「それは無いだろう」

「じゃあ、幽霊だとも言っんですか？」

「それしかないんじゃないか？」

「ちよつと！脅かさないで下さい」

「そんなつもりは無い。それと霞とメリフィリアの関係だ。面識が

あるような口ぶりだったが……」

「それは私から説明する」

音も無く開いているドアに寄り掛かる霞に二人は狼狽する。

「いたんですか？」

「いたぞ」

霞はゆつくりとベッドに歩み寄ると口を開いた。

「メリフィリアは元々人間だ。赤子の時にグールの取り替え子でグールになったんだ」

「取り替え子ってなんだ？」

「西洋の邪妖精伝説にある自分の子を人間の子とすり替える事だ。だから、メリフィリアはグールじゃない」

霞は何処か熱っぽく言うのと深く深呼吸をする。

「あいつは人間とグールの両方の特性を持っている。だから、暗闇では物が遅く見えるが、明かりのある場所では人間同様の動態視力になる」

「現実にそんな動態視力、有り得るのですか？」

「椎名は知らないか？ 蠅は人間よりも物が遅く見える。それがグールにもあり、グールと同じ環境でそんな風に適応したんだろう」

「それで一体、どんな関わりがあっただ？」

桐生の問い掛けを聞いた霞は椎名のリングを奪う。

そしてそれを口に運んだ。

「私と入谷が二人でグール掃討を行っていた時に、メリフィリアを保護したんだ。最初は民間人だと思っていたからな」

「民間人じゃないと分かっていたら……どうしてました？」

「私は躊躇無く、引き金を引いていた。命令だからな」

その言葉に椎名は唾を飲み下す。

「保護された当初は重度の記憶障害とされていたが、後に言葉を覚えて自らはグールの姫と語った。その後、メリフィリアを殺害するかどうか上層部では議論になった。それを助けたのが入谷だった」

「入谷さんが？」

「ああ。奴はメリフィリアを連れ出して、逃げ出したんだ」

「……俺でもそうするな」

桐生が小さく呟いたのを聞いた霞は一瞥したが、すぐに口を開いた。
「その逃走の過程で、あるアビスと交戦する……ハスターだ」

「ハスター？」

「黄衣の王、黄色い頭部の蛸に似た化け物だ。風を操るアビスでメリフィリア捕獲の為に追い付いた私の部隊も交戦したが、私以外は全滅した。そして激闘の末、メリフィリアがハスターを黄の印に封じた。入谷はメリフィリアを死んだ事にして逃がしたんだ」

「それが……メリフィリアとの仲ですか？ 怨まれても仕方ないような気が……」

「メリフィリアの世話係は私だった。入谷と同じようにメリフィリアを信用していた。だが、奴は……」

霞が拳を握ると、桐生は椎名のむいたリンゴを食べると笑みを浮かべる。

「何か訳があるんだろ？」

「だいいいが……それはそうと、少女とはなんだ？ お前達の映像を確認したが、そんな少女は確認出来なかったぞ？」

「えっ！？」

二人は同時に驚きの声を漏らすと顔を合わせる。

いよいよ気味が悪くなった二人に霞は苦笑いを浮かべ、茶化すように言った。

「本当に幽霊かもな」

霞はそう言つと「調査はするが、期待するな」と言い放ち歩いて行った。

霞の背中を見送った椎名と桐生は呆然とする。
そしてお互い顔を見合わせ苦笑したのだった。

ヘルファイアー教団……

ジェイクはあの文面を思い出すと不敵な笑みを浮かべた。

月夜に照らされたその笑みは何処か不気味で何処か悲しげで……

・

ジェイクはひとしきり哄笑すると、ベッドに倒れた。

「見付けた……見付けたぜ……クク……」

ハハ、ハハハッ！」

ジェイクは掌で目を覆うと再び哄笑する。

何かの簾が外れたように笑った。

とにかく笑い、大きな声で笑い、ひたすら笑った。

奴らはやはりに日本にいた。

「やつと……長かった……」

ジェイクは笑い終わると目から涙を流した。

笑い過ぎたからではない。

この涙は……

孤立した村

某県わらうしな藁科村

08:21

風がざわつく森の中。

他から隔絶された村、藁科村は少子化により殆ど老人しかない。
その村への山道を歩く影が一つ。

軽装な出で立ちの入谷はさんと照り付ける太陽を見上げると同時に何かが空中で反射する。

刹那、上空から良く研がれた鎌が落ちてくる。入谷の顔目掛けて落ちてくるそれを、入谷は首を曲げて躲した。

地面に刺さった鎌を一瞥した入谷はショルダーホルスターとヒップホルスターに差しているMK・23を引き抜いた。

「……………何だつて言うんだ？」

入谷が銃を水平に構えた瞬間、一斉に村人が駆け寄ってくる。

「大歓迎だな。俺ってそんなに有名人だったか？」

そこまで言っていると村人の一人が雄叫びをあげ、クワを振りかぶり、突進してくる。

入谷は振り下ろされるクワを避けると零距离で二丁のMK・23の引き金を引いた。

零距离で放たれる45ACP弾は村人の肉を引き裂きながら貫通する。

しかし、村人は怯むどころか、動じずにクワを振り下ろした。

入谷は素早く後ろに退く事でそれを避けると、電話を掴んだ。

「コードレッド、第三種警戒態勢！救援を要請する」

入谷が携帯に吹き込んだ瞬間、クロスボウの矢が携帯を破壊した。

（ここまで手が及んでいたか。或いは守り神が現代に甦ったか？どちらにせよ、退くわけにはいかない）

入谷は二丁のMK・23を構えると群衆に突進していった。

CATS本部診療所

「桐生さん、お体の具合は大丈夫ですか？」

椎名が朝食を持ち、意気揚々とドアを開けた。

そして桐生のベッドを見遣ると素っ頓狂な声を出す。

「あれ？」

ベッドはもぬけの殻だ。

人が昨日までいたとは思えない程に綺麗に整えられている。

同時にカルテを持った医者が出てきた。

「二尉なら昨日の夜の間に部屋に帰りましたよ？」

「えっ？えええ！？」

あれだけ安静にと言っていたのに……………

CATS本部隊員宿舎

対メリフィリア……………

その具体策を考えていた桐生は頭を抱えた。

フラッシュライトは常に照射しなければならぬに役に立たない。

閃光手榴弾は避けられるうえ、こちらにも隙が生じる。

照明弾は有効時間が約六秒と短い。

やはり、発炎筒を標準装備するしかないか？

「手詰まりだ……」

桐生は頭を抱えて、机に倒れると頭の上にふかふかした柔らかい物が乗った。

桐生はそれを掴むと机に置く。

「トロコ……。俺は疲れてるんだから、遊べないぜ?」

そう言うのと桐生はマグカップの濃いブラックコーヒーを飲み干す。

蹴り飛ばされた雷電と霧積のオーバーホールや新装備「XM8」を改良したXM8A1通称「日向」の作成に費やしてしまった。

当初問題となっていた命中精度の悪さや耐久度の低さのSIG 552を元に改良。

2.8kgの重量が3.1kgに増加したのは痛い、89式小銃よりは軽いので良しとしよう。

それにPDW型や狙撃銃型、さらに軽機関銃型になる利点から、ピカティニーレールを搭載している為、AG36やXM26を装着出来る利点がある。

と、列挙すれば改良に成功したかに聞こえるが、問題は実戦での使用だ。

「とにかく、寝るか……」

自分のベッドでなければ眠れないという理由で無理矢理退院したが、やはり銃をみると改造したくなるのは悪い癖だ。

桐生がベッドに倒れた瞬間、部屋のドアをノックする音が聞こえ、

桐生は嘆息を漏らして体を起こした。

「はいはい」

桐生は再び嘆息を漏らし、ドアに歩いて行つた。

「誰だ?」

「霞だ」

桐生はドアを半分開けると霞の顔を覗いた。

「何か用ですか?」

「入谷からコードレッドと第三種警戒態勢が発令された」

「どういう事だ?」

入谷は面倒臭そうに頭を搔くと、霞は目を細めた。

「コードレッドは緊急事態の意味だ。第三种警戒態勢はアビスに襲撃されたという意味だ」

「って事は第一種や第二種もあるって事か？」

「第一種はアビスに関係があると思われる事象が確認された場合、第二種はアビスが目視で確認された場合だ」

「それで、場所と今回の作戦は？」

「場所は小さな村だ。まず第8強襲遊撃隊がUH-60JAでヘリボーンを、第11強襲遊撃隊が地上から96式装輪装甲車で侵入する」

「随分と大掛かりだな。マスコミに嗅ぎ付かれないか？」

「マスコミは政治家の不祥事に躍起になってるから、極秘演習と銘打った物には食いつかないだろう。それに戦域封鎖隊には逮捕権があるからな」

「不当な逮捕は憲法違反だが、超法規部隊の特権か。」

桐生が内心呟くと霞が続ける。

「状況から考えて村は全滅している可能性が高いしな。お前達は不足の事態に備えて待機しておけ。貴様、寝ていないのだろう？」

分かってるなら来るなよ。

桐生が思うと同時にドアが閉められた。

桐生はベッドに崩れ落ちると静かに目を閉じる。

同時に椎名の声がドアの向こうから聞こえてきた。

「桐生さん、いますか？」

（またか・・・）

桐生はふらふらと立ち上がるとドアに向かった。

「桐生さん？」

ドアを開けたと同時に心配そうな椎名の顔が目の前に現れた。

「近い・・・」

「ご、ごめんなさい！」

椎名は慌てて離れると、桐生は溜め息を漏らした。

「何だよ？」

「朝食を持ってきたんですけど、食べますか？」

「いや、寝るわ」

「寝るって、もう九時ですよ！食堂に行ったら二尉の朝食だけ残ってたから持ってきたのに……」

「寝てねえ……んだ……よ……」

そこまで言っと、事切れるかのように後ろに倒れた。

「桐生さん!？」

椎名の声が薄れる意識の中で響き渡る。

（やべえ……メリフィリア戦の疲れが……）

意識が霧散していく中、椎名の心配する声が響き渡り、桐生は意識を失った。

響き渡るアラート

藁科村上空

15:28

UH-60JAが藁科村の上空にホバリングする。

地上には人が見えない。

刹那、96式装輪装甲車が木陰を抜けて現れた。

（作戦を開始する。地上部隊展開後、ヘリボーンを行え。目標は入谷謙介だ。アビスの正体は不明だが、優秀な仲間を失う訳にはいかない）

「了解」

オペレーターの声に第八強遊隊隊長が答えると、89式小銃に初弾を装填した。

UH-60JAは村の上空にホバリングすると、ロープを下ろす。

「降下!!」

隊長の声と同時に隊員達が一斉に降下していく。

隊長も先頭に立ち、ラベリング降下を行う。

隊長が地面に降り立つと隣にいた隊員が初弾を装填した。

「行くぞ!」

89式小銃を隊長が構えた刹那、足元に矢が刺さった。

「敵襲! 敵襲!!」

隊長が叫んだ瞬間、隣にいた隊員の頭に弾丸が撃ち込まれる。

「屋根だ! 屋根にいた奴が撃ちやがった!」

隊員が叫び、指差す方向を見た隊長の目に村田式散弾銃を持った村人が映る。

刹那、叫んだ隊員が足を撃ち抜かれ、倒れた。

「足があ!」

「任せろ!!」

遊撃支援隊の隊員が狙撃銃H&Amp;K PSG-1を構えて頭部を狙い、引き金を引いた。

7.62mm NATO弾が放たれ、村人の頭が吹き飛び、次弾で後ろに吹き飛ばされる。

同時に家屋から村人が現れた。

手には鎌やクワ、スキ、鉈を持ち向かってくる様子から察するに敵意は剥き出している。

隊員達が威嚇射撃を行っても村人達は走ってくるのを止めない。

「撃ち殺せ！」

同時に一斉に銃声が轟いた。

放たれる弾丸は村人達を襲うが突進を止めるまでには至らない。

「コイツらが……アビスなのか!？」

隊長の怒鳴り声と同時に水しぶきの音が響き渡り、隊員達の絶叫が周囲に飜した。

CATS本部隊員宿舎

15:31

「……………ん、んっ……………」

桐生は唸るとゆっくりと体を起こした。

まだ眠い目を擦ると、膝に座るトロコを撫でる椎名が映る。

「……………何やってんだ、お前？」

「猫ちゃん、可愛いですね。お名前、何て言っんですか？」

「トロコだ」

「トロコ……………トロちゃんですね？」

「……………大野と思考回路が一緒だな」

桐生が苦笑すると、椎名はムツとした顔になった。

「それにしてもお前、態度が真逆になったな。どういう風が吹いてるんだ？」

桐生はベッドから下り、冷蔵庫に歩み寄った。

中からミネラルウォーターのペットボトルを取り出すと、キャップを開ける。

ペットボトルの口を付けた瞬間、椎名がおもむろに口を開いた。

「貴方を最初ライバルとして見ていましたが、違いました……・貴方には敵いません」

ペットボトルから口を離すと桐生は苦笑いを浮かべる。

「ライバルねえ……俺はパートナーと思ってたけどな」

桐生が苦笑いを浮かべたのを見た椎名は顔を赤らめた。

が、すぐに冷静さを取り戻してXM8A1「日向」を掴んだ。

「これを作ってて寝なかつたんですか？」

「まあな。いい加減、拳銃じゃ火力不足と思ってね」

桐生は再び苦笑し、ペットボトルのキャップを閉めた。

「貴方の作った銃は奇天烈ですが、実戦ではとても使いやすいです」

「最初、ボロクソに批判したのは何処の誰だよ」

桐生はペットボトルを冷蔵庫に仕舞いながら呟くと、椎名は「私です」と答える。

「自覚はしてるのか？」

「私は言った事に責任を持ちます。だから、事実を口にするだけです」

「真面目だねえ」

桐生が苦笑をすると腹の虫が悲鳴をあげた。

「朝から何も食ってねえからな」

「そんな事言っても、朝食はありませんよ？食堂に返してきました」

「自分で食うとか冷蔵庫に入れるとかの発想は無かったのな？」

真面目を通り越して、天然だ。

「しゃあないな。何か作るか……」

「意外に自炊出来るんですね」

「出来るも何も、防大に入学する前は日本をさ迷いながらバイトしてたからな。板前やらコックやら色々やってたからな」

「銃もですか？」

「ああ、まあな」

桐生はニツと笑って見せると、台所に立った。

その時、霞が飛び込んできた。

「緊急事態だ！部隊が全滅した！！緊急召集だ！！」

桐生は今日何回目になるか分からない深い溜め息をつくとき小さく呟いた。

「・・・・・・・・ミリメシで我慢するか」

ブリーフィングルーム

15:41

「これより作戦を通達する」

霞は早口で言うと、四人を見渡す。

「強遊隊が二部隊、壊滅した。問題は敵の詳しい正体が未だ不明な事だ」

「・・・・・・・・連絡は無かったのか？」

ジェイクは露骨に面倒臭そうに呟いた。

霞は頭を掻くと、珍しく困惑した表情になる。

「それが敵は・・・・・・・・村人だそうだ」

「どういう事だ？」

「今回の事例は私も初めてだ。こういう時に入谷の馬鹿野郎がいれば力になるのだが・・・・・・・・OH-1で観測を行い、アビスを確

認する」

「上空なら不慮の事故か軍隊じゃない限り、撃ち落とせないからな」
桐生はカンメシの五目御飯を食べながら言っと、椎名は諫めた。

「口に食べ物を頬張りながら喋るのは行儀が悪いですよ」

「何も食ってないから仕方ないだろう？」

桐生は五目御飯を頬張ると再びモニターに目をやる。

「観測開始時刻は何時っスか？」

「既に始まっている。それと今回は特殊作戦群との協同作戦だ」

「特戦と！？しかし……………」

「特殊戦略小隊、覚えているな？」

「確かあんたと入谷が所属して、アビスと初めて交戦した部隊だったよな」

「だから、食べ物……………」

椎名は言いかけて、言葉を止めた。

それを見て霞は口を開いた。

「特殊戦略小隊の発展部隊は特殊作戦群。そして特殊生物殲滅隊の前身部隊、未知生物処理隊の前身も……………」

「特殊戦略小隊という訳ですね？」

「そうだ。特殊作戦群は対テロの名目だが同時に、我々特殊生物殲滅隊の後方支援も任務となっている」

「だからこそ、情報公開は殆ど行われないって訳だな？」

五目御飯を食べ終えた缶に桐生はスプーンを投げ入れながら答えた。

「ああ。対テロがいい名目になっているからな」

「偽情報を隠蔽するのも、ここまで来ると凄いとしか言いようがないな」

「兄貴、どういう事っスか？」

「大きな嘘の中に芥子粒程の真実を混ぜる。そうすれば情報を隠蔽しやすくなる。というよりは、そこら辺の煩いのが食いつき易くなる。つまり……………」

「つまり、多数の行方不明事件という大嘘にCATSのバックアッ

ブ部隊である特戦という芥子粒の事実を混ぜ込む事でマスコミや軍事評論家を違う物に目がいくように仕向け、大元のアビス事件関連に目がいかないようにする、という事ですな？」

「まあ、そういう事だ」

霞が答えたと同時にOH-1のパイロットの声がブリーフィングルームに響き渡った。

（こちらリコン、現地に到着しました）

藁科村上空

16:01

OH-1のキャノピーの下に広がる村を眺めたパイロットが無線に吹き込む。

「現地に到着した。これより、観測を……………」

刹那、ミサイルアラートが鳴り響いた。

「八時方向、ミサイル!!」

「何だと!？」

パイロットがその方向を見た瞬間、確かにミサイルが向かって来ている。

「CMD（妨害手段射出装置）スイッチ、オン!!チャフ、フレア放出!回避……………」

「間に合いません!!うわっ!!」

刹那、ミサイルが直撃し、OH-1の機体が真っ二つに折れる。

そのまま地面に落下し、爆発を引き起こした。

ブリーフィングルーム

同時刻

静まり返る室内。

「何が起きたんっすかね」

凍り付く大野に動揺を隠しきれない霞が小さく呟いた。

「・・・・・・・・撃墜されたようだ。総員、出撃準備だ」

「情報無しに戦線に投入するってあんた、俺達を何だと思ってんだ？何が起きてるか分からない状況で・・・・・・・・」

「そんな事は分かっている！だが、やらなければ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・しゃあねえな」

桐生は頭を掻きながら呟くと、机に足を乗せる。

「前回、カッコイイ所が無かったからな。いいんじゃないか？」

「・・・・・・・・俺も賛成だ」

「珍しいな、マジシャン。俺の意見に賛成だなんてな」

「・・・・・・・・」

ジエイクは無言で顔を背けると同時に椎名と大野が大きな声で「行きます」と口にした。

「ありがとう。では、作戦を説明する。本来ならヘリボーンを行う所だが、OH-1が撃墜されたという事は空中からの侵入は無理だ。地上からランクル（高機動車）で侵入する。その後は臨機応変に対応しろ」

「ま、いつも通りって事な？」

「細かい作戦を立てるのは私の趣味ではないからな。ただ、注意しろ？訳が分からん事態が起きている」

「はいはい。行くぞ」

桐生は立ち上がるとブリーフィングルームを後にした。

CATS 隊員宿舎

桐生は自室に入るとショルダーホルスターをベルトに引っ掛け、ヒップホルスターを腰に装着した。
雷電をショルダーホルスターに、霧積をヒップホルスターに差し込んだ。

そのまま、桐生は机に歩み寄ると日向の弾倉を掴み、5・56mm NATO弾を中に入れる。

そしてショルダーホルスターの後ろに鬼首を引っ掛け、弾倉を装着した。

その時、ドアをノックし、間髪入れずに椎名が入って来る。

「武装は完了しましたか？」

「今、終えた」

「……ミサイルの件、どう見ます？」

「可能性は一つしか考えられないが、一番考えたくない事でもある。どちらにせよ、現地に行けば分かる」

「そうですね。行きましょう！」

「おう！」

桐生はニッと笑うと親指を立てた。

生ける屍

CH-47JA機内

18:22

眼下に広がる森林を一瞥した桐生は銃を取り出し点検を行う。
万が一、ジャムを引き起こしたら笑えない。

ヘリによる高機動車のリレーも終盤。

この機体が不時着地点に到着したら作戦が開始される。

桐生が全ての銃に初弾を装填し終わると、特殊作戦群の隊長である
鹿島明彦一等陸尉が口を開いた。

「部隊呼称だが、こちらがS、そちらがXでいいんだな？」

「ああ、よろしく」

「勿論だ」

その時、ヘリがゆっくり降下し、高機動車のロープを切り離れた音が
聞こえてくる。

「……………いよいよ、か」

ジェイクは小さく呟くと、ヘリが地面に降下した。

同時に後部のハッチが開く。

同時に武装した自衛官達がヘリから下りる。

桐生もゆっくりと体を起こすと、ヘリから下りた。

高機動車の助手席に鹿島が乗っているのが見え、桐生は運転席に乗り
込んだ。

「運転は頼んだ」

「ま、飛ばすんでしつかり掴まってくださいね、と」

桐生はそう言うとアクセルを踏み込んだ。

CATS本部作戦指揮所

多数のモニターや計器が並んでいる薄暗い室内に多くの幹部自衛官が椅子に座っている。

中央の大型スクリーンには偵察衛星の映像が映し出され、それを霞を含めた戦闘指揮隊隊員が見つめる。

スクリーンには高機動車が映し出され、監視態勢が整えられた。

ランクルが森林を抜け、藁科村の付近までたどり着いたのを見た隊員達はコムタツクを装着した。

「これより状況を開始する！」

藁科村付近

夜も深まり、森の中に光は通らなくなる。

鹿島はタバコを取り出し、口にした。

その時、向こうから赤い光が見える。

それは凄まじい勢いで上昇していく。

鹿島が眉を潜め、その正体に気付いた時には桐生が無線を掴んでいた。

「ミサイルだ！！恐らく01式対戦車誘導弾！！車外に出ろ！！」

桐生は車を止めると、ランクルから飛び出した。

鹿島も続いて飛び出し、その数秒後にミサイルがランクルの上部に着弾し爆発する。

爆発が闇を切り裂き、赤い炎で周囲を照らす。

桐生は椎名の元へ駆けよった。

「大丈夫か!？」

「はい。しかし、何故軽M A Tが……」

その時、銃声が轟き二人の隣にいた特戦隊員が銃弾を受け、死に絶える。

椎名を庇いながら地面に伏せた桐生は叫んだ。

「大野!! 発砲してる奴の銃を狙え!」

「了解っス!」

大野はS R - 25のスコープを覗くと発砲している自衛官に照準を合わせる。

ゆっくりと引き金を引くと同時に7・62mm N A T O弾が自衛官の89式小銃を吹き飛ばした。

「動くな!」

その間に自衛官の近くに展開していた特戦隊員が叫ぶ。

流石、対テロ部隊の謂れがあるだけある。

「流石といった所か?」

桐生が苦笑した瞬間、発砲した自衛官がせせら笑いを浮かべた。

「オマエラ、シネ」

隊員が抑揚の無い声で叫ぶと同時に木の上から刃物を持った村人が下りてくる。

桐生の真上からも村人が下りてきた。

手には鉞を持ち、黒目が赤く染まり、白目も充血している。

さらにだらし無く開いた口からは涎れが垂れている。

「何だつて言うんだよ!?! この意味分からねえ状況はよお!」

桐生は右手の鬼首で鉞を防ぎ、左手で雷電の引き金を引いた。

9mmパラベラム弾が村人の体内でマッシュルームリングを引き起こす。

そして村人は吹き飛ばされ、木に叩き付けられる。

各所でも村人と先程の自衛官を殺害したとの声が聞こえてきた。

「何だつて言うんだよ？」

「X、大丈夫か!？」

桐生は周囲を見渡し、実殲隊隊員を見た。

「全員、無事だ。そちらは？」

「一人、殉職。他は全員無事だ」

「集結するか」

桐生が小さく呟いたその時、大野が震えた声で言った。

「兄貴・・・・・・・・村人が・・・・・・・・」

桐生は大野を一瞥し、目線の方角を見ると、何時もは軽口を叩く桐生も言葉を失い、後ずさった。

先程撃ち殺した村人がゆっくりと起き上がっている。さらに先程、弾丸を受けた場所は既に塞がっていた。

「銃が・・・・・・・・効いてないっス」

「クソツタレ！」

桐生は鬼首で胴体を切断すると、雷電を構え、上半身に有りつたものの9mmパラベラム弾を見舞った。

血液を噴き出し、内臓を地面に落しながら、空中で9mmパラベラム弾に揉まれる。

止めと言わんばかりに霧積を頭部に撃ち込んだ。

頭部はバラバラに吹き飛ばされ、地面に散らばる。

しかし、胴体から肉が盛り上がり、徐々に体が形成されていき、一瞬で先程の村人が形作られた。

「何だよ、こりゃ・・・・・・・・ホラー映画じゃねえんだぜ？」

桐生が小さく呟くと、鹿島が叫んだ。

「村まで走れ！今は逃げるんだ!!」

鹿島の声に全隊員が駆け出した。

後ろからは村人が迫って来ている。

止まれば死か、それ以上に悲惨な物が待っているのは明白だ。

全隊員が村に駆けていると悲鳴や絶叫が響き渡った。

隊員達が犠牲になっている。

限られた視界で、森の中となったら最悪の状況だった。

数分がこんなに長く感じられたのは初めてだ。

村の入り口にたどり着いた桐生は苦笑した。

生き残ったのは実殲隊隊員と特殊作戦群では鹿島だけだった。

「Sは鹿島一尉だけか……………」

「仕方ない……………」

鹿島は小さく呟くと89式小銃を構えた。

「我々だけでやるしかない」

「あんな化け物、どうするんスか!？」

大野が鹿島に食ってかかると「落ち着け!!」と桐生が怒鳴った。

「何か突破口があるはずだ」

「突破口と言っても、具体的には？」

椎名の言葉に桐生は口ごもった。

その時、森の中から村人の声が聞こえてきた。

それは確実に向かって来ている。

「やべえな……………」

桐生が小さく呟くと目の端に金髪の髪が映った。

桐生の他の隊員もそれに気付き、そちらを振り向いた。

そこには金髪の少女が立っている。

無表情に立つその少女は廃病院で見た「幽霊」。

「お前は一体……………」

桐生の問いに少女は短く「ゼロ」と答えた。

「……………こつち……………」

ゼロと名乗る少女は空中を滑るように移動し、手招きをする。

「これって、着いて行ったら三途の河ってオチじゃないスか!？」

「・・・・・・・・大丈夫だ」

ジェイクは小さく呟くと駆け出した。

何時もは他人を信用しない人間がこうも簡単に幽霊の言葉を信じるとは・・・・・・・・

「どうするっスか!？」

大野が小さく呟くと、森の中から声が聞こえてきた。

「イケニエ、ドコイッタ」

「オトコ、コロセ。ミナゴロシ」

それを聞いた桐生は椎名の手を掴むとジェイクを追い掛けた。

「俺は男に殺されて三途の河を渡るより少女に殺されて三途の河を渡る方がいいね!残りたきゃ、残れ」

大野に言い放つと鹿島も駆け出す。

「ちよっ!待って欲しいっス!」

大野も慌ててそれに続く。

五人がゼロの後ろをついて行くと、大きな小屋があった。

小屋は木造二階建てで農具置場のようだ。

「・・・・・・・・ここ・・・・・・・・」

ゼロは小さく呟き、指を差す。

隠れるには最適の場所だ。

ゼロは再び直立に立つと薄くなっていく。

「ドコイッタ」

「ミツケロ」

「コロセ」

その声を聞いた全員が中に入ると棒で鍵を掛けた。

「だから・・・・・・・・ホラーじゃねえんだぞ」

桐生は床に倒れ込むと雷電を一瞥した。

普通だったら即死物だというのに・・・・・・・・

雷電に初弾を装填するとそれをホルスターに仕舞うと日向を掴んだ。

「桐生二尉、これからどうする?」

「どうするも何も手の出しようがねえ」

「あの村人や自衛官……敢えてゾンビと呼称しますが、あの生命力は現実には考えられません」

「……傀儡^{かいらい}だ」

「難しい言葉知ってるねえ、マジシャン？」

「何asca、かい何とかって……」

「傀儡、操り人形という意味です」

「……奴らはアビスに操られた傀儡だ。いくら撃とうが切ろうが、殺せない。既に死んでいるからな」

「既に死んでいる？」

鹿島が素っ頓狂な声を出すとジェイクは鹿島を一瞥する。

「……死んでいるからこそ殺せない。アビスに操られている以上、大元を叩かない限り死なない」

「ジェイクさん、そのアビスは分かりますか？」

「……そこまでは分からない」

ジェイクが言ったのを聞いた桐生が日向にAG36を装着した瞬間、扉を激しく叩く音が響き渡った。

「カギ、カカツテル！」

「ココダ」

「予想外に早く気付かれたな、どうする？」

「抵抗するに決まってる」

「上等だ！」

刹那、扉を破ろうとする音が響き渡る。

「椎名、C2爆薬だ」

「ブリーチ・クリアですか？」

「勿の論だ！」

桐生はニツと笑うのを見た椎名はC2爆薬を仕掛けた。

「さて、ショータイムの始まりだ！」

完全孤立

CATS本部戦闘指揮所

偵察衛星から映る映像から部隊が消えた事にオペレーター達は焦る。

「実殲隊、応答を！実殲隊！」

「状況はどうなっている！？」

口々に叫ぶオペレーターの声に霞は怒鳴った。

「アパッチ（AH-64D）はどうなっている！？援護の予定だろ
う！」

「先程、上層部から制空権を奪うまで出撃は許可出来ないと報告が
・・・・・・・・」

（畜生が！）

霞は舌打ちをすると無線を叩き付けた。

桐生は全員を見渡すと親指を立てた。

全員が頷くと桐生は叫んだ。

「ブリーチクリア！」

椎名はスイッチを入れると納屋の扉が吹き飛んだ。

煙りが立ち込める中、ジェイクは紋様を空中に描いた。

「・・・・・・・・失せろ」

ジェイクが小さく呟くと凄まじい突風が小屋から外に流れた。

包囲していた村人はその突風に吹き飛ばされ、尻餅をつく。

「風よ・・・・・・・・走れ」

ジェイクが手刀を横に一閃すると同時に風に吹き飛ばされた村人や

自衛官の体が鎌鼬により切断される。

「今だ！」

鹿島の声と同時に全員が小屋から飛び出した。

鹿島は89式小銃を走りながら構えると3点制限点射で村人を撃ち抜く。

鹿島の狙いは正確で頭に全弾命中させると近くにいた村人を銃床で殴り付けた。

刹那、操られた自衛官が89式小銃の引き金に指を掛ける。

「吹き飛ばし！」

それより早く桐生は日向のAG36の引き金を引いた。

40mmグレネードが隊員の体を吹き飛ばし、89式小銃がバラバラに弾け飛ぶ。

同時に5.56mm NATO弾が近くにいた隊員の体を引き裂きいた。

「銃を持つてる奴から狙え！撃たせるな！！」

桐生の大声より早く、弾丸が頬を掠める。

同時に桐生は屈むと、背の高い茂みに飛び込んだ。

奴らの目は赤く光っている為、狙い易いと言えば狙い易いが、銃を持っているかはマズルフラッシュで判断するしかなく、我ながら無茶な事を言っていると苦笑する。

小さな小道を抜けると村の中だが、そこまでに敵に囲まれるのがオチだ。

桐生は発炎筒を取り出すと点火し、茂みから飛び出した。

「こつちだ、化け物！！」

桐生は発炎筒を振り回し、大声で怒鳴った。

「何やってるんスカ、兄貴！」

「桐生さん！！」

「俺が囫になる！早く行け！」

「桐生二尉！！馬鹿な真似は……………」

「鹿島一尉、部隊は頼みます」

桐生は親指を立てると発炎筒を投げ捨て、日向を構えた。

「行け！早く！！」

「………スマン！」

鹿島は敬礼をすると、駆け出すのを見てジエイクも駆け出す。

しかし、大野と椎名が行こうとしない。

「兄貴！」

「らしくないです！行きましようよ！！」

「馬鹿野郎！俺が死ぬと思ってるのか！？命令だ！行け！！」

桐生が怒鳴ると鹿島が引き返してきた。

鹿島は椎名の腕を掴むと、「行くぞ」と叫んだ。

「死なないで下さい！必ず………必ず生きて戻って下さい！」

「勿論だ！！」

桐生は大声で答えると日向の引き金を引いた。

桐生はフルオートで銃を乱射すると村人達に駆け寄る。

村人の体が5・56mm NATO弾で撃ち抜かれても、すぐに塞がりキリが無い。

後ろを一瞥すると、椎名達の姿は既に無かった。

それでいい。

桐生はニツと笑うと、弾倉を取り替えた。

刹那、銃声が轟き、反射的に茂みの中に飛び込むと曳光弾が立っていた所を通過する。

間一髪と言っても過言では無かった。

その時駆け寄ってきた村人が倒れている桐生に鎌を振り上げる。

それに気付いた桐生も素早く刀を抜いてそれを受け止めた。

「物騒な物を振るってんじゃねえ！！」

桐生は怒鳴ると雷電を首に押し付け、引き金を引いた。

弾丸は首元を吹き飛ばし、村人は後ろに弾け飛んだ。

桐生はそれを見届けると立ち上がり、身を低くして茂みを進む。

弾丸が頭上を通過し、全身の毛穴がカツと開いたが、どうやら見つけられず、やたらめったらに撃っていると感じ、安堵した桐生は

茂みを屈んで歩き、村に向かって歩いて行った。

生贄

村の中に入った椎名は後ろを一瞥した。

そんな椎名を見て鹿島が「心配か？」と問い掛ける。

椎名は目線を落とすと、ゆっくり頷いた。

「同じ隊の仲間を心配しない人が普通いますかね？」

普通なら懲罰物の発言に鹿島は「そうだな」と答えた。

その様子を見ていたジェイクは小さく「変わったな」と呟き、前を見た。

刹那、マズルフラッシュが轟き、鹿島が吹き飛んだ。

「鹿島一尉！！大丈夫っスか？」

駆け寄った大野に鹿島は頷いた。

「防弾チョッキに救われた」

「ボサツとするな！！」

ジェイクが怒鳴り、二人の前に立つと紋様を刻んだ。

同時にマズルフラッシュが閃くが、ジェイクの目の前に現れた緑色で半透明の壁が弾丸を防ぐ。

同時に椎名が改良型ステアー T M P「雄琴」を闇の中に乱射する。闇の中に弾丸が放たれるが、どれほどの距離にいるか分からない、見えない敵にサブマシンガンのバラける弾は威嚇程度の効果しかない。

かと言って、フラッシュライトは敵に自分の場所を曝す事になる。

J G V S - V 8 もランクルと共に吹き飛んだ。

条件としては最悪で、さらに先程の乱射のマズルフラッシュでこちらの場所晒している。

椎名は素早く伏せると頭上を弾丸が通過していく。

その時、粘着質の縄が体に絡まり、凄まじい力で引っ張られる。

椎名は屋根の上まで引き揚げられ、驚きのあまり閉じていた目をゆつくりと開けると小さな悲鳴をあげた。

月に照らされて妖しく光る牙。

どこと無く歪んだ人間の顔を思わせる顔面に四つの赤く光る目。

椎名はそれが巨大な蜘蛛だと理解し、それに雄琴を向けた瞬間、首に牙が突き立てられた。

「かつ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・」

痛みは無い。

ただ体が痺れて、指先すら動かすことが出来ない。

息は問題無く出来るが視界が霧が掛かったように薄くぼやける。

麻酔？

椎名が頭の中で呟くと、巨大な蜘蛛は獲物を捕らえたように足元から蜘蛛の糸で椎名を拘束していく。

それに気付いた大野は狙撃銃を構えるが、死人となった自衛隊が後ろから銃を乱射してくる。

「追い付いてきたか！」

鹿島は89式小銃で応射を行う。

闇の中でうごめく赤い光に弾丸を撃ち込むが、それが倒れる事は無い。

ジェイクは魔術の壁を消すと、椎名を捕らえている巨大な蜘蛛に銃を放った。

蜘蛛は弾丸を受けてもびくともせず、一心に椎名を糸で拘束する。

そして蜘蛛は椎名を胸まで糸で巻くと四つの脚で抱え込んだ。

蜘蛛はジェイクを見ると、まるで嘲笑うかのように牙を鳴らし、闇の中に消えて行った。

「イケニエ、ツカマエタ」

「オトコ、コロセ」

挟み撃ちにされた三人は舌打ちをすると、近くの古びた家に飛び込み、棒を立ててつつかい棒にした。

扉を叩く音が響き渡る。

三人は顔をしかめると、銃を構えつつ後ろに下がる。

勢いで中に入ったが、どうするか・・・・・・・・

ジェイクは一步前に出ると印を目の前で結び、最後に縦に手刀を一閃した。

同時に表から物音が掻き消える。

消えるというよりは元からそんな物が無かったという程に静かだ。

ジェイクは地面に膝を着くと息を切らし、小さく「大丈夫だ」と呟いた。

それを聞いた二人は恐る恐る扉を開けて目を疑った。

村人の姿は無く、地面には血だまりだけが残されていたのだ。

「これは？」

「……………奴らを異空間に飛ばし、消滅させた」

「異空間……………消滅？」

鹿島は素っ頓狂な声を出すと同時にジェイクはゆっくり立ち上がった。

「……………これはあと一回しか使えない。それより、どうする？」

「何が？」

「椎名が捕まった事だ」

「助けるに決まってるっス！」

「椎名三尉を捕らえた奴が元凶か？」

「それは無いだろう」

ジェイクは頭を押さえ、壁に寄り掛かりながら言った。

「奴は椎名に噛み付いたが、それが原因で村人と同じになるなら捕獲する必要は無い。それに生贄と奴らは言っていた。椎名を捕らえる為だけのアビスの可能性が高い」

「もしかして例の教団っスか!？」

「一連のアビス事件が関係あると仮定した場合は有り得る」

「とにかく、今は椎名三尉とターゲット、桐生二尉を探すのが先決だろう」

鹿島の声にジェイクは小さく「三人の死体が見付からなければいいな」と呟き、歩いて行った。

狗羅穠

茂みを抜けた桐生は後ろを見た。

村人が松明を持ち、自分を探している。

逃げ切るなら今のうちだが、奴らの村に突入するのはリスクが高いが、合流するには村に行くしかない。

（笑えねえ……）

桐生は自嘲すると、全く使わないライターを取り出し、茂みに火を付けた。

茂みは一気に燃え上がると桐生の側からゆっくりと燃え広がっていく。

それを見届けると桐生は村に走った。

村の中に入ると、周囲を見渡し、奥に進んで行くと、人影が家の横を通過していく。

それは村人や自衛官のようなぎこちない動きではなく、生氣のある動きだ。

桐生は日向を構え、警戒しながら人影が消えた家を勢いよく開けた。刹那、目の前に二つの銃口が突き付けられ、桐生は反射的に横に躲すと二つの銃口からマズルフラッシュと銃声が轟き、隣の家銃痕が付いた。

桐生が顔を上げて日向を構えたその時、桐生は眉を潜め、苦笑いを浮かべる。

「お前か？」

「危ないぜ……入谷」

「悪いな、奴らだと思ってな」

入谷は苦笑すると弾倉の開いた余白に弾丸を突っ込んだ。

「他はどうした？」

「俺が囫になつて逸れたって訳だ」

「成る程な」

入谷は家の中に入ると、煙草を取り出し、「そこ閉める」と言った。桐生は扉を閉めると、煙草に火を付けた。

「あんたなら何か知ってんだろ？」

「まあな。この村はかつて人身御供を神に捧げる風習があったんだが、その神が実在する神だったらしい」

「その神が今回の？」

「ああ、狗羅穠（いぬくわもろ）と呼ばれているが、特徴からクトゥルフ神話のグラ―キと考えている。奴の針に刺された物は死に絶え、奴の奴隷となる」

「有り得るのか、そんな事が？」

「有り得ているから居るんだろ？」

入谷は紫煙を吐き出すと続けた。

「その針に塗られているのはテトロドトキシンと思われる。テトロドトキシンはヒンドウー教でゾンビを作る為に使われていたと言われているがそれで仮死状態にした後、その針で操る。詳しくは知らないがその針は細胞の分裂促進を促し、不死の状態にしている・・・らしい」

「らしい、か」

桐生は苦笑いを浮かべると日向の弾倉に5・56mm NATO弾を挿入していく。

「弱点は？」

「延髄に刺さっている針を破壊すればいいんだ。が、中々難儀で一撃で破壊するか、取り出さない限り、死にはしないからな」

「延髄か。首を切り落としても無理だった訳か」

桐生は納得したように言うと言倉に5・56mm NATO弾を装填し終え、日向にセットした。

「じゃあ、やりますか？」

「何を、だ？」

入谷が煙草を踏み消しながら問い掛けると頬を緩ませ桐生に問い掛けた。

「奴らをぶつつぶすのさ!」

「面白そうだな、付き合っぜ」

入谷はM K・23を構えると威勢よく立ち上がった。

神の血を引き継ぐ少女

湿っぽい匂いと土の匂いが混ざり合う匂いに椎名はゆっくり目を開けた。

体は痺れ動かす事が出来ないうえ、視界は霧が掛かったように僅かに濁っている。

視線を動かすと巨大な蜘蛛の巣に十字に張り付けられている事に気付いた椎名の目にこちらを見上げている少女が映った。

少女は緑色の長髪に美しい顔立ちで、緑色の爪をしている。

少女は不敵な笑みを浮かべると口を開いた。

「コイツが生贄？中々の美人じゃん」

少女はそう言うと言って行った。

「あゝあ！地下って臭くて嫌になっちゃう」

少女は大声で捨て台詞を残すと、椎名は再び気を失った。

弱点が分かれば恐くねえ。

桐生は左手に鬼首を右手に日向を持ち、入谷と共に村人の中に突っ込んだ。

手順は簡単だ。

首元を刀で吹き飛ばし、日向でそれを破壊する。
それだけだ。

桐生は村人の首を撥ねると日向でそれに乱射して破壊する。
さらに手近な村人の首元に40mmグレネード弾を撃ち込み、破壊した。

自衛隊でも無い限り、敵は強くない。

刹那、銃声が轟くと入谷の足元に銃痕が出来る。

村田式散弾銃を構えた村人が屋根の上から狙撃を行っていた。

入谷は即座にM K . 23 二丁を構えると水平に構え、首元を撃ち抜く。

「物騒な物を持っているからだ」

入谷はニツと笑うとM K . 23 で他の村人を撃ち抜いていく。

騒ぎを大きくすればあいつらが来るだろう、という予想は当たっていた。

駆け付けた三人は銃を撃ちながら二人に駆け寄った。

「・・・・・・・・やはり生きていたか」

「そりゃあな・・・・・・・・おい、椎名はどうした!？」

「それが連れ去られたっス」

大野の声に桐生は「何だと?」と呟く。

「デカイ蜘蛛に連れ去られて・・・・・・・・スマン!」

「デカイ蜘蛛? アトラクナクアか」

「アトラクナクア?」

「蜘蛛型のアビスだ。その牙にはサクシニルコリンが含まれ、噛まれば意識を失う。過去に確認された個体の事例を考えれば地下に巣を作る」

「地下だな!？」

桐生が駆け出そうしたのを見た入谷はジェイクを一瞥した。

「お前も行け。感じてるんだろう?」

ジェイクは横目で入谷を見ると「邪な魔力を・・・・・・・・」と呟いた。

桐生が駆け出したその後ろをジェイクは無言で追従していく。
やはり奴は・・・・・・・・

「あゝあ。あつさり生贄が捕まって・・・・・・・・私が送り込まれた意味無いな」

緑色の髪少女は詰まらなそうに呟くと不意に足を止めて眉を潜めた。

強力な魔力？

それもかなり近くに・・・・・・・・

「面白いのが近くにいる！楽しくなりそう」

少女は妖艶な笑みを浮かべ、地下への階段を上って行った。

桐生が走っていると、珍しくジェイクから口を開いた。

「・・・・・・・・お前、当ては有るのか？」

「・・・・・・・・無いな」

「やはりな」

「お前の魔術で探せないか？」

「簡単に言うが、魔術は精神力を使うんだ。多用出来ない」

言ってくれる・・・・・・・・

桐生は内心呟く。

村の奥の神社までたどり着いた二人は長い石段を見上げると嘆息を漏らした。

「どうする？」

「・・・・・・・・神を奉っていたというのなら何かあるかもしれないな」

「それに人身御供って儀式があつたんだ。それを隠すために地下がある可能性があるかもな。が・・・・・・・・」

上りたくない・・・・・・・・

二人は内心同時に呟く。

桐生とジェイクが石段に足をかけると、爆発音が響き渡った。

二人は後ろを一瞥したがすぐに全力で石段を駆け上がって行く。

一気に駆け上がり、上り切ると目の前に古びた神社が広がっていた。鳥居を潜り、二人が目の中の神社に歩を進めたその時、神社の扉が軋む音を響かせ、ゆっくり開いた。

二人が銃を構えたその時、緑色の髪の少女が中から現れる。

薄手のワンピースに身を包んだその姿は非常に美しく、物語の人物をそのまま現実に現したかのような幻想的な様子を醸し出していた。

「あらあら？早かったのね？ここで待っていてあげようと思っただのに……」

「コイツがグラーキか？」

桐生が日向の照星を合わせ、構えたその時、少女はムツとしながら怒鳴った。

「あんなキモいの一緒にしないでくれない？私はクティラ！ヘルファイアー教団の幹部！」

「ヘル……何？」

桐生が問い掛けたその時、ジェイクがM1911A1ガバメントを構えると珍しく声を荒げる。

「貴様が……貴様が教団の幹部か！？」

「あれ？私達の事知ってるの？」

「貴様らの事など忘れられるか！！」

ジェイクは激昂すると発砲した。

クティラは右手を翳すと青い半透明の壁を出し、弾丸を受け止める。受け止められたライフルの跡が残る弾丸は潰れる事なく、空中で静止したかのように阻まれた。

壁が消滅した瞬間、弾丸が地面に落下し、澄んだ音が響き渡る。

「熱いんだ」

クティラはクスクスと笑うとジェイクを見つめる。

「教団に來ない？その魔力、こんな連中の為に使っていいの？魔法

が使えない下等な劣等種の為に……」

クティラは桐生を一瞥すると子供のように無邪気な笑みを浮かべた。

「魔法が使えないから劣等種とはヒデエ言われ方だな」

桐生は左手の鬼首を前に向けるとクティラを睨んだ。

クティラはそれを気にする様子も無く、ジエイクを見つめる。

「選ばれし者の子孫、貴方はこの世界に必要な存在。だから、教団に来るのが幸せという事なのよ？この奥にもう一人、選ばれし者がいる。計画の完遂は目前よ？だから……」

「成る程、ここに椎名がいるみたいだな」

桐生は一步前に出るとクティラは桐生を睨み付けた。

「でしゃばるな劣等種！！」

「貴様も人間だろう？」

「人間？私がそんな下等な種族だと思ってるの？私は選ばれし者と神の混血！魔法も使えない劣等種と同じにしないで！！」

クティラは大声で怒鳴ると掌を広げた。

刹那、クティラの緑色の爪が十センチまで伸びた。

「最後に聞いわ……一緒に来る気は無い？」

「……そのつもりは無い」

冷静さを取り戻したジエイクは小声で言い放ち、それを聞いたクティラは惚けた様に笑うと、殺気に満ちた表情で言い放った。

「殺してやるから、じっとしていなよ？」

風の魔術師と氷雷の魔術師

三人は拳銃で応射しながら後退するとそれぞれ物影に隠れた。早々に弾丸を撃ち尽くした大野はG18Cをレッジホルスターに仕舞うとSR-25を構える。

暗視装置が取り付けられたSR-25のスコープを覗くと首元を射抜いた。

刹那、カール・グスタフの弾丸が大野に放たれる。

大野が物影に再び隠れるとすぐ横をHEAT弾が横を通過していき、後ろで爆発した。

「あつぶな〜！」

大野は後方の爆発を見つめながら言うと、狙撃銃を構える。その時、SIG P220を持った鹿島が駆け寄ってきた。

「大丈夫か!？」

「大丈夫っス！」

大野が答えた瞬間、凄まじい揺れが周囲を揺らした。

立っていられない程の揺れに三人は地面に手をつけてそれに堪える。同時に地面が隆起し、割れ目から巨大な化け物が飛び出してきた。

楕円形の体に丸い口と黄色い目をつけた三本の茎状の突起物からなる顔はまるでグロテスクなナメクジだ。

体の下部には足のような突起が無数に生え、入谷が言っていた毒が塗られている針が体全体を覆っている。

「やっと親玉が現れたか……………」

「これがアビスか……………初めて見るが、悍ましい……………」

鹿島は小さく呟き、化け物を眺めると入谷はMK-23を構えた。

「コイツを沈めて、終わらせるぞ！」

クティラは怒鳴ると同時に桐生に突進してきた。

クティラの長い爪が月光に反射し、桐生の腹部に突き出される。

桐生はそれを避けると鬼首を爪に向かつて振るう。しかし、鬼首の刃と爪が競り合い、鋭い音を鳴らした。

「私の爪は金属でも切り裂くのよ？劣等種の武器が通用するとても？」

クティラが微笑みを浮かべたその時、クティラの頬を45ACP弾が掠めた。

僅かだが、血は勢いよく飛び出し、クティラはジェイクを睨む。

「私の顔に傷を付けた事は万死に値するわよ！！」

クティラは怒鳴ると同時に掌をジェイクに向ける。

閃光が周囲を照らしたと思うより早く、ジェイクの体は吹き飛び、鳥居に叩き付けられた。

「雷か・・・・・・」

「へえ？直撃の瞬間に魔法障壁で防いだのね？やっぱり、教団に欲しいわ」

クティラはそう言うと桐生に回し蹴りを叩き込んだ。

桐生は三メートル程、吹き飛ばされるが素早く受け身を取り、身構える。

クティラが紋様を描き始めたその時、ジェイクの放った鎌鼬がそれを妨害した。

「風を操る魔術師ね？」
「・・・・・・」

ジェイクは無言で鎌鼬を放つとクティラは魔法で発生させた障壁で鎌鼬を受け止めた。

続いて氷柱をジェイクに撃ち込む。

それをガバメントで撃ち落とすと氷の粒子が周囲に飛び散る。

「……………氷？二つも能力を操れるというのか！？」

「言ったでしょう？私は選ばれし者と神の娘だと！！」

クティラが大声で言った瞬間、電光がジェイクに放たれた。

ジェイクが障壁を作ったと同時に電光が氷の粒子に反射し、ジェイクに直撃する。

「私の見込み違いだったのかな？」

クティラはクスクスと笑った瞬間、桐生が雷電と日向を構えてクティラに乱射する。

入り乱れる9mmパラベラム弾と5.56mm NATO弾がクティラを強襲するが、それより早く障壁に阻まれた。

クティラは妖艶な笑みを浮かべると手刀を縦に一閃した。

すると、クティラは二人に分かれる。

中央から分かれるその様に桐生は雷電と日向の弾倉を変えながら小さく呟いた。

「特撮の宇宙人かあ？」

桐生が呟き終わった瞬間、二人のクティラが桐生に突進する。

桐生は鬼首を逆手に持つと駆け出し、擦れ違い様に切り付けた。

手応えが無い。

ならばと桐生はもう一人に雷電を撃ち込んだ。

しかし、9mmパラベラム弾は後ろの松の木に当たった。

同時に分身が掻き消える。

桐生がまさかと、空を見上げるとクティラの爪は一メートルまで迫っていた。

「死ね！！劣等種が！！」

クティラが叫んだ瞬間、突風が巻き起こり、クティラは吹き飛ばされる。

クティラが受け身を取るより早く、ジェイクの手から竜巻にも似た風が放たれた。

埃を巻き込むそれは、竜巻を横にしたような外見で、周囲の葉を巻き込みながらクティラの体を巻き込んだ。

クティラは竜巻に体を切り刻まれ、松に叩き付けられる。

クティラが傷を押さえ、顔を上げるとジェイクがガバメントを向けて立っていた。

「……………言い残す事は？」

「残念……………」

「……………残念？」

「貴方が教団に出来ない事……………そして……………」

クティラがそこまで言った瞬間、傷が塞がっていく。

「私を侮っている事が残念なのよ！」

クティラは右腕を思い切り下げてジェイクの腹部目掛けて突き出した。

その時、銃声と共にクティラの右腕から血潮が噴き出す。

「俺を忘れてもらっては困るねえ」

「劣等種が！！」

クティラが憎らしげに雷電を構えている桐生を睨むと同時にヘリのローター音が村中に響き渡る。

三人が上空を見上げると、陸自最強の攻撃ヘリコプターである「AH-64D アパッチロングボウ」が飛行していた。

「馬鹿な……………制空権はこちらが確保しているのに……………」

「……………どうやら馬鹿が来たらしい」

ジェイクは勝ち誇ったようにクティラを見ると、クティラは舌打ちする。

そしてクティラは素早く紋様を描くと両手の平を合わせた。

刹那、クティラの姿は一瞬で消滅し、二人は嘆息を漏らす。

「逃げちまったな」

「……………ああ」

桐生はアパッチを見上げると小さく呟いた。

「誰がパイロットだと思う？」

「……………奴しかいないだろう？」

「・・・だ。行くか」

桐生は鬼首を鞘に仕舞うと神社に駆け出し、ジェイクもそれに続いて行った。

地下へ

アパッチの眼下に広がっている巨大なアビスとマズルフラッシュを一瞥し、霞は入谷を探す。

刹那、無線から入谷の声が聞こえてきた。

（こちら入谷、パイロット応答を……と、言っても霞なんだろう？）

「分かっているなら聞くな」

霞が答えると火気管制員が口を開いた。

「入谷一尉ですか？」

（その声は……小西か）

「お久しぶりです、入谷一尉！未知生物処理隊以来ですね」

（一尉はやめる。元、だからな）

「はい！元一尉！」

小西勇作一等特尉は何処かはしやきながら言うと、84mm HEAT弾がすぐ横を掠めた。

「と、ホバリングは危険だな。小西、始めるぞ！」

「了解！」

小西が下を向くとTADS（目標捕捉／照準兼用レーザー照準装置）が下部に稼動する。

「まずは雑魚を掃討しろ」

「はい！」

ヘルメット・ディスプレイに映し出されたカール・グスタフを持った自衛官にアパッチのM230E1 30mmチェインガンが火を噴いた。

次々放たれる30mm弾が村人と自衛官の体を粉碎していく。

村人と自衛官は村田式散弾銃や89式小銃で応戦するが、全て弾かれ貫通しない。

それを火力で圧倒するようにFFARハイドラロケット弾ポッドか

ら70mmロケット弾が撃ち込まれ、村人を吹き飛ばして行く。
最強の攻撃ヘリコプターや空中の戦車の異名を持つ攻撃ヘリAH-64Dアパッチロングボウの前に歩兵は的ではない。

村人と自衛官はあつという間に掃討され、周囲は血肉の山となった。再生力が高く、延髄を狙わなくてはならない相手であるうが、高威力のチェインガンやロケット弾の前では意味が無い。

「雑魚はあらかた掃討したな……」

霞が小さく呟いたその時、ミサイルアラートが鳴り響いた。

刹那、闇夜を切り裂くかの如くミサイルが向かってくる。

霞がアパッチの回避行動を取ったと同時にミサイルはいきなり爆発し、闇夜をさらに鮮明な爆発で照らした。

「何!？」

霞がFLIR（赤外線前方監視装置）で下を向くと、先程の爆発に対して銃を構えている一つの影が映った。

持っている銃の銃伸長が長いことから狙撃銃と考えられる。

狙撃銃でミサイルを撃ち落としたというのか？

流星、桐生が手塩に掛けて育てただけある。

霞が笑みを浮かべた瞬間、ミサイルを放った自衛官にロケット弾が放たれ、木造の家屋ごと自衛官を吹き飛ばした。

「ハイドロロケット弾、弾薬切れました」

「構わない。仕上げだ！ヘルファイア、用意!!」

「了解です」

小西はアビス「グラーク」をTADSのモニターの中央に捉える。

ロックが完了した瞬間、小西はAGM-114ヘルファイアレーザ―誘導対戦車ミサイルがグラークに放った。

レーザ―誘導で放たれたヘルファイア対戦車ミサイルはグラークの頭部に向かって直進していき……

戦闘を終えたジェイクは息を切らし、鳥居に寄り掛かった。
顔は真つ青で冷や汗が出ている様子は尋常ではない。

「大丈夫か？」

「……お前は行け」

「いいのか？フルマラソンの後みてえになってんぞ？」

「貴様が居れば回復するものも出来ない」

「分かったよ」

桐生が神社の中に入った瞬間、ジェイクを一瞥すると、「そつだ」と口を開いた。

「お前は戻っていいぜ」

「……何だと？」

ジェイクが眉を潜めると桐生はニツと笑った。

「前回、良いところが無かったんだからな。見せ場をくれよ」

「……分かった。任せる」

「お前から任せるとは珍しいな。ま、預かったんだ。楽しませてもらうぜ」

桐生は後ろを向いて手をヒラヒラ動かすと奥に入って行った。

同時に風が吹き、扉が勢いよく閉まる。

ジェイクの起こした風なのか、自然に発生した風なのかは分からない。

だが、後戻りは出来ない事には代わり無いのは事実だ。

桐生は雷電に9mmパラベラム弾を、日向に5・56mm NATO弾装填した。

中は蝋燭が明るく照らしている。

暗闇の中で馴れた目には蝋燭だけで十分だ。

桐生はそのまま目の前の大きな扉を開けた。

目の前には石段があり、桐生はそれを駆け降りて行く。

壁には小さな祠があり、中に蝋燭があり、道が照らされている。

その階段を駆け降りると広い空洞があった。

空洞は天井が無く、月光とヒカリゴケで照らされているその光景を見渡す。

中央には何かの儀式が行われるであろう祭壇が安置されている。

桐生が一步前に出たその時、風船から空気が抜けるような音が頭上から聞こえ、桐生は上を見上げた。

「あいつか……」

桐生が見上げたそこには巨大な蜘蛛がいた。

張り巡らされた巣に張り付きながらこちらを見ている様から威嚇しているのは明白だ。

巣の中央には椎名が張り付けられ、完全に意識を失っている。

「さて、これがラストダンスだ。フィナーレと行こうじゃねえか！」

桐生は日向を構えると怒鳴り、同時に巨大な蜘蛛型アビス「アトラクナクア」が飛び掛かってきた。

激闘

ヘルファイアはグラークに直撃し、凄まじい爆煙を発生させた。

「やったか？」

霞が黒煙を見て小さく呟いたその時、煙りの中から長さ一メートルの針が飛んできた。

針はチェインガンに刺さり、チェインガンは黒煙を上げる。

「チェインガン故障！！」

「構わない！ヘルファイアを撃ち込み続けろ！！」

アパッチからヘルファイアがグラークに放たれ、大野と鹿島は軽M
ATとカール・グスタフで応戦すると、グラークは背中 of 針を飛ば
す。

二人が物影に隠れると針は壁に突き刺さる。

重火器でも倒せない生物とは……………

アビスを甘く見ていた鹿島は舌打ちをし、落ちていた89式小銃を
構え、グラークに撃ち込む。

刹那、グラークが多数の足を動かし、突進してきた。

鹿島は慌てて飛びのくと、グラークは家屋に突っ込んだ。

周囲に木が飛び散り、鹿島は飛んできた木を手で叩き落とす。

「クソ！どうする！」

「対戦車ミサイルも効かないなんて……………」

焦る鹿島と大野のすぐ横で平然と煙草を吸い、拳銃の引き金を引い
ている入谷は鼻で笑った。

そろそろ来るか？

読みは外したが、問題は無い。

最後にコイツを倒せればな！

「決める、ジェイク！」

入谷が煙草を捨てながら叫ぶと家屋の屋根の上に立っていたジェイクが唸り声を漏らすグラークを見下ろす。

「……………今日は骨が折れる。仕方ない……………不本意だが、終わらせる！」

ジェイクは大きな声で言うと同時に指で空中に五芒星形を描いた。そしてジェイクが地面を叩いた瞬間、グラークの周囲にその紋様が現れる。

「……………消え去れ」

ジェイクが囁いた瞬間、グラークの周囲の紋様が輝きだした。真昼のように照らし出された瞬間、目を開けられない程の光が閃く。三人とアパッチに搭乗していた二人が目を開じると、一人目を開けていたジェイクが叫んだ。

「……………闇に還れ！！」

ジェイクが横に手刀を一閃すると、光が急速に弱まり五人が目を開けた。

グラークがいた場所には白い石が安置され、それには先程の紋様が描かれている。

地面に突っ伏したジェイクは小さく呟いた。

「……………今日は厄日だ」

睨み合い……………

普通なら人間にする物だが、人生で初めて蜘蛛にしたと桐生は自嘲した。

「デメエの相手をチンタラやってる暇はねえんだ。一気に終わらせてもらう！」

桐生は雷電と日向と一緒に構えると引き金を引いた。アトラクナクアは素早く銃弾を交わすと、飛び掛かってくる。桐生はバック転をしてそれを避けると雷電を構えた。

凄まじい勢いで放たれる二発の9mmパララム弾がアトラクナクアの体内でマッシュルームリングを引き起こす。

弾丸が着弾した部位から紫色の血が溢れ出したが、アトラクナクアに効いてる様子が無い。

アトラクナクアは口から糸を吐き、それが腕に絡まった。

それが絡まった瞬間、目の前に一瞬霞がかった。

(これにも麻酔か……………)

桐生は刀で糸を切断すると、後ろによるめき、自嘲の笑みを漏らした。

麻酔で弱らせ、仕留める……………

それがコイツのやり口か？

餌になってたまるかよ……………

桐生は霧積を取り出してアトラクナクアにぶち込んだが、アトラクナクアは血を出しただけで効いてる様子がない。

ダゴンの時と一緒に……………

「だが……………」

今回は逃げる訳にはいかねえ！

桐生は日向のAG36を放った。

40mmグレネード弾はアトラクナクアに向かうが、アトラクナクアは前脚の爪で40mmグレネード弾を弾く。

弾かれた40mmグレネード弾は壁に炸裂し、土煙を発生させた。

「ふざけやがって！！」

桐生は再び雷電と日向を構え、引き金を引いたが、数発弾が吐き出されてすぐに弾切れを起こした。がやけに軽く、弾倉の中を一瞥する。

桐生は弾倉を掴もうとしたがやけに軽く、弾倉の中を一瞥する。

弾倉の中には弾薬が無く、ただの空き箱となっていた。

「ハハ………笑えねえ」

桐生はいつもの口癖を呟くと、自嘲した。

牙を鳴らすアトラクナクアを見ながら刀を掴むと左手に持つと全てのホルスターを外し、左手で鞘を掴みながら右手で柄を掴んだ。

ゆっくりと刀が引き抜かれ、緋色の刃が現れる。

月光に照らされた刀身が妖しく光った。

「終わらせてやるさ」

桐生は正眼に鬼首を構え、アトラクナクアを見据える。

月が雲の影に隠れ、周囲が暗くなった。

アトラクナクアの紅い瞳と緋色の刀身が暗闇の中で目立ち、二人が対峙していることを分からせる。

刹那、月が雲から現れ、周囲を再び照らし出した。

同時に桐生は駆け出すと横に刀を一閃する。

アトラクナクアは爪でそれを受け止めると、もう片方の爪を桐生に振るう。

桐生は鞘でそれを受け止めるとアトラクナクアに渾身の頭突きをかけた。

鈍い音が響き渡り、桐生はふらふらと後ろに下がると、生暖かい液体が垂れてきている事に気付き、苦笑する。

（無謀にも程があっただぜ）

桐生は舌先で垂れてくる血を嘗め取ると刀を構えて再び切り掛かる。爪と刃がぶつかり合い、闇に火花が散った。

桐生は剣道の切り返しが如く、アトラクナクアの頭に刀を振り下ろしていく。

アトラクナクアもそれを受け止めると、口から糸を吐いた。

それを零距离で桐生は避けると、鞘を掴んだ左手で渾身の一撃を叩き込んだ。

「オラァー!!」

桐生は怒鳴ると再び左手の拳を叩き込む。

刹那、アトラクナクアは体を横にして、勢いよく突進した。

桐生はそのまま吹き飛ばされたが、すぐに受け身を取る。

「痛くねえぜ………テメエの攻撃なんかっ!!」

桐生は一気に駆け寄ると、鞘で殴り付ける。

当然、アトラクナクアはそれを受け止めるが、それを見た桐生は二ツと笑って見せた。

「ワンパターンだと思ったかよ!？」

桐生は刀を切り上げるとアトラクナクアの右前脚を切り落とした。

宙を舞う前脚が地面に突き刺さると同時にアトラクナクアは断末魔をあげながら暴れ回る。

右前脚からは噴水のように紫色の血が噴き出す。

そして桐生は続けざまに左前脚を切り落とした。

刹那、アトラクナクアは糸を吐き出すが、鞘で巻き取られる。

「自分で動けなくするって………馬鹿か？」

桐生は鞘を地面に刺した。

マグナム弾が同時発射される拳銃を扱う桐生の馬鹿力で刺された鞘はびくともせず、アトラクナクアは鎖に繋がれた野犬の如く暴れる。桐生は刀を素早く下に下ろし、血を払うとアトラクナクアに歩み寄り、刀を振り上げた。

「ファイナーレだ」

風を切る音と同時に振り下ろされた刀はアトラクナクアを頭を切り落とした。

頭を失ったアトラクナクアは後ろに下がると、体を横たわらせる。

それと同時にアトラクナクアは風化していき、糸も劣化していく。

桐生は縛られている椎名を見上げると、糸が劣化していくのが見えた。

「やべえ!!」

桐生は刀を投げ捨てると椎名の真下に走る。

その時、劣化した糸が椎名の体重に支えられなくなり断ち切れた。落下してくる椎名を受け止めようとした瞬間、石に躓き仰向けに倒

れる。

そこに椎名が落下し、桐生の鳩尾に食い込んだ。

さらに倒れ込んだ瞬間、椎名の柔らかい唇が桐生と重なった。

（蜘蛛の一撃より……イテエ……）

桐生は息が出来ず、咳込むが椎名の口が重なり、それも構わない。

椎名の柔らかい唇を吸う形になり、数秒悶えていたその時、椎名がゆっくりと目を開けた。

状況が掴めない椎名はしばらく桐生と口づけをする形になったが、状況を理解すると顔を赤く染め、桐生の頬に平手を叩き込んだ。

「何やってるんですか！！」

「俺は被害者だ！お前の膝が腹に入っただぞ！？」

「私はもつと被害者です！！ファーストキスだったのに……」

「

椎名は目尻に涙を浮かべながら怒鳴ると、桐生は「そんな事が……

……」と小さく呟いた。

それを聞いた椎名はさらに語気を強める。

「そんな事！？女を侍らせてた貴方にはたいしたことないですよね

！！防衛大学時代に女の子に囲まれてましたからね！！」

「いや、俺もファーストキスだったからそんな事って言ったんだよ」

「えっ？」

「コクられまくったが、恥ずかしい話、付き合った事がないからな」

桐生は自嘲すると、椎名の髪を優しく撫でた。

「お互い被害者って事だな」

「ここ、暑いな」

無気力な声に桐生と椎名は声のした方を見ると、髪を掻き上げ、煙草を吸っている入谷が立っていた。

手で扇ぎ、ニヤニヤしている様を見て、二人は急いで離れる。

「邪魔してしまつて悪いね」

入谷は煙草を落として踏み消すと、祭壇に歩いて行った。

「何しに来たんだ？」

「ここに来た目的を……」

入谷は祭壇をずらし、その中の空洞に手を入れると古文書を見せた。

「これを手に入れる為だ」

「それは？」

「然べき時が来たら教えてやる」

入谷は微笑みを浮かべると、煙草を唇で挟むと石段を上って行った。
あの古文書はそれほど大切な物なのか……

桐生は内心呟くと、まだ狼狽している椎名を見た。

教団幹部のクティラという少女が言っていた「選ばれし者」。

その意味は分からない。

だが、椎名が狙われているのは確実だった……

黙示録の始まり

CATS本部隊員宿舍

19:17

沈む夕焼けが海を朱く照らす。

燃えるように朱く染まった海を眺め、入谷はコーヒーを口に運んだ。苦い………

入谷は顔をしかめて、角砂糖を五つ入れると、スプーンで掻き混ぜる。

「やたら砂糖を入れるんだな」

「ノックしろよ」

入谷はコーヒーを口に運ぶと霞を一瞥する。

霞は鼻で笑うと、口を開いた。

「昔はブラックコーヒーが好きだったな」

「ああ。でも、この仕事になってから甘くないと飲めなくなったな」

入谷は苦笑いを浮かべると砂糖が沈殿したコーヒーを飲み干した。

「お前、その本の為にあの村に？何なんだ、その本は？」

「グラーキの黙示録、とも呼んでおこうか？」

「黙示録？」

「ああ。言っちゃえば預言書だ。有名なのが、聖書のヨハネの黙示録だな。666やらハルマゲドンのアレだ」

「それに何が書かれているんだ」

その声に入谷は煙草を口にし、火を付けた。

神妙な面持ちの入谷に霞は「どうした？」と問い掛けると、入谷は紫煙を吐き出し、口を開く。

「気持ち悪いくらい当たってるから心しておけよ？」

「あ？ああ………」

「一節だ。ホフヌンクとフリーユゲルがカツツエと交わる時、エン

デが始まる、と書かれている」

「どういう事だ？」

「ドイツ語だ。ホフヌンクは希望、フリーユゲルは翼、カツツエは猫、エンデは終末の意味だ。分かるか？」

「いや……………」

「俺はこう解釈する。椎名望と桐生翼がCATSに配属され、人類の破滅が始まる」

「安直過ぎやしないか？」

「ドイツ語とアラビア語とフランス語が混ざった驚異的に訳の分からん文章を解読したんだ。それでこんなに一致した文章がでたんだから凄いなと思え」

「そついう物なのか？」

霞は灰が落ちそうな入谷の煙草を一瞥し、苦笑いを浮かべた。

「ところで、どのくらい滞在するんだ？」

「そうだな。この解読が終わるまで居座るつもりだが……………」
それを聞いた霞は一瞬嬉しそうな表情になったが、すぐにいつもの仏頂面に戻った。

「そうか……………なら、今から酒を持ってくる」

霞は足早に部屋から出て行く。

その背中を見送り、入谷は苦笑し、煙草を灰皿に押し付けた。

トロコの寝息が聞こえ、桐生は微笑みを浮かべ、その背中を優しく撫でた。

任務終了後に爆睡したから眠くねえ……………

CATSに配属されてから生活リズムが崩れてるような気がする。
笑えねえ……………

桐生は自嘲するとペットボトルの烏龍茶をがぶ飲みし、それを飲み干した。

「いますか？」

烏龍茶を飲み干すのに合わせたかのように椎名がドアを開けた。

「とうとうノックをしなくなったか。前触れ無しに入るなよ」

その声に椎名は口を尖らせ、「前触れ無く私の唇を奪ったくせに……」と呟く。

「お前だって俺の唇を奪っただろうが」

桐生は飲み干した烏龍茶のペットボトルを椎名の横のごみ箱に投げ入れた。

椎名は頬を赤らめると怒鳴る。

「貴方は女の子ですか!？」

「いーや、俺は男だ」

桐生は二ツと笑って見せると、椎名は口を真一文字に結んだと思ったら頬を緩めて嘆息を漏らす。

「ああ言えばこう言うですか？」

「それが俺の性分だからな」

すると、椎名はもじもじと体を動かし、小さな声で呟いた。

「……………あの……………付き合った事がないって……………」

「ああ、あの話、な？」

桐生は苦笑いを浮かべながら、ばつが悪そうに頭を掻く。

「俺の好みは天然な女の子なんだが……………わざと天然を演出する奴がいるだろ？」

「確かにいますね」

「あれ見ると腹立ってな。擦り寄ってくる女が全部それだった、それだけの話だよ」

それを聞いた椎名は微笑を浮かべ、「天然の人なんてそうそういませんよ?」と言った。

桐生は苦笑いを浮かべ、軽く頷いてみせる。

「目の前に……いるんだが、な」

桐生は小声で囁くと立ち上がり、背伸びをした。

「どうしたんですか？」

「コーヒー飲みたくなつた。買ってくる」

「私も行きます。喉が渴いて……」

「オレレンジジュースかリンゴジュース？買ってくるぞ？」

それに椎名は顔を紅潮させ、手をばたつかせて否定する。

「違いますよ！！たまにはブドウジュースやトマトジュースも……」

「子供かよ」

「煩いですよ！苦い物が苦手なんです！！」

「……お前、麦茶に砂糖を入れるタイプか？」

「わ、悪いですか？」

「悪いとは言わねえけどさ……23歳だろ？何て言うか、子供っぽいよな」

桐生は笑いを浮かべると、椎名は口を尖らせる。

少女のような仕草に桐生は頬を綻ばせた。

「で、何を飲むんだ？」

「ミルクセーキを飲みます」

「本当に子供だな」

「煩いです！」

「ハハ、可愛いねえ。買ってくるよ、ミルクセーキ」

桐生は手をヒラヒラ動かすと、扉に手を掛けた。

同時に桐生は「ああ、そうだ」と口を開いた。

「トロコとでも遊んでな」

桐生は後ろを一瞥すると、椎名は「はい？」と呟いた。

その時、椎名の胸にトロコが飛びつき、椎名の髪にじゃれつく。

「ちよっ！どうするんですか、コレ？」

「だから遊んでろって」

桐生はそう言うと、じゃれつくトロコに困惑している椎名を見て、

微笑みを浮かべた。

a s u r p r i s e ! !

隊員宿舍二階の自室から出た桐生はすぐ隣の階段を下りて、入口近くの自動販売機に向かった。

一階は生活施設があり、二階と三階、四階は隊員達の部屋となっている。

その一階に下りた桐生がコインを器用に投げながら歩いていると入口付近が明滅を始める。

蛍光灯の異常かとそれを見るがそれらしい異常は見受けられない。

「何だ？」

桐生が目細めた瞬間、入口に虚数次元が出現した。

黒い、異様な光を放つそれは不気味の一言だ。

桐生が後ろに一步下がった瞬間、中から泡立つ粘液質の物体が出てきた。

緑色をした原形質の塊は、スライムやアメーバを思わせる不定形な物体だ。

そこから目や触覚が伸び、その触覚を支えにして立ち上がると、ゆっくりと向かってくる。

「まさか………な」

桐生は缶コーヒーを買って、それを掴み、プルタブを上げた。

缶コーヒーを半分程飲むと、桐生はその物体を一瞥する。

「ハア………笑えねえ」

桐生は飲みかけの缶コーヒーを物体に投げ付けると、物体が触覚を鞭のように振るい缶コーヒーを両断した。

周囲に飲みかけのコーヒーが散らばり、香ばしい匂いが周囲を覆う。
「ハハ………マジで笑えねえ………」

桐生が呟くと同時に隊員宿舍の警備室から異変に気付いた隊員がベネリM3ショットガンを持つてくる。

カウンター越しからショットガンを物体に撃ち込むが貫通しただけ

で効いた様子が無い。

隊員が排莢を行った。

その時、物体の触覚が隊員の額を貫き、物体は目の付いた触覚で隊員を舐めるように見つめる。

桐生が後ろを振り返ると奥の非常口にも虚数次元が開き、中から同じ物体が出てきた。

「待てよ！！マジで笑えねえじゃねえかよ！！」

桐生は入口と非常口の間に挟まれている階段を駆け登り、自室に駆け込んだ。

その様子を見た椎名はトコロを子供をあやすように抱きながら素っ頓狂な声で問い掛ける。

「そんなに慌ててどうしましたか？」

「アビスだ！！」

「冗談……ですよね？」

「冗談な訳がねえだろ？雷電を……」

その声に椎名は雷電を桐生に投げ、桐生は器用にそれを受け取り、コッキングを行う。

続いて投げられた弾倉を掴むと、ズボンに擦込む。

「携帯で霞三佐に連絡を頼む。それと部屋から出るな？」

「分かりました」

椎名が答えたのを聞き、桐生は雷電を掴みつつ、扉を開けた。その時、椎名が「桐生さん」と叫んだ。

桐生は椎名を一瞥すると、椎名は「気をつけて」と呟いた。

「分かってるさ」

桐生は微笑を見せると、部屋から出て行く。

慎重に歩みを進めると階段から半身を覗かせて様子を伺う。

階段の下には例の物体は確認出来ない。

虚数次元の発生時間は約一時間。

その間は増援は見込めない。

レポートによれば虚数次元に触れれば、体の細胞がたちまち崩壊し、

死に至るからだ。

また、窓には鉄格子で仕切られている為、脱出場所は皆無だ。

桐生は階段下に一射し、空の葉莢を蹴り落とした。

金属の音が響き渡る。

「大丈夫……か？」

桐生は一步一步、慎重に進むと階段を下りて行く。

桐生が最後の一段を下りた瞬間、触覚が横から突き出された。

間一髪、桐生はそれを避けると、攻撃を加えてきた物体に素早く三連射を叩き込んだ。

しかし、物体は怯む事なく触覚を振るった。

桐生が階段前のトイレに駆け込むと物体はカブトムシのような鳴き声を漏らす。

桐生はタイルで出来た壁に背を付けると、雷電を連射した。

しかし、いくら体内で9mmパラベラム弾がマッシュルームリングを引き起こそうがお構い無しに迫ってくる。

「クソツタレ……！」

桐生が怒鳴った瞬間、階段の上から霞の姿が映った。

手にはウイスキーが握られ、口にはティッシュが詰められている。

「離れろ……！」

霞が怒鳴り、ティッシュに火を付けると、物体に投げ付けた。

ウイスキーが物体の近くに落ちると一気に燃え上がり、物体に燃え移る。

物体は一気に燃え、尋常ではない程の炎に包まれた。

「早く来い……！」

霞の声に桐生は急いで火の中を駆け、階段まで駆け寄った。

それを確認すると、霞は防火シャッターを下ろし、嘆息を漏らす。

「シヨゴスか……」

「シヨゴス？」

「あれの名前だ。普通の火器は効かない。12・7mm弾だろうがな」

「過去に現れた奴か？」

「ああ。既にバレットM82の弾丸をぶち込んで実証済みだ。アビスは火力だけで倒せないと実証したい例だ」

「成る程な」

「結局は火力ではなく知恵だ。火力で勝とうという考えはアビスの本質を知らない奴の浅はかな考えだからな。敵を知って弱点を突き、優位に立つ」

「文字通り猫か」

「何？」

「猫は喧嘩では高い所に立とうとするだろ？少し似てるだろ？」

桐生がニツと笑うと霞は微笑みを浮かべて「確かにな」と呟いた。

「作戦を立てる。一度上に行くぞ」

「了解」

桐生は雷電の弾倉を交換しながら階段を上って行った。

第4種警戒態勢

廊下に集められた多数の自衛官。

その中で最も階級の高い霞が口を開いた。

「今回現れたアビスのシヨゴスに関してだが……奴らは火に弱い。適当にドンパチ撃った所で奴らは殺せないが、火炎瓶なら奴らを殺せる」

「ま、今回は儚泣かせの相手だな」

入谷が煙草を吸いながら笑い混じりに呟くと霞は愛銃のSIG P 226のカスタムモデルを構えた。

「脳みそぶちまけたいか？ああ？」

「いや……」

入谷は苦笑いを浮かべつつ紫煙を吐き出すと、桐生を含めた隊員達
が笑う。

それを横目で流しつつ、霞は口を開いた。

「火事にならないように消火器を持って行け」

霞の声に隊員達はウイスキーや酒瓶に火を付けた火炎瓶を持ち駆け
出していく。

全員の後ろ姿を見送り、入谷は小さく呟いた。

「出来すぎてやがるな」

「あ？」

「虚数次元は特定の地域でしか発生しない。そいつはブラック・プラズマだからな。プラズマの特異状態だが、特定の条件下でしか発生しない。だから、虚数次元は同じ場所でしか発生しないが、今回はどうだ？」

「偶然にも出来過ぎているな……まさか！？」

「例の教団だろうな……見事に奇襲されたって訳だ。だが、
気にかかる事がある」

「どうやって虚数次元を発生させたかか？」

「いや、それは目星が付いてる」

入谷は煙草を踏み消しながら真面目な顔で口を開いた。

「何故ここに発生させたか、だ」

防火シャッターがゆっくりと上がり出す。

手筈としてはシヨゴスを確認後に火炎瓶を投げ付けて抹殺する。

アルコール度数の高い酒を使えばいいが、緊急事態だから有るだけ酒をかき集めたに過ぎない。

焼夷手榴弾が有れば問題無いが、そんな物を非番の自衛官が持つている訳無いのだ。

火炎瓶を持った桐生が一番乗りに飛び出すと振りかぶった。

その時、シヨゴスが虚数次元の中に戻って行く。

多くの自衛官が拍子抜けした瞬間、全てのシヨゴスが虚数次元に入り、虚数次元も消滅した。

「な、何だっただ？」

桐生が目を細めた瞬間、警報が鳴り響きアナウンスが流れた。

それは絶対に聞きたくない内容であり、起こってはならない物だった。

（第4種警戒態勢！！繰り返す！第4種警戒態勢！！横須賀に巨大虚数次元確認！！中央即応団、特殊作戦群及び特殊生物殲滅隊に出動命令！！）

「横須賀に虚数次元だと！？」

「馬鹿な……………」

口々に言う自衛官の声を聞きながら桐生はティッシュを抜き、酒を一気に飲み、その飲みかけの瓶を地面に投げ捨てる。

瓶が割れる音が響き渡る中、桐生は苦笑いを浮かべ、小さく「笑え

ねえ
」と呟いた。

特別任務

横須賀市

報道用ヘリコプターが上空を滞空し、地上を撮影する。

地上からは悲鳴が聞こえ、1キロはあるかという巨大な烏賊のよ
うな生物が映された。

それがズームアップされると女性アナウンサーがマイクを掴み口を
開く。

「ご覧下さい！まるで映画のような光景です！！地上では現れた巨
大生物に民間人が襲われています！」

その時、航空自衛隊所属の支援戦闘機「F-2A」の三機編隊が飛
行していくのがカメラに捉えられる。

三機のF-2Aは巨大な烏賊にASM-2空対艦誘導弾を発射した。
対艦ミサイルは巨大な烏賊に直撃したが、びくともせず、烏賊から
放たれた黄色の溶解液に一機が羽を溶かされ、墜落する。

「自衛隊の戦闘機が落とされました！」

アナウンサーが叫んだその時、空中から虚数次元が発生した。

そこから漆黒の肌に翼があり、顔が無い角の生えた頭部という伝説
の悪魔に酷似した化け物が多数飛び出し、あっという間に空を覆い
尽くす。

悪魔に似た化け物は地上に急降下すると民間人を捕まえ、虚数次元
の中に引きずり込む。

その時、数体の化け物が報道ヘリコプターに突っ込んできた。

高速で突進してくる化け物がヘリコプターに突っ込んだ瞬間、ヘリ
コプターはバランスを崩し地上に落下していく。

そして、ヘリコプターは地面に墜落し、その爆発に多数の民間人が
巻き込まれた。

CATS本部

映し出された横須賀の映像は一言、地獄絵図だった。

グールに民間人が襲われ、巨大なクトーニアン「シャッドメル」が町を蹂躪し、上空には多数の飛行型アビス「ナイトゴースト」、頭頂部に垂直の口があり、ピンク色の二つの目が頭の側面から飛び出している悍ましい容貌のアビス「ガグ」が新たに虚数次元から飛び出してくる。

「陸海空自衛隊及びCRF（中央即応連団）、S（特殊作戦群）が対応しているが、いつまで戦線を保てるか分からない我々も今から出撃する。今回は総力戦だ。全戦力で迎え撃つ」

ブリーフィング終了後、ホールを出た桐生と椎名、ジェイクが入谷に呼び止められる。

「お前らにちよつと特別任務がある。今から俺の部屋に来い」

「特別任務？」

「自分は？」

呼び止められなかった大野が心配そうに問い掛けると「お前は現地だ」

「残念だったな、大野」

桐生が大野の頭をポンと叩くと、入谷の後ろを駆けて行く。

その背中を見送った大野は劣等感に苛まれた。

兄貴は戦闘技術において常人が寄せ付けない。

椎名は桐生の相棒として定着している。

ジエイクは魔術を扱える為特別任務は必然。

でも、自分は？

暴走族のヘッドとして馬鹿をやつてた時に、兄貴に道を正されたがどんなに頑張つても追い付けない。

離れて行く背中を見送り、大野は視線を地面に落とした。

入谷の部屋に招かれた三人を前に入谷は最後の一本となった煙草に火を付けると口を開いた。

「例の特別任務だが、まず話す事がある」

入谷は煙草から紫煙を吐き出すと続ける。

「今回の横須賀襲撃だが、ヘルファイア教団に関係がある」

「ヘルファイア教団？」

「そうか、椎名は聞くのが初めてだったな。ま、この機会だ。詳しく話してやる」

入谷は煙を肺一杯に吸い込み、灰を落とすと人差し指と中指で煙草を支えながら口を開いた。

「ヘルファイア教団はイギリスで発足した、言ってみりや秘密結社つて奴だ。教祖は自らをメイガス・デーモン（悪魔の魔法使い）と名乗っているが、本名はハワード・ダッシュウッドだ」「ダセエ名前を付けるな、そいつ」

桐生は苦笑して見せると入谷も鼻で笑った。

「奴は1863年に生まれた」

「……………何か年齢がおかしくありませんか？単純に計算して150歳以上じゃありませんか？」

「いや、あつて。奴は不老だ。ついでに言うと第二次大戦でヒトラーに加担していたのも奴だ」

「ヒトラーに加担した!？」

「間違いない情報だ。ヒトラーは魔術に精通していたという噂があるが、メイガスが魔術を行っていたという事実が歪曲し、今の噂となっただ」

「成る程……で、今回の件にどんな因果関係があるんだ？」

「教団の目的は神の復活だ。そしてその目的には二つの要素が必要らしい。一つは分からないが、もう一つはネクロノミコンを奪う事だ」

「ネクロノミコン？何だそりゃ？」

「1999年に南太平洋深海調査で発見された魔道書だ。言語はギリシャ語で読むのは容易だが、魔術に心得が無い人が読めば即座に変死する」

「変死……ですか？」

何処か怖がりながら呟く椎名に桐生は「怖いのか？」と笑いながら言う。

それに椎名は子供のように頬を膨らませ、「違いますよ」と呟いた。
「仲がいいな」

入谷は微笑むと灰皿に煙草を押し付けた。

「血を体から出し尽くして死に至る。その為、災厄の意味を込めてパンドラの箱と呼ばれている」

「それって……」

「防衛省地下の金庫にあるアレか？」

「ああ。そこにはもう一つ、ある物が安置されている」

「ある物？」

「核を越えた破壊兵器とだけ言っておく。この事態が最悪の方向に進めばその兵器が使われる。その機会を見計らって奴らはネクロノミコンと最悪の場合にその兵器を手に入れる可能性がある。お前ら二人には防衛省に張り付いてそれを阻止してもらいたい」

「つまり、この騒動はネクロノミコンを手に入れる陽動と考えて間違いないって事か……いいぜ、やってやんよ」

桐生は壁に寄り掛かりながら言うと、入谷はジェイクを見る。

「お前には極秘任務だ」

入谷は小さなメモ帳を手渡した。

「話は以上だ。頼んだぞ」

入谷の声に桐生達は足早に退室していく。

ドアが閉まったのを見て、入谷は嘆息を漏らし、懷から黙示録を取り出した。

（多数の地獄が地上に放たれた時、爪への扉が開かれん。さすれば地獄の恐怖に属するイスラエルの王、パンドラを手に入れる為に動かん。それを止めるは翼と希望、か……。全ては預言通りつて訳だな）

入谷は自嘲すると、吸うべき煙草が無くなった煙草の箱を握り潰した。

横須賀

横須賀市

ビルから黒煙が上がり、銃声と断末魔が聞こえてくる。

下には74式戦車と90式戦車の混成戦車隊と10式戦車の戦車隊が主砲でガグと新たに現れた巨人型アビス「イタカ」に攻撃を加えている。

多数の自衛隊員が89式小銃で近寄るグールに攻撃を加えていた。その上空を多数のUH-60JAが飛行する。

空が火事とナイトゴーストで赤黒く染まっている。

例えるならそこは戦場だ。

それも最悪の……

大野が搭乗するUH-60JAのその脇を99式空対空誘導弾「AAM-4」と04式空対空誘導弾「AAM-5」を装備した要撃戦闘機「F-15J」が通過していく。

ナイトゴーストの群れの中にAAM-4を撃ち込むと爆風に数体が吹き飛ばされる。

それに気付いたナイトゴーストは一斉にF-15Jに向かってきた。F-15Jはアフターバーナーを点火し、振り切ろうとするが、別方向から来たナイトゴーストがキャノピーに取り付き、それを叩き割ると中からパイロットを引きずり出すのが見える。

大野はSR-25を構え、パイロットを捕まえたナイトゴーストを狙撃しようとするが、それより早くナイトゴーストが上空に消える刹那、多数のナイトゴーストがこちらに向かってきた。

大野は素早くG18Cを構えると、ナイトゴーストに乱射する。

9mmパラベラム弾で張られた弾幕にナイトゴーストは次々と落とされるが目立った撃破という訳ではない。

「上空は危険だ！予定降下地点ではないが降下しろ」

ロープが下ろされ、大野は一番乗りに降下する。

目の前には大きな商店街があった。

大野がSR-25を構え、一步步み出たその時、上空から悲鳴が響き渡る。

上空を見上げたその時、多数のナイトゴントがヘリに突進していた。

ヘリのテイルローターに突進する様は特攻の一言だ。

機体を回転させながら落下してくるヘリを見た大野は急いで商店街の方に走ると同時にヘリが墜落し、大爆発を引き起こす。

大野が伏せてすぐにヘリのローターが頭上を通過していき、店舗に突き刺さった。

後ろを振り返ると爆発と墜落の衝撃で破壊されたヘリが地面に横たわり、炎を上げている。

傍らには墜落の巻き添えになったCATSの隊員の死体が転がっていた。

手や足が無いものはまだいい方で、殆ど肉の塊と化しているものさえある。

その時、目の前から軍靴の音が響き渡り、大野が顔を上げた。

見覚えのある隊員の顔に気付き、大野は立ち上がり、敬礼をする。

「大野一曹、また会ったな」

「鹿島一尉、お久しぶりっス!!」

鹿島は墜落したヘリの残骸を見て、「仲間が残念だったな」と呟いた。

「はい………」

「現状は最悪だ。即応連団は壊滅、特戦は辛うじて生き残っている。陸海空自衛隊は続々と増援として送り込まれているが、正直アビス相手に役には立たない」

「高射特科隊はどうなってるっスか？」

「現在こちらに向かっている。今の我々の任務は民間人の避難を助ける事だ」

「残っている民間人の数は？」

「千人以上の民間人が取り残されている」

「米軍はどうなってるっスか！？」

「もしかして、お前達の方が分かってるんじゃないか？」

「エセックス攻防戦の件か？」

「とにかく米軍は当てにするな」

「了解っス！」

大野が答えると、鹿島は商店街を引き返して行った。

車が通っていない高速道路を一台のバイクが走っていく。

自衛隊の偵察用オートバイ「ホンダ XLR250R」を駆り、ジエイクは夜の闇を突き抜けて行く。

着ているコートが風に靡き、一瞬ショルダーホルスターのガバメントが見えた。

そのガバメントを一瞥するとジエイクはバイクの速度を上げる。

この手で奴を殺せる日がやっと来た。

首を洗って待っていやがれ……………

防衛省地下金庫前に胡座で座っている桐生にブラックコーヒーを椎名が差し出した。

「おう。悪いな」

桐生はコーヒーを受け取るとプルタブを上げ、口を付ける。

何気なく椎名の缶を見ると「ホワイトチョコレートドリンク」と書かれていた。

「何だ？その珍妙な飲み物は？」

「新発売だそうです」

「一口くれないか？」

「えっ？いや、それは……………」

「貸しが沢山あるんだからいいだろ？」

（キスしてるし……………いい、よね？）

椎名はぎこちなく缶ジュースを手渡すと、それならと椎名は頬を紅潮させて呟く。

「私もブラックコーヒーを飲みたいです」

「じゃ、交換な」

桐生はブラックコーヒーを、椎名はチョコレートドリンクを手渡す。そしてそれぞれが口に運んだ。

「うっ！！」

（あつま！！）

（に、苦い！！）

正反対の味の両極端を味わい、二人は顔面をしかめた。

甘い物を飲んだ後に苦い物を飲んだら非常に苦く、苦い物を飲んだ後に甘い物を飲んだら非常に甘く感じるのは誰もが味わった事があるはずだ。

その甘い物ベスト１と苦い物の代表格を味わった二人は素早く自らの飲み物を掴み、一気に飲み干した。

「味覚が死ぬかと思いましたよ」

「同じく……………」

それぞれが言くと、二人は腹を抱えて笑った。

「俺達、不謹慎だな」

「そうですね」

椎名が言うのを聞いてから、桐生はコーヒーを一気に飲み干すと小さく呟いた。

「大野の奴、大丈夫かな？」

「・・・心配ですね」

「入谷の予測が外れていたら、最悪だな」

桐生は小さく呟くと雷電に初弾を装填した。

ディストラクション

横須賀市

凄まじい銃声と悲鳴、硝煙と死臭が混じり合う、元の活気ある町とは思えない状態だ。

その町の中を大野は鹿島の後ろを付いて行くと鹿島はハンドシグナルで止まれと合図を行う。

地響きと轟音が響き渡り、鹿島達が銃を構えたその時、巨大な人間の輪郭をし、緑色に燃える目が隊員達の目に止まった。

巨人は焼死体を捻曲げたようなグロテスクな外見で、その緑色の目でこちらを捉える。

「コイツは何スカ!？」

「イタカだ!!後退だ!!」

鹿島は89式小銃の引き金を引きながら後退すると、隊員達も後退する。

二十メートルはあろうかという巨大なイタカはゆっくりと向かってきた。

初めて対峙する化け物達に特戦隊員は弾幕を張りながら後退するが、その顔には恐怖が滲み出ている。

イタカは長い足で迫ると腕で薙ぎ払った。

鹿島と大野は反射的に屈んだが、他の隊員はその強靱な腕でバラバラに粉碎され、周囲に内臓や骨、血が飛び散る。

その肉片を掴むと、イタカはそれを食った。

口を開けて食べ物を食べるあの不快な音が周囲に響き渡り、鹿島は06式小銃擲弾を装着する。

「この化け物が!!」

鹿島は怒鳴りながら擲弾を発射した。

擲弾はイタカの胸部に直撃し、爆発するが、イタカは動じている様

子が無い。

イタカが両手を握り、それを振り上げた瞬間、二発の銃声が轟き、イタカの目を7.62mm NATO弾が撃ち貫く。

鹿島が驚いて後ろを見ると、大野が銃口から煙を立ち上らせるSR-25を構えて立っていた。

「CATSで一番の狙撃手をナメないでほしいっス」

大野が大声で言った瞬間、視力を失ったイタカが暴れだし、住宅を破壊していく。

「って……アレ？」

「さつきより酷くなつてないか!？」

鹿島は弾倉を交換しながら怒鳴ると、轟音とともに重MATがイタカの後頭部を粉碎した。

イタカの暴走に全速力で後退していた二人は同時に歩みを止めて後ろを振り返る。

細胞破壊により消滅していくイタカの死体のすぐ後ろには、先程の重MATを放った89式装甲戦闘車が停車していた。

その上部ハッチが開くと隊員が顔を覗かせる。

「早く乗るんだ!」

それを聞いた二人は急いで駆け寄った。

「助かった!」

鹿島が口を開くと、WAC（女性陸上自衛官）が後部の扉を開いて出てきた。

糸目でありながら愛嬌のある顔でショートヘアの髪がよく似合っている。

「ん？あれ？スミちゃんの部下の人じゃない？」

WACは大野の顔をまじまじと眺めながら呟く。

「そ、そうっス！自分は大野賢治一等特曹っス!」

大野が敬礼をすると、WACは「あはっ！馬鹿真面目だね」と言い笑って見せた。

「私は隠岐沙耶華准陸尉ね。昔は未知生物処理隊で入谷君やスミち

やんと一緒に働いてたけど今は特戦で働いてるの」

隠岐は屈託の無い笑みで笑うとM4A1を掴みながら89式装甲戦闘車に入り、大野と鹿島も背中合わせの椅子に座った。

同時に後部ハッチが閉められ、戦闘車は前進する。

「いつかはこうなると思ってたんだよね」

隠岐は頬を緩ませながら小さく呟くと、鹿島が「何が？」と問い掛ける。

隠岐は柔らかい笑みを浮かべると口を開いた。

「パニックを起こさない為にアビスを民間人や一般自衛官に教えな」といつかこんな事になるんじゃないかなってさ。だって、いざ都市部に現れたらこうなるの分かってたじゃない」

確かに、状況が分からない民間人はパニック、いきなりの有事と政府の発表に自衛隊の情報系統は麻痺。

その現状が今だ。

「そんな思想を持つてたら危険思想扱いだよ。参っちゃうよね」

隠岐はへらへら笑ったその時、操縦士が叫んだ。

「正面、グール多数！！」

「強行突破だ！！」

隊員が叫ぶと、エリコンKDE35mm機関砲が火を噴く。

重く響き渡る銃声が響き渡り、正面のグールを吹き飛ばしていった。最高時速70キロの戦闘車はグールを跳ね飛ばしていく。

グールの破片が周囲に飛び散り、無理矢理、強行突破を謀った。

その群れの中を突破すると、多数のグールが迫ってくる。

隠岐は椅子の上のハッチを開けると身を乗り出す。

「全く……メリーちゃんには困ったわね。ちゃんとグールを躰なきやね」

隠岐は笑みを浮かべるとフォアグリップを握り、M4A1の引き金を引いた。

機銃掃射を行い、グールの足を射ぬいていくと、すぐ後ろのビルが倒壊し、周囲に土煙が巻き上がる。

「けほっ……何よ」

隠岐が苛立ちながら呟くと、その倒壊したビルの中から巨大なクトーニアン「シャッドメル」が顔を出した。

シャッドメルは頭部の触手を動かし、89式装甲戦闘車のキャタピラに一撃を叩き込んだ。

その衝撃に耐え切れず、89式装甲戦闘車は地面を滑りながら停車した。

「エンジン損傷！！走行不能です！！」

「車外に出ろ！！」

鹿島は叫び、後部ハッチを開け、鹿島、大野、隠岐が飛び出した。

同時に大量の溶解液が89式装甲戦闘車に吐きかけられる。

戦闘車を覆う程の大量に溶解液は白煙を噴出しながら戦闘車と隊員達を溶かしていく。

絶叫と溶解の独特の音が響き渡り、三人は思わず後ろを振り返った。黄色い溶解液を浴びた隊員達の皮膚は溶け、筋組織が剥き出し、それが溶け出すと骨まで溶解が始まる。

「車に！早く！！」

鹿島は急いで乗用車に乗り、二人の目の前に停車した。

二人も急いで飛び乗ると、鹿島はアクセルを踏み込んだ。

同時にシャッドメルから溶解液が放たれる。

それより早く車は走り出し、溶解液は地面を溶かした。

「危なかった……」

「これからどうするっスか？」

「万が一の場合は中央病院に集結し、再編成を行う予定だ」

鹿島はそういうと病院に車を走らせていった。

爪

A B T h 対策会議室

米軍の旧式偵察衛星から送られてくるモノクロの映像が映し出されているスクリーン。

スクリーンには横須賀の惨状が映し出され、防衛省長官や警察庁長官、内閣総理大臣等の錚々たるメンバーがそれを眺める。

「現状は？」

「C R F、S、Xの隊員、及び陸海空自衛隊がこれに出動していますが、芳しくないようです」

防衛省長官が答えると、内閣総理大臣は嘆息を漏らした。

「今までアビス事件を隠し通してきたというのに…….これではまた支持率が…….いや、私の信用を失う事になる」

(だから坊ちゃん…….)

防衛省長官は内心呟いた。

国と国民の為ではなく、自分の身の上しか案じない国のトップ。

そして、それを正そうとしない周りの側近共。

自力でここまで来た防衛省長官にとってはこのように権力に縋り付こうとする奴はヘドが出る程の嫌悪の対象だった。

「防衛省長官、これからの対応はどうするかね？」

「現在、壊滅した部隊の生き残りを再編成し、S A Tと協同で反攻に当たらせる予定です。ですが、仮にそれに失敗した場合は部隊を下がらせて…….」

「三つある『最後の爪』を使うしかないだろうな…….」

最後の爪…….

入谷が語った防衛省地下にある核を越える破壊兵器。それで横須賀を破壊するというのだ。

「警察庁長官、S A Tはどうなっている？」

「現在、ベル412EPで現地に向かっています」
警察庁長官の声を聞き、防衛省長官は腕時計を見た。
……………それでは私も作戦を開始しよう。

防衛省前

17:34

黒い車に黒いスーツ、サングラスの男達がアタッシュケースを掴み、防衛省に向かって行く。

その時、銃声が鳴り響き、男達の体が吹き飛ばされた。

「敵、沈黙」

野太い声と同時に路地の中から黒いローブを着た者が駆け寄ってきた。

手にはAK-47やUZIを持っている。

彼らは殺害した男達からメモ用紙を取り出し、不敵な笑みを見せた。

「神の力、我らの手に!!」

ドラグノフ狙撃銃「SVD」を持った男が叫んだ瞬間、ローブの者達が一斉に雄叫びを上げた。

彼らは何か神の名前を口にしながらなだれ込むと、エレベーターに駆け寄る。

ローブの男が地下のエレベーターを見ると操作パネルが破壊されているのに気付いた。

刹那、階段から銃声が轟き、そのローブの男が射殺される。

「入谷の予測通りって訳か」

桐生はニツと笑い、XM8A1「日向」を突き付ける。

「なあ？キャプテン・ソロモン？」

ソロモンはロープを脱ぐと鋭い眼光を桐生と改造ステアーTMP「雄琴」を構えた椎名に向けた。

「久しぶりだな、ルテナント・キリュウ、シイナ」

「エセックスで死んだはずのあんたが、噂に聞く変態教団の側にいていたとは………驚いたよ」

「私はただ有利な方につくだけだ」

「………最低ですね」

椎名は小さく呟くと、雄琴に初弾を装填した。

そして、桐生の横に並んだ。

桐生は椎名を一瞥すると、初弾を装填しつつ、口を開いた。

「で、何だあ？軍隊でも抱えなのか？何処のテロリストだよ。AKにUZI、SVDと来た。そこにトカレフかマカロフが来たら完璧だぜ？」

桐生が言った瞬間、ソロモンはマカロフPMを構え、弾丸を放った。それを見越していた桐生は体を逸らし、それを避ける。

「この事か？」

「危ないなあ………笑えねえぜ？」

「そこを通せ。そうすれば命だけは助けてやる」

「お断りですね」

「同感だ」

椎名の答えに桐生が同意すると、ソロモンは笑みを浮かべた。

「分かっていた！」

ソロモンが叫ぶとロープの者達が一斉に銃を構え、引き金を引いた。しかし、それより早く、椎名が防火シャッターを下ろす。

弾丸は防火シャッターに阻まれ、火花を散らした。

「二人で何が出来る？降伏すればわざわざ死ぬ必要が無いものを………」

ソロモンは不適な笑みを浮かべるとほくそ笑んだ。

目の前で金属の独特の音が響き渡るシャッターを見つつ、桐生は口を開いた。

「奴ら、どんな事をしてくると思うよ？」

「C4で爆破でもしますかね？」

「やるかもな」

桐生はニツと笑うと、階段を下りる。

後ろを振り返ると椎名を一瞥した。

「こつちもやろうぜ？ブービー（まぬけ）へのプレゼントを、さ？」

「了解です！」

数分後、ソロモンはC4を仕掛け終えて、信管を起爆した。

凄まじい爆風にシャッターはいびつに曲がり、巨大な穴を開ける。

「行け！」

ソロモンの声に教団信者は口々に神の名前を口にし、シャッターをくぐる。

そして階段の手摺りに手を掛けた瞬間、信者は体を小刻みに震わせ絶叫した。

様子から察するに高圧電流が流されている。

「小賢しい真似を……」

ソロモンが小さく呟いたその時、奥で凄まじい爆発が巻き起こった。ブービートラップの一種だろう。

扉を開けたら手榴弾が落ちるタイプだ。

成る程、どうして知恵が働く。

素人で、ましてや前しか見えない者にはブービートラップが効果的か。

ソロモンが遠くから聞こえる銃声や爆音に耳を傾けていたその時、空間から女性が実体化するように現れた。

血のように濃い深紅の髪をツインテールに纏め、端麗な顔を無表情に変えているその女性の首には銀色の鍵が掛けられている。

「何を・・・して・・・いるの？」

途切れ途切れに問い掛ける女性を一瞥し、ソロモンは答える。

「あんたらの教祖様の手伝いだ」

「なら・・・いい・・・もし・・・裏切る・・・なら・・・殺す」

そう言うと、女性は八重歯を見せ、ニヤリと笑った。

あくまでよそ者、信用はしていないという訳か・・・

「俺は裏切らんよ、フェアリ。それで何しにきた？」

「教祖様の・・・命令で・・・お前を・・・監視・・・しろと・・・言われた」

「成る程な・・・」

フェアリを一瞥し、ソロモンは葉巻を掴んだ。

「それと・・・『扉』を・・・開けて・・・いいと・・・言われている」

「虚数次元か・・・厄介者のルテナント・キリュウを殺す為に特殊生物殲滅隊基地に虚数次元を開いたが・・・何故そんなに奴の抹殺にこだわる？」

「教祖様の・・・命令に・・・従うと・・・契約・・・したから・・・教祖様が・・・それを・・・望むなら・・・それを・・・実行・・・する・・・だけ・・・」

フェアリは途切れ途切れに言葉を繋いだ。

桐生の抹殺・・・

抹殺する位なら仲間にすれば良いものを・・・

「私が・・・出る？」

「任せる」

ソロモンの声を聞き、フェアリは再び姿を消した。
それは肯定か否定かは分からなかったが、ソロモンは傍観を決め込
んだ。

生き残り

横須賀市中央病院

同時刻

鹿島が運転する車が中央病院の中に入っていく。

中央病院の駐車場には損傷を免れた10式戦車や90式戦車、96装輪装甲車等の兵器が駐車している。

また、病院に収容仕切れない負傷者の為に設営された自衛隊のテントやアンビュランスが駐車していた。

大半の犠牲者は民間人と陸海空自衛隊であり、先程の携帯無線からの通達によれば飛行型アビスの殲滅を行っていたイージス艦「あたご」が数体のイタカの襲撃に逢い、大破したとの情報が入っている。その収容人数を考えれば相当な被害だろう。

さらに行方不明者の大半はグルやガグ、ナイトゴント、イタカの餌食になったか、シャッドメルに溶かされたと考えるのが妥当で、生きている可能性は極めて低い。

唯一、襲撃を受けていない中央病院の周辺が安全地帯なのだが、それは果たして見逃しているだけなのか、または最後に一度に殲滅する為なのかは分からない。

ただ言えるのは、今ここが安全地帯だという事だけだ。

鹿島が車から下りると、自衛官が駆け寄ってきた。

市街戦用迷彩服と特殊作戦き章を付けている所を見ると、特殊作戦群の隊員で曹長の襟章から察するに鹿島の部下だろう。

「鹿島一尉、ご無事で何よりです。無線に応答が無かったので、つきり……………」

「確かに生きてる」

「生き残りは？」

「……………後ろの隠岐とXの大野一曹だけだ。他は死んだ……………」

・・・」

「そうですか」

隊員は小声で呟くと、レポート用紙を手渡す。

「現在の状況です。自衛隊の戦力は当初の約35パーセントまで消耗、人口の約95パーセントは避難に成功しましたが、残りの約5パーセントは行方不明、または死亡です」

「増援は？」

「先程、増援のSAT（特殊強襲部隊）が到着しました。高射特科隊や野戦特科隊もすぐに到着の予定です」

「分かった」

鹿島は車内から出ると、大野、隠岐も武器を掴み車内から出てきた。

「案外、悲惨な状況ね。これじゃ、玉砕するのも仕方ないかもね」

隠岐は他人事のようにヘラヘラ笑うとM4A1を肩に担いだ。

そんな隠岐を一瞥しつつ、大野は病院の天井を見上げた。

黒く長い銃口を見付け、大野は眉を潜める。

「バレットM82？」

「はい。ですが、狙撃手がいなくて……………」

「まだ使えるっスか？」

「ええ。整備も終わってますし、弾薬も充分です」

「そうっスか」

大野は囁くように言うと、歩いて行く。

その時、修羅場でスピーカー越しに聞いた懐かしい声が聞こえてきた。

「アパッチくらい出せるでしょう！？CATSに三機も配備されるんですよ！！せめてコブラの一機でも……………制空権を確保出来るまでヘリを出せない！？」

無線に叫んでいる小西を見て、隠岐は嬉しそうに「ゆっちゃん！！」と叫び、小西に抱き着いた。

驚きのあまり、小西は無線を取り落として隠岐を見る。

「隠岐陸曹長？」

「今は階級が上だよ？小西一尉」

隠岐は微笑みを浮かべて、じゃれつくと小西の頭を叩く。

「お二人の関係って、どうなってるっスか？」

「未知生物処理隊の第17遊撃殲滅隊の元メンバーだよ。勿論、スミちゃんや入谷君も同じ部隊ね。彼は元ヘリ隊のパイロットだよ」

「改めて小西勇作です」

小西は敬礼をすると、大野も敬礼を返す。

「霞三佐もヘリの操縦出来るっスよね？」

「スミちゃんは特別！スミちゃんはサヴァン症候群らしくて、一回読んだ物や説明された事、行った物を完璧にマスターしちゃうんだよね」

「サヴァン症候群？」

「ごく特定の分野に常人には及びもつかない能力を発揮する人の症状よ。知的障害や自閉症が伴う事が多いけどスミちゃんはその例には当て嵌まらないんだけどね」

隠岐はのほほんと笑うと、鹿島達が病院中に入って行くのが見えた。大野はその背中を追いかけて、病院の中に掛けて行く。

夜まではあと二時間……

策謀

防衛省地下

17:41

教団信者は異常だ。

通常、ブービートラップは進行を遅らせ、相手を疑心暗鬼に陥れる為の物である。

つまり、最初のトラップに敵が引っ掛かれば、その時点で敵はトラップを警戒し、慎重に行動を行う。

しかし、奴らはトラップを気にせず、ただ猪突猛進に向かってくる。弾丸をばらまき、意思が無いように突進し、神の名前を叫び……

桐生はそんな信者を見て、舌打ちをし、XM8A1「日向」の軽機関銃型を乱射した。

狭い室内に放たれる軽機関銃の弾丸は単に向かってくる信者を薙ぎ倒すには最適だ。

「弾倉を交換する。椎名、援護を！！」

「了解です」

桐生が壁に隠れると、代わりに椎名が射撃を行う。

椎名は改造TMPで指切りを行いながら信者を撃ち倒していく。

桐生が初弾を装填し、体を壁から出すと日向を構え、弾丸をばらまいた。

「敵、残り5、4、3、2、ラスト！！」

桐生の日向のマズルフラッシュが止んだ。

同時に弾倉を装填した椎名が壁から様子を伺った。

呆気ない程に全滅した信者を見て、桐生は眉を潜める。

「ソロモンの野郎は？」

「ここにいるぞ、ルテナント」

時空からソロモンとフェアリが現れ、二丁のマカロフPMが二人に突き付けられる。

「武器を捨てろ」

その声に桐生と椎名は武器を地面に置いた。

「ルテナント・キリユウ、デリンジャーを捨てろ」

「・・・・・・ハア・・・・・・分かったよ」

桐生は裾から霧積を取り落とすと、ソロモンを一瞥する。

「女を侍らせて、軍人らしくないな、キャプテン？」

「貴様に言われたくない言葉だ」

「お生憎様、俺は軍人じゃないんでね」

桐生が笑ったその時、後頭部に重い一撃が叩き込まれ、桐生は力無く倒れる。

「桐生さん!!」

椎名は倒れた桐生に駆け寄り、体を抱き起こした。

「ふん、他愛もない」

ソロモンは二人を一瞥すると、金庫を操作するパネルに歩み寄り、先程の男達から奪ったメモを手に取り、番号を入力していく。

最後の一行を入力し、エンターを押すと、エラーの文字が踊った。

「何だと!？」

（はい、残念）

「この声は・・・・・・」

「入谷さん!？」

（お前達の考えている事が手に取るようだ。説明してやる。よく聞けよ？）

入谷の声に、ソロモンは歯をギリと鳴らした。

（お前達が欲しがっていたネクロノミコンは中にあるが、ネイルアンカーは三つのうち、一つは既に運び出されてるんだよ!）

放送室のマイクから一度口を離すと、煙草を唇で挟んだ。

「しかもお前達が殺した黒ずくめの男、あれは死刑囚なんだよ。まんまとおびき出されたお前達は、馬鹿なんだよ！」

入谷は言い放つとマイクのスイッチを切った。

爪……ネイルアンカーは無事だったが、奴らが心配だ。

ネイルアンカーはC4同様の安定性を持ちながら、拳程の大きさで半径500メートルの全てを完全に破壊する。

また、原爆の核分裂や水爆の核融合が起きない為、放射能が発生しない。

憲法に違反する核を越えた破壊兵器をカルト教団に渡さなくて済んだが、奴らも渡す訳にはいかない。

入谷はMK・23を構えると、放送室を飛び出した。

躍らされたか……

ソロモンはメモを握り潰し、舌打ちをする。

それを横で見ていたフェアリは目を細め、倒れている桐生とこちらを睨んでいる椎名を見た。

霧積と雷電が無い事に気付いたフェアリがソロモンにそれを伝えようとしたり刹那、桐生が体を起こし、フェアリに霧積を、ソロモンに雷電を向ける。

「お返しだ」

桐生は怒鳴ると引き金を引いた。

9mmパラベラム弾と357マグナム弾が二人を弾き飛ばす。

フェアリの体から弾が透過し、ソロモンはロープの下に着ていた防

弾チヨツキに助けられたが、二発の9mmパラベラム弾によって、肋骨が折れる。

「サノバビッチー!!」

ソロモンは怒鳴り、胸を押さえると、フェアリが駆け寄った。

「大・・・丈夫・・・?」

「ああ」

「一旦・・・逃げ・・・る・・・教祖・・・様の・・・命令・・・だから・・・」

「チツ」

ソロモンは舌打ちすると、彼の前にフェアリが歩み出た。

そして首に掛けていた銀の鍵を掴むと、鍵を開けるように回す。

その時、隊員宿舎で見たように空間が脈動を初め、虚数次元が開いた。

「まさか・・・あれもお前が!？」

桐生の問い掛けを無視し、フェアリとソロモンの姿は掻き消え、フェアリの声がか細く響いた。

「餌に・・・なれ・・・」

同時に虚数次元から悪臭を放つ青い膿汁を滴らせ、注射針のような長い舌を持った四足獣が飛び出してきた。

毛の無い大型の猟犬に酷似したそのアビスは唸り声を漏らす。

桐生と椎名は拳銃を構えると、アビスに引き金を向けた。

一斉に放たれた9mmパラベラム弾がアビスに放たれるが、アビスは壁の角に消える。

「何だ、コイツは!？」

桐生が怒鳴るとその桐生の後ろの角からアビスが飛び出てきた。

桐生が気付くより早く、アビスが涎を垂らし、飛び掛かってくる。

その時、銃声が轟き、アビスの横を45ACP弾が掠め、再びアビスが角の中に消えた。

「早く来い!!」

入谷は視線を動かしながら怒鳴る。

死角を作らないように慎重に動く入谷に二人は駆け寄った。

「あの化物は何なんだ？壁の中に消えたり……」

「ティンダロスの猟犬、とでも言おうか？奴は鋭角の中からこちらに干渉する」

「という事は、鋭角がある限り現れるという事ですか！？」

「そういう事だ。ホールまで逃げるぞ！」

入谷は何時になく全力で駆け出し、二人もそれに続いていった。

ティンダロス・ハウンド

広いホールに飛び出した三人は周囲を見渡した。

「鋭角から出てくるって反則すぎやしねえか!？」

桐生は右手に鬼首、左手に雷電を持ちながら怒鳴る。

同時に右後ろの壁の角から獵犬が飛び出してきた。

獵犬は桐生に駆け寄ると、飛び掛かってくる。

桐生は刀を振るい、獵犬を切り付けるが、獵犬は素早く頭の上を飛び越えた。

三人はその後ろに弾丸を撃ち込むが、それより早く獵犬は壁の中に消える。

「どっから来る!？」

「奴は鋭角があれば何処からでも現れる。つまり、小さなガラス片があってもアウトだ」

椎名は弾倉を交換し、もしかしてと足元を見た。

刹那、弾倉の角から質量を無視して獵犬が飛び出してくる。

獵犬は桐生にのしかかり、注射針のような舌を動かす。

腐臭に近い匂いが桐生の鼻をついた。

吐き気を催す程の腐臭に顔を歪め、霧積を押し付ける。

しかし、鈍い音が響き渡った。

フェアリに使っていた事を思い出し、桐生は舌打ちをする。

そうこうしているうちに、舌が突き出され、ほぼ条件反射的にそれを避けた。

入谷はMK・23を水平に構え、連射するがそれより早く、獵犬は弾倉の中に飛び込んで行く。

「お前を狙ってるな」

入谷は弾倉を交換しながら呟くと、桐生は自嘲しつつ「笑えねえ」と呟く。

「しかし、このままでは全滅ですよ?」

「分かってるが、手の出しようがねえぜ？」

「全く……虚数次元が発生の理由が分かったと思ったらこれだよ」

入谷は周囲から響く唸り声を聞きながら、MK・23を構える。

どこから来るか分からない敵程、恐ろしい物は無い。

刹那、天井の照明から飛び出してきた。

三人は素早く飛び退き、弾倉の中に消える。

桐生は何か分かったような笑みを見せると「離れてくれ」と呟いた。それを聞き桐生の側から二人が離れ、それを確認した桐生は鬼首を一度正眼に構える。

右足を引き、体を右斜めに向け、鬼首を右脇取って剣先を後ろに向けた。

所謂、脇構えだ。

桐生は深く息を吸い込み、気持ちを落ち着かせ、目をゆっくり閉じる。

（来やがれ！！）

目をカッと開かせた瞬間、桐生の死角から猟犬が飛び出してきた。涎を撒き散らし、駆けてくる。

微動だにしない桐生の背中に猟犬が飛び掛かった瞬間、鬼首が火花を上げた。

地面に緋色の刃が擦れ、それによって舞い上がった火花が弧を描く。桐生は地面に刀を擦りながら、回転した。

舞い上がった火花と共に、桐生は後ろを振り返り、回転の勢いを利用して、気合いもともと猟犬を一閃する。

緋色の刃は猟犬の口を横に切り裂き、そのまま体に食い込んで行く。「斬れる！！」

桐生は怒鳴ると柄を強く握り、一步步み出た。

力一杯に振り切ると両断された猟犬が空中に舞う。

粘液質の塊が落ちる音が周囲に響き渡り、消滅していく猟犬を一瞥し、桐生は下に粘液質の物体を刀から払った。

「大丈夫か？」

「おう！」

桐生は刀を鞘に仕舞うと椎名は眉を潜めた。

「何故、後ろから来ると分かったんですか？」

「奴は必ず死角から現れた。下を向いている時は上から、正面を向いている時は後ろから……. だったら、直前でぶつた切ればいい」

桐生はニツと笑うと、入谷は腕を組んだ。

「よし、お前達は今から横須賀に飛んでもらう。あつちは人手不足らしいからな。ヘリは霞が担当する」

「了解だ。行くぜ、椎名」

「了解です」

桐生と椎名の背中を見送り、入谷は消滅していく狽犬を見た。

今回は収穫だった…….

これで核心が持てる。

桐生の刀に纏わる伝説も、年に数回開くか開かないか程度の発生率の虚数次元が多発していたのも…….

リスクは高かったが、結果は上々だ。

あとは頼むぜ、ジェイク・サイファー。

メイガス

18:29

人通りの無い森の中を走り抜けたジェイクは古い教会の前にバイクを止めた。

古びた教会は幽霊屋敷のように静かで不気味だ。

ジェイクはM1911A1の薬室に初弾を送り込み、目を閉じた。

入谷が渡したメモに書かれた教祖の隠れ家。

そこがここだ……

ジェイクはコートをなびかせると教会の扉まで歩み寄った。

中からはミサを行っている声が聞こえる。

ジェイクはグリップを強く握ると、扉を蹴り開けた。

同時に黒いローブを着た信者達が目に入り、ジェイクはガバメントで次々殺害していく。

最後の一発を祭壇の前に立っていた男に撃とうとした瞬間、その男の指先から放たれた水が頬を掠め、傷を付けた。

「……超高压水か」

音速の二倍、水道水の千倍の水圧で放たれる水はあらゆる物を切断する。

それが手から放てるという事は……

「……貴様がメイガスか？」

ローブの男はフードを脱ぐと、不敵な笑みを浮かべた。

左目には首まで伸びる大きな傷があり、頭には髪が無い。

「だしたら、どうする？」

「決まっているだろう？」

ジェイクはガバメントに新しい弾倉を装填すると、素早く引き金を引いた。

45ACP弾はメイガスに向かうが、メイガスは高压水で全て撃ち

落とす。

「私には全て見えているのだよ。貴様の攻撃も、人類の未来もな！」

メイガスは哄笑すると、目をカツと見開く。

ジェイクは歯ぎしりすると、メイガスに銃を突き付けたまま問い掛ける。

「一つ聞く。何故、俺の母親を殺した？」

「簡単だよ。神の生贄に成り切れず、体が崩壊したんだよ。つまりは自滅だ」

「黙れ！お前達はこの世に必要な無い存在だ！」

「それはどうかな？」

メイガスは鼻で笑うと、演技掛かった声で言う。

「君は、君達がアビスと呼称する存在の正体を知っているかな？」

「………知るか！」

「未来の地球の生き物だよ。神が復活し、地球を支配した世界のもの……」

「………なんだと！？」

「虚数次元は未来と今を繋ぐ扉だ。神の復活は必然。貴様ら矮小な物が足掻いた所で未来は変わらない！」

メイガスは引き攣った笑みを浮かべると狂ったように笑い出した。

それを見たジェイクは舌打ちをし、「ふざけるな！」と怒鳴り、引き金を引く。

しかし、弾丸はメイガスの作った水の壁に阻まれた。

「学者しない馬鹿が！」

メイガスが叫んだ瞬間、ジェイクは左手に鎌鼬を纏い、その水の壁に突き出した。

左手が突き刺さった部分の水の壁が剥がれ、大きな穴が開く。

ジェイクはその穴に弾丸を撃ち込んだ。

メイガスの腹部に次々と45ACP弾が撃ち込まれてメイガスがよろめき、後ろに退いた瞬間、とどめと言わんばかりに強烈な回し蹴

りがメイガスに叩き込まれる。

回し蹴りを叩き込まれたメイガスは祭壇に叩き付けられ、そのまま地面に血を流しながら目を閉じた。

「………終わった」

ジェイクが肩の力を抜いた瞬間、右肩に激痛が走り、後ろに弾け飛んだ。

床を転がり、壁に叩き付けられた瞬間、立ち上がるメイガスが目に映った。

「甘いな。私は不老不死、たかが弾丸で死ぬと思っていたか？」

「………くそ」

取り落としたガバメントを見て舌打ちをする。

右肩の神経が集中する部位を攻撃され、指を動かすだけで酷い激痛が腕を襲う。

これでは魔術を使う事はおろか、拳銃すら持てない。

「愚かな男だ。母親の敵討ちなどつまらない事を考えなければしななかつたものを………」

メイガスは歩み寄り、ジェイクの頭を踏み付けながら呟く。

その時、バイクの音とともに銃声が轟いた。

メイガスは放たれた弾丸に体を揉まれ、同時に突入してきたバイクに跳ね飛ばされる。

バイクから下りた運転手はヘルメットを脱ぐと、愛銃のSIG P226のストライクガン仕様を構えた。

「霞………か？」

「ああ、大丈夫か？」

霞はSIG P226をメイガスに向けつつ、ジェイクを一瞥する。刹那、凄まじい速度で水が放たれた。

霞は素早く避けるが肩に水が掠り、鮮血が飛び散る。

「何者だ！？」

「貴様に教える必要は無いはずだ、そうだろ？」

霞はいつもの男勝りな口調で言い放つとメイガスに駆け寄った。

「馬鹿が！」

メイガスがレーザーのように細長い水を放つと、教会の椅子に隠れる。

霞のSIG P226 CUSTOMはストライクガン仕様の文字通り、スパイクのようなマズルガードやハンマーカバーを施されている銃であり、近距離戦で使用されて真価を発揮するのだ。

ましてや、下手に遠くから撃つても不意打ちでない限り防がれるのがオチだ。

霞は椅子から飛び出すと、一気にメイガスに駆け寄った。

メイガスとの距離は約二メートル。

やれる！！

霞はメイガスに拳銃を向け、弾丸を放った。

右腕を抜ける9mmパラベラム弾にメイガスが表情を歪めた瞬間、続けて左の脇腹を抜ける。

三発目の弾丸が放たれようとしたその時、足元から水柱が噴水のよ

うに噴き上がり、霞を吹き飛ばした。

「小癪な劣等種が！」

メイガスは霞を見下ろし、人差し指を向ける。

その時、メイガスの傍らに半透明のフェアリが現れた。

「教祖・・・様・・・目的の・・・物が・・・手に・・・入り・・・ました」

「そうか。よくやった」

フェアリが再び透明になったのを見て、メイガスは鼻で笑った。

「貴様を殺さなくても目的に支障は無い」

メイガスは哄笑すると何処かへと歩いて行った。

「待て！！」

霞はSIG P226を構えながら叫ぶがそこに姿は無かった。

「逃がしたか・・・」

霞は舌打ちをし、銃をホルスターに仕舞い、ジェイクを見る。

しかし、そこにジェイクの姿は無かった。

「ジエイク？」

霞は誰もいない教会で小さく呟いた。

背水の陣

横須賀市

19:11

高射特化隊の車両が到着して、約三十分が経過した頃、現場がとにかくに慌ただしくなった。

「敵襲！！十一時の方向、グール襲来！！」

偵察隊員の声が聞こえると同時に病院の非常ベルが鳴り響いた。

鹿島は89式小銃を掴み、病院から飛び出す。

戦闘配置の声に全員が武器を持つ。

病院の門を閉じ、全隊員が銃を構えた瞬間、門を飛び越え、メリフィリアが中に入ってきた。

メリフィリアは手近な隊員の首をへし折ると、隣にいた隊員の顔面に回し蹴りを叩き込んで殺害する。

「さあ、誰が相手かしら？」

メリフィリアが飛んでくる弾丸を人間離れた動態視力と瞬発力で避けながら中を駆け抜けると、不意のスライディングに足を取られて倒れる。

メリフィリアが素早く受け身を取るとその相手を見た。

「お久しぶりだね、メリーちゃん」

「隠岐？」

「あら？老けて誰だか分からなかった？」

「・・・・・・・・」

「無言の肯定？失礼するわね。体術を教えたのは私なのにな」

隠岐がへらへら笑った瞬間、メリフィリアは正拳を突き出した。

隠岐は片手でそれを受け止めると体をメリフィリアに寄せる。

「甘いし、遅いわね。修業が足りないわよ」

そう言うと、隠岐はメリフィリアの顎にアッパーカットを叩き込んだ。

隠岐はともかく、この状況はヤバイ。

89式小銃で飛び越えてくるグールを射殺していると、上空から多数のナイトゴントが接近してきているのが見えた。

81式短距離地对空誘導弾「短SAM」と93式近距離地对空誘導弾「近SAM」からミサイルが放たれ、87式自走高射機関砲がエリコンKDA35mm機関砲でナイトゴントを攻撃し、なんとか食い止めているがいつまで持つかわからないのが現状だ。

戦闘機も送り込めないのが現状だが、SATのヘリは敵の少ないエリアを通った為襲われなかった。

しかし、現状でのヘリの救援も増援も有り得ない。

「背水の陣、か」

鹿島が小さく呟いたその時、石垣が崩れる音が響き渡った。

鹿島は音のする方に89式小銃を構えると、ガグが石垣を破壊しているのが目に入り、ガグに89式小銃を向ける。

同時に近くにいた隊員を掴み、垂直な口に放り込み、かみ碎いた。

「畜生め！！うおおっ！！」

鹿島は89式小銃を乱射しながらガグに突っ込んでいく。

ガグは横に突き出した瞳を動かすと不気味な唸り声を漏らした。

「喰らえ！化け物！！」

鹿島が怒鳴ったその時、89式小銃が弾切れを引き起こした。

その弾倉を交換しようとした瞬間、ガグの四つの手に体を掴まれる。

垂直な口が開き、涎が糸を引いたその時、ガグの片腕が吹き飛び、

鹿島は地面に落ちた。

急いで離れると病院の屋上を一瞥し、笑みを浮かべる。

「大野一曹か……」

再び放たれた弾丸が、ガグの瞳を撃ち抜いた瞬間、鹿島は手榴弾のピンを引き抜いた。

「これでも喰らってろ!!」

鹿島は手榴弾をガグの口に放り込んだ。

凄まじい爆発がガグの頭を粉碎し、鹿島は89式小銃を掴み、弾倉を交換した。

横須賀付近までチヌークで輸送した軽装甲機動車を運転する桐生は入谷から離された計画を思い出していた。

横須賀消滅作戦。

核を越える破壊兵器「ネイルアンカー」でアビスもろとも横須賀を消し去る焦土作戦だ。

作戦開始時刻は二二〇〇時。

無線で伝えるにも混線している為、直接伝えて退却する。それが今の任務だ。

桐生は小さく「笑えねえ」と呟くと、椎名を一瞥した。

「正面を突破する。頼むぜ、相棒!」

「了解です」

椎名はMINIMI軽機関銃を掴むと天井を開けた。目の前には多数のゲール。

「行くぜ!!」

桐生は叫ぶとアクセスを踏み込んだ。

退却

120mm滑空砲の轟音が轟き、近くにいたガグを吹き飛ばした。

「散らばるな！！固まれ！」

鹿島は89式小銃で弾幕を張りながら怒鳴ると87式偵察警戒車がエリコンKBA25mm機関砲が迫ってくるグールを薙ぎ倒していく。

「キリがない！」

鹿島は89式小銃の弾倉を交換しながら叫んだ。

「街中のアビスがここに集まってきている！！数的不利だ！！弾薬も足りない！！」

小西は9mm機関拳銃で弾丸をバラまきながら言うと、門の前で攻撃を行っていた90式戦車がイタカに踏み潰され、大破した。

（全車、あの化け物に火力を集中しろ）

10式戦車長の声が無線から聞こえると、10式戦車の主砲がイタカを向き、四台の10式戦車が同時にイタカにHEAT弾を撃ち込んだ。

その一撃にイタカの胸部に穴が開くが、10式戦車が倒れたイタカの下敷きになり、いびつに歪む。

戦車の支援が無くなり、ここぞとばかりにグールの群れが群がってくる。

刹那、車のエンジン音が響き渡り、軽装甲機動車が瓦礫の山を飛び越えてきた。

軽装甲機動車は無謀にもグールの中に突入していく。ハンドルを切る運転手を見た鹿島は口元を緩めた。

「あの二人か……」

鹿島は小さく呟くと大声で叫んだ。

「救世主と幸運の女神の到着だ！！まだ運は尽きてねえぞ！！」

鹿島が怒鳴るとドリフトで停車し、運転席から桐生が顔を覗かせた。

「助かった！増援は・・・・・・・・」

「部隊に撤退を命じる！」

「なんだと！？それには弾薬や重火器があるんじゃない・・・・・・・・」

「撤退用の、な！！政府は横須賀を破壊兵器で消滅させるつもりだ！タイムリミットに間に合わなければ、俺達もろとも消し去るつもりだ！」

「なに！？」

「急げ！早く怪我人を収容しろ！」

桐生は怒鳴ると車を発進させ、日向のPDWモデルを片手に窓から弾丸を撃つ。

鹿島は89式小銃に初弾を装填すると、無線に叫んだ。

「総員車両に乗れ！！急げ！」

五分五分の格闘戦を繰り広げた隠岐とメリフィリアは互いに息を切らし、自嘲を漏らした。

「やるね」

「隠岐も・・・・・・・・」

そう言うときメリフィリアは空を見上げた。

「私は未来が変わらないなら、少しでも人間を残したくて奴らに加担したの」

「メリーちゃん？」

「霞にゴメンって言って・・・・・・・・奴らを欺く為に加担して・・・・・・・・」

そこまで言った瞬間、桐生の車が横切った。

「未来は変えるもの・・・・・・・・そうでしたわね・・・・・・・・望を守って・・・・・・・・」

メリフィリアが叫んだ瞬間、桐生が放った5.56mm弾がメリフ

イリアの胸を撃ち抜いた。

「私の役目は終わり・・・・・・・・さようなら・・・・・・・・」

そこから凄まじい血飛沫が噴き上がり、隠岐が駆け寄るより早く、メリフィリアの体は煙のように薄れ、消えていった。

それを言う為にわざわざこんな事を？

隠岐は自らが似合うと言って彼女に渡したペンダントを拾い、ゆっくり目を閉じた。

「馬鹿ね。不器用なんだから」

隠岐は苦笑いを浮かべ、駆け出した。

日向に弾倉を交換しつつ、桐生が車を走らせていると、無線から声が聞こえてきた。

（こちら鹿島。全員搭乗完了！！）

「了解！椎名・・・・・・・・」

「分かっています！」

椎名はMINIMIを構えると身乗り出した。

同時に軽装甲機動車は瓦礫を飛び越え、道路に飛び出す。

その後ろをジープや74式特大型トラックや31/2トトラック、ランクル、87式偵察警戒車が続く。

桐生がバックミラーで後ろを見ると最後尾の87式自走高射機関砲にグールが群がっていくのが見えた。

桐生は舌打ちすると同時にジープが隣に並んだ。

運転席には隠岐が見え、助手席には大野、後ろには小西が見える。

それを見た桐生がニツと笑った瞬間、右のビルが倒壊し、シャッドメルが飛び出してきた。

間一髪、桐生達の車両は逃れるが、後続の車がシャッドメルによつ

て立ち往生となる。

桐生は車を止めると無線に吹き込んだ。

「大丈夫か!？」

（こちら鹿島!道を塞がれた・・・・・・・・）

「今から救援に・・・・・・・・」

（馬鹿野郎!!お前達は退却しろ!!）

鹿島の怒鳴り声に桐生は怒鳴り返した。

「馬鹿はそっちだ!今から向かう!」

（ふざけるな!お前達にはやる事があるはずだ）

鹿島は怒鳴ると無線が途切れた。

「クソつたれえ!!」

桐生は叫ぶと抑えられない怒りを無理に抑えるようにハンドルに頭突きを行った。

クラクションの音が一瞬周囲に響き渡り、桐生はアクセルを踏み込んだ。

軍隊の最終走者

百里基地

20:41

百里基地の滑走路の上にある整備が終わったF-15Jイーグルの試作改良機体「F-15JA」を一瞥した佐伯玲志^{さえき れいじ}二等空尉は航空用ヘルメットを被るとイーグルに乗り込んだ。

F-15Cが原型のF-15Jは燃料タンクを空中投棄出来ないが、このF-15JAは主翼下面兵装ラック部分に搭載した兵装を空中投棄が行える。

そこにネイルアンカーを搭載し、横須賀に投下するのが佐伯の任務だ。

そして今回限りのコールサインであり、TACネームである「フラッシュ」はネイルアンカーの燃える様が爆発的に延焼する火災現象「フラッシュオーバー」に似ている様子からきているが元々、電光^{ブリ}石火の異名とTACネームを持つ彼にとっては、電光石火がカメラの光に変わった事に不服があった。

「これも任務だから仕方ないが……」

佐伯は小さく呟くと、サンバイザーを下ろした。

（こちら官制、フラッシュ、聞こえるか？）

無線から響くその声に、佐伯は英語で答えた。

「こちらフラッシュ、聞こえている」

（目標は横須賀市の中央病院。そこに爪^{ネイル}を投下する）

軍隊（爪）の最終走者（最終兵器）と、文字通りの意味を持つネイルアンカーを横須賀の中央に投下する。

ネイルアンカー一発で横須賀を焦土に変える事が出来るという事はF-2Aのような正確性ではなく、F-15Jのような最大速度マ

ツハ2・5を誇る一撃離脱が可能な戦闘機が適任なのだ。

（作戦開始時刻は二二〇〇。それまでは近隣に近付くな。開始時刻になったら、アフターバーナーを点火し、一気に作戦を完遂させるんだ）

「ラジャー」

佐伯は無線に吹き込むと苦笑いを浮かべた。

佐伯のTACネームのブリッツは文字通り、アフターバーナーを点火した戦闘機で電光石火の如く撃墜していく様子からきている。彼にとってはどうと言う事が無い任務だ。

（フラッシュ、滑走路への侵入を許可する）

管制官の声にイーグルを滑走路へ向かわせると、深く深呼吸を行った。

（フラッシュ、離陸を許可する。幸運を）

「ありがとう。離陸する」

F-15JAはエンジンを点火させ、上空へと飛び立って行った。

横須賀市

21:44

エンジンの音が響き渡り、ライトを点灯させながら走る車が二つ、市内を横切っていた。

「上空、ナイトゴントが接近!!」

小西の声に大野はMINIMI軽機関銃を上空に向け、ナイトゴントの群れに撃ち込む。

小西もジープに搭載していたM2重機関銃を上空に向けた。

椎名もMINIMIを構えたその時、桐生が叫んだ。

「目の前にイタカだ!!」

その声に椎名は踏ん張り、同時に桐生と隠岐は車でイタカの足をくぐり抜けた。

イタカは唸り声を上げると暴れ、狂ったように追い掛ける。

モンスターと戦う事を夢に見た人なら巨人に追い掛けられ逃げながら応戦し、打ち倒す事を考えただろう。

しかし、実際にこうなるとたまった物では無い。

恐怖以外の何者でもなく、ましてや精巧に作られたファンタジーではないのだ。

が、桐生だけはニツと笑って見せた。

「面白いぜ!! 最高だ!!」

「何ふざけた事を言ってるんですか!？」

椎名が怒鳴ると桐生は「ちよつと運転変わってくれ」と言い、ハンドルを離した。

「ちよつ!」

椎名は急いでハンドルを掴み、アクセルを踏み込む。

「何やってるんですか!」

「ちよつと、大物を退治してやろうと思ってね」

桐生はAG36を掴みながら上部のハッチを開ける。

AG36と40mmグレネード弾を数個掴み、桐生は迫ってくるイタカに構えた。

「三発で沈めてやんよ!!」

桐生が口元を緩めると、椎名が驚き、素っ頓狂な声を漏らした。

「三発!? 無茶苦茶です」

「余裕だ!!」

桐生はイタカにグレネードを撃ち込んだ。

イタカの顔面に直撃した瞬間、イタカは拳を振り上げた。

「スピード落とせ」

「はあ!？」

「だからスピード落とせて!! お前が協力して三発だ!!」

その声を聞き、椎名は歯を食いしばりながらスピードを落とした。拳はすぐ後ろに直撃し、軽装甲機動車が大きく揺れる。

目前に迫ったイタカの顔面が酷く歪んでいた。

それを見た桐生はほくそ笑む。

「二発目だ!!」

近距離で放たれたグレネードはイタカの額に減り込んだ。

イタカが暴れ狂った瞬間、桐生は三発目をAG36に装填した。

「この一発でジャイアント・キリングだ!!」

笑みが混じった声と同時にAG36からグレネードが放たれ、イタカの頭を吹き飛ばした。

爆発は周囲の闇を切り裂き、花火を巻き起こす。

それをミラーで見ていた椎名は息を呑んだ。

一発目で表皮を傷付け、二発目で近距離で直撃し、安全装置が作動したグレネードを食い込ませ、三発目で二発目もろとも爆発させて頭を吹き飛ばす。

馬鹿が考える事が……

「いや………違いますね」

桐生が考える事……

「何が？」

「何でもありません！」

椎名は頬を緩めたその時、無線から隠岐の声が聞こえてきた。

（桐生二尉、こちら隠岐、送れ）

桐生は中に入ると無線を掴んだ。

「こちら桐生。どうした？」

（大野君の話によると、地図を見た限り約1キロで高速道路だつて、どうする？）

年上とはいえ、仮にも上官に対する口ぶりかと苦笑し、すぐに無線に吹き込んだ。

「ゲートがあると思う。通過するにはそれをぶち壊す必要がある」
（さっき巨人を倒したように、グレネードランチャーで吹き飛ばせ

ばいいんじゃないか？)

「グレネードを使えば破片が飛び、タイヤがパンクする。リスクが高い」

(へえ………戦闘狂だと思ったら考えてるんだね)

皮肉げな口調に桐生は嘆息を漏らした。

メリフィリアか………

昔どんな関係があつたかは知らないが………

「………大野に変わってくれ」

桐生はそう言つと日向を掴み、分解を始めた。

(大野っス)

「大野、ゲートが見えたら合わせろ」

(合わせる………了解っス！)

桐生はあつという間に日向を狙撃銃型に変え、ピカティニーレールにスコープを取り付けた。

「ゲートです！」

「椎名、三つカウントしてくれ」

「分かりました」

椎名の了解の声に桐生はスコープを覗き込んだ。

「一、二………」

桐生は息を止めて目標を固定した。

「三……！」

数発の銃弾が、塞いでいる二カ所のゲートを同時に根本から撃ち抜き、空中に吹き飛ばした。

同時に車が通過していく。

時刻は22時まで3分………

横須賀市上空

21:59

（こちら管制、作戦開始時刻までは37秒）

「ラジャー」

佐伯は答えると、操縦桿を傾けた。

F-15JAは炎上する横須賀に向かって行く。

（作戦開始時刻です。フラッシュ、作戦を開始しろ）

「ラジャー！！」

佐伯は力強く答えると、アフターバーナーを点火した。

音速を越えた瞬間に発生する衝撃波がイーグルを一瞬覆った。

凄まじいGが佐伯を襲い、佐伯は歯を食いしばる。

電光石火の異名を持つ彼には生半可な精神力は持ち合わせていない。失神する者もいる程、強力なGに堪え得る精神力と肉体を持ち合わせた佐伯は一気に横須賀に突入する。

「爪の投下準備に移る」

佐伯は投下準備を行うと、ディスプレイに病院を捉えた。

「投下！！」

燃料タンク型の無誘導型爆弾に搭載されたネイルアンカーが投下され、F-15JAは即座に飛び立って行った。

投下されたネイルアンカー専用爆弾は地面に着弾した瞬間、凄まじい閃光が輝く。

核兵器は僅か一瞬で周囲を破壊するが、ネイルアンカーは違った。

爆弾を中心にドーム状に炎が広がって行く。

文字通りの完全焦土兵器。

炎は計算されたネイルアンカーの量だけ周囲を焼き尽くす。

全てを焼き尽くし、空気に至るまで蒸発させる。

最悪最強の兵器は横須賀の街を灰に変えていく……………

助手席に座っていた桐生は急な気温の上昇に眉を潜め、窓から顔を出した。

「椎名……車……止める」

珍しく動揺する桐生を一瞥し、椎名は車を止め、それに気付いたジープも停車した。

「どうしたんです？」

椎名が運転席を下り、横須賀を見ると椎名も言葉を失った。
空が真紅に染まっている。

血のように紅い空はまるでこの世の終焉のように不気味な紅を作り出していた。

「これが……ネイルアンカー？」

「入谷が必死で守ろうとする訳だ……こりゃあ……」

「

まるで空襲の後ね」

隠岐はへらへら笑うと不謹慎窮まりないと桐生達が一瞥する。

「だってそうじゃない。これは……」

桐生は隠岐の頬を平手打ちにし、大きな音が響き渡った。
憤怒の表情を見せる桐生に隠岐は妖艶な笑みを浮かべる。

「いい加減にしゃがれー！」

「なんなら殺す？メリーのように」

隠岐はへらへら笑うと、桐生は舌打ちをした。

「隠岐、それまでだ」

「あつ、スミちゃん」

バイクに乗ってきた霞がヘルメットを脱ぐと、隠岐は手を振った。

「スミちゃん？メリーちゃんが奴らを欺く為にゴメンってね。そんな事より見てよスミちゃん！空が真っ赤！キャハハ」

「そうか」

霞は無表情に呟くと拳銃を取り出し、隠岐の足を撃ち抜いた。全員が驚き霞を見ると、霞は嘆息を漏らす。

「いつかはこうなると思っていた……私達が担当した最後の任務で狂気を当てられた……治療で抑えていたがメリフィリアの死で出て来たようだ」

「俺の……せいか」

「いや、当然の結果だ。戦場で、敵は躊躇せず殺さなければならぬ」

「……」

「それで最後の任務って、どんな任務だったんです？」

椎名が首を捻った瞬間、霞は拳銃を仕舞った。

「クトウルフだ。クトウルフの復活を阻止する作戦だった。感受性が強い隠岐は奴の狂気に当てられた」

「クトウルフ？」

「ヘルファイアー教団が神と崇めるアビスだ。取り敢えず、状況が終了したら教えろと入谷が言っていたからな。何か分かった事があるんだろ？」

霞は携帯電話を取り出すと耳に当てた。

数回のコールの後に、入谷が出る。

（お疲れさん）

「わざわざ電話しろって事は何か分かったんだろ？」

（ああ）

入谷が答えた瞬間、電話の向こうから銃声が轟き、電話が唐突に途切れた。

「入谷？入谷！！どうした！？」

霞の怒鳴り声とともに、チヌークの編隊が向かってくるのが見えた。それは霞の声を掻き消しつつ、向かってくる。

チヌークは七人の近くに降下し、隊員が飛び出してきた。

「負傷者を中に！！」

パイロットの声とともに自衛官達が隠岐を担架に乗せた。

霞は携帯電話の電源を切るとパイロットに駆け寄った。

「今から入谷民俗学研究所に向かえ！」

「しかし……」

そこまで言うとはパイロットの表情が強張った。

「命令だ！！」

霞は怒鳴り、拳銃を突き付けつつ、桐生達を一瞥した。

「乗れ！！」

入谷の事となると異常に過激になる人だと苦笑いを浮かべ、桐生は後ろを振り返った。

横須賀では蒸発した水が雨となり洪水の如く降り注いでいる。

この雨なら巨大なシャッドメルも……

桐生は目を閉じると散っていった仲間に敬礼をし、チヌークに乗り込んだ。

hold up / offer . . .

入谷民俗学研究所

00:01

チヌークが入谷の民俗学研究所の前に降下した。

霞は急いでヘリから飛び出していく。

「お前達は残れ。何かあったら最悪だからな」

「了解っス！」

「分かりました」

「小西一尉、同行をお願いします」

「了解です」

桐生が駆け出すと、9mm機関拳銃を持った小西が続いていく。

研究所の中は血で染まり、壁には銃痕が、床には薬莢が落ち、何か一大事があった事を伺わせる。

「7.62mm弾の薬莢だ」

「ヤバイな」

桐生は研究員の死体を見ると舌打ちをし、奥に走っていく。

奥の書斎に駆け込んだ二人は言葉を失った。

胸から血を流している入谷と、それを抱き抱えている霞。

一番見たくない光景だった。

入谷は口元を緩めると、自嘲的な笑みを浮かべ、口を開く。

「よお よく生き残っていたな」

「喋るな入谷!!」

霞が手で制したが、その手を払い除け、ゆっくり立ち上がり、壁に寄り掛かった。

「お前達には伝える事が 沢山ある」

入谷は頬を緩めるとゆっくりと口を開いた。

「奴らの 教団の目的はクトウルフの復活」

そしてそれに必要な二つ要素．．．．．ネクロノミコンのと．．．
．．．椎名望だ」

「何!?!」

桐生と霞は眉を潜めた。

「ネクロノミコンは分かるが、何で椎名なんだあ」

「椎名は魔力を有している．．．．．微弱ながらも．．．．．サイファーみたいにではなく．．．．．感じる程度だが．．．．．」

そういえば、エセックス攻防戦で邪な気を感じたと言っていた。

クテイラも選ばれし者がどうか．．．．．

「クトウルフに．．．．．核は通用しない．．．．．それは歴史が証明している．．．．．」

「初耳だぞ!?!」

霞の声に入谷は「初めて言ったからな．．．．．」と呟き、血を吐いた。

思わず、霞が駆け寄るが、入谷は再び手で制す。

「古代核戦争．．．．．知っているな．．．．．」

「聞いた事だけはあるが、そんな事有り得る訳が．．．．．」

「科学者はそう言う．．．．．だがな、桐生．．．．．可能性がある限りそれを完全に否定出来ない．．．．．」

入谷は血を拭くと嘆息を漏らす。

「モヘンジョ・ダロやカッパドキア．．．．．ハットウシャ遺跡がその例だ．．．．．奴らが戦ったのがクトウルフだ．．．．．当時の科学力は現代と同等だった．．．．．彼らは核を使い応戦したが．．．．．クトウルフには核は効かなかった．．．．．」
入谷は息苦しそうに深呼吸を行うと、言葉を繋げる。

「俺達の最終任務で．．．．．クトウルフの復活は阻止された．．．．．はずだった．．．．．」

「だった?」

霞が眉を潜めると入谷は苦しそうに天井を見上げる。

「クトウルフの復活に必要なだった物は．．．．．ネクロノミコン
だけじゃ．．．．．なかつたんだ．．．．．生贄だ．．．．．
魔力がある女性．．．．．」

「それが椎名か．．．．．」

「調べた所．．．．．メイガスは逆に．．．．．生贄だけでク
トウルフを．．．．．復活させようとした．．．．．その生贄
が．．．．．ジェイクの母親だ．．．．．結果は．．．．．
失敗で．．．．．取り込まれたジェイクの母親は．．．．．不
完全なクトウルフの血肉に．．．．．」

「その代わりが椎名って訳だな？」

「ああ．．．．．最初の．．．．．お前が出くわした虚数次元
は．．．．．ネクロノミコンを手に入れる為．．．．．その後
のは．．．．．椎名を手に入れる為だ．．．．．」

これで理屈が叶う。

椎名を狙った攻撃．．．．．

ダゴンの時もアトラクナクアの時も．．．．．

「取り込まれたら最期だ．．．．．助けられない．．．．．世
界を支配したら．．．．．クトウルフの繁殖の苗床に．．．．．
される．．．．．その例がクティラだ．．．．．奴は古代人の
生贄とクトウルフの．．．．．子供だ．．．．．」

「笑えねえ．．．．．」

「知りすぎたから殺されたのか!？」

「違う．．．．．トラペゾヘドロン．．．．．それを手に入れ
る為だ．．．．．やったのは．．．．．ソロモンだ．．．．．」

「あの下郎!!」

霞は近くの机を強く蹴ると怒鳴った。

「トラペゾヘドロンは．．．．．強力なアビスが封じ込まれてい
る．．．．．気をつける．．．．．」

入谷は咳込むと血を吐き出しつつ、小さく呟いた。

「霞……煙草を……」

「ああ、待ってろ」

霞は胸ポケットの煙草のパックを取り出した。

最後の一本を掴み、霞はその一本を入谷の口に挟んだ。

しかし、入谷は力無く煙草を取り落とした。

「うわああああっ!!」

霞は絶叫し、床に突っ伏し、嗚咽を漏らす。

床を叩き、絶叫する霞を見た小西は目頭を押さえると姿勢を正し、大声で叫んだ。

「敬礼!!」

その声に小西は敬礼を行い、桐生は刀を捧げ銃を行うように持ち、ゆっくり目を閉じた。

ゼロ

防衛省

同時刻

防衛省前の駐車場に荒々しくバイクを停めるとジェイクは大腿で防衛省の中に入って行く。

ジェイクはカウンターに駆け寄るとショルダーホルスターからM1911A1を受付嬢に突き付けた。

驚く受付嬢にジェイクは囁くように言う。

「・・・・・・・・地下金庫を開ける。これは命令だ」

「貴方は何を言ってるんですか！？そんな事を出来る訳・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」
凄まじい銃声が轟き、ガバメントが火を噴いた。

受付嬢のすぐ後ろに銃痕が出来、葉莢が落ちると同時に金属の澄んだ音が響き渡る。

「・・・・・・・・最後の警告だ」

受付嬢は慌ててパスワードを入力し、ジェイクを一瞥する。

「開きました」

「・・・・・・・・君には眠ってもらおう」

ジェイクは手刀を一閃したと同時に受付嬢はゆっくり目を閉じる。規則正しい寝息を漏らす受付嬢を一瞥し、ジェイクは地下に駆けていく。

その前を金髪の少女が現れ、後ろを見ながら奥に走っていく。

何故今まで気付かなかったんだ・・・・・・・・？

ジェイクはゼロの後ろを着いて行く。

メイガスとの戦闘中に気付くとは・・・・・・・・

金庫のハンドルを回すとゼロがこちらを見つめていた。

ゼロは暗号名で・・・・・・・・

ジェイクは急いでネクロノミコンに駆け寄ると、その魔導書を開いた。

サイファー！！

「呼応せよ、浮かばれし魂よ！！このジェイク・サイファーの身の元、現れよ！マティルダ・サイファー！！」

ジェイクは大声で叫ぶとゼロ――マティルダ・サイファーの体が光に包まれ、少女から妙齡の女性まで成長した。

ジェイクは一筋の涙を流すと小さく「母さん」と囁く。

マティルダは優しく微笑むと我が子の名前を呼び、抱きしめた。

幽霊であるはずなのに温もりを感じるが、こちらから抱きしめる事は叶わない。

（ジェイク・・・・・・大きくなったわね）

「・・・・・・ああ」

（ごめんなさい・・・・・・クトウルフに魔力を吸収されて・・・・・・）

ジェイクは首を横に振ると「いいんだ」と答えた。

「・・・・・・何を伝えたかったんだ、母さん？」

（メイガスとクトウルフの弱点を・・・・・・）

その声にジェイクは息を呑む。

（メイガス・・・・・・ハワード・ダッシュウッドはクトウルフの生み出した『毒』であるルルイエ異本を手に入れてから変わったわ。

虫も殺せないような男が悪魔に豹変した・・・・・・）

「クトウルフの毒・・・・・・」

（ルルイエ異本はメイガスの命のような物・・・・・・それを破壊されればメイガスは死ぬ。ルルイエ異本は奴の頭と心臓にそれぞれ埋め込まれてる・・・・・・同時に破壊すれば奴は急に老化し、死に絶える）

「それを伝える為にわざわざ・・・・・・ありがとう」

ジェイクが頬を緩めたその時、後ろから「それまでだ」という声が聞こえてきた。

思ったより早かったな……

ジェイクはガバメントを構え、後ろに向けた。しかし、それは想定していた警備員とは違い、ジェイクは拍子抜けた表情になる。

色黒の美成年はこちらに微笑を浮かべこちらを見つめていた。

「貴様は？」

「ナイアルラトホテップ……ナイとだけ言っておく」

そう言うとナイはジェイクの顎を蹴り上げ、吹き飛ばした。

宙を舞いながら周りの光景がスローモーションのように流れる。

ネクロノミコンを手にするナイ……

同時に消えて行くマティルダ……

その光景を認識した瞬間、ジェイクの世界は今までの速度を取り戻し、机に体をたたき付けられる。

同時に何かを掴んだ感触を覚えたジェイクは、その手を一瞥したがそれを認識する前に激痛が走った。

「愛しの母親との一生の別れなんだから、もっといい面しやがれよ」
ナイはジェイクの腹部を蹴り飛ばした。

鈍い痛みにジェイクは口が切れ、血を吐く。

「ハハハ、良いねえ！その面！！」

（ふざけやがって！！）

ジェイクはガバメントを向けたがそれより早くナイはレイピアでガバメントを弾き飛ばした。

「この位にしてやる。続きはまた今度だ」

ナイはそう言うと、姿を消していった。

一人残されたジェイクは口元を腕で拭くと小さな声で毒づき、壁を殴り付けた。

最終任務

入谷民俗学研究所

00:10

入谷への敬礼をしている最中、三人は銃声を聞き後ろを振り返った。ヘリの方からだ。

「まさか……………」

入谷の言っていた事が頭の中でリフレインした。

クトゥルフを復活させる為に必要な要素……………

ネクロノミコンと……………椎名望。

「望!!」

桐生は二人を置いて一気に駆け出した。

小西と霞の声を背にヘリまで走るとヘリが炎上する音が聞こえてくる。

桐生が飛び出すと炎上するヘリから五メートル程の所で大野が倒れ、その横には気を失っている椎名を抱えたクティラが立っていた。

「あら？久しぶりね？」

クティラは笑みを浮かべると桐生は刀を抜き、雷電を構えた。

「望を返してもらうぜ」

「そうはいかないわ」

クティラは不適な笑みを漏らすと「じゃあね」と言い、現れた黒い光の中に消えていった。

「待て!!!」

桐生が駆け寄るより早く光の中に消え、二人は姿を消した。

「クソツタレ!!!」

桐生は虚空に叫ぶと、上空に雷電をぶち込んだ。

CATS本部

05:11

救出された四人が本部に到着したのはあれから四時間後だった。

それぞれが自室に戻され、待機を言い渡された。

そんな中、魂が抜けたように桐生はベッドに横たわっていた。

ただ天井を見上げている桐生の目には光がない。

文字通り望を失った絶望と虚無感、守りきれなかった無力感。

ただそれだけが桐生を満たしていた。

心配そうに眺めるトロコにも目を向けず、桐生は天井を眺めている。

その時、部屋の扉を叩く音が響き、霞と小西が入ってきた。

「桐生、支度をしろ」

「何か分かったのか？」

「ああ、その通りだ」

「横須賀に寄港していた輸送艦『おおすみ』が教団に奪われている
事が分かったんです」

小西の声に桐生は体を起こした。

「おおすみだと!？」

という事は奴らが向かうのは海？

「これから偵察衛星を奪っておおすみを捕捉する」

事実上日本を敵に回し、教団を相手にする。

全てを敵に回せというか……

「しかも、奴らは既にネクロノミコンを手に入れている」

「何だと!？それじゃ……」

「ああ。奴らの野望はあと少しで達成する」

「させるかよ!！」

桐生は立ち上がりながら怒鳴った。

「当たり前だ。その為の闘いだ！」

「衛星は私達が押さえます。貴方と大野一曹はジェイクを頼みます」
「ジェイク？」

「彼は今、CATS本部地下に監禁されています。彼はネクロノミコンを用いて死者と交信し、死者からメイガスの弱点を教えてもらったそうです。勿論、上層部は信じようとしませんでした・・・」

「オカルトは信じねえか・・・今までの事態も十分オカルトなのにな」

桐生の呟きに霞は茶々を入れた。

「まるで配属当初のお前だな」

「・・・毒気に当てられたか」

桐生は頭を掻くと虚しそうに呟いた。

入谷の顔が脳裏に浮かんだ。

「これは誰にも讃えられない闘いだ。それでもやるんだな？」

「当たり前だ！！」

その声に霞はゆっくり頷くと、小西を見た。

「やるぞ！」

「了解です！！」

反乱

「おおすみ」艦内

06：21

空母のような甲板に集う信者。

口々に神――クトウルフの名前を叫ぶ様は不気味の一言だとソロモンは思う。

ソロモンはそのまま貨物室まで歩くと扉を開けた。

後ろ手に手錠を付けられ、横たわっている椎名を見下ろす。

その時、気を失っていた椎名がゆっくり目を開けた。

「起きたか」

「貴方は……」

椎名は起き上がろうとしたが、手錠のせいで立てず、代わりに椎名はソロモンを睨む。

「卑怯者！」

「何とでも言え。私は生き延びればそれでいい」

「外道！！」

椎名が怒鳴った瞬間、ナイが入ってきた。

「目覚めたかな？」

「貴方も教団の幹部？」

「申し遅れました、お嬢さま。私は黒の貴公子ナイアルラトホテツプと申します」

ナイの芝居がかった口調を聞いた椎名は思わず失笑した。

「貴公子？ふざけているんですか？」

「決してそんなつもりはありませんよ、お嬢さま」

「やめてくれませんか？私はそういう阿呆みたいな事を言う人が大嫌いなんです！！」

その時、椎名の顎をナイが優しく支え、顔を近付ける。

「そなたは美しい。我が妾となれば助けてやつてもいいぞ?」

その声に椎名は顔を離すとナイを睨み付けた。

「私は心に決めた人がいるので……彼が必ず助けてくれます! 私は諦めません!!」

「健気だな。なら、私はその男を目の前で殺してやろう」

ナイの哄笑を聞き、椎名は小さく桐生の名前を呼んだ。

CATS本部

同時刻

「準備はいいか?」

霞の声に三人はゆっくり頷いた。

拳銃の携帯が義務付けられているCATS隊員と遭遇しないで行くには日が昇りすぎた。

かと言って隠れながらは時間を大幅に使う。

「強行突破だ。見付かったら、銃を無力化、或いは気絶させる。散開!!」

霞は怒鳴ると管制塔に走り、CATS本部に桐生が走って向かった。桐生は鞘に納まった刀を掴み、駆けていく。

「兄貴……良いんすか!？」

オドオドとした声を漏らす大野に桐生は不機嫌そうに「何が?」と呟いた。

「こんな事したら……」

「こんな事をしなきゃ椎名が助けられねえんだよ!!」

「兄貴……」

「今なら間に合う。引き返すなら……」

「自分は兄貴に着いて行くっス!!」

桐生の言葉を遮った大野は力強く答え、走っていく。
見張りは何とかなる。

問題は看守だ。

身分証明書では何ともならない。

強行手段を取って救出するにも監視カメラに映るうえに無力化する
時間ももつたいない。

さらにあちらが動けば、こちらも難しくなる。

まさに時間との勝負だった。

霞と小西は駆けていくと、霞の目にC-1が目映った。

「小西、C-1を頼む!」

「了解です!!」

小西は9mm機関拳銃を持ち、駆けだした背中を見送り、霞は管制
に入った。

管制は最上階でレーダーや衛星を統轄している。

行きはエレベーターで行けるが、戻りはエレベーターが止められる
可能性が高い為、階段しかない。

桐生ではないが……

「笑えないな」

霞は自嘲気味に呟くとエレベーターに乗り込み、最上階のボタンを
押した。

CATS本部の地下までは誰にも会わなかったがここからはそうも
いかない。

「大野はここで待機だ」

「了解っス！」

桐生は刀を左手に持ちながら一気に駆け出していく。

「桐生二尉？」

看守が素っ頓狂な声で桐生を呼んだその時、桐生は刀を抜き、峰を
正面に向けて看守の一人を殴り付けた。

もう一人の看守はSIG P226を構え、桐生の足を狙うがそれ
より早く鞘が拳銃を弾きながら、看守の頬を殴る。

気絶した二人の横に置いていたシオルダーホルスターとM1911
A1を掴み、扉を開けた。

「ジェイク！」

桐生の呼び掛けにベッドに腰掛けていたジェイクが顔を上げた。

「……………桐生？」

「力を貸せ」

桐生は短く言々とシオルダーホルスターとガバメントを投げ付け、
ジェイクは眉を潜めた。

「……………どういう風の吹きまわしだ？」

「お前の力が必要だ。だから、お前を利用する。お前は脱出に俺達
を利用しろ」

「無茶苦茶な理由だ……………だが、協力しよう」

ジェイクは僅かに笑みを見せると立ち上がった。

同時刻

エレベーターが最上階に到達すると同時に霞は拳銃を取り出すと大声で怒鳴った。

「動くな！」

霞の声に制服姿のCATS隊員が顔を青ざめさせ、立ち上がった。

「霞三佐、どういっつもりだ！？気でも狂ったか！？」

そう言った隊員の手元の電子パネルが火を噴き、霞は怒鳴った。

「偵察衛星を使わせてもらっ！」

「あれは許可が……ひっ！」

銃を突き付けられ、隊員が小さな悲鳴を上げると霞はすぐに衛星の操作パネルに駆け寄り、衛星を操作する。

大画面のスクリーンに映し出される映像から航空写真が送られてきた。

続けて偵察衛星を操作していると、自衛隊の艦を見つける。

それはシルエットから輸送艦と確認出来た。

「小西、おおすみを確認した。座標を送る」

（分かりました）

霞が外後ろを振り返ったその時、一人の隊員が拳銃を突き付けていた。

「霞三佐、銃を下ろして下さい！」

「……分かった」

霞がSIG P226 CUSTOMを床に置いた瞬間、足首に隠していたグロック社のバックアップガンG26を構え、隊員の拳銃を弾き飛ばした。

霞は急いで拳銃を掴むと階段を駆け降りて行く。

その後ろを火花が散り、壁に銃痕が出来たが、それより早く霞の姿は消えたのだった。

大空へ

ジェイクがショルダーホルスターを装着すると同時に警報が鳴り響いた。

（本部内部にて反乱発生。繰り返す、反乱発生。実動殲滅隊隊員、及び霞傭を拘束せよ。抵抗を示したら射殺も厭わない）

射殺も厭わないか………

桐生は放送を聞き、小さな声で「笑えねえ」と呟いた。

そして桐生は椎名の使っていた改造USP「漁火」をセミオートに切り替える。

ジェイクもガバメントに初弾を装填した。

「………いつでも行ける」

「よし！」

桐生は漁火を構えながら駆け出すと、ジェイクがその後ろに続いていく。

階段まで駆けていくと大野が顔を出した。

「兄貴、先程小西一尉から連絡があったっス！滑走路に駐機しているC-1で脱出するらしいっス」

「おおすみは！？」

「確認したらしいっス！」

「分かった！」

桐生が答えた瞬間、顔面のすぐ近くを弾丸が掠め、三人は素早く体を壁の影に隠し、大野が様子を伺う。

二人の隊員がベネリM3とUMP9で弾幕を張っている。

大野はG18C二丁をセミオートに切り替えた。

「敵の武器は？」

「ショットガンとサブマシンガンっス」

「ジェイクの魔力を温存しておきたい………かと言ってここで時間を食う訳にはいかねえ。大野、フラッシュバン。俺が切り込

む！ジェイクはバックアップを」

「了解っスー！」

「・・・・・・分かった」

大野は閃光手榴弾のピンを抜くと、隊員達に放った。

同時に凄まじい轟音と閃光が二人の隊員の視覚と聴覚を奪つ。

同時に鬼首を鞘から抜いた桐生が二人に一気に駆け寄り、鞘と峰で二人を殴り付ける。

気絶した二人の隊員を見下ろし、「いいぞ」と言い、階段を駆け登っていく。

（待ってろ、望！）

小西が機器のチェックを行っているとC-1の機内に霞が駆け込んできた。

霞は一度息を整えると後ろを振り返り、口を開いた。

「あいつらは？」

「まだですが、救出は完了したとの報告は入っています」

その時、車のエンジン音が響き渡り、霞はM24を掴み飛び出す。

こちらに向かつてくる軽装甲機動車にM24のスコープを覗いた瞬間、窓から布が飛び出しこちらに振っている。

運転席を見ると、桐生の姿が見え、助手席にはジェイクが見えた。

「あの馬鹿共だ！離陸準備！」

「はい！」

霞は副操縦席に座ると後ろを一瞥する。

ゆっくりと移動を開始するC-1のすぐ後ろに軽装甲機動車が停車し、それぞれの武装を持ち、乗り込んで行く。

同時に後ろから銃撃音が響き渡り、機体を叩く音が機内に響く。

カーゴハッチが閉じると、C-1は滑走路を加速する。

三人は急いで椅子に座り、シートベルトを締めた。

同時にC-1のタイヤは滑走路から離れ、大空に飛び立って行った。

着陸という名の落下

C-1機内

06:54

三人が武器の調整を行っていると言っていると霞が後ろを一瞥しながら口を開いた。

「おおすみには突入するが空挺のパラシュートは無いし、着陸するスペースも無い。低空飛行でおおすみに接近し、一気に着陸しろ」

「あのなあ？それは着陸じゃなく、落下って言っただぜ？」

桐生はそれぞれの足のホルスターに雷電と漁火を入れながら苦笑いを浮かべると、霞も自嘲し、「分かっている」と答えた。

「とにかく、どんな方法を使ってもいい。奴らをぶつつぶせ！」

霞は手をパンと叩くと、ゆっくり頷いた。

「正直、貴様等は最悪のチームだと思っていた。だが、実力は確かだ。任務を完遂させろ」

霞はいつに無く豪胆な口調で言うと、女性らしい柔らかい微笑みを浮かべた。

「これは最重要事項だ」

その声に三人は手を止めて、霞を凝視する。

霞は一瞬目線を外すと大きく息を吸い、三人を見渡し、口を開いた。

「これ以上大切な人は失いたくない……必ず生きて報告書を書け！！」

この人なりの精一杯かと三人は苦笑すると小西が叫んだ。

「目標確認！！」

その声に三人はコックピットから外を見た。

空母のようなシルエットがここからはつきり見える。

「さて、近付けるか？あれには、CIWSが二機搭載されているかな」

Close in Weapon System、通称CIWSは接近するミサイルや航空機を至近距離で迎撃する兵器である。

つまり、ギリギリまで減速して、三人が着陸するのだが先にCIWSを破壊しない限りC-1は蜂の巣に早変わりだ。

「どうするよ？」

桐生は大野を一瞥しながら呟くと、大野は傍らに置いていたM82 A1を構える。

「自分っスよね」

「察しがいい。頼むぜ、スナイパー」

桐生は大野の肩を軽く叩くと、ニツと笑って見せた。

「狙撃って大変なんスからね？」

「分かってるよ。距離、重力、気温、気圧、湿度、風向きを計算するんだろ？大野様頑張ってくれや」

「分かってるっス」

大野はC-1の窓を開けると、CIWSに狙いを定めた。

CIWSの射程は数キロとされているが、撃つてこないという事は自動迎撃装置を切っている可能性が高い。

素人集団に気付かれる前にCIWSを破壊する必要性がある以上は見付からず、確実に仕留める事が必至。

大野は旋回するC-1からおおすみのCIWSを捉える。

慎重に照準を合わせ、力まないように引き金を引いた。

放たれる弾丸はCIWSの銃身に直撃し、火花を散らし、別のCIWSも黒煙を噴き出す。

同時にC-1はおおすみの上空を通過していく。

後部カーゴハッチが開くとそこからは慌てふためき、駆け回る信者の姿が見える。

「接近する！！」

小西の声を聞きつつ、桐生は日向のPDWモデルで掃射を行っている。と信者も負けじとAK-47で応戦するが機体をただ傷付けるだけだ。

C-1はゆつくりとおおすみに接近し、甲板が見えた瞬間、桐生とジェイクが飛び出し、大野が続こうとしたその時、ミサイルアラートが鳴り響いた。

小西は急いで機体を上昇させるとチャフとフレアを放出させる。

しかし、ミサイルは右翼に直撃し、そこから黒煙を噴き上げさせた。甲板からそれを見ていた桐生とジェイクの無線に霞の声が聞こえてくる。

（右翼が損傷した。損傷は軽微だが不安定だ。一度基地に引き返す）
「了解」

その時、弾丸が掠めた。

ジェイクは素早く魔法障壁を作り、桐生はその後ろに隠れる。

「……人を盾にするな」

「仕方ないだろ？蜂の巣になれつてのか？」

「……ふつ。それもまた面白い」

ジェイクが鼻で笑うとガバメントで信者を射殺していき、桐生もPDWで応戦する。

「……一気に突入する！」

「オーケー！！」

桐生はPDWと漁火を構え、フルオートで突進していく。

ジェイクもその後ろに続く走りながら紋様を描いた。

「……伏せる！」

桐生が飛び込んだ瞬間、ジェイクは手刀を一閃し、発生した鎌鼬が信者を薙ぎ倒していく。

同時に桐生は反動を付けて立ち上がり、笑って見せた。

「お互い決着を付けようぜ」

「ああ」

二人はそう言うとおおすみの艦内に入って行った。

貴公子と妖精

おおすみ艦内

同時刻

縛られた椎名を舐めるようにナイが眺めていると椎名が「見ないで下さい！気持ち悪い……………」と怒鳴る。

ナイはニヤリと笑うと、椎名の髪を掴み、立ち上がらせた。睨み付ける椎名に笑みを見せると、椎名の頬を平手で叩く。

「っあ！」

「良い声ではないか。ますます私の女にしくなっただ」

ナイは不気味に笑い、荒々しく地面に椎名を突き飛ばす。

椎名はナイから目線を逸らしたその時、銃声が轟き、ナイは炎の壁で弾丸を受け止めた。

「待ったか、椎名？」

桐生の声に椎名が顔を上げると、心を寄せる人の笑顔を見付け、笑みを返した。

「大丈夫です」

椎名が答えたその時、ナイは椎名の髪を掴み、立ち上がらせ、その後ろに隠れた。

桐生は漁火と日向を構えながら「格好悪いな」と呟くと、ナイは鼻で笑いながら椎名に囁く。

「あの男か……………貴様が心を寄せているのは？」

「だったらなんですか！？」

椎名が怒鳴ると同時に壁に突き飛ばされた。

「ならコイツを殺し、私の女にしてくれよう」

「で、貴様は？」

「私は黒の貴公子ナイアルラトホテップ。混沌を作りし者」

芝居がかった口調を聞いた桐生は拳銃と日向を仕舞うと自身も芝居

がかった口調で答える。

「俺は桐生翼。ただの人間さ。付け加えるとあんたみたいな奴が大嫌いだ」

「ほう？神に喧嘩を売るか」

「自分で神を名乗り、混沌を口にし……あんだ、頭は大丈夫かあ？」

桐生が肩を竦めるとナイは哄笑する。

「たいていの者は私に出会って術中にはまり込み、発狂するのだから」

「な、なんだって」

桐生はふざけたように言う。刀を引き抜き、器用に振り回し、地面に突き刺した。

「神、混沌、発狂……厨二のオンパレード……正気じゃない」

桐生が芝居がかった口調で答えるとナイの姿がすぐ目の前現れ、耳元で囁く。

「貴様の顔が絶望に変わる瞬間が楽しみだ」

「お前の顔が涙と鼻水でぐちゃぐちゃになるのが楽しみだぜ」

そう言った瞬間、二人はそれぞれ刀とレイピアを持ちながら後ろに退いた。

桐生は脇構え、ナイはフェンシングのアンガルドの態勢になる。

脇構えは相手から刃が見えにくい構え、つまり刃の危険な距離が分りにくいという事だ。

刺突がメインのレイピアは突く時、必然的に前に踏み込む。

だが、相手の距離が分からない以上、下手に踏み込む訳にはいかな

い。桐生は慎重に歩み出ると、ナイはいきなり刺突してきたが、桐生は横に避けて擦れ違い様に切り付ける。

しかし、手応えという物は一切無く、文字通り空を切った音が響き渡った。

（何だコイツは！？）

桐生が驚き、振り返ると同時にナイはレイピアの切っ先を向けながら飛び掛かってきていた。

ほぼ条件反射に避けると、おおすみの厚い壁をレイピアが刺し貫く。桐生は地面を転がりながら日向を構えるが、それより早くナイは指を鳴らし、拳程の火球を飛ばし、日向を焼き尽くした。

続けて撃ち込まれる火球を雷電の9mmパララム弾で消していく。

桐生は雷電片手に一気に駆け寄ると鬼首を横に一閃する。

しかし、やはり空を切ったように手応えが無い。

ジェイクの言った通りだ。

野郎はあつちからは触れられるが、こつちからは無理って訳だ。

「笑えねえ……………」

桐生は自嘲すると、雷電をナイに向けて撃ち込んだ。

ジェイクが広い倉庫に出ると例のトラペゾヘドロンを見付け、歩み寄った。

桐生が戦うナイアルラトホテップはこのトラペゾヘドロンから魔力が供給されている。

つまり、これを破壊してしまえばこちらの勝ちという訳だ。

ジェイクがガバメントを構えたその時、周囲が黒い霧に包まれフェアリが姿を現した。

相変わらずの無表情な顔でジェイクを見つめると口を開く。

「貴方を…………殺す……………」

「…………来たか、星の精。俺の血でも吸うか？」

「それも…………いい……………」

フェアリは唇を舌で舐めると口から八重歯が覗いた。

「……吸血鬼が」

ジェイクはガバメントの引き金を引いた。
45ACP弾がフェアリのすぐ近くまでいった瞬間、目視で確認出来る程に遅くなる。

同時にフェアリの右手に黒い霧が集まっていき、凝縮した瞬間、身の丈もある巨大な鎌へと姿を変えた。

「遅い……」

フェアリはその鎌を振り、弾丸を真つ二つに切り裂いた。

両断された弾丸は急激に速度を速め、フェアリから遠ざかるように二カ所に弾痕を付ける。

「……人の姿をしたアビスが……」

ジェイクは小さく呟くと、ガバメントを構えた。

下手に近付いて、至近距離で発砲してもこっちが弾丸の二の舞になるだけだ。

コイツの情報が少ない以上、手探りで戦うしかない。

唯一、コイツの心臓が頭を撃ち抜けば勝ちというごく当然の情報しかないのだ。

ガバメントの装弾数は今の弾倉に入っているのが6発、予備弾倉は2つ。合計20発の弾丸でコイツを仕留める必要がある。

問題は弾丸をどう奴に当てる事が出来るか、だ。

無表情なフェアリを見て小さく舌打ちをした。

黒い霧

放たれた雷電は凄まじいマズルフラッシュと一緒に9mmパラベラム弾が放たれた。

しかし、9mmパラベラム弾はナイの体を貫通し、弾丸は壁に当たり、激しくへこむ。

ナイはニヤリと笑うと、レイピアを突いてくる。

桐生はレイピアを白刃取り、鋭利な切っ先が光に照らされ白い光を放った。

突き出される切っ先に桐生は舌打ちをすると、押し返す。

素早く後ろに退いたその時、桐生に火炎が放たれる。

退いた勢いのまま、右に飛び込んだと同時に火球の熱風の余波に桐生は顔を歪めた。

「どうした？私を泣かすのではないのか？」

「……………こっちが泣きそうだぜ。」

桐生は苦笑いを浮かべるとバツティングフォームに似た構えで刀を構える「八双の構え」で鬼首を構えた。

抜刀したまま走ったり、跳んだりする場合に使う構えだ。

単純に重い刀を持ち得る状況での体力温存にもなる。

とつと頼むぜ、マジシャン！！

やはり駄目か……………

ジェイクはガバメントの弾倉を交換しながらフェアリを睨んだ。どう足掻いても弾丸は奴には届かない。

「終わり……………なら……………こっちから……………行く……………」

そう言うと、途切れ途切れの口調からは想像出来ない速度で切り掛かり、大きく振りかぶる。

ジェイクが擦れ違うように避けると同時に壁が大きく刳れた。

ジェイクは素早く後ろに弾丸を三発撃ち込むが、やはり同じように防がれる。

振り返り様に弾丸を切り付け両断すると、フェアリは無表情ながらも殺気に満ちた顔をこちらに向けて切り掛かった。

素早く魔法障壁を展開し、それを防ぐが数秒後に先程の壁のように切り裂かれる。

ジェイクが舌打ちをした刹那、ジェイクの周囲が黒い霧に包まれ、何も見えなくなった。

目線を動かしフェアリを探すが、元より気配の無いフェアリを闇の中で探すのは不可能に近い。

「見付からない・・・お前には・・・」

フェアリの声が響いたと同時にジェイクの後ろに殺気が感じられ、即座に後ろを振り返った。

無慈悲にも鎌を掲げるフェアリは鎌を振り下ろすが、ジェイクは闇の中から飛び出す。

自分を取り囲んでいたのは柱のように高い黒い霧だと理解した瞬間、霧の柱の中心からフェアリが現れ、無表情な顔をこちらに向ける。

その時、床に何かがばらまかれる音が響いた。

ジェイクは眉を潜めて、下を見ると床に両断された45ACP弾と弾倉が転がっている。

これで使える物は弾が4発しかないガバメントのみとなった。

ジェイクは紋様を描き、掌をフェアリに翳し、竜巻を手から放つが、フェアリに到達する前に外に逸れる。

「・・・成る程」

ジェイクは小さく呟くと、フェアリも負けじと小さな声で言う。

「・・・お前の・・・魔術は・・・効かない・・・」

ジェイクはその声を聞き、核心したようにガバメントを構え、指先

で小さく紋様を描くと続けざまに二発放った。

「同じ・・・事・・・」

フェアリが呟いたその時、一発は途中で止まったが、唯一、一発だけがフェアリの心臓を撃ち抜いた。

フェアリはガクリと体から力を抜くと俯せに床に倒れる。

「どう・・・して・・・?」

「・・・一生悩め」

ジェイクは小さく呟くと、フェアリの頭を撃ち抜いた。

血が飛び出るでもなく、ただ黒い霧が噴き出し、室内を闇に染めたかと思うと、今度は幻のように掻き消えた。

簡単な事だ。

魔法障壁には二つパターンがある。

かつて現れたクティラのような魔法障壁は物理系の、つまりは実弾兵器に対して有効だが、強力な魔術には対した防御には成らない。

しかし、フェアリに使い跳ね返された技はクティラの魔法障壁を撃ち破った。

つまり、フェアリが常に身にまとっている黒い霧そのものが魔法障壁なのだ。

実弾兵器は黒い霧が濃い部分で減速するが完全に防げない。

さらに強力な魔術を防ぐのではない限り、薄い層でいい上、霧という性質上風には弱い。

そこで45ACP弾を風で覆い、さらに二発撃つ事で実弾攻撃と錯覚させて、霧を風で払い、弾丸を通過させた。

ジェイクは鼻で笑うとトラペゾヘドロンに銃口をくつつける。

「これで・・・・・・終わりだ」

ジェイクは言い終えると引き金を引き、トラペゾヘドロンが粉々に砕け散り、四散した。

「・・・これで銃はただの筒か」

ジェイクが小さく呟くと、凄まじい力で吹き飛ばされた・・・

終劇・・・

桐生の持っていた刀がレイピアに弾き飛ばされた。

「終わりだ」

ナイがレイピアを振りかざす。

態勢が崩れ、さらに銃が効かないとなれば、この距離は確実に避けられない距離。

詰んだ・・・

桐生が初めて死を自覚したその時、ナイはレイピアを地面に取り落とした。

「がああっ！！力が・・・力が抜ける！！」

「どうやら形成逆転だな」

「何をした！貴様あ！！」

ナイの体が徐々に薄れていく中、桐生は無言で刀を掴み首を捻った。
「俺とは別に動いていた奴がいてなあ？防衛省で世話になったって伝えてくれってよ」

「あいつかあ！」

苦しそうに掠れた声を漏らすナイは憎らしげに言つと絶叫とともに消滅していった。

「翼・・・良かった、死ぬかと・・・」

縛られながらも一部始終を見ていた椎名は涙を流し、呟くと桐生は優しく笑って見せた。

「俺は死なねえよ。まあ、さっきはやべえとは思ったがな。ってか、いつから名前と呼ぶようになったんだ？」

「それは・・・もう！いいじゃないですか！」

椎名が頬を赤らめ、子供のように言つた瞬間、すぐに表情を変え「後ろ！」と怒鳴った。

桐生は素早く後ろを振り返るがそれより早くメイガスの一撃が桐生に叩き込まれ、壁まで弾き飛ばされる。

「貴様がメイガスか！」

桐生が鬼首を構えて、切り掛かったがメイガスの指から放たれた高圧の水が刃を根本からへし折り、桐生もともに弾かれた。その凄まじい力に桐生の気が遠のいていく。

「その刀があるところらは迷惑なのでな。一緒に沈め」

メイガスは小さく呟くと、椎名を抱え、歩いていく。

椎名が名前を呼ぶが、指一つ動かさない自分に舌打ちをし、桐生は気を失った。

壁に叩き付けられたジェイクが顔を上げるとそこにはクティラが立っていた。

クティラは妖艶な笑みを浮かべると、右手を下に差し出す。

同時に鋭い爪が伸びた。

「苦しませないように逝かせてあげるわ」

クティラが不適な笑みを見せると、後ろからソロモンが駆け寄ってくる。

「行くぞ」

「劣等種には指図されない」

「教祖の命令だ」

「・・・・・・仕方ない」

クティラは爪を元の長さに戻すと、歩いて行った。

その姿を見送るとジェイクは胸を撫で下ろす。

弾が切れて、精神が朦朧としている状態で先程の状況はかなり危なかった。

ジェイクはふらふらと立ち上がると壁に手をつきながら歩いて行く。とおおすみが振動し、大きく傾く。

おおすみの動きも止まったように感じる・・・・・・

機関室が爆破されたか？

仮にそうだとしたら、早く脱出しなければ……

ジェイクは桐生が向かった方向に歩いて行くと、再び傾いた。かなりヤバイな……

おおすみの船体が揺れだし、奥まで歩いて行くと壁に寄り掛かりながら気絶している桐生を見付け、駆け寄った。

「桐生！」

「……………っ……………」

桐生は顔を歪めながら目を開けると不意にジェイクの肩を掴んだ。

「椎名は！？」

桐生の問い掛けにジェイクは首を振ると、桐生は絶叫し、床を殴った。

その一撃は血が滲むような一撃で、手から血が滴り落ちてくる。

「椎名を助ける！」

桐生は立ち上がったが、すぐに力無く倒れた。

「……………その体じゃ、無理だ」

「椎名を助けなきゃ……………」

ジェイクは桐生を殴り付けると、珍しく声を荒げた。

「その体でどうする！！もう間に合わない！」

「ざけんな！！俺はあいつを助けなきゃなんねえんだ！！初めて好きになった奴を守れなかったら……………」

その時、桐生は腹部に違和感を感じ、気を失った。

ジェイクは倒れ込んだ桐生の肩に腕を差し入れ、立ち上がらせると、地面に転がっている折れた鬼首を広いあげ、鞘に仕舞う。

ジェイクは左手に鞘を持ち、右で桐生を支えながら兵器が搭載された貨物室に向かって速足で駆けていく。

同時に凄まじい轟音が下から聞こえてきた。

ジェイクが貨物室に飛び出すと、おおすみが本格的に傾き始める。急いで救命ボートに駆け寄り、桐生を寝かせると向こうにLCCが見え、そこにメイガスの姿が見えた。

「・・・・・・・・糞野郎」

ジェイクは小さく呟くと、救命ボートに桐生を寝かせて鞘を置くと救命胴衣を掴み、桐生に着せた。

そして救命ボートを奥に押し、海に着水させる。

同時に機関室から溢れ出た海水が津波のように押し寄せるのが見えた。

ジェイクは急いで救命胴衣を着込むと凄まじい勢いの海水が救命ボートを沈み行くおすみから押し流す。

そして、その海水は救命ボートをおすみから遠ざけ、ジェイクは豆粒程の大きさとなったLCACを眺めた。

俺達は生き残り、ナイアルラトホテップとフェアリを倒したが、椎名とネクロノミコンがある以上は奴らの勝ちだ。

「・・・・・・・・この世の終わり、か」

ジェイクは自嘲しながら呟くとヘリの音に気が付き、上空を見上げた。

近付いてくるヘリに手を振り、ヘリがこちらに気が付いたらしく向かってきた瞬間、ジェイクの意識が薄くなり、目の前が真っ暗に染まっていた・・・・・・・・

終わりの始まり

L C A C が南太平洋の小さな孤島にたどり着き、停泊する。

中央には小さな石碑があるだけの十メートル程の浮島で、島と言うには幾分か小さすぎた。

後ろ手に縛られた椎名はメイガスに無理矢理 L C A C から下ろされると、石碑の前に寝かされる。

「君は今からクトウルフの生贄になるのだ」

椎名は涙を流しながら桐生の名前を小声で呼んでいると、メイガスは口元に笑みを含みながら「桐生はおおすみと共に沈んだよ。君が愛する桐生翼はな」と耳元で囁く。

同時に椎名の表情は絶望へと変わり、泣き叫んだ。

「その絶望だよ。偉大なる神に必要な物は！」

メイガスは言い放つとネクロノミコンを掴みながら、海に投げ込んだ。

同時に立ってられない程に島が揺れだした。

その振動は島だけで L C A C は揺れている様子はない。

メイガスは哄笑し、椎名の泣き声が響き渡る中、海面が隆起し、海中から粘液質の鱗に覆われた緑色の体、鋭い鍵爪を備えた二本の腕、背中には蝙蝠に似た巨大な翼がある二十メートルは有ろうかという巨大な化け物が飛び出してきた。

楕円形の頭部の口の部分には無数の触手がうごめく様は蛸に酷似している。

化け物は粘液質の塊に覆われ、ピクリとも動かない。

「神が復活したぞ！！」

メイガスは歓喜の声で叫ぶと、恐怖と絶望に満ちた椎名を一瞥し、クトウルフに叫んだ。

「神よ！貴方の生贄を用意しております！」

メイガスの叫び声に呼応するようにクトウルフの口から管状の触手

が伸び、椎名に迫ってくる。

「いや、いやあー！」

椎名が泣き叫ぶと触手は椎名の足をくわえ込んだ。

不意に椎名を拘束していた縄が解け、椎名は逃げようとするが触手は椎名を体内に引きずり込んでいく。

椎名の悲鳴が響き渡ると、触手は椎名の体を胸まで飲み込んだ。

椎名はいいやいと首を振り、逃げようと両手で這い出ようとするが、遂に首まで飲み込まれ両手の自由も奪われた。

「助けて……助けて、翼！」

椎名が叫ぶと同時に触手は完全に椎名を丸呑みにし、椎名のくぐもった声が静かに訝する。

「ん！んんっ！！」

椎名の鼻を生臭い匂いが包み、吐き気を催す程の不快感に椎名は鳴咽した。

さらに密着してくる肉とぬるぬるした液体が椎名との間を潤滑する。その圧迫する触手が椎名を体内に誘い、椎名は絶望と恐怖、そして諦めのあまり気を失った。

触手が盛り上がり、その盛り上がりがクトウルフの体内に消えた瞬間、クトウルフを覆っていた塊がはげ落ちた。

クトウルフは蛸に似た目を開くと、メイガスはニヤリと笑う。

「我が目的が達成した。あとは完全復活するまで待つだけだ」

メイガスはLCACに乗り込むと同時に島は沈没し、ただそこにクトウルフだけが残った。

「うう………」

息苦しさから解放され、椎名の感覚が戻ってくる。

粘液質の音が鳴り、四肢に柔らかい、まるで羽毛布団のような感触を感じ、生臭い匂いを感じ……

椎名はゆっくりと目を開けると恐怖のあまり悲鳴をあげた。

暗い中を照らす粘液質の液体と赤い肉の壁がうごめき、粘液質の音を響かせる。

椎名は悲鳴をあげながら逃げようとするが、四肢が肉の壁に取り込まれて、まるで磔けられるように拘束されていた。

椎名が恐怖で泣き叫ぶとそれに呼応するように肉の壁が動く。

「お願い………助けて………」

助けて………翼………

エンゲージ

A B T h 対策会議室

09:42

クトウルフ復活から約2時間。

世界各地に虚数次元が発生し、クトウルフに縁のあるアビス、シャッドメルやクトーニアン、ディープ、ダゴン、「クトウルフの落とし子」スポーンが現れ、各国軍と交戦状態に陥っているらしい。

世界最強の米軍ですら苦戦を強いられているとの報告が入っている。

「クトウルフ、捕捉しました」

オペレーターの声と同時にモニターにクトウルフが映し出された。

クトウルフは少しも動こうとせず、ただ空中に滞空している。

「あと5分でフラッシュが目標に到達します」

ネイルアンカーを搭載したF-15JAがレーダーに映し出されている。

この戦いでクトウルフを倒せなければ、教団が語っていたクトウルフが支配し、アビスが闊歩する未来が待っているのだ。

なんとしてもクトウルフを抹殺しなければ……

防衛省長官はモニターを注視しながらアルミ缶を握り潰した。

その時、救助された桐生が飛び込んでくる。

「長官！」

「桐生二尉！？」

「クトウルフが復活したって本当か！？」

「ああ。偵察衛星で確認している。今からネイルアンカーで攻撃を……」

それを聞き、桐生は大声で怒鳴った。

「今すぐ中止しろ！！あの化け物の中には椎名が捕らえられてるんだ！！」

「何だと!？」

防衛省長官は顔色を変えて「攻撃中止!」と叫んだが、総理大臣が大声で「許可出来ない!」と言う。

「何でだ!！」

桐生は総理大臣の胸倉を掴むが、総理大臣は顔色一つ変えずに言い放った。

「君は一人の命と世界の人々の命、どちらが大切なのかね？」

「命を比べるな!！」

桐生は総理大臣の額に雷電を突き付けるが顔色を変える事が無い。

「世界が滅ぶかもしれない状況で致し方ないだろう?」

その声と同時にSPが桐生を総理大臣から引きはがす。

総理大臣は襟元を正すと大声で「攻撃を許可!」すると言い放ち、オペレーターは無線に吹き込んだ。

南太平洋上空

F-15JAのHUDにクトウルフが捉えられる。

(攻撃が許可された。射程に入り次第攻撃しろ)

「了解。攻撃に移る」

佐伯はF-15JAの操縦桿を倒して、機体を降下させてクトウルフをロックした。

「ターゲット、ロックオン!FOX3!！」

F-15JAからミサイルが放たれ、クトウルフに向かっていく・・・

「ネイルアンカー着弾まで、3、2、1、着弾！」

オペレーターが凝視するレーダーからミサイルの反応が消えた瞬間、凄まじい炎がクトウルフを覆い尽くした。

呆然と立ち尽くす桐生を尻目に総理大臣はモニターを注視し、「終わった」と呟く。

歓喜の声を上げる人々の声が桐生の中で遠退いていく中、防衛省長官が「まだだ！」と叫んだ。

ネイルアンカーの炎が晴れたその時、翼を大きく広げたクトウルフがモニターに映し出された。

「奴にはネイルアンカーが効かないというか……」

総理大臣が呟いたその時、桐生は何か思い出したように会議室から飛び出していく。

後ろではイーグルパイロットに攻撃命令を下す声や全自衛隊に対し、有事の命令が下されていた。

攻撃命令！？

AAM-3でやれつてのか！？

だからAAM-4を搭載しろって言ったんだ！

佐伯は飛び立ったクトウルフを一瞥すると機体を反転させた。

奴の後ろを捉えて、羽を狙い、たたき落とす！

佐伯はHUDにクトウルフを捉え、AAM-3を発射する。

「FOX2！FOX2！」

F-15JAから放たれたミサイルはクトウルフを追尾していく。

それに気付いたクトウルフは羽を羽ばたかせ、上空に飛び上がる。ミサイルもそれに続いて上昇していき、クトウルフに直撃した。クトウルフはその爆発にものともせず、煙から飛び出すと、上空からF-15JAに突っ込んでくる。

イーグルはアフターバーナーを点火し、それを避けるとそのすぐ後ろをクトウルフが高速で降下していくのが見えた。

クトウルフは海面に到達する前に翼を広げた。海面の直前で飛び上がった瞬間、凄まじい水しぶきが舞い上がり、クトウルフは再び上昇していく。

そしてF-15JAの後ろを取ると腕を伸ばしてくる。

「物騒な事をしやがって!!」

佐伯は英語で言わなければならないと分かっているながら日本語で叫び、上昇し、一回転すると逆にクトウルフの後ろを奪い取った。

佐伯が20mmバルカン砲の引き金を引いたと同時に最大毎秒100発もの20mm弾を発射出来るM61A1が火を噴く。

クトウルフの羽目掛けて弾丸が撃ち込まれる中、クトウルフは滞空し、振り返りながら手を伸ばす。

同時にイーグルからロックしていたAAM-3がクトウルフに放たれ、イーグルがクトウルフを回避すると、ミサイルはクトウルフの顔面に直撃する。

これでミサイルは残り一発となった。

クトウルフに効いている様子が無い事に佐伯は歯ぎしりをする。

「無理だろ、こりゃ……」

佐伯は苦笑いを浮かべると、機体をクトウルフに向けてバルカン砲を連射しながら突っ込み、直前でミサイルを撃ち込んだ。

ミサイルはクトウルフの腹部に直撃し、爆発するがやはり効き目は無い。

イーグルはアフターバーナーを点火し、機首をクトウルフに向けるとクトウルフもイーグルに向かってくる。

佐伯は雄叫びをあげながらバルカン砲の引き金を引き続け、クトウ

ルフが目前に迫った瞬間、M61A1は弾切れを起こした。

同時に凄まじい衝撃が機体を襲い、警告音が鳴り響く。

佐伯はイーグルの左翼を見ると、翼が無くなり黒煙が噴き出しているのが目に入った。

「くそ！」

佐伯はバランスを力ずくで保つとイーグルをクトウルフに向けた。

「それでも喰らえ、化け物が……！」

佐伯は脱出レバーを掴み、ベイルアウト（緊急脱出）を行った。

同時に佐伯はイジェクションシートと共に機体から排出され、15G以上の重力が体に掛かる。

眼下では機体のバランスを失ったイーグルがクトウルフに向かっていき、直撃した。

しかし、クトウルフは動じる事なく日本のある方角へと飛び立っていく。

「救助は何時になるかな」

佐伯は溜息を漏らすとクトウルフを憎らしげに睨み付けた。

第305飛行隊

太平洋上空

E-767のレーダーから送られたデータを見た瀬上香苗三等空尉は正面を見据えたと同時に無線から野太い声が次々聞こえてきた。

（エルボー7、ブリッツが撃墜されたらしいな）

（あいつがやられるとは珍しい）

（ま、生きているからいいだろ）

「エルボー1、こちらエルボー7、ヴァルキリー。敵の正体は？」

佐伯の代わりにエルボー7のコールサインを貰った瀬上は英語で問い掛ける。

（敵の正体は化け物だ）

「化け物？」

（やり合えば分かるだろう？それにヴァルキリーは恐くはないだろう？）

TACネーム「ヴァルキリー」は先日エルボー1に名付けられた物だ。

美人で胸が大きく、戦闘機乗りという理由でヴァルキリー（戦乙女）と名付けられた。

とはいえ、スクランブル発進は初めてで緊張で手が震える。

その時、AWACSから驚きの声が漏れた。

（ターゲットロスト！！）

（何だと！？）

エンゲージまでそれほど時間は掛からなかったはずだ。

それがロストするなど有り得ない。

（全機、編隊を崩すな。目標がロストした地点まで向かう）

F-15Jがアフターバーナーを点火し、音速で向かっていく。

僅か二分で目標が消滅した地点に到達したその時、海中からクトゥ

ルフが飛び出してきた。

瀬上の右斜めにいたF-15Jがクトウルフと接触し、爆発する。

（エルボー9がやられた！！）

（全機交戦！！）

エルボー1の声が響き渡り、三個の編隊が訓練された動きでクトウルフに機首を向けた。

（エルボー1、FOX3！！）

（エルボー12、FOX3！！）

瀬上もターゲットをロックするとAAM-4を発射する。

「エルボー7、FOX3！！」

クトウルフに多数のミサイルが直撃し、爆風がクトウルフを覆う。

（やったか？）

エルボー1の声が聞こえた瞬間、クトウルフが爆風の中から飛び出し、一個の編隊の中に突っ込んだ。

（エルボー11から15、ロスト！）

（ふざけやがって！！FOX2！！FOX2！！）

エルボー1はミサイルを発射するとそれに呼応し、僚機がミサイルを発射する。

しかし、クトウルフはミサイルの直撃を受けながらも突進してくる。

（全機、ブレイク！）

エルボー1を含めた全機が散開するが、一機がクトウルフに接触した。

（エルボー4、ペイルアウトを行う……………脱出出来ない！？
うわああああああ……………）

F-15Jが回転しながら海中に墜落した瞬間、凄まじい水柱が立ち上がった。

爆発は瀬上の機体まで届き、キャノピーを濡らす。

（エルボー10、ブレイク！）

瀬上の所属する編隊のF-15Jが編隊を離れると、クトウルフの後ろを捉える。

（FOX3！！）

エルボー10からミサイルが放たれ、煙が一瞬キャノピーを覆った瞬間、クトウルフはエルボー10の機体を掴んだ。

エルボー10は20mmバルカン砲でクトウルフに攻撃をくわえたその時、別の戦闘機に投げ付けられ、ともに爆発し、その爆風に巻き込まれ一機が巻き添えとなった。

（クソオ！エルボー10とエルボー8、エルボー6が落とされた！）

（エルボー7、4番機に付け！）

「ウィルコ！」

瀬上はエルボー1の編隊の4番機に付いた。

同時にクトウルフは身を翻すと編隊に突進してくる。

刹那、全機からミサイルと20mm弾がクトウルフに放たれた。

しかし、やはりと言うべきか、クトウルフには通じない。

エルボー1と瀬上が離れた瞬間、残りの三機が避け切れず、爆発した。

瀬上の頭に全滅の二文字が過ぎった瞬間、エルボー1の野太い声が聞こえてくる。

（こちらエルボー1。瀬上、逃げろ）

その声に瀬上は驚きのあまり驚きの声を漏らし、無線に吹き込んだ。「隊長！」

（瀬上、お前はいい物を持っている。エースに成れる程の物を・・・貴様は日本に必要なだ。生きろ！！）

エルボー1はクトウルフに向かって行くとミサイルを発射した。

（生きろ！！これは命令だ！！）

「逃げるなら隊長も・・・」

（俺は部下とともに逝かねばならん。生きて佐伯とともにエルボーを再び作り直せ！！これが私の最後の命令だ！！）

同時に無線が途切れた。

瀬上の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

サンバイザーを上げ、酸素マスクを外すと瀬上は敬礼をし、再びサ

ンバイザーと酸素マスクを付けて飛び立っていった。

伝説への解釈

入谷民俗学研究所

エルボー隊交戦同時刻

桐生は入谷の机を手当たり次第に漁った。

入谷に関して一つだけ腑に落ちない事がある。

霞が当てつけに休暇を取らせた時に質問してきた内容だ。

刀「鬼首」に伝わる伝説を興味あり気に聞いたのは何故だ？

もし、入谷と俺の考えている事が一緒ならば必ず何かあるはずだが・
・・・

桐生が最後の引き出しを開けた。

そこには「アビスと妖怪との関連についての考察」と書かれた封筒があり、桐生はそれを掴むと鼻で笑う。

「やはり、か」

桐生は封筒を開くと書類に目を通した

昔の人が仮にアビスを見たとすると、それは認識の出来ない化け物、妖怪変化と認識する。

則ち、過去に現れた妖怪はアビスだとする仮説。

酒吞童子を始めとする鬼退治の伝説に使われた刀はアビスに対する兵器になり得る。

「突飛な説だ。どうせ、公表するつもりは無かったんだろ？」

桐生は入谷に問い掛けるように一人で呟くと顔をあげた。

桐生は外に出ると駐機させていたヘリに乗り込み、入谷に「京都まで頼む」と口を開き、刀を一瞥する。

（こんな形で会うとはな）

桐生は苦笑いを浮かべると窓に目を向けた。

太平洋

12:34

太平洋の海面で動きを止めたクトウルフは一時間前から動きを止めていた。

その間にヘリコプター搭載汎用護衛艦である「はつゆき」型の四艦がクトウルフを取り囲んでいる。

薄暗いCICの中に多数の幹部自衛官がモニターを見据えていた。

はつゆきの艦長である沖田隆一等海佐は口を開く。

「全艦、戦闘準備！！」

同時に警報が鳴り響いた。

「ハーブーン発射始め！！」

「ハーブーン発射始め！！」

「一番発射用意・・・・・・てえ！！」

はつゆき、しらゆき、あさゆき、さわゆきの四艦から対艦ミサイル「ハーブーン」が発射され、クトウルフに直撃する。

オクトーゲンの凄まじい爆発がクトウルフを覆う。

同時にSH-60Jから陸上自衛隊からの払い下げである96式自動擲弾銃から放たれた40mmグレネード弾がクトウルフに直撃した。

使える物は使わなければ勝てないと自覚した自衛隊は総力を持ってクトウルフを殲滅する作戦に出たのだ。

CICの電子パネルで直撃を確認した沖田は声高に叫んだ！

「二番発射用意！！」

「二番発射用意・・・・・・てえ！！」

クトウルフにミサイルが向かい、直撃した瞬間、クトウルフは海の中に消える。

その時、さわゆきから無線で悲鳴が聞こえてきた。

（機関室が大破！！）

（衝撃に備え！！）

さわゆきの艦長の声と共にレーダーからさわゆきが消えた。

「魚雷発射！！」

三連装短魚雷発射管から魚雷が放たれ、スクリューを動かし、クトウルフに直撃し、水柱を立てる。

刹那、しらゆき、あさゆきがレーダーから消えた。

「何が起きている！？」

沖田が叫んだその時、ソナーを観測していた自衛官が悲鳴をあげた。
「どうした！？」

「目標・・・・・・・・真下です」

青ざめる自衛官の声を聞き、沖田はＣＩＣから飛び出し、甲板から海を眺めた。

その時、海中からゆつくりとクトウルフが顔を出す。

まるで海坊主を彷彿させるその姿に沖田が身震いすると、端には艦首を天に向けて海中に没して行く護衛艦が目に入った。

「・・・・・・・・こんな化け物に勝てる訳が無い・・・・・・・・」

沖田が呟いたその時、はつゆきの船体が大きく揺れた。

機関室を刳られたと理解した瞬間、クトウルフは大きく手を振り上げ、甲板をたたき付けた・・・・・・・・

最終防衛ライン

CATS本部

護衛艦隊交戦同時刻

入谷がかつて使っていた部屋に足を運んだ霞は溜息を漏らした。
奴は死にたくて死んだんじゃない……

いや、死にたくて死んだ奴なんてこの世にはいないはずだ。
これ以上、あの化け物と教団を放置する訳にはいかない。

「入谷、仇は取るぞ」

霞が囁くように言う過去に、メリフィリアを含めたかつての所属
部隊の集合写真を見る。

あの時はこんな事になるなんて思ってもいなかった。

メリフィリア、隠岐、入谷が死に、結婚して退役した二人は今はい
ない。

私一人で出来る訳が無いのは分かっている。

だが、やらなければならぬんだ。

霞は入谷の名前を呼ぶと、後ろを振り返り、ジェイクの名前を驚き
混じりに呟いた。

「……………あんた一人で何が出来るんだ？」

音も無く立っていたジェイクは嘲笑して見せる。

「……………先程、噂だが硫黄島基地から連絡が途切れたと小耳
に挟んだ。幹部であるあんたがそれを知らないはずはない。しかも
クトウルフはまだそこには到達していない。つまり……………奴
らを潰すなら手伝うぞ」

「どういうつもりだ？ 貴様が協力を申し出るとは、珍しい」

「知っているだろう？ 俺は母親を奴らに殺された。その仇を取りた
いだけだ」

ジェイクは珍しく笑みを浮かべ、すぐにそれを掻き消した。

「・・・・・・・・大野もやると言っていた」

「お前達も馬鹿だな・・・・・・・・わざわざ地獄に来なくてもいいんだぞ」

「・・・・・・・・アビス（地獄）はとっくに見ている」

それを聞き、霞は鼻で笑った。

「行くぞ！野郎をぶっ潰す！」

東京湾

16:39

最終防衛ラインとして位置付けられた東京湾に陸上自衛隊の戦力が集結していた。

主力には90式戦車と10式戦車の戦車隊、支援には99式自走榴弾砲、88式地对艦誘導弾、MLRSの支援兵器、81式短距離地对空誘導弾、93式近距離地对空誘導弾の対空兵器、AH-1SとUH-60JAと空自のF-2A戦闘機の航空部隊が待機し、クトゥルフに備えている。

「目標、目視で確認！！対空戦闘用意！！」

目の前に米粒程だが、明らかに東京に向かってくる生命体があった。伝説のドラゴンにも似たシルエットに身構えた瞬間、短SAMと近SAMから対空ミサイルが放たれる。

多数のミサイルは白煙を噴き、クトゥルフに向かって行く。

「第二弾、発射！！」

再び多数のミサイルがクトゥルフに放たれた。

クトゥルフに向かって最初に放たれたミサイルはクトゥルフに次々着弾していく。

こちらからもはつきり見える程の爆発の中からクトウルフが飛び出すと、二波目のミサイルがクトウルフを襲う。

クトウルフは耐え切れなかったのか海に降り立った。

観測員は双眼鏡を眺めると大声で叫んだ。

「自走砲、攻撃始め！！」

多数の99式自走榴弾砲からから155mm榴弾が放たれ、次々とさらにSSM-1から対艦ミサイルも放たれた。

凄まじい爆発と水柱がクトウルフを覆った。

クトウルフはやはり効いてる様子が無く、海上を滞空しながら向かってくる。

「榴弾砲、対艦ミサイル、効果無し！！」

「航空部隊、交戦！！」

AH-1Sから対戦車ミサイル「TOW」が放たれ、UH-60J Aから96式自動擲弾銃が擲弾を撃ち込む。

「目標と一定の距離を保て。近付き過ぎるな！」

クトウルフが羽を広げた瞬間、ミサイルがそれを防ぐ。

「戦車、攻撃準備！！撃てえ！」

90式戦車と10式戦車から放たれる120mmHEAT弾はクトウルフの体到的確に直撃し、爆発する。

怪獣映画では、怪獣の飛び道具によって自衛隊は全滅するが今は違う。

飛び道具が無い敵等、策を練れば勝てる。

「距離を保て！我々がケリを付ける！」

観測員は次々と戦車砲や榴弾を撃たれるクトウルフを見てほくそ笑んだ。

血は水より濃い

京都「鬼無神社」

16：40

丸坊主の頭に、白と黒が混じった髭の初老の神主は切れ長の目で落ち葉を憎らしげに睨んだ。

毎年毎年、面倒だと言わんばかりに嘆息を漏らす。

どうやら世界が酷い事になっているが、こつちには関係は無いだろう。

桐生飛鷹きりゆう ひだかが竹箒で落ち葉を集め終えたその時、ヘリのローター音が響き渡った。

「何だ？」

飛鷹が上空を見上げたその時、自衛隊のヘリが降りてくる。

巻き上がった落ち葉が飛鷹の側を舞い、飛鷹は青筋を立てると竹箒を肩に担ぐ。

そっち関係の人と言わんばかりの表情でヘリを睨むと、桐生がヘリから降りた。

「翼あ！！」

飛鷹は自分の息子の名前を叫ぶと駆け出す。

「だから来たくねえんだ！！」

桐生は慌てて鬼首の鞘で防ぐと、飛鷹は先程掃いていた箒を振り下ろした。

同時に竹箒の柄が空中に舞う。

竹を叩き折る力とそれを受け止める腕力、やはり親子とでも言うべきか。

そっち関係の人、というよりは本当に若かりし頃にそっち関係の、しかも幹部をやっていた飛鷹は「熊を素手で倒した」や「20人相手に一人で勝った」等の武勇伝がある。

飛鷹は夜叉のような表情で桐生を睨み付けた。

「どの面さげて来やがった、この馬鹿息子があー!!」

「俺だつてこの有事に来たかないさ!! お前みてえな面倒な奴の相手する為になんかな!!」

「貴様!! 親に向かつてお前とはなんだあ!?!」

へりを駐機させた小西は慌て二人に駆け寄る。

「落ち着いて下さい! 非常事態なんですから……」

慌てる小西に気付いた飛鷹は一転し、「馬鹿息子が世話になってい
るな」と言い丁寧に一礼する。

「は、はあ……」

悪い人には見えないと小西は苦笑したその時、桐生に顔を向けた。

「この馬鹿息子が!! 自衛隊を、しかも年上を使うとは何事だ!?!
歩いてこんか!!」

「俺も自衛官だ!! 歩いて来れるか!! だいたい、んな事はどうだ
つていい。親父、頼みがある」

桐生は真面目な顔で見据えると、刀を引き抜いた。

折れた鬼首を引き抜いたと同時に中からその刃が落ちてくる。

それを見た飛鷹はとうとう顔を紅潮させたが、それより早く桐生は
土下座した。

狐に摘まれたような表情の飛鷹に桐生は訴える。

「親父!! 刀を直してくれ!! 親父は刀鍛冶が出来る! だから……
……」

「貴様はもう息子ではない!」

飛鷹は怒鳴ると顔を背けた。

「俺だつて分かつてる! 我が儘だつて……. だけど、この刀
がねえと、椎名を助けられねえんだよ…….」桐生は大声で
訴えると、桐生は凄まじい力で立たされ、頬に一撃が叩き込まれた。
桐生は二メートル程吹き飛ばされると飛鷹は桐生に手を差し出す。
「これで許してやる」

「成る程、だいたい分かった」

飛鷹はあらかじめ説明を聞いて、納得したように頷く。

桐生は頬に氷嚢を当てながら鼻で溜息を漏らす。

「いてえよ、親父……」

本気で殴られた頬が疼き、桐生は内心呟くと飛鷹が刀を掴んだ。

「とにかく、翼。貴様は寝てる。貴様が主役なのだから、力を養っておけ」

「ワリイ」

桐生は鍛冶用の小屋の出口に手を掛けると飛鷹は桐生を呼び止めた。

「その椎名てっ女の子はお前にとって、どんな娘なんだ？」

「守ってやりたい……」

「そういうのじゃない。伴侶にしたいかどうかって事だ」

小西は伴侶の単語に体をピクリと動かし、同時に桐生も後ろを一瞥する。

「ああ」

「なら、助けたら俺に紹介しろ。椎名って娘が良いって言ったら、俺が神主をやってやる」

俺が神主を……という事は結婚式を神社でやってやるという事だ。

桐生は軽く吹き出すと頬を緩めた。

「勿論だ、親父。頼むぜ」

桐生が出て行ったのを確認した飛鷹は苦笑いを浮かべた。

「血は水より濃い、か」

「は？」

小西は素っ頓狂な声を出した。

「小西さん、自分はな。翼を見ると若い頃の自分を思い出すんだ」

「と、言いますと？」

「見ての通り、自分は若い頃にやんちゃした。親父が神主になれって言った事に反発したんだよ。あの馬鹿のように……」

「だから刀鍛冶も？」

「その通りだ。やんちゃやっていた時に刀を鍛えろと言われたからな」

飛鷹は自嘲する。

「よかったよ。あの馬鹿が真つ当な道に進んでくれてな」

「彼にはお世話になっております」

「さ、君も休んでくれ」

「失礼します」

小西は敬礼すると出て行き、飛鷹は刀を見据えて、笑みを見せた。

「約束は守ったぞ、結菜^{ゆづな}」

飛鷹は今は亡き妻の名前を呟くと、ハチマキを額に巻き、気合いを入れた。

最強の武器

東京湾

同時刻

クトウルフへの攻撃が開始されてから約10分程からクトウルフは動きを止めていた。

M L R Sから次々と放たれるロケット弾や戦車から放たれる滑空砲を受けながらクトウルフはピクリとも動かない。

上空を轟音とともに通過したF - 2 AはA S M - 2対艦ミサイルがクトウルフに直撃する。

「目標、完全沈黙」

観測員は口調に喜びを滲ませている。

その声に自衛官達は車内から出て、動かなくなったクトウルフを見た。

同時に歓喜の声があがる。

しかし、同時に無線から悲鳴が響き渡った。

（頭が・・・・・・頭の中に入って来るなあ！！）

（視界が・・・・・・）

A H - 1 S コブラのパイロットの悲鳴だ。

同時にクトウルフの攻撃を行っていたコブラは機体を反転させるとこちらに向かってくる。

刹那、70mmハイドロロケット弾が自衛官達に放たれた。

凄まじい勢いで乱射されるロケット弾は自衛隊の体をバラバラに吹き飛ばしていく。

「何だ！？何をやっている！」

観測員が絶叫したその時、その場にいた隊員達が口々に悲鳴をあげた。

「何だ・・・・・・これは？」

「目が!？」

観測員が周りを見渡ししていたその時、吐き気を催す程の頭痛に観測員は絶叫した。

それが不意に消えたと同時に観測員は周囲を見渡し、顔色を変える。目の前にいた自衛官が化け物に変わっている。

どろどろに溶けた腐乱死体に似たその外見に観測員は悲鳴をあげた。周りにいる多数の化け物は絶叫すると、持っていた銃の引き金を引く。

殺しあう多数の化け物。

修羅道のようなその様に観測員は絶叫すると息を切らし、9mm機関拳銃を構える。

悲鳴にも似た絶叫とともに観測員は機関拳銃を乱射した瞬間、爆発とともに観測員の意識は霧散していった。

東京湾の上空を通過していくU・H・1Jの機内から殺しあう自衛官の様子を見た大野は「酷い……」と呟く。

ヘリの操縦をしながら霞は後ろを一瞥し、苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

「クトウルフの狂気にやられた結果だ。クトウルフは特撮の怪獣みたいに飛び道具は無い。だが、奴には最強の武器がある」

「武器つか？」

大野の声にジェイクはガバメントに装弾しながら言う。

「……世界を狂ったように見せる力だ。全てが化け物に見えれば誰だってあなるさ」

「隠岐も、私も一度体験している。酷い者は生き残っても精神を病み続ける。隠岐もその一人だ」

隠岐の狂ったような表情、発言……

それがあの余波だとしたら納得出来る。

「私達は奴らをぶっ潰す！化け物はあの馬鹿に任せよう」

「いいんスカ!？」

「あいつならやれるさ」

「了解!!」

霞の声に二人は銃を担ぎながら大声で答えると、そのすぐ後ろではクトゥルフが東京に飛び立っているのが見えた。

運命

鬼無神社

17:14

机の上に丁寧に並べられた拳銃の部品。

その一部は特異な形をしており、改造拳銃だと伺える。

雷電と霧積の調整を行っていた桐生は自嘲した。

手が激しく震え、部品が掴めない。

初めてこんなにビビってる。

今までだったらこんなにビビらなかったし、困難な任務も一人で何とか出来る自信があったし、やりのけた。

だが……だが今回だけは別だ。

倒しても望を助けられるかも分からない。

あんな化け物に勝てる訳が無い！

死ぬかもしれない！！

桐生は歯ぎしりをすると、机に突っ伏す。

お袋が死んでからは弱音は吐かないと決めた。

諦めないと決めた。

だからこそ……

「どうすりゃいい？」

桐生は天井を見上げ、床に大の字に倒れ込んだ。

久しぶりを見る、見馴れた天井を見ていると桐生は溜息をついた。

その時、桐生の脳裏に椎名の顔が浮かんだ。

可愛いって言ったら顔を赤くする椎名の顔が浮かび、「誰が可愛いんですか！？」といった怒鳴り声がりフレインされた。

その声と同時に椎名と過ごした日々や記憶が蘇ってくる。

俺がやらないで誰がやる！！

不意に桐生は起き上がると雷電と霧積を手早く組み立てていく。

部品が次々と組み立てられていき、銃が形作られていった。

桐生は手早く雷電と霧積を組み立てるとホルスターに拳銃を仕舞い、部屋を飛び出す。

部屋から飛び出した桐生は急いで靴を履いて、鍛冶小屋に飛び込んだ。

「親父！刀は！？」

桐生の声に飛鷹はビックリと体を動かすと「休めと言っただろ！」と諫めたがそれを無視して鬼首を見た。

折れた部分が結合されて緋色の刃が元の輝きを取り戻している。

桐生は刀を握むと鞘に納めた。

「流石親父だ！仕事が早いぜ！」

桐生は急いで外に飛び出し、小西を呼び止めてへりに飛び乗った。

小西がへりに乗り込もうとしたその時、飛鷹はへりに駆け寄り、桐生を見つめ、口を開く。

「生きて帰って来いよ」

桐生は無言で満面の笑みを見せると親指を立てた。

同時にへりのローターが周りだし、飛鷹は後ろに一步退きながら大声で怒鳴る。

「必ず生きて帰って来い！！さもないと三途の河に先回りして、結菜と一緒に河に沈めてやる！！」

桐生はそれを聞き、吹き出すと負けなくらいの大声で桐生は答えた。

「お袋がんな事するかよ！！」

「生きて帰ってこいよお！！」

飛鷹の怒鳴り声に桐生は敬礼でそれを返した。

同時にへりは上昇し、それを見送った飛鷹は空を見上げる。

「生きて帰って来い………馬鹿息子」

そう呟いたその時、飛鷹は涙を流していた事に今更気付き、赤面した。

「柄じゃねえな」

飛鷹は小さな声で呟くと、涙を拭う。

戦地に子供を送る親の気持ちなんて今まで考えた事は無かった。むしろ、正常な現代の親ならそんな事は考えないだろう。

何もする事が出来ない歯痒さと、あいつなら生き残るという希望と期待と不安が入り交じった異様な感情が心を覆った。

飛鷹は涙を拭い去り、神主の正装の裾から写真を取り出した。

恐持ての男性と無邪気に笑う男の子と優しく微笑む、ロンクヘアの美しい、大和撫子を体言するような女性の家族写真だ。

男性は気をつけの姿勢で真っ直ぐ視線を向かわせ、男の子はカメラに向かってVサインを見せ、女性は柔らかない笑みを浮かべて男の子の頭を優しく撫でている。

桐生結菜と撮った最後の写真だ。

結菜は数日後に信号無視で突っ込んで来たトラックに撥ねられた。即死だったそうだ。

翼は深い心の傷を負ったがその日出会った女の子の言葉に助けられた。

「弱音を吐いちゃ駄目、諦めても駄目、頑張れば出来るから、笑えなくても笑って……だったか？望ちゃん」

飛鷹は椎名望の名前を呼んだ。

たまたま旅行に来ていた望が抜け殻となった翼に言った言葉だ。

偶然と片付けるか必然と片付けるか……

再び巡り会った二人に運命という言葉を使うべきか？

「お前は望ちゃんに助けてもらった。今度はお前が助ける番だ、翼」

飛鷹は小さく言つと「お前もそう思うだろ、結菜」と言い、ヘリを見送った。

愛する者の為に・・・

硫黄島

17:49

硫黄島航空基地の滑走路を見ると霞の予想通り、教団の信者が歩いているのが見えた。

信者達はこちらを指差し慌てふためき、AK-47を発砲してくる。しかし、7.62mm弾はヘリの機体を傷付けるのみで貫通には至らない。

ジェイクはヘリのスライドドアを開けると、96式自動擲弾銃に取り付くと滑走路に向けて乱射した。

雨のように降り注ぎ、爆発するグレネードは教団の体を吹き飛ばしていく。

刹那、ヘリに警告音が鳴り響き、ステインガー（毒針）の異名を持つFIM-92から放たれたミサイルは一直線に向かってくる。

「ミサイルだ！！」

ジェイクが叫ぶより早く、ミサイルはバランスを崩しながらヘリの真下に潜り込み、爆発した。

狙いすました爆発というよりは撃ち落とされたようにも見える軌道にジェイクが眉を潜めたその時、大野は弾倉を交換する。

「余裕つスね」

大野はニツと笑うとスコープを覗き込み、次々と信者を撃ち抜いていく。

霞は降下すると叫び、ヘリを降下させると9mm機関拳銃を掴んだ。

「手順は簡単だ。メイガスを殺す。それだけだ」

「・・・・・・ああ」

ジェイクは短く答えるとガバメントを構える。

大野もG18Cに初弾を装填し、駆け出していく。

へりから飛び出した大野はG18Cで弾丸をばらまきながら駆け出すとその後ろにジェイク、霞と続いた。

滑走路は隠れる場所が少なく、足を止めたら射殺されるのは明白だ。そこを中央突破するには一気に駆けながら弾幕を張るしかない。

あとは運だ。

弾丸が目の前やすぐ横を掠めて行く音が響き渡り、全身に鳥肌がたつたが、足を止めたらそれだけでは済まない。

同時に通り雨が降り出した。

雨は滝のように周囲をたたき付け、信者の体が水ぶくれるように膨れ上がり、着ていたローブが弾けとんだ。

「デープ!?」

大野はアビス「デープ」の姿に変わった信者を見て驚きの声を漏らした。

「…………あれが本当の姿だ。水を受ければ醜い姿になる」

ジェイクは濡れた髪を掻き上げながら言うと言った霞は付け加える。

「狂った教団を信じる奴はあんな連中だけだ」

霞は身を屈めながら早足で駆け出すと、航空基地の入口に立った。

二人を支援するように弾丸を乱射すると、ジェイクが基地に飛び込む。

刹那、大野が小さな悲鳴をあげて地面に倒れ込んだ。

二人が大野を見ると、足から血が出ている。

どうやら信者の弾丸が足に当たったらしいのだ。

ジェイクはすぐに治療をしようとするが突き飛ばした。

ジェイクが驚き、体を起こすと大野は呻きながら入口に寄り掛かる。

「ここは自分が何とかするっス!!」

「だが……………」

霞が労るように手を出す手は払った。

「自分は今までカッコイイ所が無かったっス!でも、今こそが見せ場なんスよ」

柔和な顔立ちに笑みを見せると、霞が叱責した。

「ふざけるな！戦いにカツコイイも何もある訳が無いだろ！！」

「行けって言ってたんだろ！！」

元暴走族ヘッダの気が出た大野は大声で怒鳴り、愛銃のSR-25を構えた。

「うおおおおおっ！！」

大野は雄叫びを上げると引き金を引いた。

霞は無言で9mm機関拳銃を大野の傍らに置く。

大野の覚悟を目の当たりにし、それを無下に出来ない二人は後ろを振り返らずに駆け出した。

後ろからは大野の雄叫びと銃声が聞こえ、二人は奥に向かって行く。お互いの愛する者の仇を討つために……………

死んで行った無念を晴らすために、二人は駆け出して行った。

東京タワー

東京

同時刻

いつもは喧騒の中央とも言える東京は今はゴーストタウンだった。クトゥルフ襲来に伴う一般人の避難、それに一役買った横須賀消滅。一般人には突如として現れた生物とそれに関連した謎の爆発で横須賀は消滅したと伝えられていた。

今回も謎の生物という事実と「生物」が引き起こした爆発で横須賀が消滅したという嘘でやり過ごしたのだ。

その生物による東京消滅を恐れて民間人は素直に立ち退いたという事である。

そのゴーストタウンに降り立ったクトゥルフは東京タワーに絡み付く。

映画で怪獣に壊されるのが常だが、ここにある計画が動いている。

特殊作戦群所属の一等陸尉である吉良沢准きらさわ じゅんは東京タワーの設計図を見ながらある作戦を考えていた。

東京タワーでクトゥルフを押し潰す。

怪獣だろうがなんだろうが、直接的な打撃には堪えられないはずだ。吉良沢は地図を見て、必要な爆薬の量を再確認した。

吉良沢は首を捻り、音を出すとM4A1にM203を取り付け、H & amp; K USPに初弾を装填し、隙間に9mmパラベラム弾を挿入する。

他の部隊は爆破までの時間稼ぎだ。

元は横須賀で失っているはずの命だが、たまたま病院で、弾薬庫にしていた地下にいたのが良かった。

取り残され、弾薬の補給の為に地下に降りた瞬間にネイルアンカーによる爆撃が行われたが慌てて下ろした防火シャッターに遮られた

のだ。

皮一枚と言わんばかりにシャッターが防いでいたが、熱でシャッターが赤く染まり、気温が上がっていき、このまま焼け死ぬのではない、あの恐怖は死ぬまで忘れられないだろう。

吉良沢は東京タワーとそれに絡まるクトウルフを見据えると、鼻で笑った。

吉良沢が一気に東京タワーに駆けると、生き残った自衛官達による最後の攻撃が開始される。

飛び交う銃弾と曳光弾、隊員達の雄叫び。

ゴーストタウンに響き渡るは雑踏ではなく銃声。

クトウルフは身動き一つせずにただ東京タワーに絡まっている。

吉良沢はエレベーターに駆け寄ると、ボタンを押し、飛び込んだ。

一度観光で来た事があったが、これはそんな生易しい物ではない。

「俺が終わらせる！」

吉良沢は戦友達のタグをにぎりしめるとM4A1を構えた。

同時にエレベーターが開き出し、吉良沢は飛び出す。

急いで破壊する柱に駆け寄るとC4爆薬をセットしていく。

その時、クトウルフの口から何かが飛び出して来た。

粘液質の痰のような物質に包まれたそれは軽く振動すると起き上がる。

蛸のような外見の化け物はSF映画で見るステレオタイプの火星人に似ていた。

それは各国から報告があったクトウルフの落とし子である「アポーン」であると予想出来る。

「楽には終わらせてくれないようだな」

吉良沢は構えていたM4A1の引き金を引き、アポーンに弾丸を撃ち込む。

泥を激しく叩いたような音は非常に不快な気持ちにさせる。

アポーンは体を揺らし、ゆっくりと歩み寄り、弾丸が効いてる様子が無い。

弾丸が撃ち尽くされて、マズルフラッシュが消えた瞬間、アポーンは先程とは打って変わり、突進してきた。

しかし、吉良沢は冷静にそれを避けるとM4A1の下部に取り付けられたM203を構え、引き金に指を掛ける。

刹那、擦れ違ったアポーンにグレネードを撃ち込んだ。

グレネードは僅かに放物線を描いたがこの距離ではさほど影響せず、アポーンを爆風で吹き飛ばした。

爆風はアポーンを弾き飛ばし、展望台のガラスを破り、下に落ちていく。

吉良沢は下を見る為に作られたガラスを見るとM4A1の弾倉を交換し、鼻で笑う。

「余裕だな」

吉良沢は肩にアサルトライフルを担ぎ、C4を仕掛けようと後ろを振り返った瞬間に「前言撤回だ」と呟く。

後ろにはクトウルフから吐き出されたアポーンが体をゆっくりと揺らし向かって来ている。

吉良沢はアポーンを無視して柱に駆け寄るとC4を取り付けた。

下手に相手をして勝ち目が無い。

その時、ヘリの音が響き渡り、AH-1Sが展望台に並行しながら滞空する。

無線から「伏せろ」と聞こえ、M197が回転し、数秒後に火を噴き、弾丸を吐き出した。

次々放たれる弾丸はアポーンの体を粉碎していき、数秒で肉片に変えていく。

AH-1Sが支援攻撃を止めた瞬間、クトウルフの触手が直撃し、回転しながら落ちていった。

吉良沢はここぞとばかりに柱に次々にC4を仕掛けるとエレベーターに向かって行く。

ボタンを押したが、先程の支援攻撃で故障したようだ。

「有難迷惑な支援だ！クソ！」

吉良沢は毒づき、エレベーターの扉を蹴ると階段に駆けて行く。

その時、後ろから再び粘液質の音が響き渡り、三度吐き出された事を知った。

吉良沢はふと思い出したように笑みを見せるとフックが着いたロープを引っ掛ける。

高層からのラベリング降下を行うと一気に50メートル程降下していく。

ロープが無くなる前に吉良沢は階段に飛び降りると別の鉄骨に飛び降りる。

アスレチック感覚に吉良沢は飛び降りるが、一歩間違えば即死だ。しかし、元々の卓越した運動神経がその死の旅を支える。

猿が木から降りるようだと思った瞬間、吉良沢は猿も木から落ちるという言葉が唐突に思い出し、苦笑いを浮かべた。

殆ど落下に近い降下は降りては鉄骨を掴み、勢いを付けて鉄骨を掴みの繰り返しだ。

僅か一分で地上から10メートルまでたどり着き、吉良沢はC4を起爆した。

展望台から爆発が起こり、先端がクトウルフに向かい折れ曲がる。数秒して凄まじい軋みとともに先端はクトウルフに突き刺さり、吉良沢も地面に降り立った。

タワーの先端が突き刺さったクトウルフは地面に落下し、横たわる。「やった………やったぞ！」

一人の自衛官が叫ぶと同時に歓喜の声が上がった。が、しかし、それは甘かった。

クトウルフは触手を動かし、タワーを引き抜くと咆哮する。同時に隊員達の歓喜は消え、再び銃声が轟いた。

駆け引き

硫黄島航空基地

18:12

二人が奥に駆け、ホールに飛び出したその時、ホールの中央に少女の姿が見えた。

競技用のホールは格闘技等の訓練に使われる場所であり、ある程度の広さが有り、嫌でも目立つ。

「・・・・・・クティラ」

「待ってたわ、ジェイク・サイファー」

クティラは澄ましたような笑みを見せ、霞を一瞥すると笑った。

「あんたは行つていいよ」

「何？」

「私はコイツと決着付けたいの。だから、邪魔」

霞は一瞬、ジェイクを見るが力強い頷きを見せたジェイクに笑みを返した。

「あとは頼んだ」

霞は小走りで奥に向かい、ホールから消えたと同時にクティラは口を開く。

「この日を待ち望んでいたわよ」

「・・・・・・俺は望んでない」

「それは私が好きだから？」

「貴様みたいなのは好きではない」

ガバメントを掴むと初弾を装填したジェイクはクティラに銃口を向けた。

「そう・・・・・・」

クティラは爪を伸ばすと大声で怒鳴った。

「貴様は殺す！偉大なるメイガス様の為に！！」

クティラは爪を振りかぶり、ジェイクに向かって行く。

ジェイクもすかさずガバメントの引き金を引くが、弾丸は魔法障壁で防がれる。

クティラが接近した瞬間、ジェイクはガバメントをホルスターに仕舞い、代わりに両手に、逆手に持った二本のバタフライナイフを開くとその爪と競り合う。

中世に行われた魔術師の対決の駆け引きを聞いた事がある。

魔術師の魔術の根本は精神力。

魔術を使えば精神力は削がれ、それを使うように仕向けるのが駆け引きだ。

それには戦闘技術も必要で魔術に気を取られれば、逆に精神力を削ぐ前にやられる。

つまり、戦闘技術と魔術は紙一重、それが両立してこそが「魔術師」だ。

クトゥルフと生贄の娘と人間。

精神力は並外れているはずだ。

だが、唯一勝てる可能性がある物は……

ジェイクは後ろに跳び、退く。

二本のバタフライは鋭利な切っ先を光らせた。

戦闘技術なら勝てる可能性がある！

ガバメントは魔法障壁で防がれるのがオチだが、ナイフは違う。

ジェイクは全力で駆け出すとナイフを振りかぶり、クティラに振るう。

しかし、クティラは巨大な氷柱でそれを受け止め、ジェイクに回し蹴りを叩き込んだ。

数メートル吹き飛ばされたジェイクは壁にたたき付けられる。

続けてクティラはジェイクに氷柱を飛ばした。

先端が錐のように尖った氷柱は避けたジェイクのすぐ横に氷柱は突き刺さる。

氷柱は一瞬で粉々に弾け飛び、クティラは雷を放ち、それに乱反射

させた。

間一髪、ジェイクはその領域から飛び出してクティラに走る。

ジェイクは右手のナイフを空中に投げ、左手のナイフで切り掛かりつつ、右でガバメントを掴んだ。

近距離でガバメントを向けるが、クティラはそれを弾き、爪で切り掛かる。

しかし、ジェイクは左のナイフでそれを受け止め、落ちてきた右のナイフを掴み、切り掛かった。

それを逆に防いだクティラは嬉しそうな笑みを見せる。

「やっぱり強い。私は強い奴が好きだ！」

クティラは妖艶な笑みで言うと、ジェイクは鼻で笑った。

「……悪いが、俺は守ってやりたいような女が好きなんだ」

「なら、死ね」

クティラは冷たい声で言うと、目の前から消えた。

代わりに電光が周囲を駆け巡る。

一瞬、電光の中にクティラの姿が見えた刹那、ジェイクのコートの一部が切れた。

続いてジェイクの頬に傷が出来る。

見えたらそこにはいない。

見えなくてもそこにはいる。

ややこしい不条理の前に常識は通用しない。

ただ、状況を判断し、実行するだけ。

ジェイクはゆっくりと目を閉じた。

同時にコートや髪が微かに吹き出した風に揺られてなびきだす。

「何かの魔術？意味ないけどね！！」

クティラの声があらゆる方向から聞こえてくる。

まるで複数のスピーカーに囲まれているような錯覚に陥る中、ジェイクはただ目を閉じていた。

「手も足も出ないって意思表示だった？」

クティラの馬鹿にするような声が響き渡った瞬間、ジェイクはナイ

フを後ろに投げ付けた。

疾風を纏い、目にも留まらぬ速さで投げ出されたナイフは血塗れとなり壁に刺さる。

ナイフが通った場所には心臓に風穴が開いたクティラが何が起きたか分からないといった表情で立っていた。

「何が？ 見えてないはずなのに！？」

胸から流れ出る血に濡れた手を驚愕の表情で見つめるクティラにジェイクは静かに答える。

「・・・・・・・・確かに見えてない。だが、聞こえていた」
「えっ？」

「空気を裂く音だ。貴様のあの動きは空気を激しく乱していた。俺はそれを頼りに動きを探った」

ジェイクはナイフに風を纏わせる。

「俺の魔術、風の特徴は攻撃ではなく探知だ。逆に貴様の魔術は防御の氷と速度の雷。貴様は自分を理解していたが、俺を理解していなかった。それが敗因だ」

「強い奴に殺されるなら本望・・・・・・・・」

ナイフを構えたジェイクを見て、クティラは笑った。

ただ笑うその姿を見たジェイクはゆっくりと目を閉じる。

同時にクティラはジェイクの腕を掴んだ。

刹那、ジェイクの中に暖かい物が流れ込んできた。

「私の・・・・・・・・力、大事にしてね？」

クティラは笑うと、ジェイクはカッと目を見開き、腹部にナイフを突き立てた。

苦痛ではなく笑顔のその姿を見送ったジェイクの体を光が包み込む。
「敵なのが惜しかった・・・・・・・・」

ジェイクは囁くように言うと光が晴れ、クティラの笑い声が聞こえたようだった。

攻防

硫黄島航空基地

18:24

ジェイクの先を行き、細い通路を走る霞のすぐ横を弾丸が掠めた。弾丸は霞のすぐ横を通過し、空を切る音が響く。

慌てて近くの物影に隠れた霞はSIG P226を構え、様子を伺った。

刹那、次々弾丸が放たれ、通路の壁を穴だらけにしていく。

霞はブラインドファイアで応戦するが、手だけ出しての射撃は相手を確認出来ないばかりか、反動を逃がす事が出来ない。

つまりは威嚇か牽制程度だ。

銃撃が止み、身を乗り出した霞の目に葉巻を口にするソロモンが映った。

RPKの弾倉を交換し終えたソロモンは再び弾幕を張り、攻撃を加えてくる。

中距離、しかも狭い通路において軽機関銃と拳銃とでは勝ち目が無い。

持っている装備は拳銃と閃光手榴弾、発煙手榴弾がそれぞれ二つ。

近距離に持ち込めたら勝ち目があるが……

「入谷、貴様ならどうする？」

霞は小さな声で呟くと何かが転がってきた。

手榴弾だ。

手榴弾は通常、投げ返されないように時間と距離を計って投げる。すぐに逃げなければバラバラになるか、破片の餌食だ。

霞は足が吹っ飛ぶのを覚悟しつつ、足で手榴弾を蹴り飛ばした。

手榴弾は二メートル程転がり、一秒後に爆発する。

沢山の破片が周囲にばらまかれ、壁に突き刺さる。

間一髪だった……

霞が安堵した瞬間、再び銃撃が始まった。

下手に動いても蜂の巣になるだけだ。

「どうすればいいんだ？」

ジャップの分際でまだ生き残るか。

遮蔽物と言っても薄い鉄板、貫通も時間の問題だ。

ソロモンが再び弾倉を交換したその時、発煙手榴弾が投げ込まれた。手榴弾は白煙を噴き出し、通路に白い壁を作り出す。

「煙幕？」

ソロモンが呟いたその時、多数の9mmパラベラム弾が横を掠めた。煙幕を張り、弾丸で仕留めるつもりのようだが……

ソロモンがRPKを構えたその時、閃光手榴弾が転がってきた。

（罠か！？）

ソロモンが眉を潜めたその時、凄まじい閃光と音響がソロモンを襲う。

しかし目の前が真っ白に染まるが、ソロモンはRPKを撃ちつづけた。

狭い通路での軽機関銃は例え視界が確保出来なくても優位に立つことが出来る利点がある。

甘かったな。

ソロモンは不敵な笑みを漏らすと視界が晴れ、煙幕も消えていた。

ソロモンは片手で引き金を引きつつ、もう片方で手榴弾のピンを抜き、カウントする。

数秒して手榴弾を投げ込むと同時に手榴弾は霞の隠れていた遮蔽物を吹き飛ばした。

しかし、血の霧が舞い上がるどころか、肉片すら無い事にソロモンは眉を潜める。

同時に上部のダクトから霞が飛び出してきた。

発煙手榴弾は動きを見えなくする為で閃光手榴弾は囷という訳か！？

ソロモンは素早く軽機関銃を捨てるとホルスターに手を伸ばす。

しかし、脇腹に走った激痛に顔を歪めた。

あの時……エセックスで入谷に負わされた傷だ。

その古傷が今、疼き出すとは……

霞はSIG P226 CUSTOMを構えると引き金を引いた。

近距離で胸に撃ち込まれた9mmパラベラム弾はソロモンの肉を引きちぎり、体を吹き飛ばす。

舞い上がる血が霞の端麗な顔を赤く濡らすと共に怒りを隠すようでもあった。

壁に叩き付けられたソロモンはマカロフを構えたが、霞はそれを撃ち抜き、足で肩を押さえ込んだ。

「終わりだ……」

霞は小さく呟くと引き金を引いた。

凄まじい銃声が訝し、ソロモンの肩に弾丸が撃ち込まれた。

「苦しんで死ぬ。入谷を殺した罪だ」

霞はそう言つと拳銃を片手に歩いて行く。

ソロモンはほくそ笑むとマカロフを掴んだ。

「だから甘いんだよ！！日本人はなあ！！」

ソロモンが叫ぶと同時に後ろを振り向かず霞は拳銃を構えた。

刹那、霞の拳銃の銃口からマズルフラッシュが閃く。

刹那、ソロモンの額から血が噴き出し、死に絶えた。

霞が弾倉を交換すると同時にジェイクが駆け寄ってくる。

「……大丈夫か？」

「私は死なないさ」

そう答えたその時、放送が流れた。

（霞とジェイクだったか？奥で待っているぞ）

メイガスの声に二人は頷くと奥に駆けて行った。

チェックメイト

先程のホールよりも広いホールに出た二人の前にメイガスが立っていた。

せせら笑いを浮かべたメイガスは拍手をする。

「よくここまで来た。誉めてやろう」

「黙れ！大人しく死ね！」

霞はS I G P 2 2 6を構えると怒鳴った。

「・・・・・・貴様はこの世界にはいない。消えろ」

ジェイクも言い放ち、ガバメントを構えるが、メイガスは笑みを絶やさずに口を開く。

「未来は変わらない。運命も変わらない。既に預言されているのだよ。お前達はここで死ね！」

メイガスは怒鳴ると指先から水を放つ。

二人はそれぞれ左右に避けるとメイガスに弾丸を撃ち込む。

マズルフラッシュが見えた瞬間、メイガスの周囲に炎の柱が現れ、

弾丸を一瞬で融解させた。

奴は水の他に炎も操れると言うか？

むしろ、クティラから魔力を受け継いだようにナイアルラトホテッ

プから魔力を受け継いだと見るべきか？

どちらにせよ、厄介な事には変わり無い。

「霞、どうする？」

「魔術の専門はそっちだろう？」

「分かった。援護を頼む」

そう行った瞬間、ジェイクの姿が電光とともに掻き消えた。

刹那、ジェイクはメイガスのすぐ目の前に現れ、ガバメントを構える。

しかし、それより早くメイガスは指を鳴らし、炎を出すとガバメントを弾いた。ジェイクは怯む事なくバタフライナイフを取り出すと

切り掛かる。が、メイガスはそれを見切ったように避けると回し蹴りでジェイクを吹き飛ばした。

ジェイクが離れた瞬間、受け身の取れない状態のメイガスに霞は弾丸を放つ。

メイガスはそれを見越していたように水の壁で弾丸を防ぐと、瞬間移動したかの如く、霞の目の前に現れた。

あまりのいきなりの出来事に反射出来なかった霞にメイガスは指を突き付ける。

間一髪、メイガスが高圧水を放つ瞬間にジェイクが体当たりでメイガスを弾いた。

後ろの壁に穴を開けた水はジェイクの助けがなければ霞の頭に穴を開けていただろう。

霞がそんな事を考えていた瞬間、ジェイクがメイガスから弾かれた。「その程度で勝とうとは笑止」

メイガスが笑った瞬間、空気を裂く音が響き渡った。刹那、メイガスの額に穴が開き、後ろに吹き飛んだ。

「送れたっス！」

その声に二人が振り返るとSR-25を構えた大野が立っていた。体には無数の擦り傷が有り、血が垂れてきている。

「おのれ……」

メイガスはゆっくりと起き上がると三人を睨み付けた。

「……作戦を変える。大野は弾幕を張れ。霞は白兵戦に持ち込め。俺が合図を出したら頼む。これで終わらせる」

そう言くと、ジェイクは素早く紋様を描き出し、詠唱した。

「雷よ、悪を裁く鉄槌となれ！」

その声が終わると同時にメイガスの頭上から雷が落ちてきた。メイガスは頭上を見上げると魔法障壁を作り、それを防いだ。その時、メイガスは足の冷たさに下を見て、舌打ちをした。足が氷で包まれているのだ。

「小賢しい真似を！」

メイガスが怒鳴り、炎を出す紋様を描いた瞬間、ジェイクが「今だ」と合図を出した。

同時に大野はG18C二丁をメイガスに向けて乱射する。

メイガスの体が弾丸で揉まれる中、G18Cの弾丸が尽きるのを見計らい、霞が飛び出した。

続けて放たれる9mmパラベラム弾にメイガスの体は再び揉まれ、遂に足から切れて、空中に投げ出される。

刹那、ジェイクの手から放たれた竜巻が、メイガスの体を切り刻みながら壁に叩き付け、続けて放たれた氷柱がメイガスを礫る。

体から大量の血を流すメイガスは哀れみすら感じられる程の惨さだ。

「私に齒向かうか……私はクトウルフの神官だぞ！」

もはや、子供の口喧嘩によくある「自分の親は偉い人だから自分も凄い」という事を声高に叫ぶメイガスは哀れな一人ではない。

ジェイクは大野からG18Cを手渡され、セミオートに切り替える
と、霞とともに歩み寄る。

「私を助ける。そうすれば私の部下にしてやろう！だから……」

ジェイクは鼻で笑うと鋭い眼光でメイガスを睨んだ。

「……まだ分からないか？未来は預言なんか頼る物ではない」

その声に、霞も頷くと拳銃を額に、ジェイクは胸に押し当てた。

「「チェックメイト」」

二人は同時に咄くと凄まじい銃声と断末魔がホールに轟いた。

最終決戦

東京タワー周辺

19：18

沈黙したクトゥルフと周りに散らばる無数の死体。

生き残った吉良沢と十数名の隊員達は壊れた89式装甲戦闘車の中で武器の調整を整えていた。

最後の反攻に備えてなのだが、現状での最強の火器が軽MATというのが悲しいところだ。

無論、どんな火器も通用しない相手なのだから有っても無くても一緒なのだが……

「これが人類の最期なのか？」

吉良沢が小さく呟いたその時、轟音が響き渡った。

生き残りの自衛官達が上空を見上げたその時、上空に機影が見える。機影はロッキード社が開発した長距離飛行が可能であるC-130のようなのだ。

C-130 機内

「本当に降りるんですか？」

「滑走路ねえじゃねえか。ま、行つてきます！」

吉良沢が上空を見上げているとC-130Hから人影が見えた。それは月夜に照らされ、降りて来る。

あんな無謀な事をするのは……

「総員、戦闘準備！！真打ちの登場だ！！」

東京上空

風が体を抜ける。

風の擦れる音が耳を突き抜け、どこか心地のいい音を鳴らす。

桐生はクトゥルフを見据えると、鬼首を引き抜いた。

上空から落下するのは常人は考えないし、やろうともしない。

だが……

桐生は刀をクトゥルフに突き立てると、体を引き裂きながら勢いを殺し、刀はクトゥルフの眉間で止まった。

あれほど重火器が通用しなかったクトゥルフの体が簡単に切られ、隠れていた隊員達が歓喜とも驚嘆とも取れる声を漏らす。

桐生は態勢を整えるとニツと笑い、大声で怒鳴った。

「おい！蛸野郎！！相棒を返してくれねえか？今なら見逃してやるぜ」

桐生は我ながら下らない挑発に自嘲したその時、クトゥルフは腕を振り上げた。

一瞬、油断していた桐生がヤバイと思ったその時、多数の対戦車誘導弾がクトゥルフに直撃し、銃弾が殺到する。

クトゥルフの体にぶら下がりながら、桐生が周囲を見渡すと生き残

つた自衛官が雄叫びをあげながら攻撃を加えていた。

桐生は笑うと、サバイバルナイフを突き立てるとそれにぶら下がり、刀で眉間を切り裂く。

同時に赤い肉が見え、生臭い匂いが桐生の鼻をついた。

しかし、桐生はそれを気にせず肉に刀を突き立て、無理矢理こじ開け、中に体を擦込む。

ぶよぶよとした肉壁が桐生の体を圧迫するが、桐生は無理矢理に押し広げ、何とか奥へと入っていく。

三メートル程進んだ辺りで桐生は見知った顔を見付けた。

「望！！」

椎名の服は半分程溶けていたが、特に問題はなさそうだ。

桐生は四肢を肉に飲み込まれた椎名の名前を呼ぶが、気を失っているらしく目を開けない。

「起きろ！」

桐生は椎名を力強く抱きしめると彼女の唇に自分の唇を重ねた。

お伽話という訳ではないが、何故かそうしなければならぬ気がしたのだ。

桐生は唇を離すと大声で言った。

「弱音を吐くな！諦めるな！頑張れば出来るから、笑えなくても笑え！！」

桐生の声とともに、椎名は目をゆっくり開け、「翼？」と呟いた。

「ああ！俺だ」

「・・・・・・それ、私が言った言葉・・・・・・」

その声に桐生は一瞬、拍子抜けした顔になった。が、すぐに鼻で笑う。

「んな、事はどうだっていい。今、助けてやる」

桐生が刀を突き立てたその時、肉壁から触手が飛び出し、桐生を外に吹き飛ばした。

望の悲鳴を聞きながら、背中から空中に投げ出された桐生はそのまま、地面に落下していく。

地面が近くなり、死を覚悟したその時、体がまるでクッションに落ちたようにゆっくりと跳ね上がり、その後地面に落ちた。

同時にヘリの音が響き渡り、ヘリはゆっくりと降下し、ジェイク達が駆け寄ってくる。

「・・・・・・・・世話を焼かせるな」

「オールキャストだな」

桐生はニツと笑うと、ジェイクが団子程度の大きさの粘土のような物を投げて寄越した。

「これは？」

「ネイルアンカーだ。ナイアルラトホテップに初めて会ったあの時、偶然手に入れていた」

ネクロノミコンとともに、封印されていた物、それがここにあるとは・・・・・・・・

桐生はニツと笑うと、東京タワーの狙撃が可能な位置に陣取った大野が叫んだ。

「兄貴！！」

「おう！」

桐生は半壊した東京タワーに駆け登ると先程の裂け目に飛び込んだ。再び、椎名まで駆け寄ると今度はすぐに触手が向かってきた。

それを大野が狙撃で破壊し、桐生を援護すると、クトウルフは自らの手を中に突っ込もうとする。

中の柔らかい部分はともかく、外に弾丸は効かない。

大野が舌打ちをしたその時、クトウルフの腕が氷に包まれていく。

「・・・・・・・・仲間の邪魔をするな」

ジェイクはそう言うと、クトウルフの動きを氷で封じていく。

再び椎名の元にたどり着いた桐生は椎名を捕らえている肉を鬼首で切り裂いた。

そして椎名を抱きしめると抱え上げる。

「これはプレゼントだ」

桐生はネイルアンカーを後ろに投げ捨てるとクトウルフの体内から

飛び出した。

同時にジェイクは風で二人を受け止め、それを確認した霞は信管を用いてネイルアンカーを起爆させる。

クトウルフの体内で爆発したネイルアンカーは一瞬でクトウルフの体内に大穴を開けた。

同時に胸部から肉に包まれたネクロノミコンが見える。

桐生は刀を構えると叫んだ。

「これで終わりだ！！」

氷で動きを束縛されたクトウルフに向かって、桐生は勢いを付けながら鬼首を投げた。

凄まじい勢いで投げられた刀は回転しながらクトウルフに向かい、ネクロノミコンに突き刺さる。

鬼首が突き刺さったネクロノミコンは一瞬で光の量子となった。

そして、ネクロノミコンが消えた事でそれに頼って存在していたクトウルフが断末魔の声とともに掻き消えるように消滅していく。

クトウルフの体が消えた瞬間、上空から鬼首が落ちてきた。

同時に自衛官の無線からは世界中にいたアビスが幻のように掻き消えたと報告が続々と入って来る。

「終わっただですね」

よろよろと立ち上がった椎名は桐生に支えられながら呟く。

「そうだな」

桐生は椎名に優しく微笑むとジェイクから鬼首を受け取りながら続けた。

「ボロボロだな。世界も、俺達も……」

「そうですね」

椎名が答えたその時、報道用のヘリが見えた。

激戦地だったこの撮影に来たのだろうが、一足遅かったな、と桐生は内心呟く。

そして、桐生は首に掛けていたタグを外すと椎名を見た。

「今から実家に来てくれねえか？親父に紹介したい」

「でも、こんな格好では失礼ですし……」

桐生は頭を掻くと笑った。

「結婚、してくれねえか？」

いきなり、しかもこの変なタイミングで何故こんな一言が出るのかと桐生が自嘲したその時、椎名は「勿論です」と答えた。

「ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

椎名のその声に一斉に囁し立てる声が訝した。

霞はゆっくりと歩いてくると、二人を真っ直ぐ見据え、口を開く。

「二度と、戻ってくるな」

二人はゆっくり頷くとタグを渡し、歩いて行った。

エピローグ

アビス事件犠牲者慰霊碑前

一年後、人類は復興を開始した。

民族や宗教、国家を越えた助け合いはある意味ではアビスがもたらした副産物でもあった。

「お前が死んで、一年か」

霞は慰霊碑前にある英霊達の墓の、その中の一つに花束を添えた。

「早かったな」

霞は入谷が好き好んで吸っていた煙草に火を付けると、線香立てに入れた。

同時に霞は胸から集合写真を取り出すと、ライターで火を付ける。

「もう、さよならだ」

霞は小さく呟くと嗚咽を漏らした。

陸上自衛隊射撃場

クトゥルフを倒した自衛官が陸上自衛隊出身という事もあったが、多数の志願者が殺到し、曹階級以上の自衛官は教官として忙しい毎日を送っていた。

「と、こんな風に狙撃を」

大野がそこまで言ったその時、私語が聞こえてきた。

「誰だ！」

大野が怒鳴ると二人の自衛官が「自分達であります」と言い、敬礼

をする。

「何の話をしていた!？」

「は! 桐生二等特尉について話をしておりました!」

「それなら許そう。彼について話を聞きたい奴は?」

大野の声に自衛官達が歩み出ると、大野は嬉しそうに口を開いた。

鬼無神社

「おい、翼! 祭用の行灯は見付かったか?」

飛鷹の怒鳴り声に桐生は首を振る。

「・・・・・・見付けました」

ジェイクは紅白の行灯を飛鷹に手渡すと嘆息を漏らした。

「馬鹿息子よりも居候が役に立つな」

「勝手に言つてろ」

桐生が口を尖らせたその時、巫女服の椎名が入って来た。

「お昼ご飯出来ましたよ」

その時、家の中から赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

「さつき寝たと思ったのに・・・・・・」

椎名は慌てて家に戻る姿を見て桐生は頬を緩めた。

（そうか、俺はこれを守る為に戦っていたんだ）

夏のそよ風が肯定するように桐生の横を吹き抜ける。

未来は終わらない、俺達が生きている限り・・・・・・

終

後書き

皆様、初めまして、如月晃です。

初投稿小説「アビス」を最後まで読んでいただき、ありがとうございます！

予想していたよりも多くの方が読んでくれて、非常に嬉しかったです！！

今後は本編では語られなかった

- ・メリフィリアの過去
- ・桐生と椎名の過去
- ・入谷達の最終任務

を外伝として投稿しようと思っています（他にも何か外伝にして欲しい話があったら言って下さい）。

それと予想外に人気だった為、次回作は同じ世界観でやろうと考えており、外伝を進めながら設定を作っています。

次回作は戦争物ですが、魔術（魔法）も出す予定で、今回の終盤にも伏線を仕込んでおきました（笑）

良かったら、次回作も読んで下さい。

ご意見、ご感想が有りましたら、是非聞かせて下さい！

今回は本当にありがとうございました！！

設定

特殊生物殲滅隊

通称「CATS」、「特殲隊」

隠語「X」

英正式名「Counter-xenomorphic Annihilation Teams」。

自衛隊の独立部隊。虚数次元から現れた生物「アビス」の極秘殲滅を行う部隊の総称。存在は民間には伝えられておらず、完全に極秘となっている。隊員達は各自衛隊の曹以上のエキスパートとも言える人物が選別される。特殊作戦群、通称「特戦」と混同しない為に隠語が用意され、特戦を呼称する場合は特戦の隠語である「S」と呼称する。

実動殲滅隊

特殲隊所属の特殊部隊。通称「実殲隊」。特殲隊における切り札的部隊でアサルト、スカウト、スナイパー、メディックの4人で構成される。隊員達は専門の知識を有し、卓越した戦闘技術を有している。部隊数は1つ。

隠密工作隊

特殲隊所属の偵察隊。通称「密工隊」。特殲隊において、突入部隊の先んじた偵察や工作を行う部隊。部隊員は全員SD（サプレッサー内蔵）装備を持っている。構成は2人。部隊数は20。

強襲殲滅隊

特殲隊所属の突入部隊。通称「強殲隊」。密工隊の情報を元に突入・殲滅する部隊。部隊は6人編成で基本的な軍隊と同じく、アサルトライフルに一人がグレネードランチャー装備となっている。部隊数は30。

遊撃支援隊

特殲隊所属の支援部隊。通称「遊援隊」。強殲隊に同伴する部隊。分隊支援火器として、機関銃やグレネードランチャーを装備した部隊。4人編成で基本的に強殲隊と同じく数えられる。その際の呼称は「強遊隊」。部隊数は30。

機動兵器隊

特殲隊所属の兵器部隊。通称「機兵隊」。各部隊の戦域輸送や支援攻撃を主な任務としている。保有している兵器はLCAC、ランクル、96式装輪装甲車、89式装甲戦闘車、87式偵察警戒車、偵察用オートバイ、軽装甲機動車、UH-60JA、AH-64Dア

パッチロングボウ、A H - 1 S コブラ、O H - 1、C H - 4 7 J A。

戦域封鎖隊

特機隊所属の封鎖部隊。通称「戦封隊」。作戦領域の封鎖を主な任務としている。警告を行い、それでも侵入してきた人物に対しての逮捕権を持っている。

戦闘指揮隊

特機隊所属の指揮部隊。通称は「オペレーター」。前線部隊へ情報伝達や指揮を担当する部隊。主に尉官以上がこの部隊に配属される。

特殊生物「アビス」

正式名「A n B i o T h i n g s」。虚数次元から現れる異形の生物の総称。基本的に人に害成す存在であり、共存は不可能。様々な種類があり、その醜悪な外見や性質からクトゥルフ神話の神や眷属の名前が付けられる。銃器によってダメージを与える事が出来るが、殺すには弾丸を多量に消費する。

魔術師

中世ヨーロッパで行われた魔女狩りを逃れた人物の子孫。大半が長い時の中でその力を失ったが、一部の人間には魔術が受け継がれている。魔術師はその力を警察の犯罪捜査や医療に役立てているが、民間にその存在は極秘とされている。

魔術

魔術師が操る魔法の意味。衝撃波を発生させたり、傷を回復させたりと様々な力があるが、使用には高い精神力が必要となる。その為、連続使用をすればその分早く体力が消耗する事となる。故に、魔術師は魔術を必要な時のみに使用し、それ以外の時には絶対に使用しない。

富士樹海惨殺事件

1999年に富士の樹海で起きた登山客がバラバラにされ、食い荒らされた状態で発見された事件。当初は野生動物と殺人両面から捜査が開始されたが、捜査を行っていた警官が死体で発見される。その後、警察に手が終えないとして、陸上自衛隊「特殊作戦群」の前身部隊「特殊戦略小隊」が投入される。自衛官はそこでクトゥルフ神話の怪物である多数の「グール」を確認、交戦する。自衛官は奇襲にも似た形で襲われた為、甚大な被害が出る。この戦いで生き残った自衛官は入谷謙介と霞夢のみ。また、この事件は民間には極秘とされ、野犬の犯行と発表された。これが公式のアビスとの交戦事例であり、特捜隊が組織されるきっかけとなる。

特殊戦略小隊

陸上自衛隊特殊部隊「特殊作戦群」の前身部隊である部隊。1999年に警察では対処仕切れない事件を極秘かつ迅速に解決する為に組織される。曹階級以上のレンジャー有資格者が配属される。部隊の存在は民間には極秘とされていたが、2004年には公表する予定ではあった。しかし、富士樹海惨殺事件を機に僅か数日で解散する事となる。武装は基本的な自衛隊の武装と同じだが、サプレッサーを装着する為にM4A1とSIG P226と45ACP弾使用の為にMK・23が採用されている。主な任務は要人奪還や敵地への空挺作戦等とタスクフォースやSASを意識した部隊だった。

未知生物処理隊

特殊戦略小隊の後続部隊であり、特殊生物殲滅隊の前身である独立部隊。富士樹海惨殺事件の後に専門知識を持った自衛官達を集めた特殊部隊。アビスの情報収集や殲滅と特殲隊と同じだが、規模が比較的小さく、分隊規模に輸送ヘリ1機のための編成だった。

特殊作戦群

通称「特戦」、「S」。陸上自衛隊特殊部隊であり、対テロ作戦を主な任務としている。比較的情報公開を行っている陸海空自衛隊と

は正反対に情報公開は殆ど行われていない。テロの他にもアビス事件を扱っている為、情報公開を行っていない。基本的な武装は同じだが、M4A1やM203等も採用されている。

鬼無神社きなし

桐生の実家。京都にある小さな神社であり、代々伝わる刀「鬼首」が納められている。

日本刀「鬼首」おにのくち

桐生翼が扱う日本刀。戦国時代に桐生の先祖がこの刀を使って鬼の首を切り落とした為、この名前が付けられたという由来がある。刀の刃は緋色に染まっており、鬼の血で染まったとも言われている。相当な業物であり、500年以上経った今でも切れ味は衰えていない。

雷電

桐生が扱う拳銃。M92FSを特殊改造した物。銃口を無理矢理二つ取り付けられており、引き金を引くと同時に二発の弾丸を撃ち込む。つまり、敵の防弾チョッキに初弾が食い込み、さらにほぼ同じ

部位に次弾が食い込み、初弾着脱部位を破壊、或いは対象に確実なダメージを与える事を目的に作られた。しかし、同時に二発発射の為、弾数が二倍で減る。そこで弾倉を20発に拡張、装弾数を20+2となり、従来のM92FSより僅か4回分少ないのみにまで拡張した。意外にもジャムが少なく、耐久性も高いが反動は強く、桐生以外の人が使つと反動で跳ね上がり、逸れる。その為、桐生専用の銃とも言える。

日向

X M 8を桐生が改良したモデル。命中精度の悪さや耐久性の低さ、動作不良を改善した改良型。元々、カービン型、P D W型、軽機関銃型、狙撃銃型にパーツ交換で迅速に変更出来る為、それに目を付けた桐生が違法入所、改造した。さらに、A G 3 6グレネードランチャーやX M 8 L S Sフルオートショットガン等も取り寄せており、状況に応じて使用している。また、開発途中であつた6 . 8 m m S P C弾（5 . 5 6 m m N A T O弾と7 . 6 2 m m N A T O弾の中間の威力）を使用出来るように改造している。

霧積

桐生が扱うデリンジャー。C O P . 3 5 7マグナムを改造したもの。本来、4連装の銃口から順番に弾が発射されるが、それを同時発射に改造した。勿論、衝撃も尋常ではなく、普通に撃つても当たらない。その為、デリンジャーという特性を活かした奇襲や不意打ちに用いられる。マグナム弾を使用している為、威力も高く、中距離に

おいても近距離のショットガンと同等の威力を持っている。

漁火

椎名が扱う拳銃。製作者は桐生。H&Amp;K USPにバースト機構とフルオート機構を搭載した拳銃であり、G18CとM93Rをモデルに作られている。ダゴン戦で紛失した椎名に桐生が作った物であり、当初は自分で使う予定だった。ジャムを起こし難く、さらに命中率を上げる為に発砲間隔を通常のフルオートとバーストより遅くしている。

雄琴

桐生自作のサブマシンガン。原型はステアーTMP。漁火と同様の理由で椎名に使われる。MP-5より性能が良いとされているTMPに銃床とレーザーサイトを搭載、サプレッサー内蔵した。使用弾薬も9mmパラベラム弾から4.6mmライフル弾に変更した。

設定 ネタバレ含む（前書き）

ネタバレを含む設定です。読む際はご自分の責任でお願いします。

設定 ネタバレ含む

ネクロノミコン

1999年に行われた南太平洋深海調査の際に発見された箱に納められていた本。発見時、水に濡れた形跡や劣化した様子がなかった。言語はギリシャ語で書かれており、読む事は容易。しかし、翻訳を開始してしばらくして翻訳に関わっていた人物達は体の穴という穴から血を流し死に至り、さらに引き揚げに関わった作業員も発狂し、変死する。その為、ネクロノミコンは防衛庁の地下金庫内部に厳重に封印される事となる。魔術の心得があり、高い魔力を有している人間が読むことが出来、使用出来る。また、死者と交信する事が出来る道具でもある。邪神「クトゥルフ」の再生の鍵を握っている。

イマジナリー・ディメンション 虚数次元

突如として現れた異空間。外観はブラックホールに似ている。出現パターンはランダムで特定は難しいが、一度発生した虚数次元は同じ場所にしか発生しない為、監視は容易。この内部からアビスが出現する。自然発生した物は約60分で閉じる。発生する場所の共通点は強力な磁場を帯びている地点。銀の鍵を用いて虚数次元を故意に開く事が出来るが、発生時間は約30分と短い。また、銀の鍵で開けられた虚数次元は仮想次元と呼称されている

ネイルアンカー

自衛隊が開発した新型爆薬。当初は新エネルギー開発の過程で生まれた、言わば副産物であった。安定性が高く、C4同様燃やしたり衝撃を加えただけでは爆発せず、信管が必要。威力は拳程の大きさで半径300メートルが完全に消し飛ぶ程。生産率が悪い為、量産は殆どされていない。また日本国憲法に違反する程の兵器として、国民には知らされていない（非核三原則が形骸化し、専守防衛の範疇を越える為）。

銀の鍵

異世界への扉を開ける為の鍵。アラベスク文様と象形文字が刻まれている。鍵で次元の裂け目を傷付け、こじ開ける事で虚数次元を開く事が出来る。

ルルイエ異本

人間の皮で装丁された無気味な本。クトゥルフやその眷属や異世界の者を喚ぶ方法が記されている。手に入れた人物は強大な力を持ち、全てを掌握する事が出来、歳をとらない。しかし、同時に我を亡くす事になる。

ヘルファイアー教団

地獄の恐怖教団。前身はイギリスの「ヘルファイアークラブ（地獄の炎倶楽部）」¹。崇拜する神はクトウルフ。元は貴族の享楽だった物。近代になり、偶然にも教祖メイガス・デーモンが銀の鍵とルルイエ異本を手に入れた事により発足した。ルルイエ異本の力に魅了されたメイガスは銀の鍵を使い、闇の眷属と契約、ヘルファイアー教団を立ち上げる。クトウルフの復活とそれによる地球支配を目的とする。

クトウルフ

古代人を支配していた存在。外見は巨大な蛸に翼が生えたもの。現在には南太平洋に封印されている。かつて古代人を支配していたが、蜂起した古代人達と戦い、心臓「ネクロノミコン」と脳「神子」を取り出され、古代都市「ルルイエ」に眠った。しかし、同時に毒「ルルイエ異本」と復活の道具「銀の鍵」を生み出し、再び復活を目論む。

古代人

クトウルフに支配されていた古代の人々。科学力は現代人に匹敵しているが、クトウルフとの戦いでその数を大きく減らした。

古代核戦争

古代人とクトゥルフによる戦争。古代人は核を持ち、奮闘するがクトゥルフに被害は与えられず、被害が広がる事となる。モヘンジョ・ダロやハットウシャ遺跡、カッパドキアがその都市であり、マハーバーラタやラーマヤナがそれを伝える例であり、オーパーツはその遺物である。

鬼「アビス」説

各地に伝わる鬼退治伝説から導き出された入谷謙介の説。民俗学的に鬼は日本に流れ着いた異人とされているがその一部にはそれでは説明出来ない物が有り、その事象はアビスであるとする説であり、鬼首はアビスを葬る、言わば兵器であるとするでもある説。

トラペゾヘドロン

黒色の表面に赤い筋が走った4インチ程の大きさの宝石。元は民間の邪神研究団体「入谷民俗学研究所」が保有していたが、後にヘルファイアー教団が保有。這い寄る混沌「ナイアルラトホテップ」を召喚する為の道具。これを持つ限り、ナイアルラトホテップを役使し続けられる。しかし、これを破壊される事でナイアルラトホテップが消滅する。

民間の民俗学研究所。邪神研究において日本ではトップクラスの研究機関。責任者は入谷謙介。妖怪や鬼と呼ばれる物は邪神であると考えている為、他の民俗学者達からは異端扱いされているが、アビスと交戦している特殲隊や自衛隊上層部、総理大臣からは支持されている。また、ネクロノミコンの解読を行っていたのも、ここである。さらにナイアルラトホテップを召喚する事が出来るトラペゾヘドロンを保有しているのもここである。

登場武器

特殲隊武装

89式小銃改

使用弾薬

- ・ 5.56mm NATO弾

装弾数

- ・ 30+1

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊
- ・ 遊撃支援隊
- ・ 戦域封鎖隊

陸上自衛隊で正式採用されている小銃。

SIG P226

使用弾薬

- ・ 9mmパラベラム弾

装弾数

- ・ 15+1

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊
- ・ 遊撃支援隊
- ・ 隠密工作隊
- ・ 戦域封鎖隊
- ・ 機動兵器隊

陸上自衛隊で採用されているSIG P220の後継として採用された拳銃。特殊部隊にも配備されている程の傑作銃。

H&a m p ; K U M P 9

使用弾薬

- ・ 9 m mパラベラム弾

装弾数

- ・ 3 0 + 1

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊
- ・ 遊撃支援隊

ドイツ軍正式採用アサルトライフル「G36」をサブマシンガン化したMP-5の後継。ピカティニーレールシステムを搭載しており、汎用性が高く、さらに拳銃弾との互換性を持たせる為に9 m mパラベラム弾を使用している。

M P - 5 S D 6

使用弾薬

- ・ 9 m m パラベラム弾

装弾数

- ・ 3 0 + 1

配備部隊

- ・ 隠密工作隊

M P - 5 シリーズの S D 型。偵察隊のメインウェポンとして採用されている。射程こそ短い、精度と消音性能が高い。

S I G 5 5 2

使用弾薬

- ・ 5 . 5 6 m m N A T O 弾

装弾数

- ・ 3 0 + 1

配備部隊

- ・ 隠密工作隊

世界最高の精度を誇る突撃銃。性能が非常に高いが、価格が高い為

配備が進んでおらず、隠工隊のみの配備となっている。

M 2 4

使用弾薬

・ 7 . 6 2 m m N A T O 弾

装弾数

・ 1 0 + 1

配備部隊

・ 遊撃支援部隊

レミントンM700シリーズの陸軍モデル。陸上自衛隊や米陸軍の狙撃銃でもある。速射能力こそ低いが、命中精度は群を抜いており、ワンショットワンキルに最適な狙撃銃。

H & a m p ; K P S G - 1

使用弾薬

・ 7 . 6 2 m m N A T O 弾

装弾数

・ 5 + 1

配備部隊

- ・遊撃支援部隊

セミオート狙撃銃の代表格。命中精度が高く、かつ速射能力が高い。しかし、価格が高い為、遊援隊にしか配備されていない。

MINIMI 軽機関銃

使用弾薬

- ・ 5.56mm NATO 弾

装弾数

- ・ 200

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊
- ・ 遊撃支援隊

陸上自衛隊以外に米軍や各国軍に採用されている軽機関銃。分隊支援火器として強遊隊に配備されている。

ベネリ M3

使用弾薬

- ・ 12ゲージショットシェル

装弾数

・ 8

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊

速射力重視のセミオートと通常のポンプアクションに変更が可能なショットガン。室内戦に用いられる。

M 2 キャリバー 50

使用弾薬

- ・ 12・7mm弾

配備部隊

- ・ 戦域封鎖隊
- ・ 機動兵器隊

開発から50年たった現在でもこれを超える重機関銃は現れないとまで言われる程の傑作重機関銃。自衛隊の他、各国軍が未だに採用している。

96式自動擲弾銃

使用弾薬

- ・ 40mm擲弾

配備部隊

- ・ 戦域封鎖隊
- ・ 機動兵器隊

自衛隊の自動擲弾銃。米軍のM K・19の高い有用性から特殲隊にも配備された。高い制圧力を持っている。

カール・グスタフ

使用弾薬

- ・ 84mmHEAT弾

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊
- ・ 遊撃支援隊

正式名は「84mm無反動砲」。射程は400mと短い、個人運用や使用弾薬の多さを考えれば十分の性能。

01式対戦車誘導弾

弾薬

- ・ 多目的対戦車榴弾

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊

- ・ 遊撃支援隊

小型軽量の携帯式対戦車ミサイル。ファイア&フォージェット機能を有し、トップアタックやダイレクトヒットの切り替えが可能。愛称は「軽MAT」

91式携帯地对空誘導弾

使用弾薬

- ・ 対空誘導弾

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊
- ・ 遊撃支援隊

米軍のステインガーの後継ミサイル。ステインガーより正面要撃性、瞬間交戦性、対妨害性等が向上している。愛称は「携SAM」

パンツァー・ファウスト

使用弾薬

- ・ 成形炸薬弾頭

配備部隊

- ・ 強襲殲滅隊
- ・ 遊撃支援隊

正式名称は「110mm個人携帯対戦車弾」。使い捨ての携帯式対戦車火器。カウンター・マスを使用している為、狭い場所から発射出来る。

エルキャック
L C A C

配備部隊

- ・機動兵器隊

正式名称「Landing Craft Air Cushion」。
揚陸艇。

A H - 6 4 D

武装

- ・30mmチェインガン
- ・70mmハイドロロケット
- ・ヘルファイアミサイル
- ・ステインガー

乗員

- ・2

配備部隊

- ・機動兵器隊

黒色塗装を施した戦闘ヘリ、アパッチ ロングボウ。愛称は「ブラックアパッチ」。ロングボウレーダーにより、高い攻撃性能を獲得、最強の戦闘ヘリと目されている。13機のうち、3機が特殲隊隊に配備されている。主に空中からの支援攻撃に用いられる。

AH-1S

武装

- ・20mmガトリング砲
- ・70mmハイドロロケット
- ・TOW対戦車ミサイル

乗員

- ・2

配備部隊

- ・機動兵器隊

陸自の主力対戦車ヘリのコブラに黒色塗装を施した物。愛称は「ブラックコブラ」。対大型のアビスに投入される。

89式装甲戦闘車

武装

- ・エリコンKDE35mm機関砲

- ・ 7 9 式対舟艇対戦車誘導弾
- ・ 7 4 式車載機関銃

乗員

- ・ 3 + 7

配備部隊

- ・ 機動兵器隊

国産初の本格的な歩兵戦闘車。戦車にも対抗出来る火力を持っている。主に孤立部隊の救出に用いられる。

9 6 式装輪装甲車

武装

- ・ M 2 キャリバー 5 0
or
- ・ 9 6 式自動擲弾銃

乗員

- ・ 3 + 7

配備部隊

- ・ 機動兵器隊

7 3 式装甲車の後継として作られた兵員輸送車。ヘリでの降下が難しい場所への輸送に用いられる。

OH - 1

武装

・ A A M

乗員

・ 2

配備部隊

・ 機動兵器隊

観測ヘリコプター。可視光カラーTVカメラ、赤外線センサー、レーザー測距離装置等を備え、高い偵察力を備えている。

UH - 1 J

乗員

・ 2 + 1 1

配備部隊

・ 機動兵器隊

自衛隊で最も有名な多用途ヘリコプター。アパッチやコブラ同様、黒色迷彩が施されている。主に夜間任務遂行力の高さから、夜間の任務に用いられる。

U H - 6 0 J A

乗員

・ 2 + 1 5

配備部隊

・ 機動兵器隊

黒色塗装が施された多用途ヘリコプター。U H - 1 J より航続距離が長い為、長距離の輸送に用いられる。

C H - 4 7 J A

乗員

・ 3 + 5 5

配備部隊

・ 機動兵器隊

黒色塗装が施された大型輸送ヘリコプター。主に兵器の輸送や多数の兵員の輸送に用いられる。

8 7 式偵察警戒車

武装

- ・ エリコン K B A 2 5 m m 機関砲
- ・ 7 4 式車載機関銃

乗員

- ・ 5

配備部隊

- ・ 機動兵器隊

偵察や警戒を任務とする装甲車。主に過去に発生した虚数次元の周囲の警戒に用いられる。

偵察用オートバイ

配備部隊

- ・ 機動兵器隊

偵察用のオートバイ。

ランクル

乗員

- ・ 2 + 8

配備部隊

・機動兵器隊

高機動車。主に兵員の輸送や兵器の輸送に用いられる。

実殲隊武装

軽装甲機動車

乗員

・4

配備部隊

・実動殲滅隊

実殲隊が輸送に使う車両。後部荷台には携MATやカール・グスタフ、その他小火器が車載されている。

鬼首

所有者：桐生 翼

日本刀。戦国時代に桐生の先祖がこの刀を使って鬼の首を切り落とした為、この名前が付けられたという由来がある。刀の刃は緋色に染まっており、鬼の血で染まったとも言われている。相当な業物であり、500年以上経った今でも切れ味は衰えていない。

雷電

使用弾薬

・ 9mmパラベラム弾

装弾数

・ 20+2

所有者：桐生 翼

桐生が扱う拳銃。M92FSを特殊改造した物。銃口を無理矢理二つ取り付けられており、引き金を引くと同時に二発の弾丸を撃ち込む。つまり、敵の防弾チョッキに初弾が食い込み、さらにほぼ同じ部位に次弾が食い込み、初弾着脱部位を破壊、或いは対象に確実なダメージを与える事を目的に作られた。しかし、同時に二発発射の為、弾数が二倍で減る。そこで弾倉をダブルカラム化にして20発に拡張、装弾数を20+2となった。排莢口は下部銃口が手前に、上部銃口を奥に配置し、ジャムを引き起こさないように考慮されている。さらに耐久性も高く、水中でも発砲可能。しかし、反動が強く、桐生以外の人が使うと反動で跳ね上がり逸れる。その為、桐生専用の銃とも言える。

霧積

使用弾薬

・ 357マグナム弾

装弾数

・ 4

所有者：桐生 翼

桐生が扱うデリンジャー。COP・357マグナムを改造したもの。本来、4連装の銃口から順番に弾が発射されるが、それを同時発射に改造した。勿論、衝撃も尋常ではなく、普通に撃つても当たらない。その為、デリンジャーという特性を活かした奇襲や不意打ちに用いられる。マグナム弾を使用している為、威力も高く、中距離においても近距離のショットガンと同等の威力を持っている。

漁火

使用弾薬

・ 9mmパラベラム弾

装弾数

・ 15+1

所有者：椎名 望

椎名が扱う拳銃。製作者は桐生。H&K USPにバースト機構とフルオート機構を搭載した拳銃であり、G18CとM93Rをモデルに作られている。ダゴン戦で紛失した椎名に桐生が作った物であり、当初は自分で使う予定だった。ジャムを起こし難く、

さらに命中率を上げる為に発砲間隔を通常のフルオートとバーストより遅くしている。その為、弾がバラけたり、急な跳ね上がりを防止した桐生曰「傑作銃」。

雄琴

使用弾薬

- ・ 4 . 6 m m ライフル弾

装弾数

- ・ 3 0 + 1

所有者

- ・ 椎名 望

桐生自作のサブマシンガン。原型はステアー T M P。漁火と同様の理由で椎名に使われる。M P - 5 より性能が良いとされている T M P に銃床とレーザーサイトを搭載、サプレッサー内蔵した。使用弾薬も 9 m m パラベラム弾から 4 . 6 m m ライフル弾に変更した。椎名は当初「駄作」と評していたが、後に「傑作機関拳銃」と好評している。

S R - 2 5 S D

使用弾薬

- ・ 7 . 6 2 m m N A T O 弾

装弾数

・ 5 + 1

所有者

・ 大野 賢治

S R - 2 5 の S D モデル。狙撃銃として高い命中率を誇る他、スコ
ープを倍率化、さらに暗視装置と赤外線装置を搭載している。

G 1 8 C

使用弾薬

・ 9 m m パラベラム弾

装弾数

・ 1 7 + 1

所有者

・ 大野 賢治

グロッグ社の拳銃「G 1 7」のフルオートモデル化。

M 1 9 1 1 A 1

使用弾薬

・ 4 5 A C P 弾

装弾数

・ 7 + 1

所有者

・ ジェイク・サイファー

米軍の大型拳銃。

M K ・ 2 3

使用弾薬

・ 4 5 A C P 弾

装弾数

・ 1 2 + 1

所有者

・ 入谷 謙介

アメリカ軍特殊部隊採用の大型拳銃。

S I G P 2 2 6 C U S T O M

使用弾薬

・ 9 m mパラベラム弾

装弾数

・ 1 5 + 1

所有者

・ 霞 儂

銃身長を伸ばし、命中精度を高めたカスタムモデル。また、ストライクガンとして使用する為の改造も施されている。

日向

使用弾薬

・ 6 . 8 m m S P C 弾

装弾数

・ 3 0 + 1

使用者

・ 桐生 翼

X M 8を桐生が改良したモデル。命中精度の悪さや耐久性の低さ、動作不良を改善した改良型。元々、カービン型、P D W型、軽機関銃型、狙撃銃型にパーツ交換で迅速に変更出来る為、それに目を付けた桐生が違法入所、改造した。さらに、A G 3 6グレネードランチャーやX M 8 L S Sフルオートショットガン等も取り寄せており、状況に応じて使用している。また、開発途中であった6 . 8 m

m S P C 弾 (5 ・ 5 6 m m N A T O 弾 と 7 ・ 6 2 m m N A T O 弾 の
中間の威力) を使用出来るように改造している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5815u/>

アビス

2011年10月10日01時40分発行